

常陸大宮
坪井上遺跡
TSUBOIUE SITE

大宮ショッピングセンター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999.12

坪井上遺跡発掘調査会
大宮町教育委員会

米陸大言

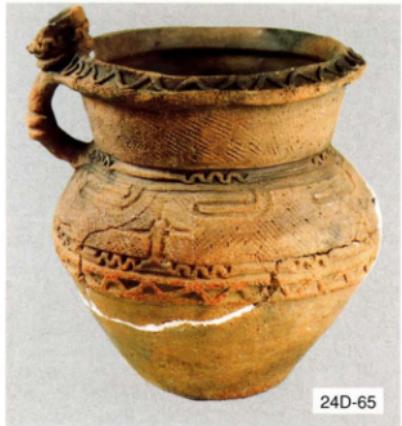
坪井之畫跡



9D-68



38D-3



24D-65



27D-42



30D-4



30D-8

A地区出土遺物



28D-122



93D-2

A地区(上段)・B地区(下段)出土遺物



B地区出土遺物(下段は火炎系)



32D-1



70D-13



93D-13



93D-11

B地区出土遺物





96D-1



143D-40



127D-1



11D-7

B地区出土遺物



215D-5-10-15



193D-2



191D



218D-12

B地区出土遺物



219D-11



231D-31



80D-2



251D-3

B地区出土遺物



275D



19D-21-24



21D-12

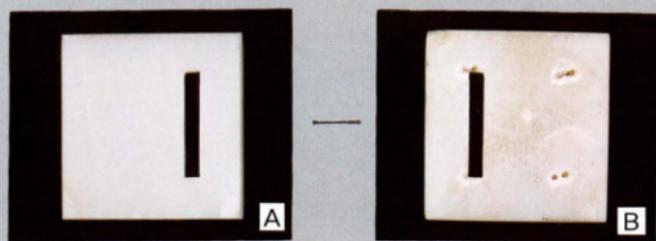


7タ-1

B地区出土遺物



B地区出土遺物(硬玉製大珠)



B地区出土遺物 石帶(上段)・有孔円板(中段)・輪鼓状耳飾り(下段)



B地区出土遺物(刀劍・鐵鎌)

序

大宮町は茨城県の北東部に位置し、町域は久慈川と那珂川に挟まれ、全体的に北部が高く、南部が低い傾斜をした丘陵地を形成しています。この二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれたこの地は、古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねてきています。

そのため町内には、古墳、塚、集落跡など数多くの遺跡が存在しており、これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。

このたびの調査は、常陸大宮ショッピングセンター建設工事に伴い、周知の遺跡である坪井上遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。遺跡内からは、縄文時代から弥生時代にかけての集落跡が確認され、住居址、遺構、特に袋状土壙は75基と非常に多く、その他出土品としては、硬玉製大珠等非常に珍しい資料が出上していますので大変貴重な調査事例といえると思います。

この調査報告書によって、祖先の遺業をしのぶことができるとともに、古代文化に対する認識がいっそう深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸ります。

最後になりますが、この発掘調査にあたり、格別のご指導を賜りました茨城県教育府文化課、発掘調査並びに報告書の執筆を担当いただきました千種重樹先生、そして調査にご協力いただきました常陸大宮街つくり株式会社、地元の関係者各位に心から厚く感謝を申し上げまして発刊のことばといたします。

平成11年10月

大宮町教育委員会教育長 海老根 幹男

例 言

- 1 本書は、茨城県那珂郡大宮町下村田字坪井上2379外に所在する坪井上遺跡の記録保存のための埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、第一次調査・第二次調査の併合報告書である。
- 3 発掘調査は、大型店舗（大宮ショッピングセンター）建設に伴うものである。
- 4 発掘調査は二次にわたって実施した。
第一次発掘調査 平成5年12月10日～平成6年3月31日
第二次発掘調査 平成8年3月16日～平成8年8月12日
- 5 発掘調査面積は、第一次調査9300m²、第二次調査20000m²である。
- 6 発掘調査は、千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を担当者とし、調査員に水谷正・飯島栄子を加え、地元作業員の協力を受けて実施した。
- 7 発掘調査は、可能なかぎり原位置法を採用した。
- 8 本書に収録した遺構・遺物の写真は、千種重樹が撮影したものを使用した。
- 9 遺物整理および報告書作成作業は、調査終了後より平成11年8月30日まで行った。
- 10 遺物整理および報告書作成作業は、千種重樹・水谷正・飯島栄子・田村みどりが従事した。
- 11 報告書作成にあたっては、整理の都合上、第一次調査区をA地区、第二次調査区をB・C地区とした。
- 12 遺構と遺物の説明記述は、印刷予算の関係で網羅することが困難となったので、紙面の許すかぎり実測図を収録した。
- 13 土器の実測図についても、完形品・準完形品・接合復元品・特徴のあるものを収録し、破片類の拓影図は割愛せざるを得なかった。
- 14 出土遺物は、大宮町教育委員会が一括保管している。

実 測 図 凡 例

- 1 出土遺物の種類は次の記号で区別した。

● 縄文土器 ■ 弥生土器 ○ 土師器 □ 須恵器 ▲ 自然石 △ 石器

〔参考文献・資料〕

- 『きらめく縄文土器～北関東地域性のあけぼの～』ミュージアム氏家 平成6年1月
『豊かな恵みの中で—なすの縄文入—』（財）栃木県文化振興事業団 平成7年10月
『玉とヒスイ』藤田富士夫 1992年3月 同朋出版社
『縄文土器の研究』小林達雄 1994年4月 小学館
『石器』鈴木道之助 1994年5月 柏書房
『大宮の考古遺物』大宮町歴史民俗資料館・大宮町教育委員会 1995年4月

本文目次

原色図版

序文

例言

本文目次

挿図目次

図版目次

第一章 遺跡の位置と考古学的環境	1
第二章 調査に至る経緯	4
第三章 調査の概要	5
〔第一次調査・A地区〕	
第四章 竪穴住居址の調査	13
第一号住居址～第一〇号住居址	
第五章 竪穴状遺構の調査	26
第一号竪穴状遺構～第五号竪穴状遺構	
第六章 土壙の調査	32
第一号土壙～第四三号土壙	
第七章 石組炉址の調査	72
第一号石組炉址～第二号石組炉址	
〔第二次調査・B地区の遺構〕	
第八章 竪穴住居址実測図	74
第一号住居址～第一九号住居址	
第九章 平地式住居址実測図	84
第一号平地式住居址～第四号平地式住居址	
第十章 竪穴状遺構・石組炉址・溝状遺構実測図	86
第一号竪穴状遺構～第七号竪穴状遺構・第一号石組炉址～第二号石組炉址・第二号溝状遺構	
第十一章 土壙の調査	91
第一号土壙～第二七五号土壙	
第十二章 B地区土壙実測図	174
第二三号土壙～第三四〇号土壙	
第十三章 硬玉製大珠	204
第十四章 石帯	206
〔第二次調査・C地区の遺構〕	
第十五章 C地区遺構実測図	207
竪穴住居址・竪穴状遺構・周溝・土壙	
〔遺物実測図〕	
第十六章 A地区～C地区出土遺物実測図	216

第一七章 まとめ	257
坪井上遺跡発掘調査会役員名簿・発掘調査作業従事者・整理並に報告書作成従事者・謝辞	260

挿 図 目 次

第一 図 遺跡位置図、周辺地形図.....	3
第二 図 調査区設定図.....	7
第三 図 第一次調査A地区遺構分布図.....	8~9
第四 図 第一次調査B地区遺構分布図.....	10~11
第五 図 第一次調査C地区遺構分布図.....	12
第六 図 第六号住居址実測図、遺物出土状態図.....	13
第七 図 第九号住居址実測図、遺物出土状態図.....	14
第八 図 第一〇号住居址実測図、遺物出土状態図.....	16
第九 図 第二号住居址実測図、遺物出土状態図.....	17
第一〇 図 第三号住居址実測図、遺物出土状態図.....	18
第一一 図 第一号住居址実測図、遺物出土状態図.....	20
第一二 図 第四号住居址実測図、遺物出土状態図.....	21
第一三 図 第五号住居址実測図、遺物出土状態図.....	22
第一四 図 第七号住居址実測図、遺物出土状態図.....	23
第一五 図 第八号住居址実測図、遺物出土状態図.....	24
第一六 図 第一号住居址カマド実測図（上）、第一〇号住居址炉址実測図（下）.....	25
第一七 図 第一号堅穴状遺構実測図、遺物出土状態図.....	27
第一八 図 第二号堅穴状遺構実測図、遺物出土状態図.....	28
第一九 図 第三号堅穴状遺構実測図、遺物出土状態図.....	29
第二〇 図 第四号堅穴状遺構実測図、遺物出土状態図.....	30
第二一 図 第五号堅穴状遺構実測図、遺物出土状態図.....	31
第二二 図 第一号土壤実測図、遺物出土状態図.....	32
第二三 図 第二号土壤実測図.....	33
第二四 図 第三号土壤実測図.....	34
第二五 図 第四号土壤実測図、遺物出土状態図.....	35
第二六 図 第五号土壤実測図、遺物出土状態図.....	36
第二七 図 第六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	37
第二八 図 第七号土壤実測図、遺物出土状態図.....	38
第二九 図 第八号土壤実測図、遺物出土状態図.....	39
第三〇 図 第九号土壤実測図、遺物出土状態図.....	40
第三一 図 第一〇号土壤実測図、遺物出土状態図.....	41
第三二 図 第一一号（左）・一二号（右）土壤実測図、遺物出土状態図.....	42
第三三 図 第一三号土壤実測図、遺物出土状態図.....	43
第三四 図 第一四号土壤実測図、遺物出土状態図.....	44
第三五 図 第一五号土壤実測図、遺物出土状態図.....	45
第三六 図 第一六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	46

第三七 図 第一七号土壤実測図	47
第三八 図 第一八号土壤実測図、遺物出土状態図	48
第三九 図 第一九号土壤実測図、遺物出土状態図	49
第四〇 図 第二〇号土壤実測図、遺物出土状態図	50
第四一 図 第二一号土壤実測図、遺物出土状態図	51
第四二 図 第二二号土壤実測図、遺物出土状態図	52
第四三 図 第二三号土壤実測図、遺物出土状態図	53
第四四 図 第二四号土壤実測図、遺物出土状態図	54
第四五 図 第二五号土壤実測図、遺物出土状態図	55
第四六 図 第二六号土壤実測図、遺物出土状態図	56
第四七 図 第二七号土壤実測図、遺物出土状態図	57
第四八 図 第二八号（上）・第二九号（下）土壤実測図、遺物出土状態図	59
第四九 図 第三〇号土壤実測図、遺物出土状態図	60
第五〇 図 第三一号土壤実測図、遺物出土状態図	61
第五一 図 第三二号土壤実測図、遺物出土状態図	62
第五二 図 第三三号土壤実測図、遺物出土状態図	63
第五三 図 第三四号土壤実測図、遺物出土状態図	64
第五四 図 第三五号土壤実測図	65
第五五 図 第三六号土壤実測図、遺物出土状態図	66
第五六 図 第三七号（右）・第三八号（左）土壤実測図、遺物出土状態図	67
第五七 図 第三九号（右）・第四〇号（左）土壤実測図、遺物出土状態図	68
第五八 図 第四一号土壤実測図	69
第五九 図 第四二号土壤実測図	70
第六〇 図 第四三号土壤実測図、遺物出土状態図	71
第六一 図 第一号石組炉址実測図	72
第六二 図 第二号石組炉址実測図	73
〔第二次調査 B地区〕	
第六三 図 第一号住居址実測図、遺物出土状態図（上）・第二号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	74
第六四 図 第三号住居址実測図、遺物出土状態図（上）・第五号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	75
第六五 図 第六号住居址実測図、遺物出土状態図（上）・第七号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	76
第六六 図 第七号住居址焼土塊実測図（上）・第八号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	77
第六七 図 第九号住居址実測図、遺物出土状態図（上）・第一〇号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	78
第六八 図 第一一号住居址実測図、遺物出土状態図（上）・第一一二号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	79
第六九 図 第一三号住居址実測図（上）・第一四号住居址カマド実測図（下）	80
第七〇 図 第一四号住居址実測図、第二九一号土壤実測図（上）・第一五号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	81
第七一 図 第一六号住居址実測図（上）・第一七号住居址実測図、遺物出土状態図（下）	82
第七二 図 第一八号住居址実測図（上）・第一九号住居址実測図（下）	83

第七三図	第一号平地式住居址実測図（上）・第二号平地式住居址実測図（下）	84
第七四図	第三号平地式住居址実測図（上）・第四号平地式住居址実測図、遺物出土状態図（下）	85
第七五図	第一号堅穴式遺構実測図、遺物出土状態図（上）・第三号堅穴式遺構実測図（下）	86
第七六図	第四号堅穴式遺構実測図、遺物出土状態図（左上）・第五号堅穴式遺構実測図（右上）、第六号堅穴式遺構実測図（下）	87
第七七図	第七号堅穴式遺構実測図、遺物出土状態図（上）・第一号石説炉址実測図（左下）、第二号石説炉址実測図（右下）	88
第七八図	第二号溝状遺構実測図、遺物出土状態図	89～90
第七九図	第一号土壤実測図、遺物出土状態図	92
第八〇図	第二号（左）・第三号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	92
第八一図	第四号土壤実測図、遺物出土状態図	93
第八二図	第五号土壤実測図、遺物出土状態図	93
第八三図	第六号土壤実測図、遺物出土状態図	94
第八四図	第七号土壤実測図、遺物出土状態図	94
第八五図	第八号土壤実測図、遺物出土状態図	95
第八六図	第九号土壤実測図、遺物出土状態図	95
第八七図	第一〇号土壤実測図、遺物出土状態図	96
第八八図	第一一号土壤実測図、遺物出土状態図	97
第八九図	第一一二号土壤実測図、遺物出土状態図	98
第九〇図	第一一三号土壤実測図、遺物出土状態図	98
第九一図	第一一四号土壤実測図、遺物出土状態図	98
第九二図	第一一五号土壤実測図、遺物出土状態図	99
第九三図	第一一六号土壤実測図、遺物出土状態図	99
第九四図	第一一七号（左）・第一一八号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	100
第九五図	第一一九号土壤実測図、遺物出土状態図	100
第九六図	第一二〇号土壤実測図、遺物出土状態図	101
第九七図	第一二一号土壤実測図、遺物出土状態図	101
第九八図	第一二二号土壤実測図、遺物出土状態図	102
第九九図	第一二五号土壤実測図、遺物出土状態図	102
第一〇〇図	第一二六号（左）・第一二七号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	103
第一〇一図	第一二九号土壤実測図、遺物出土状態図	103
第一〇二図	第一三〇号土壤実測図、遺物出土状態図	104
第一〇三図	第一三一号（左）・第一三二号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	105
第一〇四図	第一三四号土壤実測図、遺物出土状態図	105
第一〇五図	第一三五号土壤実測図、遺物出土状態図	106
第一〇六図	第一三六号土壤実測図、遺物出土状態図	107
第一〇七図	第一三九号土壤実測図、遺物出土状態図	107
第一〇八図	第一四〇号土壤実測図、遺物出土状態図	108

第一一〇図	第四〇号B土壤実測図、遺物出土状態図.....	108
第一一〇図	第四一号土壤実測図、遺物出土状態図.....	109
第一一一図	第四三号土壤実測図、遺物出土状態図.....	109
第一一二図	第四六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	110
第一一一三図	第四七号・第四八号・第四九号・第五〇号・第五九号・第六〇号・第六一号土壤実測図、遺物出土状態図、第一号溝状造構実測図.....	111
第一一四図	第五一号土壤実測図、遺物出土状態図.....	112
第一一一五図	第五二号土壤実測図、遺物出土状態図.....	112
第一一一六図	第五三号土壤実測図、遺物出土状態図.....	113
第一一一七図	第五四号土壤実測図、遺物出土状態図.....	113
第一一一八図	第五五号土壤実測図、遺物出土状態図.....	114
第一一一九図	第五六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	114
第一一二〇図	第五七号土壤実測図、遺物出土状態図.....	115
第一一二一図	第五八号土壤実測図、遺物出土状態図.....	115
第一一二二図	第六二号土壤実測図、遺物出土状態図.....	116
第一一二三図	第六三号（左）・第六四号（右）土壤実測図、遺物出土状態図.....	116
第一一二四図	第六五号土壤実測図、遺物出土状態図.....	117
第一一二五図	第六六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	117
第一一二六図	第六八号土壤実測図、遺物出土状態図.....	118
第一一二七図	第六九号土壤実測図、遺物出土状態図.....	118
第一一二八図	第七〇号土壤実測図、遺物出土状態図.....	118
第一一二九図	第七二号土壤実測図、遺物出土状態図.....	119
第一一二〇図	第七五号A土壤実測図、遺物出土状態図.....	120
第一一二一図	第七五号B土壤実測図、遺物出土状態図.....	120
第一一二二図	第七六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	120
第一一二三図	第七七号土壤実測図、遺物出土状態図.....	121
第一一二四図	第七八号土壤実測図、遺物出土状態図.....	121
第一一二五図	第七九号土壤実測図、遺物出土状態図.....	122
第一一二六図	第八〇号土壤実測図、遺物出土状態図.....	122
第一一二七図	第八一号土壤実測図、遺物出土状態図.....	122
第一一二八図	第八二号土壤実測図、遺物出土状態図.....	123
第一一二九図	第八三号土壤実測図、遺物出土状態図.....	123
第一一二〇図	第八四号土壤実測図、遺物出土状態図.....	123
第一一二一図	第八五号土壤実測図、遺物出土状態図.....	124
第一一二二図	第八六号土壤実測図、遺物出土状態図.....	124
第一一二三図	第八八号土壤実測図、遺物出土状態図.....	125
第一一二四図	第八九号土壤実測図、遺物出土状態図.....	125
第一一二五図	第九〇号A土壤実測図、遺物出土状態図.....	126

第一一四六図	第九一号土壤実測図、遺物出土状態図	126
第一一四七図	第九二号土壤実測図、遺物出土状態図	126
第一一四八図	第九三号土壤実測図、遺物出土状態図	127
第一一四九図	第九四号土壤実測図、遺物出土状態図	128
第一一五〇図	第九五号土壤実測図、遺物出土状態図	128
第一一五一図	第九六号土壤実測図、遺物出土状態図	129
第一一五二図	第九七号（左）・第九八号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	129
第一一五三図	第一一〇三号（左）・第一一〇四号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	130
第一一五四図	第一一〇八号土壤実測図、遺物出土状態図	130
第一一五五図	第一一〇九号土壤実測図、遺物出土状態図	131
第一一五六図	第一一一二号土壤実測図、遺物出土状態図	131
第一一五七図	第一一一三号土壤実測図、遺物出土状態図	132
第一一五八図	第一一一四号土壤実測図、遺物出土状態図	132
第一一五九図	第一一一六号土壤実測図、遺物出土状態図	133
第一一六〇図	第一一一七号（左）・第一一八号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	133
第一一六一図	第一一一九号土壤実測図、遺物出土状態図	134
第一一六二図	第一一二〇号（左）・第一一二一号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	134
第一一六三図	第一一二二号土壤実測図、遺物出土状態図	134
第一一六四図	第一一二四号土壤実測図、遺物出土状態図	135
第一一六五図	第一一二五号土壤実測図、遺物出土状態図	135
第一一六六図	第一一二九号（右）・第一三〇号（左）土壤実測図、遺物出土状態図	136
第一一六七図	第一一三一号土壤実測図、遺物出土状態図	136
第一一六八図	第一一三二号土壤実測図、遺物出土状態図	137
第一一六九図	第一一三六号（左）・第一一三七号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	137
第一一七〇図	第一一三八号土壤実測図、遺物出土状態図	138
第一一七一図	第一一四一号土壤実測図、遺物出土状態図	138
第一一七二図	第一一四三号土壤実測図、遺物出土状態図	139
第一一七三図	第一一四四号土壤実測図、遺物出土状態図	140
第一一七四図	第一一四六号土壤実測図、遺物出土状態図	141
第一一七五図	第一一四八号土壤実測図、遺物出土状態図	141
第一一七六図	第一一四九号土壤実測図、遺物出土状態図	141
第一一七七図	第一一五〇号土壤実測図、遺物出土状態図	142
第一一七八図	第一一五二号A・B・C・D土壤実測図、遺物出土状態図	142
第一一七九図	第一一五三号土壤実測図、遺物出土状態図	142
第一一八〇図	第一一五四号土壤実測図、遺物出土状態図	143
第一一八一図	第一一五五号土壤実測図、遺物出土状態図	143
第一一八二図	第一一五六号土壤実測図、遺物出土状態図	144
第一一八三図	第一一五七号土壤実測図、遺物出土状態図	144

第一八四图	第一五九号土壤实测图，遗物出土状态图	145
第一八五图	第一六三号土壤实测图，遗物出土状态图	145
第一八六图	第一六四号土壤实测图，遗物出土状态图	145
第一八七图	第一六六号（左）·第一六七号（中）·第一六八（右）土壤实测图，遗物出土状态图	146
第一八八图	第一六九号土壤实测图，遗物出土状态图	147
第一八九图	第一七〇号（上）·第一七一号（中）·第一八一号（下）土壤实测图，遗物出土状态图	148
第一九〇图	第一七二号土壤实测图，遗物出土状态图	149
第一九一图	第一七四号土壤实测图，遗物出土状态图	149
第一九二图	第一七五号土壤实测图，遗物出土状态图	149
第一九三图	第一七六号土壤实测图，遗物出土状态图	150
第一九四图	第一七八号（左）·第一七九号（右）土壤实测图，遗物出土状态图	150
第一九五图	第一八〇号土壤实测图，遗物出土状态图	151
第一九六图	第一八二号土壤实测图，遗物出土状态图	151
第一九七图	第一八五号土壤实测图，遗物出土状态图	152
第一九八图	第一八六号土壤实测图，遗物出土状态图	152
第一九九图	第一八七号土壤实测图，遗物出土状态图	153
第二〇〇图	第一八八号A·第一八八号B·第二〇〇号土壤实测图，遗物出土状态图	153
第二〇一图	第一九〇号·第一九一号·第一九二号土壤实测图，遗物出土状态图	154
第二〇二图	第一九三号土壤实测图，遗物出土状态图	155
第二〇三图	第一九四号（左）·第一九五号（右）土壤实测图，遗物出土状态图	156
第二〇四图	第一九六号（左）·第一九七号（右）土壤实测图，遗物出土状态图	156
第二〇五图	第一九八号（左）·第一九九号（右）土壤实测图，遗物出土状态图	158
第二〇六图	第二〇一号土壤实测图，遗物出土状态图	158
第二〇七图	第二〇三号·第二〇四号·第二〇五号土壤实测图，遗物出土状态图	159
第二〇八图	第二一二三号土壤实测图，遗物出土状态图	159
第二〇九图	第二一二四号A（左）·第二一二四号B（右）土壤实测图，遗物出土状态图	160
第二一二〇图	第二一二五号土壤实测图，遗物出土状态图	160
第二一二一图	第二一二六号土壤实测图，遗物出土状态图	161
第二一二二图	第二一二七号土壤实测图，遗物出土状态图	161
第二一二三图	第二一二八号土壤实测图，遗物出土状态图	161
第二一二四图	第二一二九号土壤实测图，遗物出土状态图	162
第二一二五图	第二一二七号土壤实测图，遗物出土状态图	162
第二一二六图	第二一二八号土壤实测图，遗物出土状态图	163
第二一二七图	第二一二九号土壤实测图，遗物出土状态图	163
第二一二八图	第二二三一号土壤实测图，遗物出土状态图	164
第二一二九图	第二二三二号土壤实测图，遗物出土状态图	164
第二一二一〇图	第二二三三号土壤实测图，遗物出土状态图	165
第二一二一一图	第二二三八号土壤实测图，遗物出土状态图	165

第二二二四圖	第二四〇号土壤実測図、遺物出土状態図	166
第二二三四圖	第二四一號土壤実測図、遺物出土状態図	166
第二二四四圖	第二四四號土壤実測図、遺物出土状態図	166
第二二五五圖	第二四五號土壤実測図、遺物出土状態図	167
第二二六四圖	第二四六號土壤実測図、遺物出土状態図	167
第二二七四圖	第二三三号（左）・第二四七号（右）・第二四八号（中）土壤実測図、遺物出土状態図	168
第二二八四圖	第二四九號土壤実測図、遺物出土状態図	169
第二二九四圖	第二五〇號土壤実測図、遺物出土状態図	169
第二三〇四圖	第二五一號土壤実測図、遺物出土状態図	170
第二三一四圖	第二五六號土壤実測図、遺物出土状態図	171
第二三二四圖	第二五八号（左）・第二五九号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	171
第二三三四圖	第二六二号（左）・第二六三号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	172
第二三四四圖	第二六四号（左）・第二六五号（右）土壤実測図、遺物出土状態図	172
第二三五五圖	第二六六號土壤実測図、遺物出土状態図	173
第二三六四圖	第二三号、第二四号、第二八号、第三三号土壤実測図	174
第二三七四圖	第三七号、第三八号、第四二号土壤実測図	175
第二三八四圖	第四四号、第四五号、第六七号、第七三号、第七四号、第八七号土壤実測図	176
第二三九四圖	第九九号、第一〇〇号、第一〇一号土壤実測図	177
第二四〇四圖	第一〇二号、第一〇五号、第一〇六号、第一〇七号、第一一〇号、第一一一号、第一一五号 土壤実測図	178
第二四一四圖	第一一二三号、第一一二六号、第一一二七号、第一一二八号、第一三三号土壤実測図	179
第二四二四圖	第一一三四号、第一一三五号、第一一四二号、第一一四五号、第一一四七号土壤実測図	180
第二四三四圖	第一一五一号、第一一五八号、第一一六〇号、第一一六一号、第一一六二号、第一一七三号土壤実測図	181
第二四四五圖	第一一六五号、第一一七七号、第一一八三号、第一一八四号、第一一八九号土壤実測図	182
第二四五五圖	第二一二号、第二一二六号、第二一二七号、第二一二八号、第二一二九号、第二一二〇号、第二一二一号 土壤実測図	183
第二四六四圖	第二一二二号、第二一二九号、第二一二〇号、第二一二二号、第二一二三号、第二一二四号、第二一二五号、 第二一二六号土壤実測図	184
第二四七四圖	第二一二三〇号、第二三四四号、第二二三五号、第二二三六号、第二二三九号土壤実測図	185
第二四八四圖	第二一二四二号、第二一二四三号、第二一二五二号、第二一二五三号土壤実測図	186
第二四九四圖	第二一二五四号、第二一二五五号、第二一二五七号、第二一二六一号土壤実測図	187
第二五〇四圖	第二一二六七号、第二一二六八号、第二一二六九号、第二一二七〇号土壤実測図	188
第二五一四圖	第二一二七一号、第二一二七二号、第二一二七三号、第二一二七四号、第二一二七五号、第二一二七六号土壤実測図	189
第二五二四圖	第二一二七七号、第二一二七八号、第二一二七九号、第二一二八〇号土壤実測図	190
第二五三四圖	第二一二八一号、第二一二八二号、第二一二八三号土壤実測図	191
第二五四四圖	第二一二八四号、第二一二八五号、第二一二八六号土壤実測図	192
第二五五四圖	第二一二八七号、第二一二八八号、第二一二八九号、第二一二九〇号土壤実測図	193
第二五六四圖	第二一二九一号、第二一二九二号、第二一二九三号、第二一二九四号土壤実測図	194

第二五七図	第二九五号・第二九六号・第二九七号・第二九八号土壤実測図	195
第二五八図	第二九九号・第三〇〇号・第三〇一号・第三〇二号土壤実測図	196
第二五九図	第三〇三号・第三〇四号・第三〇五号・第三〇六号・第三〇七号・第三〇八号・第三〇九号 土壤実測図	197
第二六〇図	第三一〇号・第三一一号・第三一二号・第三一三号・第三一四号土壤実測図	198
第二六一図	第三一五号・第三一六号・第三一七号・第三一八号・第三一九号・第三二〇号・第三二一号 土壤実測図	199
第二六二図	第三二二号・第三二三号・第三二四号・第三二五号土壤実測図	200
第二六三図	第三二六号・第三二七号・第三二八号・第三二九号・第三三〇号・第三三一号土壤実測図	201
第二六四図	第三三二号・第三三三号・第三三四号・第三三五号・第三三六号土壤実測図	202
第二六五図	第三三七号・第三三八号・第三三九号・第三四〇号土壤実測図	203
第二六六図	硬玉製大珠実測図	205
第二六七図	石帯実測図	206
第二六八図	C地区第一号住居址・カマド実測図・第二号住居址実測図	207
第二六九図	C地区竪穴状遺構実測図(一)	208
第二七〇図	C地区竪穴状遺構実測図(二)・遺物出土状態図	209
第二七一図	C地区竪穴状遺構実測図(三)・周溝実測図	210
第二七二図	C地区土壤実測図(一)	211
第二七三図	C地区土壤実測図(二)	212
第二七四図	C地区土壤実測図(三)	213
第二七五図	C地区土壤実測図(四)	214
第二七六図	C地区土壤実測図(五)	215
第二七七図	第一次調査A地区出土遺物実測図(一)	216
第二七八図	第一次調査A地区出土遺物実測図(二)	217
第二七九図	第一次調査A地区出土遺物実測図(三)	218
第二八〇図	第一次調査A地区出土遺物実測図(四)	219
第二八一図	第一次調査A地区出土遺物実測図(五)	220
第二八二図	第一次調査A地区出土遺物実測図(六)	221
第二八三図	第二次調査B地区出土遺物実測図(一)	222
第二八四図	第二次調査B地区出土遺物実測図(二)	223
第二八五図	第二次調査B地区出土遺物実測図(三)	224
第二八六図	第二次調査B地区出土遺物実測図(四)	225
第二八七図	第二次調査B地区出土遺物実測図(五)	226
第二八八図	第二次調査B地区出土遺物実測図(六)	227
第二八九図	第二次調査B地区出土遺物実測図(七)	228
第二九〇図	第二次調査B地区出土遺物実測図(八)	229
第二九一図	第二次調査B地区出土遺物実測図(九)	230
第二九二図	第二次調査B地区出土遺物実測図(一〇)	231

第二九三図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一一）	232
第二九四図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一二）	233
第二九五図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一三）	234
第二九六図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一四），拓影図	235
第二九七図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一五）	236
第二九八図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一六），拓影図	237
第二九九図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一七），拓影図	238
第三〇〇図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一八）	239
第三〇一図	第二次調査B地区出土遺物実測図（一九）	240
第三〇二図	第二次調査B地区出土遺物実測図（二〇）	241
第三〇三図	第二次調査B地区出土遺物実測図（二一）	242
第三〇四図	第二次調査B・C地区出土遺物実測図	243
第三〇五図	A地区出土石器実測図（一）	244
第三〇六図	A地区出土石器実測図（二）	245
第三〇七図	A地区出土石器実測図（三）	246
第三〇八図	B地区出土石器実測図（一）	247
第三〇九図	B地区出土石器実測図（二）	248
第三一〇図	B地区出土石器実測図（三）	249
第三一一図	B地区出土石器実測図（四）	250
第三一二図	B地区出土石器実測図（五）	251
第三一三図	B地区出土石器実測図（六）	252
第三一四図	B地区出土石器実測図（七）	253
第三一五図	B地区出土石礫実測図（一）	254
第三一六図	B地区出土土製品・鉄製品実測図	255
第三一七図	B地区出土刀剣，C地区出土石棒・刀剣・石斧実測図	256

図 版 目 次

- 図版第一 A地区調査前の現状・第一号住居址全景・第一〇号住居址遺物出土状態（一）
- 図版第二 調査風景（第一〇号住居址）・第一〇号住居址遺物出土状態（二）・第一〇号住居址全景
- 図版第三 第九号土壤遺物出土状態（一）・第九号土壤遺物出土状態（二）・第二四号土壤遺物出土状態
- 図版第四 第二八号土壤上層部遺物出土状態・第二八号土壤下層部遺物出土状態・第三〇号土壤遺物出土状態（一）
- 図版第五 第三〇号土壤遺物出土状態（二）・第三〇号土壤遺物出土状態（三）・第三〇号土壤遺物出土状態（四）
- 図版第六 第三二号土壤遺物出土状態・第三三号土壤遺物出土状態・第三八号土壤遺物出土状態
- 図版第七 B・C地区調査前の現状・B・C地区調査安全祈願祭・第六号住居址全景
- 図版第八 第九号土壤刀劍出土状態・第九号土壤鐵鎌出土状態・第二一号土壤遺物出土状態
- 図版第九 第三二号土壤遺物出土状態・第四〇号土壤遺物出土状態・第七〇号土壤遺物出土状態
- 図版第〇〇 第八〇号土壤遺物出土状態（一）・第八〇号土壤遺物出土状態（二）・第九三号土壤遺物出土状態
- 図版第一一 第九六号土壤遺物出土状態・第一二七号土壤遺物出土状態・第一三一号土壤硬玉製大珠出土状態
- 図版第一二 第一一号硬玉製大珠出土状態・第二号硬玉製大珠出土状態・第三号硬玉製大珠出土状態
- 図版第一三 第一三八号土壤遺物出土状態・第一四三号土壤遺物出土状態・第一四四号土壤遺物出土状態
- 図版第一四 第一四八号土壤遺物出土状態・第一四九号土壤遺物出土状態・第一七八号土壤遺物出土状態
- 図版第一五 第一八二号土壤遺物出土状態・第一九一号土壤遺物出土状態・第一九二号土壤遺物出土状態
- 図版第一六 第一九三号土壤遺物出土状態・第二二八号土壤遺物出土状態・第二三二号土壤遺物出土状態
- 図版第一七 第二三五号土壤半截発掘状況・第二七九号土壤遺物出土状態（一）・第二七九号土壤遺物出土状態（二）
- 図版第一八 B地区溝状遺構全景・第一号石匂炉址全景・第二号石匂炉址全景
- 図版第一九 B地区調査風景（一）・B地区調査風景（二）・B地区調査風景（三）
- 図版第二〇 C地区第一号土壤全景・C地区第1トレンチ第二号竪穴状遺構石棒出土状態・C地区第4トレンチ第4号土壤遺物出土状態（一）
- 図版第二一 C地区第4トレンチ第4号土壤遺物出土状態（二）・B地区第3号溝状遺構埋没土断面・B地区完掘後の遺構分布状況（一）
- 図版第二二 B地区完掘後の遺構分布状況（二）・B地区完掘後の遺構分布状況（三）・C地区完掘後の遺構分布状況
- 図版第二三 A地区出土遺物（一）
- 図版第二四 A地区出土遺物（二）
- 図版第二五 A地区出土遺物（三）
- 図版第二六 B地区出土遺物（一）
- 図版第二七 B地区出土遺物（二）
- 図版第二八 B地区出土遺物（三）
- 図版第二九 B地区出土遺物（四）

- 図版第三〇 B地区出土遺物（五）
- 図版第三一 B地区出土遺物（六）
- 図版第三二 B地区出土遺物（七）
- 図版第三三 B地区出土遺物（八）
- 図版第三四 B地区出土遺物（九）
- 図版第三五 B地区出土遺物（一〇）
- 図版第三六 B地区出土遺物（一一）
- 図版第三七 B地区出土遺物（一二）
- 図版第三八 B地区出土遺物（一三）
- 図版第三九 石劍，石棒，石斧（1・2 A地区，3・4・5 B地区）
- 図版第四〇 B地区出土遺物（凹石，石皿，石鑓，石槍，石錐）
- 図版第四一 凹石，石皿（左上A地区，他はB地区）
- 図版第四二 B地区出土遺物（凹石，石皿）
- 図版第四三 B地区出土遺物（凹石，敲石，磨石）
- 図版第四四 B地区出土遺物（打製石斧）一
- 図版第四五 B地区出土遺物（打製石斧）二
- 図版第四六 B地区出土遺物（磨石，敲石，磨製石斧）

第一 章 遺跡の位置と考古学的環境

坪井上遺跡は、茨城県那珂郡大宮町大字下村田字坪井上2379番地ほかに所在する。

大宮町は県の中央部北寄りに位置する。町の東を久慈川が南流し、西に那珂川が南東に流れ、中央を『常陸國風土記』久慈郡の条に「丹石交雜れり、色は瑠璃に似て、火を鑄るに尤好し」と記されているメノウを産する玉川が南流する。

東は久慈郡金砂郷町、西は緒川村・東茨城郡御前山村・同桂村、南は瓜連町・那珂町、北は山方町・美和村に接する。

那珂川と久慈川とに挟まれた丘陵地を形成し、町域の大部分はこれらの河川の河岸段丘上にあり、西方一帯は標高200m前後の山地で鶴子山塊に連なる丘陵地帯になっている。

南部は標高15~30mの沖積地で穀倉地帯となっており、北高南低の地形を呈する。

中央をJR水郡線と国道118号が並行して南北に貫き、水戸市と県北山間地域の中間に位置する一方、日立市と栃木県足利市を結ぶ国道293号が町の中心部で交差して東西に走り、地理的に那珂郡の中心であるばかりでなく、県北地域の政治・経済・文化の一拠点となっている。

坪井上遺跡は、町域南東部、玉川左岸の標高47.5~50mの台地上に位置し、面積約75000m²を有する広大な遺跡である。遺跡の東側を国道118号が南北に走る。

茨城県教育委員会昭和62年刊の『茨城県遺跡地名表』に記載されている大宮町内の遺跡は112を数える。

先土器時代の遺跡としては東野遺跡、梶巾遺跡があげられる。梶巾遺跡からは、石槍、石核などが多量に出土している。

縄文時代の遺跡は八幡山、富士山、東山、坪井上、高ノ倉、幌巾、若林A、三美、宮中、三美根岸、小野天神前、泉沢A、下坪、石沢、北村田、菅又八田、泉沢B、大宮自然公園、茅峯、東仲山、中道、後田A、三蔵、諏訪台、大阪平B、向山、町営牧場内、若林B、東原、小中、待合、後田B、赤石、糠塚、小場中崎、大塚、上宿、源氏平、居合などがあり、中期から後期にかけての数が著しく増加する。

これらの遺跡からは縄文式土器を主体として、土鍤、石鍤、石錐、凹石、石棒、石斧、石匙、独鉛石、砥石、石槍などが出土している。

茅峯、泉沢両遺跡からは頭部に彫刻のある有頭石棒が、諏訪台遺跡からは、ほぼ完形に近い土偶が発見されている。

宮中遺跡からは加曾利B式土器、阿玉台式土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、縄文時代と重複しているものとして、坪井上、高ノ倉、三美、小野天神前、幌巾、泉沢B、後田A、糠塚などがあげられ、他に下村田、富士山、犬追などがある。

特に小野天神前遺跡では再葬墓がみられ、人面付壺形土器が3個も出土した。一つの遺跡から3個人面付壺形土器が出土した例は県内ではこの遺跡だけで、貴重な資料となっている。

また、富士山遺跡からは合口壺棺が発見された。

古墳時代の遺跡（集落跡）としては、三美根岸、泉沢A、滝ノ上、富士山、岩崎、上大賀東平、小祝、鷹巣、宮中、根本、西坪井、堰ノ上、八田向原、戸内、抽ヶ台、後三ヶ尻A・B、額山A・B、姥賀、細内、堀之内、仲坪、前坪、中崎、馬場先、河井台、田子内、山根、大宮、八幡山などがあげられよう。

古墳としては糠塚古墳と抽ヶ台古墳があり、特に糠塚古墳は全長80mと推定される前方後円墳で、久慈川流域の北限ではもっとも大きな古墳である。

古墳群では岩崎古墳群、鷹巣古墳群、松吟寺古墳群、富士権現古墳群、一騎山古墳群、根本古墳群などがあげられる。

10基を数えた一騎山古墳群からは、直刀、鉄鏃、棗玉、武人埴輪、女子埴輪、動物（鹿形）埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土した。

八田雷神山には横穴群がみられ、上段に1基、下段に4基、計5基を数える。

上段の1号墓のみがドーム形で、他はアーチ形を呈している。

町域南東部に所在する根本古墳群は、円墳2基によって形成されているが、平成2年9月、分譲住宅の造成工事が2基の古墳直下に及んでいることを付近の住民が発見し教育委員会へ通報した。

教育委員会は直ちに工事を中止させ、開発業者と再三にわたる協議の末に、墳丘の測量調査を行った後、現状保存することになった。危機一髪で破壊を免れた古墳群である。

富士山古墳群の3号墳からは、鉄斧や硬玉製の勾玉が副葬品として出土している。

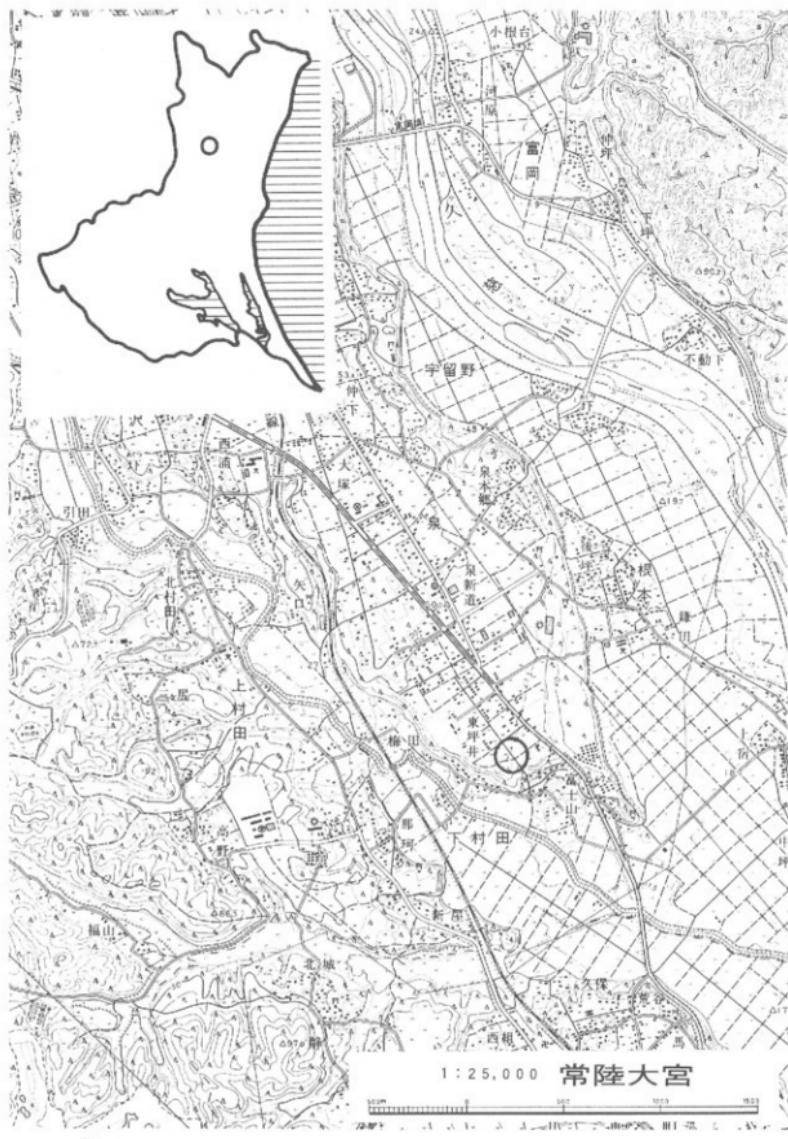
奈良・平安時代の遺跡は『地名表』によると43を数えるが、『調査カード』によって資料が確認されている遺跡としては東平、高ノ倉、三美、鷹巣、宮中、小野天神前、北村田、菅原、戸内、抽ヶ台、西坪井、富谷原、富谷原下、石幸、台坪、春日神社前、中丸、宿東、小場中崎、西原、源氏平、居合などがあげられよう。

特に鷹巣遺跡は過去2回（昭和56・61年）発掘調査が行われている。

就中、第二次調査で多量に出土した布目瓦は、久慈郡金沙郷町大里・薬谷付近に所在したであろうと想定されている久慈郡衙跡への供給説があり、出土遺物の特徴から8世紀第3四半期ころから營まれた集落跡で、遺跡の性格上、郡衙や寺院と消長をともにしたものではないかと考えられている。

そうだとすると、奈良時代の大宮地方は、瓦製作などに関係した専業集団が居住して、古代常陸における窯業技術の重要な役割を担っていたかも知れない。

大宮町の歴史的環境は以上のように概観できると思う。



第一図 遺跡位置図・周辺地形図

第二章 発掘調査に至る経緯

大宮町は水戸市と県北山間地域の中間に位置し、地理的に那珂郡の中心であるばかりでなく、県北地域の政治・経済・文化の一拠点となっている。

しかし、国道118号バイパスの開通以来、バイパス沿いに駐車場のある郊外型の店舗が進出するに伴って、旧市街の商店街は衰退の一途を辿り、捨て置き難き状態に立ち到了った。

そこで、起死回生の策として、水戸市泉町2丁目3番2号に所在する株式会社伊勢甚本社取締役総引昭好と那珂郡大宮町308番地に所在する大宮ショッピングセンター建設任意組合理事長高岡文男は共同で、集客力の大きい拠点的な大型店舗を建設して、沈滞している商店街の活性化を図ろうということになった。

両者は大型店舗の建設予定地として、国道118号に面した那珂郡大宮町大字下村田字坪井上2376外の地を適地と選定し、地権者と交渉を重ねて大方の日程がつくようになった。

平成4年2月17日、両者は大宮町教育委員会に対して、建設予定地内の埋蔵文化財有無と所在した場合の取扱いについて照会を行った。

これを受けて町教育委員会は、予定地が県番号591・町番号5の周知遺跡である坪井上遺跡のエリア内であり、工事着工前に記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答をした。

発掘調査の必要性を理解していた開発側は、直ちに所定の手続きを町教育委員会に依頼した。

発掘調査担当の要請を受けた千種重樹は、時を移さず現地に赴き、町教育委員会・開発側・担当者の三者による協議を行い、調査方法・期間・予算等について合意を得た。

調査期間は、地権者と完全な契約が成立する期間を考慮して、平成5年12月10日から平成6年3月31日までと決定した。

町教育委員会は文化財保護法第57条の2および第98条の2に定められた所定の手続きを済ませ、「坪井上遺跡発掘調査会」を結成した。

発掘作業の従事者は地元の協力を得られることになり、かくして平成5年12月10日、関係者一同現場事務所に集合し、調査方法の説明後作業開始。平成6年3月30日予定どおり9300m²の調査が無事終了した。

ところが、調査終了後間もなく、開発側で建設計画の見直しがあり、調査が終了した土地の西側に隣接する20000m²について第二次の発掘調査を実施することになった。

大宮ショッピングセンター建設任意組合は、常陸大宮街づくり株式会社と改称した。

第二次調査区の現状は15000m²が平坦な畑地、5000m²が山林である。調査方法は、畑地の15000m²については第一次調査の構造出土状況からみて全面調査とし、山林については畑地の調査中に伐開して急傾斜地を除く部分にトレチを設定するという方法で合意した。

この時点で、第一次の調査区をA地区、第二次調査区の全面調査部をB地区、山林をC地区と呼称することにした。調査期間は地権者との契約を持って平成8年3月16日より同年8月12日までと決定した。

平成8年3月6日、大宮町教育委員会において調査会の最終打合せ。

平成8年3月14日、大宮町下村田「田園都市センター」において地権者に対する説明会。

平成8年3月16日、関係者一同現場に参集。神職籍を有する担当者千種重樹斎主となって発掘調査安全祈願祭を厳修。「調査作業を拂田諸人等を諸々の枉事不令在手頭脚蹕不令在計画随分大幸成果予取所期所目的遂果之未給正恐莫白々」直会の後、調査方法の説明を行い直ちに調査を開始した。

調査は、後述するような遺構を多数検出し、予定どおり平成8年8月12日に終了した。

第三章 調査の概要

第一次調査A地区9300m²の現状は休耕状態の畠地で平坦地である。

調査方法は極めて残念乍ら予算の関係で遺構確認のトレンチ方式を採用し、遺構分布の濃密な範囲を重點的に調査するという変則的な方法を採用せざるを得なかった。

確認トレンチは幅1mとし、長さ35mから90mのトレンチを13本設定した。

遺構確認の結果、トレンチを設定した範囲の大部分は表土除去を行うことになった。

調査区には5m方眼のグリッドを設定した。

グリッドは南北方向に縦軸をとり、これに直交する東西方向を横軸とし、縦軸にはアルファベット記号、横軸には算用数字を用いて標記した。

遺構の発掘に当っては、原則として原位置のまま遺物を柱状に残し、出土地点、床上レベルまたは確認面からのレベル、表裏関係、種類などを記録した後に収納する方法をとった。

また、完形品や大形破片については、時間の許す限り実測図にその形を記録することにつとめた。

カマドの調査に当っては、左右の両袖・煙出し部を検出し、カマドの構造を把握することに努めた。

第一次調査A地区から検出された遺構は次のとおりである。

縄文時代住居址3軒・弥生時代住居址2軒・古墳時代住居址5軒・竪穴状遺構5軒・石組炉址2基・土壙43基などである。

住居址の中で特に注目されるのは第一〇号住居址で、径8mの縄文時代中期の典型的な円形住居址である。

赤変硬化した焼上が充满する径150cmの地床炉址が付設されており、高い頻度で火が使われていたことが窺われる。

土壙は43基を確認したが、円筒状またはり鉢状土壙が28基、袋状土壙が15基である。

15基の袋状土壙のうち、深さ1m以上のものが11基存在し、これらの土壙からは大木8a式や阿玉台式の良好な土器が出土している。

原色図版第一下段左は第三〇号袋状土壙出土で、器高36cmの深鉢形土器である。

口縁部には隆帯によるS字文が配され、全体に縄文が施文され、3本の沈線による文様が描かれている。

底面には網代痕が認められる。(第二八〇図)

原色図版第一下段右も第三〇号袋状土壙出土で、器高43cmの円筒状の深鉢形土器である。

口縁部には刻みのある隆帯がみられ、胴部全体に縄文が施文され、沈線文がみられる。(第二八一図)

また、特筆すべきは第二八号袋状土壙出土の土器である。(原色図版第二上段)

器高21cmの小型深鉢形土器の完形品で、口縁部は波状を呈し1か所が高くなっている。実測図第二七九図上段左にみられるように、口辺部文様帶を跨ぐようにブリッジ状の把手も付いている。

1か所突出した把手の裏面には大きな日と月をもつクロウ形の顔面がモチーフされ、獸面把手の一種と考えられるが、完形品の出土は貴重である。

第二次調査B・C地区の現状は、B地区が畠地の平坦地、C地区は山林で東側半分は急傾斜地である。

B地区15000m²は全面調査、C地区5000m²の山林部は伐開後に確認トレンチを設定して遺構検出部の拡張調査を実施した。

B・C地区もA地区と同様に調査区に5m方眼のグリッドを設定した。

グリットはA・B地区共に南北方向に縦軸をとり、これに直交する東西方向を横軸とし、縦軸には算用数字、横軸にはアルファベット記号を用いて標記した。

遺構の発掘に当っては、原則として原位置のまま遺物を柱状に残し、出土地点・床上レベルまたは確認面からのレベル、表裏関係、種類などを記録した後に収納する方法をとった。

また、完形品や大形破片、大形石器、大形石製品、大形鉄製品などについては、時間の許す限り実測図にその形を記録することにつとめた。

カマドの調査に当っては、左右の両袖・煙出し部を検出し、カマドの構造を把握することに努めた。

B地区の遺構は、縄文時代住居址16軒・古墳時代住居址3軒・平地式住居址4軒・竪穴状遺構7軒・周溝（部分検出）2か所・土壙340基・溝状遺構1条が検出された。

C地区では、古墳時代住居址2軒・竪穴状遺構9軒・周溝（部分検出）2か所・土壙18基が検出された。

B地区的土壙340基のうち、57基が袋状土壙で、深さ1mを越えるものが26基である。

C地区的土壙は18基で、3基が袋状土壙であり、深さ1mを越えるものは2基である。

B地区的出土遺物のうち特異なものは第一八二号袋状土壙（深さ125cm）の底面上より出土した馬高式系の火災系土器であろう。

詳細は「まとめ」の章で述べるが、北陸地方との交易を物語る貴重な資料といえるだろう。

また、調査前から「出る筈だ」と言われていたのが硬玉製大珠である。

それは、かなり以前から、耕作中に5個の硬玉製大珠が採集されていたからである。このうち4個は町指定文化財になっているほどヒスイに対する関心度が高かった。

幸いにして今次の調査で輕節型の良質良形の硬玉製大珠を3個発見することができた。

一つの遺跡から8個もの硬玉製大珠が出土したことは全国的にも稀有な例で驚嘆に値する。

これもまた北陸地方との交易の証であろう。

第九三号袋状土壙からは土器が一括出土している。（第一四八図）

大木式土器と阿玉台式土器の共伴で、このような袋状土壙の遺物出土状態は、福島県の妙音寺遺跡や栃木県那須地方でもみられるので、東北地方南部で発達した袋状土壙が同地方の大木式土器とともに、北関東地方へ伝播してきたルートの解明に役立つものと思われる。

土器以外では凹石・石斧・石劍・石鐵・鉄鐵・石帶・直刀・輪鼓状耳飾り・石製有孔円板・土製有孔円板などが出土した。第九号土壙出土の直刀は長さ51cmである。

C地区は山林伐開後5本のトレンチを設定して調査した。検出した遺構は前記のとおりである。

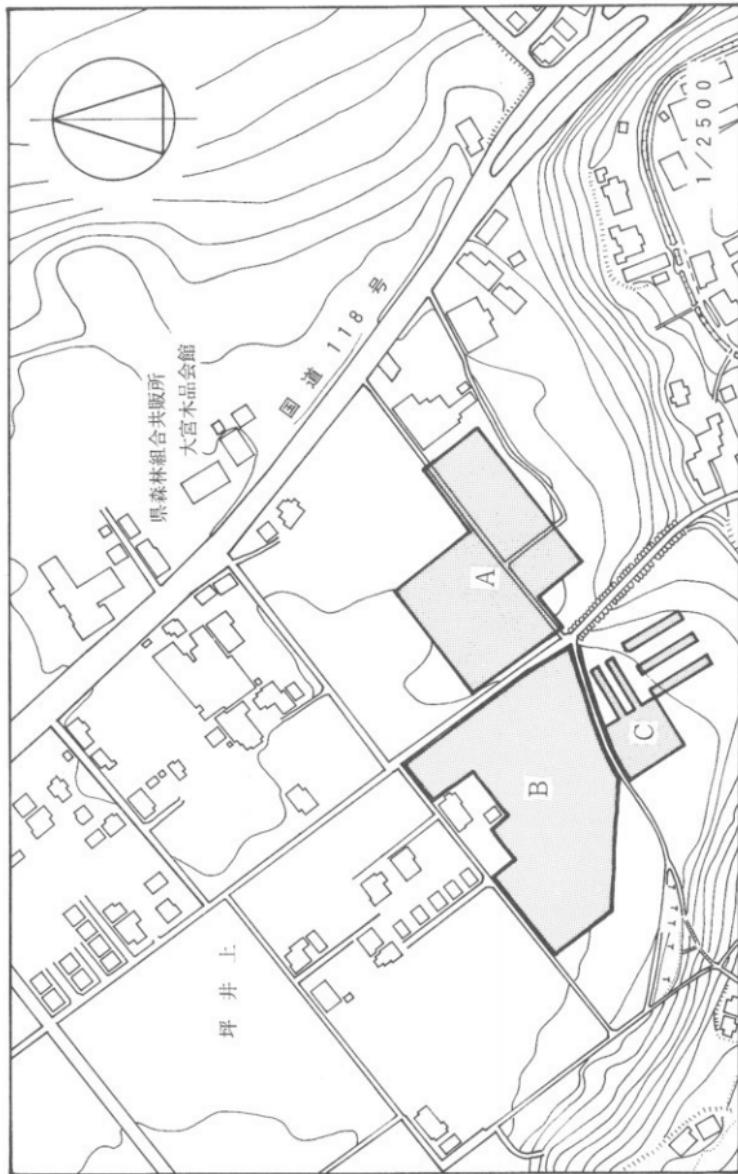
第1トレンチ第一号竪穴状遺構からは、径3cm、長さ52cmの石棒が折れた状態で出土した。

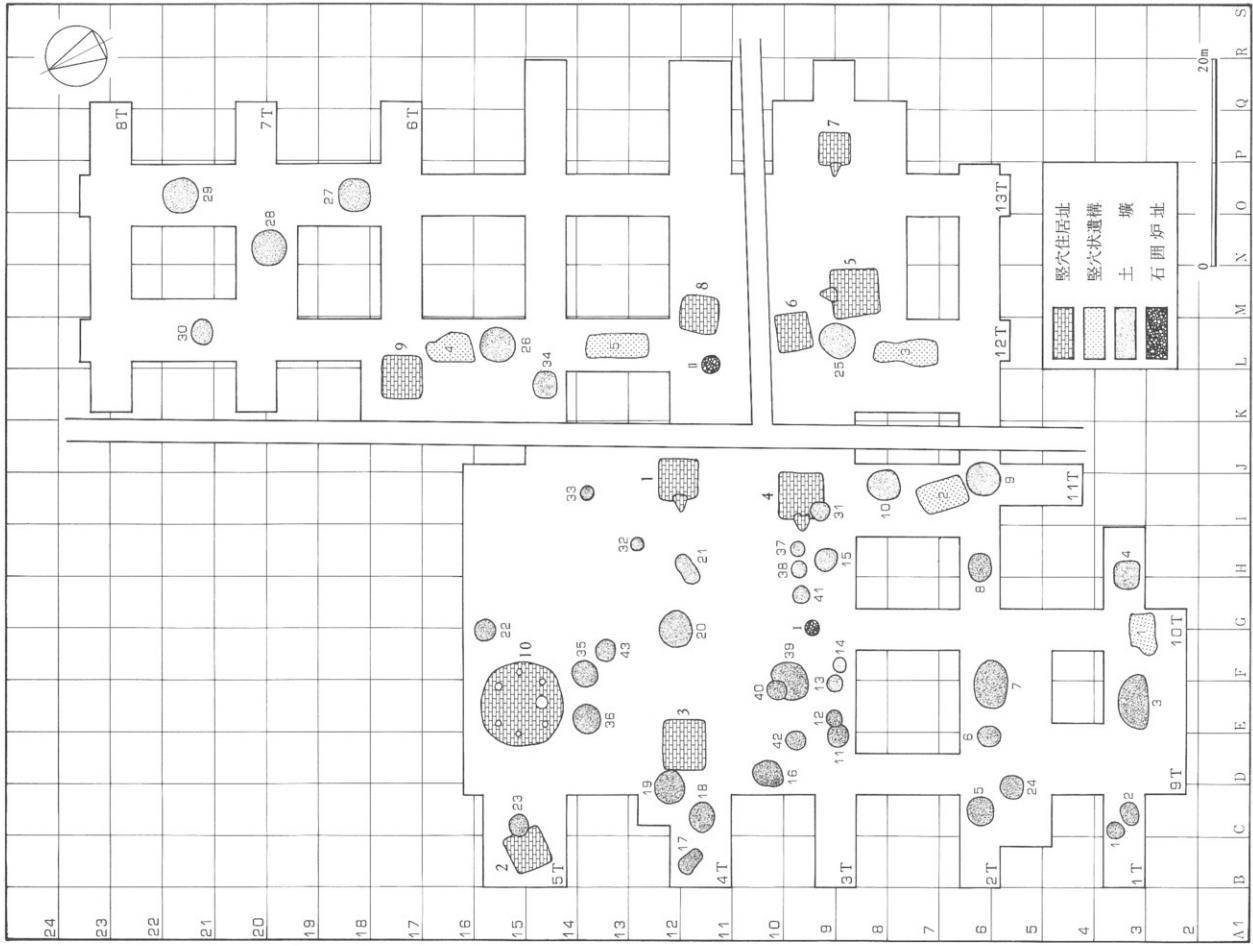
特徴的な遺構と特長的な遺物を中心に調査の概要を述べてきたが、火炎系土器と硬玉製大珠の出土は北陸地方との関連を究明する上で重要な資料となった。

さらに、大木式土器を出土した袋状土壙は、東北文化と関東文化の接点であることを物語るもので、今後の県北地域における類似の調査究明上、大きい成果があったものと思われる。

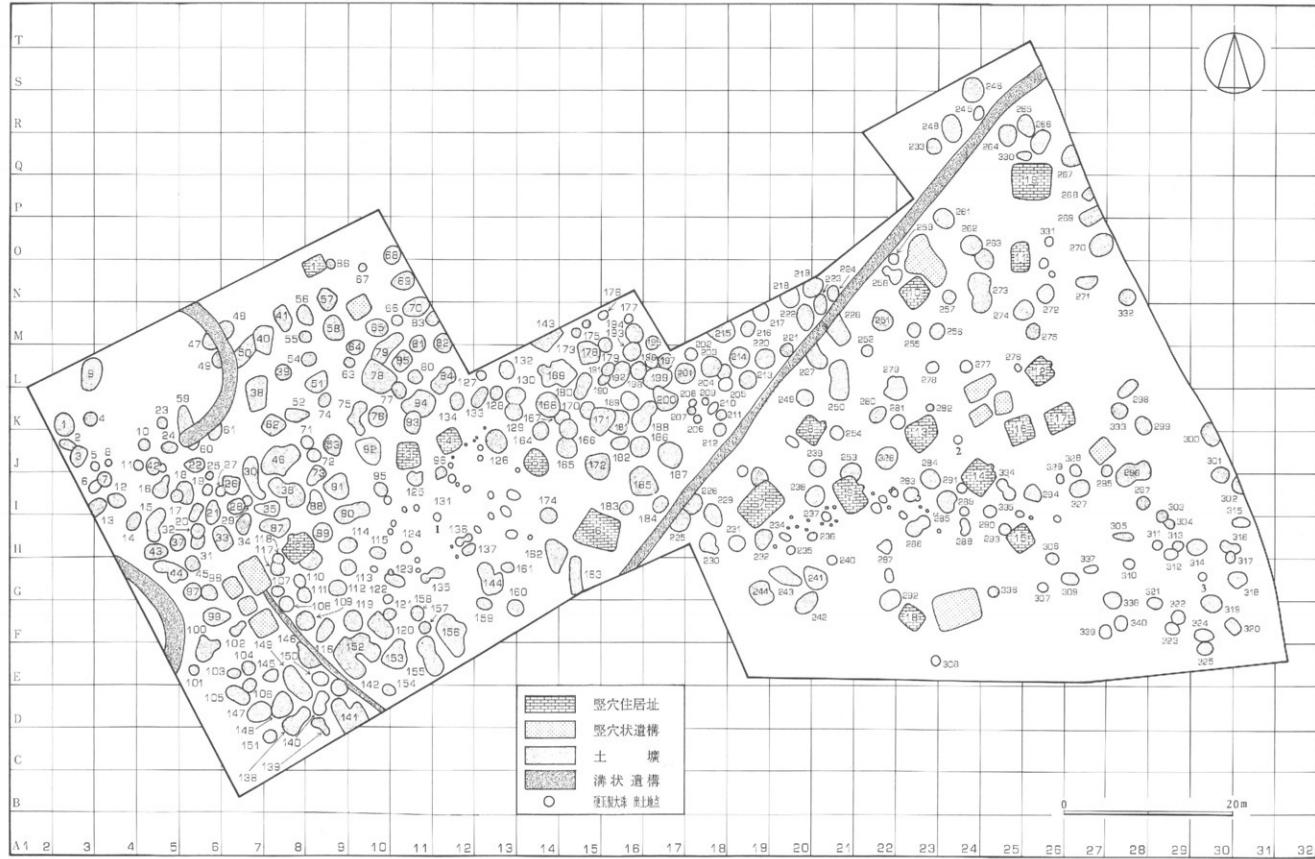
きわめて饶偉な調査であった。

第二圖 調査区設定期





第三図 第一次調査 A 地区遺構分布図



第四図 第一次調査B地区遺構分布図



第五図 第二次調査C地区遺構分布図

第一次調查

A 地 区

第四章 竪穴住居址の調査

I 縄文時代の住居址

1 第六号住居址（第六図）

位置および遺存状態 本址は第12トレンチの南端部に近いグリットL～M-10に位置する。

遺構の部分検出の後、トレンチを拡張して全容を確認した。破壊も擾乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は隅丸方形を呈する。周壁の辺長は、東壁X-Z間2.8m、西壁Y-X間2.8m、南壁Y-Z間3.1m、北壁W-X間2.8mを測り、面積は約8.7m²である。主軸線はN-36°-Wを指向する。

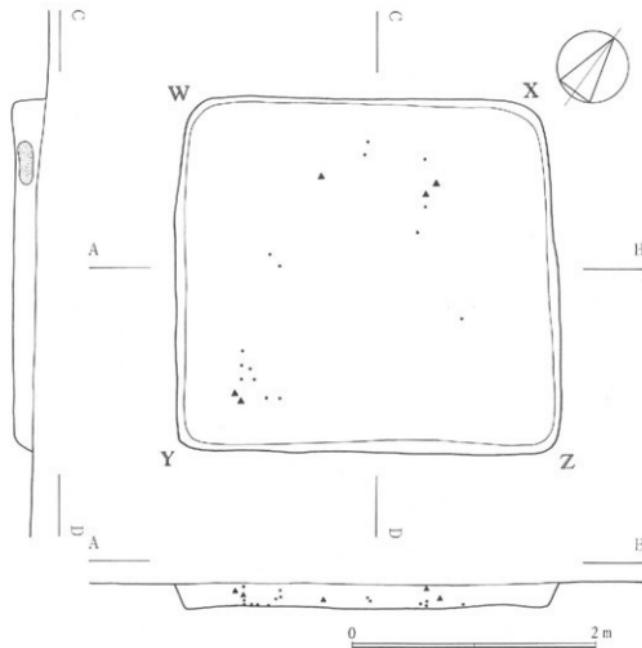
壁高および壁面 周壁はやや斜めに掘り込まれておる、壁高は東壁20cm、西壁20cm、南壁15cm、北壁26cmを測り、各周壁には崩落の痕跡は認められず、堅固である。

床面 おおむね平坦で、硬く踏みかためられている。

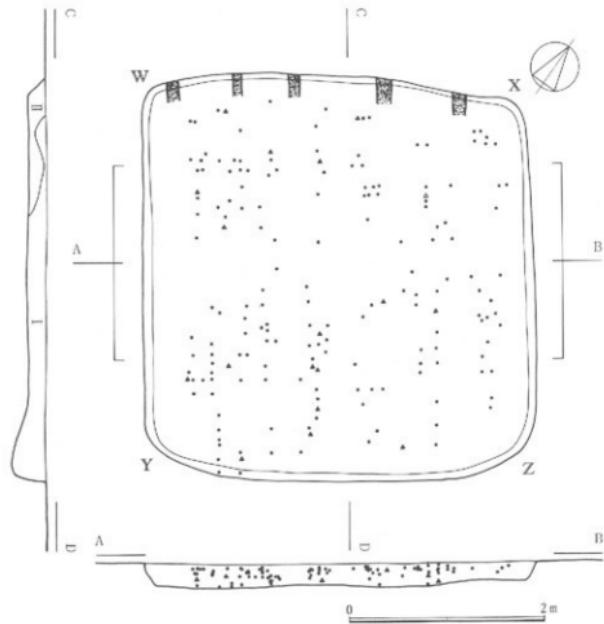
ピット 竪穴内も壁外も精査したが、ピットは検出されなかった。

埋没土 竪穴内の埋没土の性状は黒褐色土の単一層で、層序を区分するような変化は認められない。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は20個で、内訳は縄文土器片15個、自然石5個となる。極めて疎らな出土状態で空白部分が多い。加曾利E式の土器片が主体であり、縄文時代中期の住居址である。



第六図 第六号住居址実測図、遺物出土状態図



第七図 第九号住居址実測図、遺物出土状態図

2 第九号住居址（第七図）

位置および遺存状態 本址は第12トレンチの中央より北側へ寄ったグリットL～17～18に位置する。

遺構の部分検出の後、トレンチを拡張して全容を確認した。北壁はゴボウ取獲時における5条のトレンチャーフィンによって破壊を受けているが、その程度は極めて軽微で、全体としての遺存状態は良好といえるだろう。

形状および規模 若干の歪みはあるが、平面形は隅丸方形と見做してよいだろう。

周壁の辺長は、東壁X～Z間3.5m、西壁W～Y間3.7m、南壁Y～Z間3.8m、北壁W～X間3.7mを測り、面積は約13.7m²である。主軸線はN-36°-Wを指向する。

壁高および壁面 周壁はやや斜めに掘り込まれておらず、壁高は東壁18cm、西壁24cm、南壁30cm、北壁19cmを測る。北壁のトレンチャーフィン以外は堅固で、崩落の痕跡は認められない。

床面 凹凸は認められず平坦である。床面全体は硬く踏み固められている。

ピット 穴内も壁外も精査したが、ピットは検出されなかった。

埋没土 本址の埋没土の層序は2層に区分することができる。Iはローム粒子を多量に混入する暗褐色土で、IIはロームが主体の褐色土である。この性状の在り方は人為埋戻しによるものである。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は183個である。内訳は純文土器片165個、自然石18個となる。

平面分布の状態は、豎穴内から万遍なく出土しており、A-Bセクション両側1mの範囲を断面図に投影した垂直分布を観察すると、床面上の出土は少なく、中層より上位に分布する。

3 第一〇号住居址（第八図）

位置および遺存状態 本址は第5トレンチの西端部に近いグリットE～F-14～16に位置する。

遺構の部分検出の後、トレンチを拡張して全容を確認した。堅穴内の西側を南北方向に走る幅90cm、深さ30cmの溝状遺構によって一部破壊を受けているが、遺存状態はおおむね良好である。

形状および規模 平面形は円形を呈する。東西径7.7m、南北径7.9mを測る。面積は約47.8m²である。

壁高および壁面 溝状遺構による破壊部を除く周壁の壁高は、東壁のセクションBで18cm、西壁セクションBで5cm、南壁セクションDで18cm、北壁セクションCで18cmを計測する。

壁は斜めに掘り込まれており、堅牢はないが崩落の痕跡は認められない。

床面 平坦で全体が硬く踏み固められている。中央よりやや西寄りの位置に地床炉が設けられている。

ピット 8個のピットを確認したが、位置関係、配列状況、規模などから判断すると、主柱穴としての機能を果したのは次の6個であろう。

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	(単位cm)
P ₁	100	100	70	P ₂	110	98	74	P ₃	99	97	93	
P ₄	108	102	90	P ₅	108	90	76	P ₆	100	100	75	

炉址 堅穴中央部よりやや西寄りの位置に地床炉址がある。

東西方向に長軸を持ち、長径150cm、短径138cmの楕円形状を呈する。

床面を17cmほど皿状に掘り窪めて燃焼部を形成している。

長径105cm、短径85cm、深さ17cmの範囲で焼土が堆積している。

出土遺物はないが、煉瓦状に硬化しており、使用頻度が高かったものと思われる。

埋没土 堅穴内の埋没土は3層に区分することができる。

I層は暗褐色で、黒色土とローム粒子の均一な混合土。II層は黒色土がベースでローム粒子を混入する黒褐色土。IIIは明褐色土で、ロームが主体である。

この埋没土の性状は周囲の土砂の自然流入ではなく、人為的な埋戻しであることは多言を要しない。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は332個である。内訳は縄文土器片310個、石器2個、自然石20個となる。

ドットマップによって平面分布状態を観察すると、堅穴内の全面から万遍なく出土しており、特に変った傾向を指摘することはできない。

A-Bセクションに沿った両側1mの範囲を断面図に投影した垂直分布の在り方は、床直上の出土は少なく、中層より上位に集中する。

出土土器はすべて中期の加曾利E II様式の土器片である。

石器は石剣と石棒である。

II 弥生時代の住居址

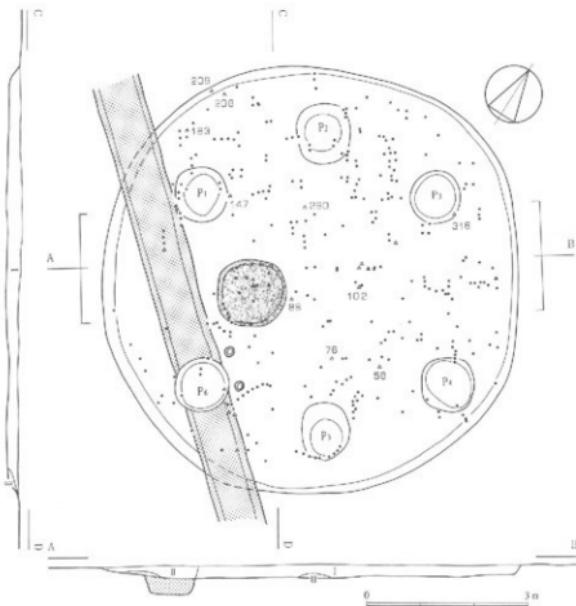
1 第二号住居址（第九図）

位置および遺存状態 本址は第5トレンチの西端部、グリットC-15に位置する。

遺構の部分検出の後、トレンチを拡張して全容を確認した。

南壁の中央部は第二三号土塼と接しているが、部分的な切り合いで堅穴全体に及ぼす影響は少ない。

遺存状態はおおむね良好といえるだろう。



第八図 第一〇号住居址実測図、遺物出土状態図

形状および規模 平面形は不整長方形を呈する。

周壁の辺長は、東壁X-Z間3.5m、西壁W-Y間3.2m、南壁Y-Z間3.0m、北壁W-X間2.7mを測り、面積は約9.5m²である。主軸線はN-62°-Wを指向する。

壁高および壁面 周壁は若干斜めに掘り込まれておる、壁高は東壁25cm、西壁22cm、南壁17cm、北壁20cmを測り、周壁は堅硬ではないが崩落の形跡は認められない。

床面 硬く踏み固められた形跡はないが、おおむね平坦である。

ピット 横穴内も壁外にも確認できなかった。

埋没土 本址の埋没土の層序は2層に区分することができる。

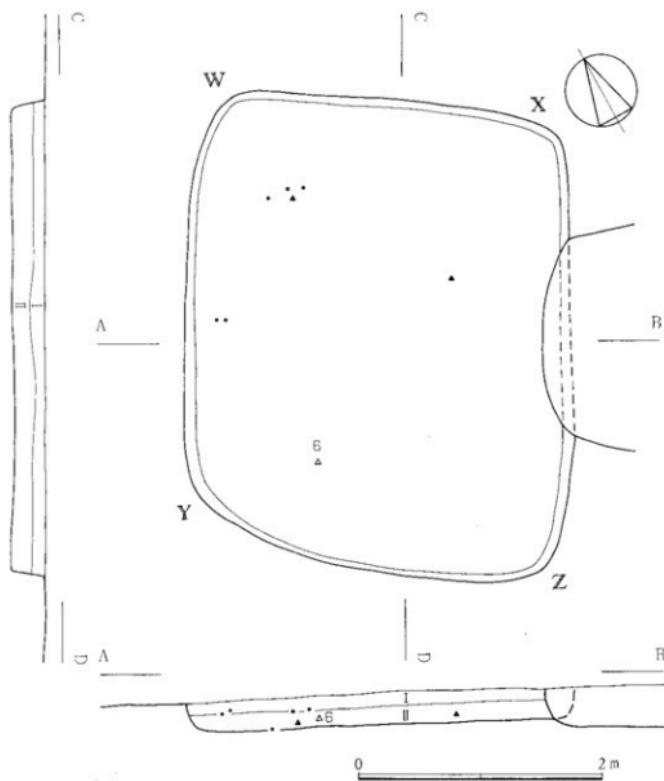
I 黒褐色土 黒色土がベースで微量のローム粒子を混入する。

II 暗褐色土 黒色土がベースで赤橙色ロームの混在が目立つ。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数はわずかに7個で、内訳は弥生土器片5個と自然石2個とである。

出土状態は極めて散発的で空白部が大半を占める。

出土土器の5個は後期十王台式の土器片である。



第九図 第二号住居址実測図、遺物出土状態図

2 第三号住居址（第一〇図）

位置および遺存状態 本址は第4トレンチと第9トレンチの交差部、グリットD-E-12に位置する。

遺構の部分検出の後、トレンチを拡張して全容を確認した。

Xコーナーは第一九号土壤と切り合っているが、遺存状態はおおむね良好である。

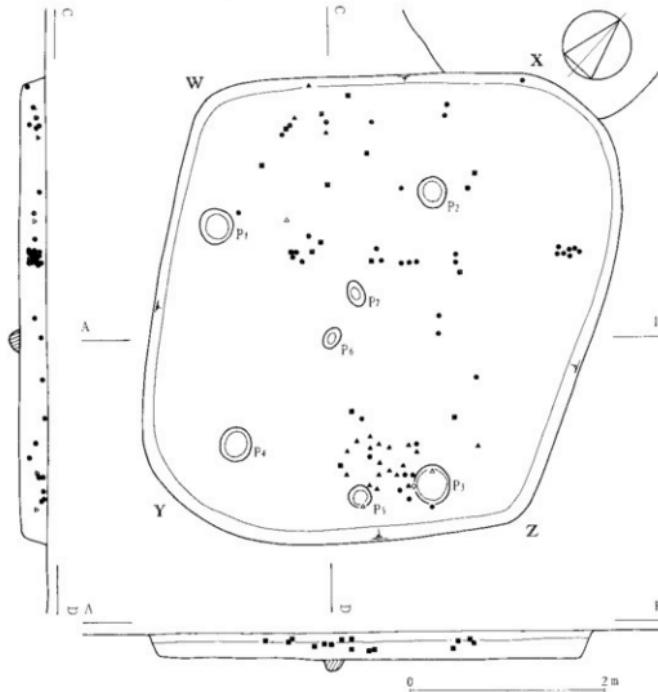
形状および規模 平面形は隅丸方形を呈する。周壁の辺長は東壁X-Z間4.3m、西壁W-Y間4.0m、南壁Y-Z間3.9m、北壁W-X間4.0mを測り、面積は約17.2m²である。主軸線はN-31°-Wを指向する。

壁高および壁面 周壁は斜めに掘り込まれておる、壁高は東壁30cm、西壁25cm、南壁26cm、北壁25cmを測る。

壁面はさほど堅固ではないが、崩落の痕跡は認められない。

床面 平坦で全面が硬く踏み固められている。

ピット 7個のピットを確認したが、位置関係、規模、配列などから判断するとP₁～P₄が主柱穴であろう。



第一〇図 第三号住居址実測図、遺物出土状態図

埋没土 本址の埋没土は2層に区分することができる。

I 黒褐色土 黒色土がベースでローム粒子を混入する。

II 明褐色土 部分的に赤橙色ロームが散在する。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は75個である。内訳は縄文土器片38個、弥生土器片15個、自然石22個となる。ドットマップによる平面分布の在り方は、東壁と西壁間に空白部が多く、主軸線に沿ったライン上にまとまりをみせている。断面図に投影した垂直分布の状態は、床面直上の出土は皆無で中層より上位に集中して出土している。本址の時期は弥生時代後期と思われる。

III 古墳時代の住居址

1 第一号住居址（第一一図）

位置および遺存状態 本址は第4トレンチと第11トレンチの交差部、I～J-12に位置する。

遺構の部分検出の後、トレンチを拡張して全容を確認した。破壊も搅乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は隅丸方形を呈する。周壁の辺長は東壁X-Z間2.7m、西壁W-Y間2.7m、南壁Y-Z間2.5m、北壁W-X間5.5mを測り、面積は約6.8m²である。北壁中央部にカマドを設けている。

主軸線はN-44°-Wを指向する。

壁高および壁面 周壁は斜めに掘り込まれておらず、壁高は東壁23cm、西壁25cm、南壁25cm、北壁27cmを測る。

壁面は堅牢で崩落の痕跡は認められない。

床面 平坦で硬く踏み固められているが、床面全体に貼床が施されている。

貼床の厚さは10～13cmで、黒色土・粘性ロームの混合土である。

ピット 3個のピットが確認された。計測値は次のとおりである。(単位 cm)

長径	短径	深さ	長径	短径	深さ
----	----	----	----	----	----

P ₁	48×40×47		P ₂	44×38×45		P ₃	50×38×39	
----------------	----------	--	----------------	----------	--	----------------	----------	--

この3個のピットは位置関係・規模などから判断すると主柱穴の機能を果したものと思われる。

本址は3本柱堅穴住居址であろう。

埋没土 本址の埋没土は2層に区分することができる。

I 暗褐色土 黒色土がベースで、ローム粒子・ローム小ブロックを多量に混入する。

II 黒褐色土 黒色土が大部分を占め、底面直上部はローム粒子が多い。

カマド 本址のカマドは北壁の中央に設けられている。

袖部を被覆する黄褐色粘性土の最大幅は128cmである。

天井部は堅穴廃絶時に破壊されたものと思われ残存しないが、両袖は黄褐色粘性土で固く構築され、他の補強材は一切使われていない。

構造は、焚口部と燃焼部を壁内に設け、煙道部と煙出し口は70cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は、床面を8cmばかり掘り窪めて形成し、焚口部から煙道部先端までの長さは120cm、幅は48cmである。

煙道部煙出し口はゆるやかに外傾して立ち上がる。

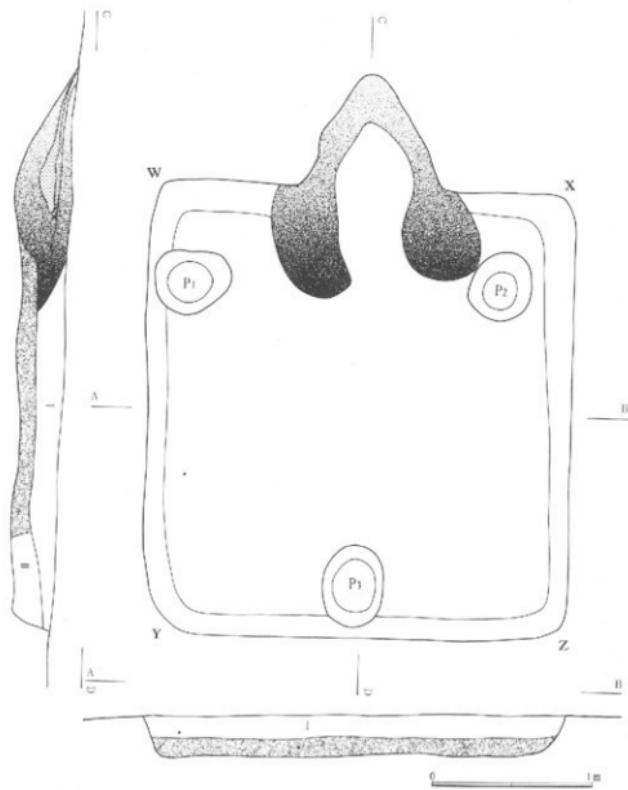
両袖の燃焼部壁面は、火熱を受けて赤変硬化している。

燃焼部から土師器片7個が出土した。

遺物の出土状態 堅穴内の出土遺物は繩文土器片2個のみであるが、これは本址に関連する遺物ではない。おそらく紛れ込みであろう。

カマド内出土の土師器7個は坏形土器片で、燃焼部からの出土であるが接合はできなかった。

口縁部の直立する坏形土器片や、体部下位にゆるい稜をもつ坏形土器片など鬼高Ⅲ式に比定し得る土師器が認められることから、本址の廃絶は古墳時代後期7世紀初頭頃と考えられる。



第一一図 第一号住居址実測図、遺物出土状態図

2 第四号住居址（第一二図）

位置および遺存状態 本址は第3トレンチと第11トレンチの交差部I～J-9～10に位置する。

北西隅のWコーナーに第三号土壙が存在する。他の部分の遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は隅丸方形を呈する。周壁の辺長は東壁X-Z間2.9m, 西壁W-Y間2.9m, 南壁Y-Z間3.2m, 北壁3.2mを測り, 面積は約9.3m²である。

北壁の中央と、竪穴内中央部の南壁寄り確認面上にカマドを設けている。主軸線はN-32°-Wを指向する。

壁高および壁面 周壁は斜めに掘り込んでおり、壁高は東壁28cm, 西壁28cm, 南壁27cm, 北壁27cmである。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面 平坦で硬く踏み固められている。

ピット 確認されたピットはXコーナーの1個だけである。径44×40cm, 深さ48cmを測るが、1個だけでは主

柱穴とはなり得ないであろう。壁外も精査検索したが確認できなかった。

埋没土 全体としては黒色土をベースとしてローム粒子を混入する暗褐色土であるが、粘土とロームの混合ブロックがところどころに介在している。

カマド 第一号カマドは北壁の中央に設けられている。袖部を被覆する黄褐色粘性土の幅は115cmを測る。

天井部は残存しないが、両袖は黄褐色粘性土で固く構築され、他の補強材は一切使われていない。

構造は、焚口部と燃焼部を壁内に設け、煙道部と煙出し口は70cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は床面を8cm程掘り窪めて形成し、焚口部から煙道部先端までの長さは70cm、幅は48cmである。

煙道部は27°の傾斜から垂直に立ち上って壁外に出る。両袖燃焼部の壁面には際立った赤変はみられない。

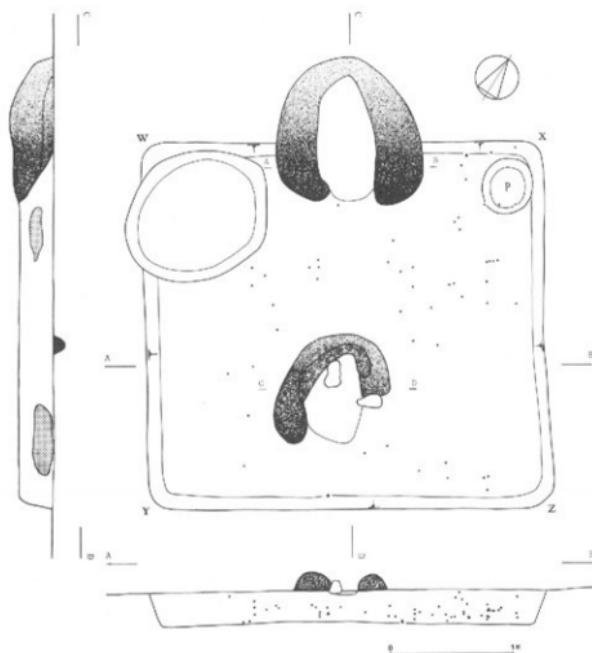
第二号カマドが何故に確認面上に構築されたのか、焼土の堆積が認められるもののその性格は不明である。

遺物の出土状態 本址の出土遺物总数は55個である。内訳は土師器53個、自然石2個となる。

平面分布状態は、竪穴内の全面からきわめて疎らに出土しており、特に変った傾向は指摘できない。

A-Bセクションの断面図に投影した垂直分布の在り方は、下層から上層まで及んでいる。

遺物は細小破片が大部分で有効な資料とはなり得ないが、壊形土器片や甕形土器片の特徴から本址の廃絶の時期は古墳時代後期初頭頃と思われる。



第一二図 第四号住居址実測図、遺物出土状態図

3 第五号住居址（第一三図）

位置および遺存状態 本址は第3トレンチと第12トレンチの交差部M～N～8～9に位置する。

破壊も攪乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形はほぼ方形を呈し、周壁の辺長は東壁X-Z間3.9m、西壁W-Y間3.7m、南壁Y-Z間3.4m、北壁W-X間3.5mを測り、面積約13.3m²。北壁の東寄りにカマドを付設している。

主軸線はN-62°-Eを指向する。

壁高および壁面 周壁は内側へ斜めに掘り込んでおり、壁高は30～35cmで堅固である。

床面 平坦で中央部からカマド前面にかけては非常に硬く踏み固められている。ピットは存在しない。

埋没土 2層に大別される。Iは褐色土、IIはローム粒子・ローム小プロックを混入する暗褐色土。

カマド 北壁の中央よりやや東寄りの位置に構築されており、両袖の最大幅は122cmを測る。

構造は、焚口部と燃焼部を壁内に設け、煙道部と煙出し口は55cmほど壁外へ突出させている。

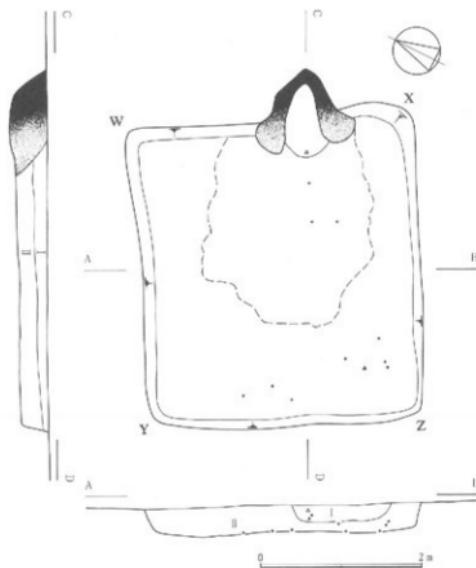
燃焼空間は床面を7cm程掘り窪めて形成し、焚口部から煙道部先端までの長さは108cm、幅は42cmである。

両袖の燃焼部壁面には若干の赤変硬化がみられる。煙道部は55°外傾して壁外へ立ち上がる。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数はわずかに12個である。内訳は土師器10個、石器1個、自然石1個となる。石器は石斧である。

平面分布状態は、きわめて疎らで空白部が多い。垂直分布の在り方は床面直上の出土が多い。

古墳時代中期末葉頃の廃絶と考えられる。



第一三図 第五号住居址実測図、遺物出土状態図

4 第七号住居址（第一四図）

位置および遺存状態 本址は第3トレンチと第13トレンチの交差部P-Q-9に位置する。遺存状態良好。

形状および規模 平面形は隅丸方形を呈し、周壁の辺長は東壁X-Z間2.4m、西壁W-Y間2.6m、南壁Y-Z間2.9m、北壁W-X間2.8mを測り、面積は約7.3m²、北壁やや東寄りにカマドを付設している。

主軸線はN-32°-Wを指向する。

壁高および壁面 周壁は内側へ斜めに掘り込み、壁高は20~26cmで壁面に崩落の痕跡は認められない。

床面 平坦で硬く踏み固められている。ピットは確認できなかった。

埋没土 2層に区分される。Iは黒褐色土、IIはローム粒子を多量に含む褐色土である。粘土ブロックも介在する。

カマド 北壁のやや東寄りに位置する。袖部を被覆する黄褐色粘土の最大幅は95cmである。

天井部は残存しないが、両袖は黄褐色粘土で固く構築され、他の補強材は使用していない。

構造は、焚口部と燃焼部を壁内に設け、煙道部と煙出し部は70cmほど壁外へ突出させている。

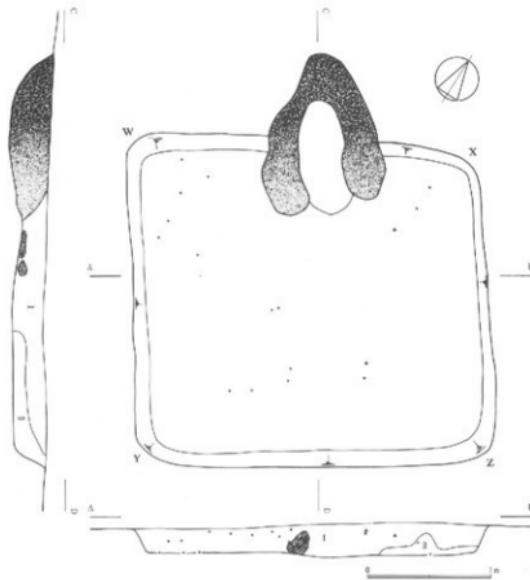
燃焼空間は、床面を10cm程掘り窪めて形成し、焚口部から煙道部先端までの長さは130cm、幅は35cmである。

燃焼部には厚さ5cmの焼土が堆積しているが、袖部壁面の赤変硬化は顕著ではない。

遺物の出土状態 本址の遺物総数は17個にすぎない。内訳は土師器15個、自然石2個である。

平面分布状態はきわめて疎らで空白部が目立つが、散えて言及すればC-Dセクションの西側に分布量が多いといえるだろう。垂直分布の在り方は量は少ないので底面直上から上層まで各層に分布している。

土器の形式やカマドの形態などから古墳時代後期初頭頃の発掘と思われる。



第一四図 第七号住居址実測図、遺物出土状態図

5 第八号住居址（第一五図）

位置および遺存状態 本址は第4トレンチと第12トレンチの交差部M～N～9～10に位置する。

東西方向にトレンチャー痕が走っているが、表土層が深いため遺構へのダメージはなかった。

形状および規模 平面形はほぼ円形を呈する。東西径3.9m、南北径3.8mである。

壁高および壁面 周壁は内側へ斜めに掘り込んでおり、壁高は12～20cmで壁面は堅牢ではないが崩落は認められない。

床面 硬さはないがおおむね平坦である。ピットは確認できなかった。

埋没土 埋没土の性状は、黒色土をベースにローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

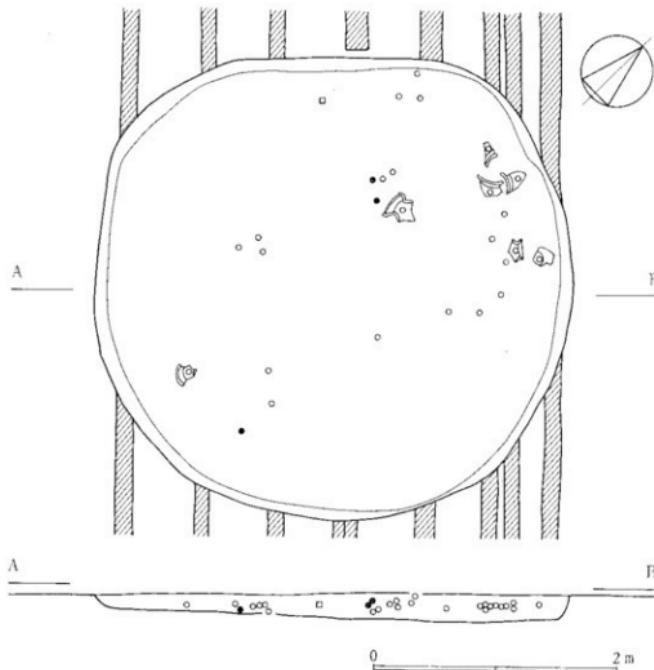
遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は28個で、縄文土器片3個、土師器片24個、須恵器片1個となる。

平面分布状態は空白部の多い疎らな出土状態であるが、傾向としては北壁側に小規模なまとまりがみられる。

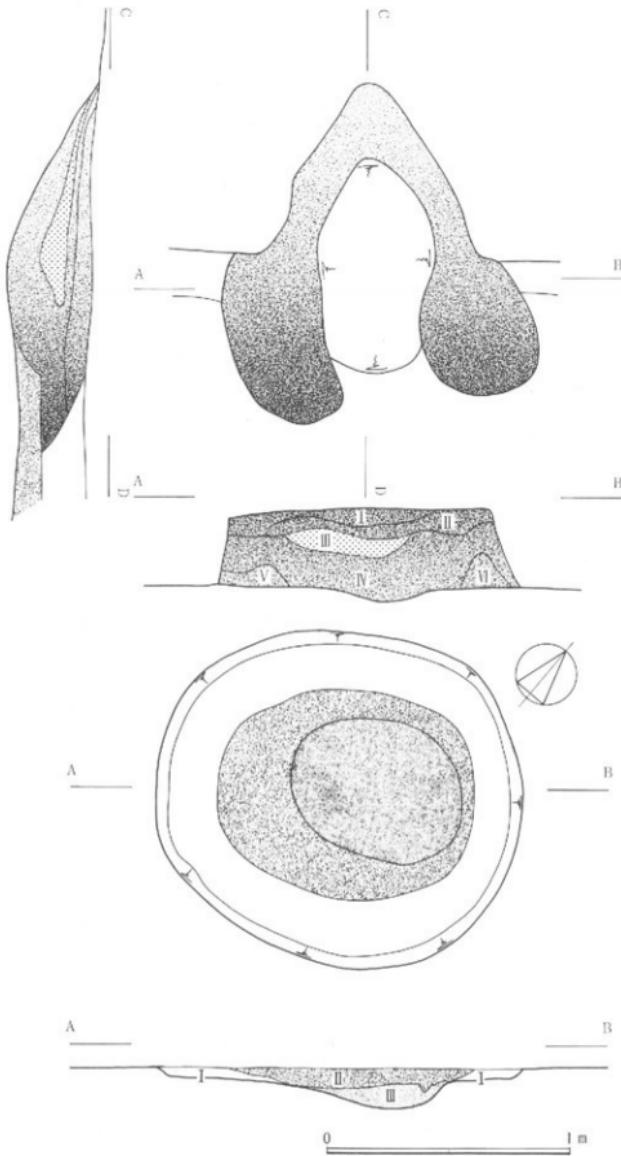
A～Bセクションの断面図に投影した垂直分布の在り方は、床面上から上層まで万遍なく出土している。

土師器の器種には壺形土器が多く、壺形土器がこれに次ぐ。須恵器は壺形土器である。

古墳時代中期末葉頃の遺構と考えられる。



第一五図 第八号住居址実測図、遺物出土状態図



第一六図 第一号住居址カマド実測図（上），第一〇号住居址炉址実測図（下）

第五章 壁穴状遺構の調査

1 第1号壁穴状遺構（第一七図）

位置および遺存状態 本址はG-3に位置する。北側約30%は縄文時代土壌と重複しており、良好な遺存状態とはいい難い。

形状および規模 プランの平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。周壁の辺長は東壁（X-Z）3.5m、西壁（W-Y）推定3.5m、南壁（Y-Z）2.5m、北壁（W-X）推定2.3mを測り、面積約8.4m²である。

主軸はN-35°-Wを指向する。

壁面および壁高 各周壁は内側へ斜めに掘り下げておる、壁面は堅硬で崩落の痕跡は認められない。

壁高は東壁68cm、西壁56cmを測る。

床面 床面は青白色粘土とロームの混合土を踏み固めており平坦である。

埋没土 本址の埋没土の性状は6層に区分することができる。

I 黒色土

II 茶褐色土 ロームがベースで若干の黒色土が混入し、わずかに赤橙色ローム粒子と青白色粘土ブロックが点在する。

III 暗褐色土 黒色土とロームの混合土で、II層より黒色土の混入が多い。

IV 褐色土 II層に近似するが、ローム粒子の混入量が多い。

IV' 褐色土 IV層と同様の性状に赤橙色ローム粒子を含む。

V 黄褐色土 ロームと赤橙色ロームの混合土。

遺物の出土状態 出土遺物総数は189個である。内訳は縄文土器片184個、土師器片3個、須恵器片2個となる。

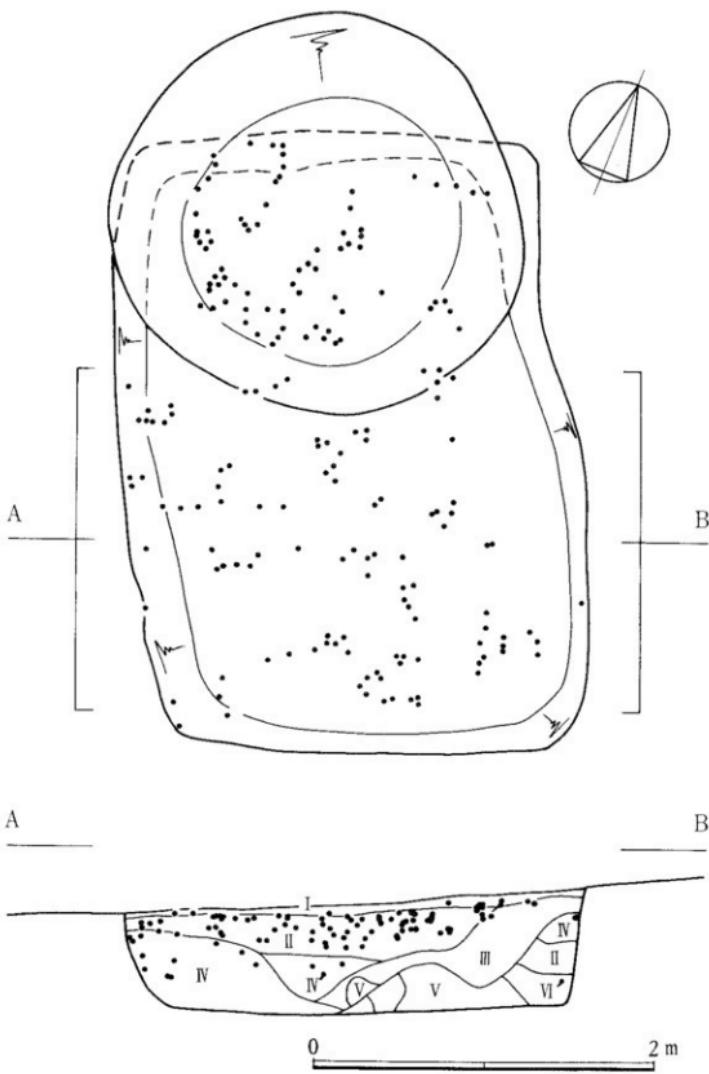
土師器と須恵器は確認面からの出土で、土師器は国分期の环形土器で内黒土器も認められる。

平面分布状態を観察すると、壁穴の全面から万遍なく出土しており、特に変った傾向は指摘できない。

A-Bセクションの両側2mの範囲を断面図に投影した垂直分布の在り方は、床面直上や下層部からの出土は皆無で、中層より上位に集中する様相を看取することができる。

この状態は、埋戻しと同時に一括投棄されたことを物語るものであろう。

縄文時代中期の遺構であろうと思われるが性格は不明である。



第一七図 第一号竪穴状遺構実測図、遺物出土状態図

2 第二号竪穴状遺構（第一八図）

位置および遺存状態 本址は I ~ J - 7 に位置する。遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は梢円形を呈する。長径5.0m、短径3.1m、主軸線はN-47°-Eを指向する。

南側の開口部プランは張り出し状を呈するが性格は不明である。

壁面および壁高 周壁は内側へ斜めに掘り下げ、東壁33m、西壁30mの壁高を測る。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面 硬く踏み固めた形跡はないが平坦である。

埋没土 本址の埋没土の性状は2層に区分することができる。

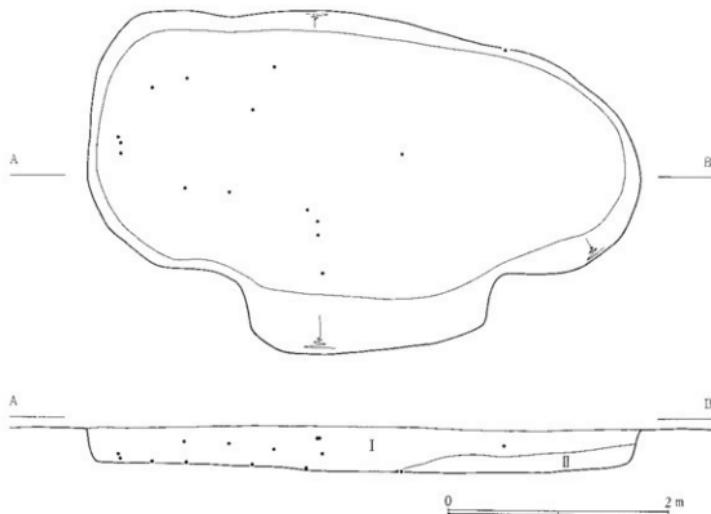
I 黒色土 極く微量のローム粒子を含む。

II 褐色土 黒色土がベースで、多量のローム粒子とローム小ブロックを混入する。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は15個で、内訳は縄文土器片13個、土師器2個となる。

平面分布状態を観ると15個という僅少出土量の遺物は、散発的ながら中央部より西側に偏在している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、極めて疎らではあるが下層から上層まで散在している。



第一八図 第二号竪穴状遺構実測図、遺物出土状態図

3 第三号竪穴状遺構（第一九図）

位置および遺存状態 本址はL～M-7～8に位置する。遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は不整長方形を呈する。長軸4.2m、短軸2.2m、主軸方向はN-62°-Eを指向する。

壁面および壁高 周壁は内側へ斜めに掘り下げ、東壁27cm、西壁24cmの壁高を測る。

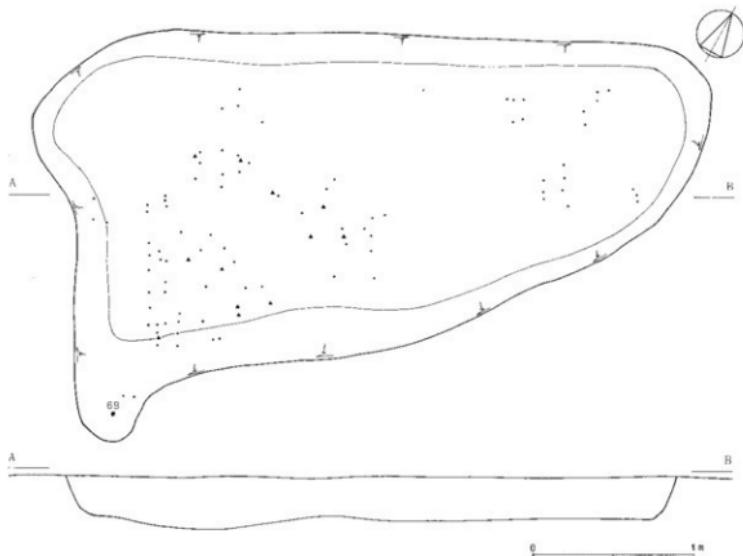
壁面に堅牢さはないが崩落の痕跡は認められない。

埋没土 本址の埋没土の性状は、黒色土が主体でローム粒子を混入する黒褐色土の単一層である。

遺物の出土状態 本址の出土遺物の総数は101個で、内訳は縄文土器89個、自然石12個となる。

平面分布状態をドットマップによって観察すると、中央部の空白部を挟んで東側と西側にややまとまりのある分布状態を看取することができる。

南東隅の確認面直下から小形浅鉢形土器の完形品が出土している。縄文時代中期の遺構であろう。



第一九図 第三号竪穴状遺構実測図、遺物出土状態図

4 第四号竪穴状遺構（第二〇図）

位置および遺存状態 本址はL～M-16～17に位置する。遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は不整長方形を呈する。長軸5.1m、短径2.7m、主軸方向はN-33°-Eを指向する。

壁面および壁高 周壁は内側へ斜めに掘り下げ、壁高は35cmを測るが、西壁は緩斜面状に掘り込んでいる。

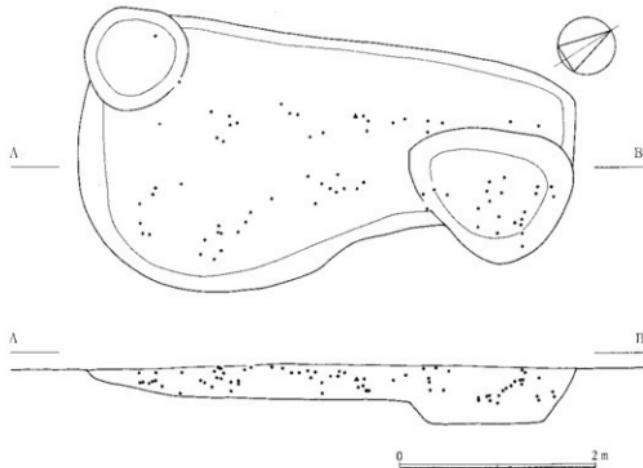
床面 おむね平坦であるが、北西隅と南東隅に2個のピットが存在する。

埋没土 本址の埋没土の性状は、ローム粒子と赤橙色ローム粒子を混入する暗褐色の單一層である。

遺物の出土状態 本址の出土遺物总数は75個で、内訳は縄文土器片74個、自然石1個となる。

平面分布状態は疎らに散在しており、特に変った状態は指摘できない。

縄文時代中期の遺構であるが性格は不明である。



第二〇図 第四号竪穴状遺構実測図、遺物出土状態図

5 第五号竪穴状遺構（第二一図）

位置および遺存状態 本址はL～M-13～14に位置する。遺存状態は良好である。

形状および規模 平面形は長方形を呈する。長軸6.9m、短軸2.1m、面積約14.5m²。

主軸線はN-16°-Eを指向する。

壁面および壁高 周壁は内側へ斜めに掘り下げており、壁高は東壁30cm、西壁30cmを測る。

壁面堅牢ではないが崩落の痕跡は認められない。

床面 若干の起伏はあるがおおむね平坦である。硬く踏み固めた形成はみられない。

埋没土 本址の埋没土の性状は3層に大別することができる。

I 黒褐色土 黒色土がベースでローム粒子を混入する。

II 暗褐色土 I層に比してローム粒子・赤橙色ローム粒子の混入が多くなる。

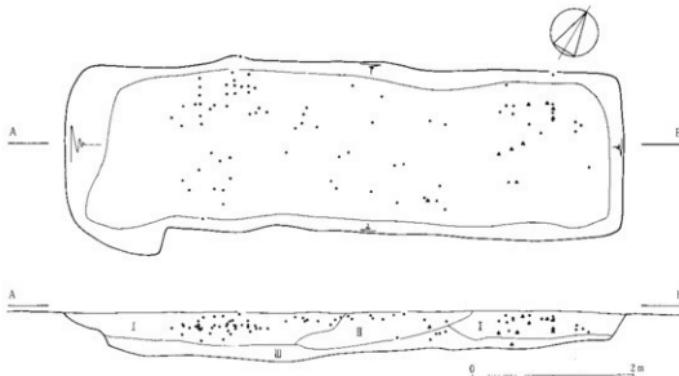
III 褐色土 ロームが主体で黒色土・赤橙色ローム粒子を含む。

遺物の出土状態 本址の出土遺物総数は88個である。内訳は縄文土器片79個、自然石9個となる。

平面分布状態は疎らに全面から出土しており、特別な傾向を指摘することはできない。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、床面直上の出土は皆無で中層より上位にまとまっている。

縄文中期の遺構と考えられるが性格は不明である。



第二一図 第五号竪穴状遺構実測図、遺物出土状態図

第六章 土 壤 の 調 査

第一号土壤（第二二図）

本土壤はC-3~4に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長径252cm、短径225cm、主軸線はN-38°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは60cmで底面は平坦である。底面形はほぼ円形を呈し経195×190cm。硬く踏み固められている。

埋没土の性状は黒色土がベースでローム粒子と焼土粒子を混入する暗褐色土の單一層である。

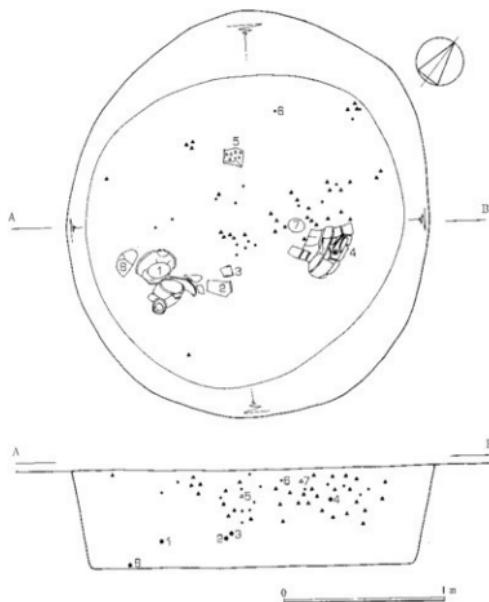
出土遺物総数は58個である。内訳は縄文土器21個、石器2個、自然石34個である。

平面分布状態を観察すると、自然石の出土量が多く土器の出土状態はまばらである。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上の出土はわずかに一個のみで、他は中層・上層に集中している。大形破片の出土レベルは中層以下である。

石器No 5は凹石、No 7は磨石である。

中層より上位に自然石がまとまっている状態から推察すると、本土壤はゴミ捨場的性格の強い土壤のように考えられる。縄文時代中期の土壤であろう。



第二二図 第一号土壤実測図、遺物出土状態図

第二号土壙（第二三図）

本土壙はC～D-3～4に位置する。

開口部の平面形は橢円形を呈する。長径255cm、短径185cm、長軸方向はN-60°-Wを指向する。

掘り方は、開口部から30cmほど内側へ斜めに掘り下げて頭部を形成し後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

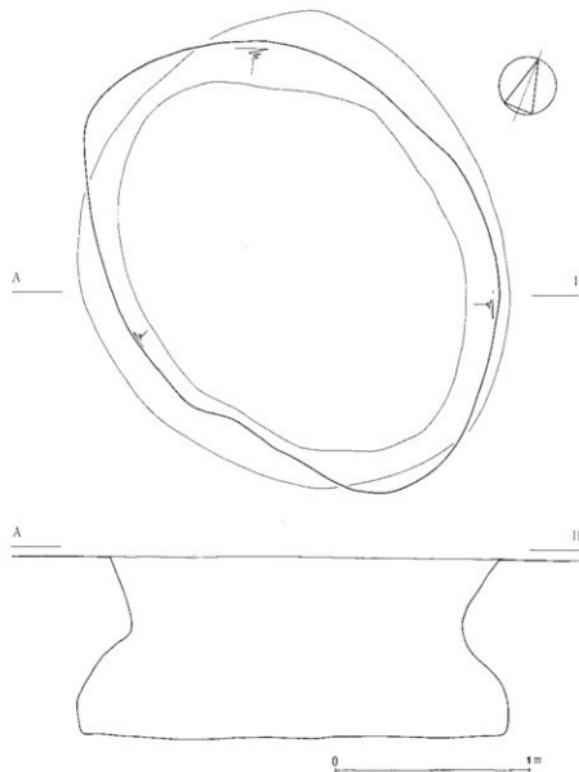
壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは92cmを測り、鹿沼層に達しているが、ロームを非常に硬く踏み固めた底面は平坦である。

底面形も橢円形で、長径235cm、短径210cm、長軸方向は開口部と同様である。

埋没土の性状は、黒色土を主体としてローム粒子を混入する暗褐色土の単一層で、強いて区分線を引かなければならぬような性状の変化は認められない。

出土遺物はないが、本土壙も縄文時代中期であろう。



第二三図 第二号土壙実測図

第三号土壙（第二四図）

本土壙はE～F～3～4に位置する。遺存状態は良好である。

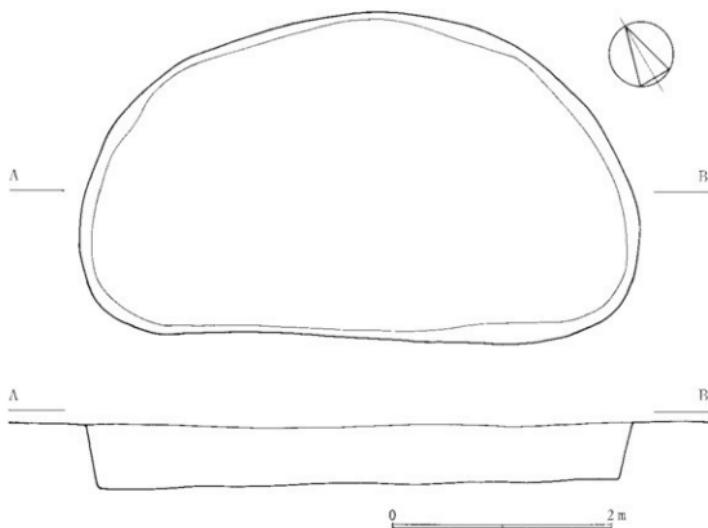
平面形は梢円形を呈し、長軸500cm、短軸295cm、主軸線はN-121°-Eを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは50cmで、底面は硬く平坦である。

埋没土の性状は、黒色土がベースでローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物は皆無である。縄文時代中期の土壙と考えられる。



第二四図 第三号土壙実測図

第四号土壤（第二五図）

本土壙はH-3～4に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は隅丸長方形を呈し、東西辺長320cm、南北辺長260cmを測る。

掘り方は内側へ30cmほど斜めに掘り下げて平坦面を形成し、中央部に径160×130cmの梢円形状の頸部を形成した後、そこより下位は外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは98cmで、底面は鹿沼層に達しているが、踏み固めて平坦な底面としている。

底面形は円形で、径225cm×210cmである。

埋没土の性状は、5層に区分することができる。

I 暗褐色土 黒色土・ローム・ローム小ブロックの搅拌土。

I' 暗褐色土 I層に比してローム粒子の混入がやや多い。

II 褐色土 黑色土の量が減少し色調が明るくなる。

III 明褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量。

IV 黑褐色土 黑色土がベースで微量のローム粒子を含む。

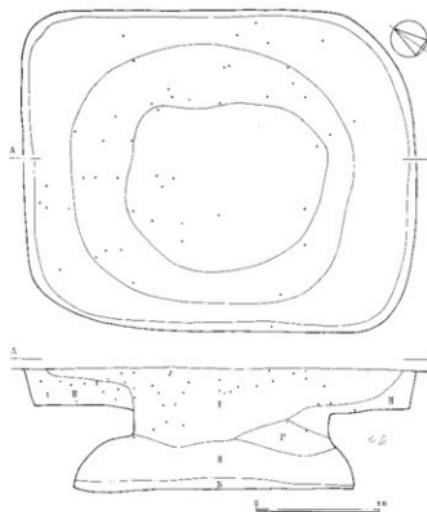
出土遺物総数は50個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は空白部が多く、きわめて疎らに散在する。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上や下層からの出土は皆無で、中層より上位に集まっている。

開口部の平面プランは恰も小型堅穴住居址の形状を呈するが、住居址としての確認はできなかった。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第二五図 第四号土壤実測図、遺物出土状態図

第五号土壙（第二六図）

本土壙はC～D-6～7に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は円形に近い橢円形を呈し、長径255cm、短径197cm、主軸線はN-89°-Eを指向する。

掘り方は開口部より40cmほど内側へ斜めに掘り下げて、径97cmの頸部を形成した後、外側に大きく膨らむフ拉斯コ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは118cmを測り、鹿沼層に達しているが底面は硬く平坦である。

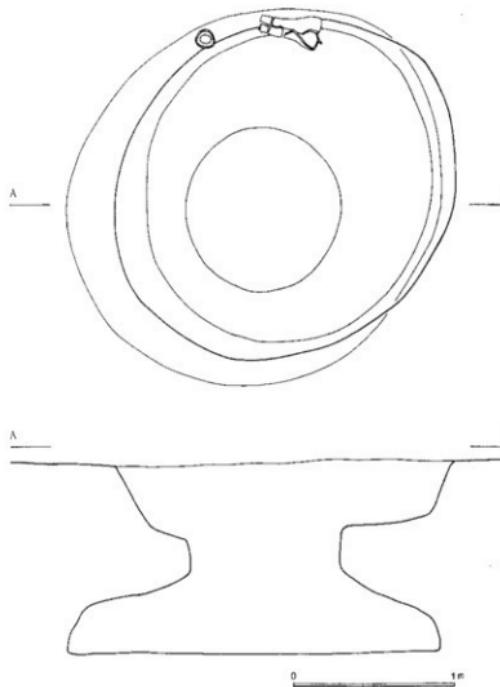
底面形は橢円形で径250×228cmを測る。

埋没土の性状は黒色土が主体でローム粒子と赤橙色ローム粒子を均等に混入する暗褐色土の単一層である。

底面直上部には鹿沼粒子も散在するが、層序区分線を入れるほどの明瞭な変化は認められない。

出土遺物は縄文土器の大形破片2個で、北壁際の底面上から出土した。

縄文時代中期の土壙である。



第二六図 第五号土壙実測図、遺物出土状態図

第六号土壙（第二七図）

本土壙はE-6に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長径173cm、短径150cm、主軸線はN-20°-Eを指向する。

掘り方は開口部より30cmほど斜めに掘り下げて、径147cmの頸部を形成した後、外側に大きく膨らむフラスク状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは70cmを測り、底面は硬く平坦である。底面形も梢円形で径210×190cmである。

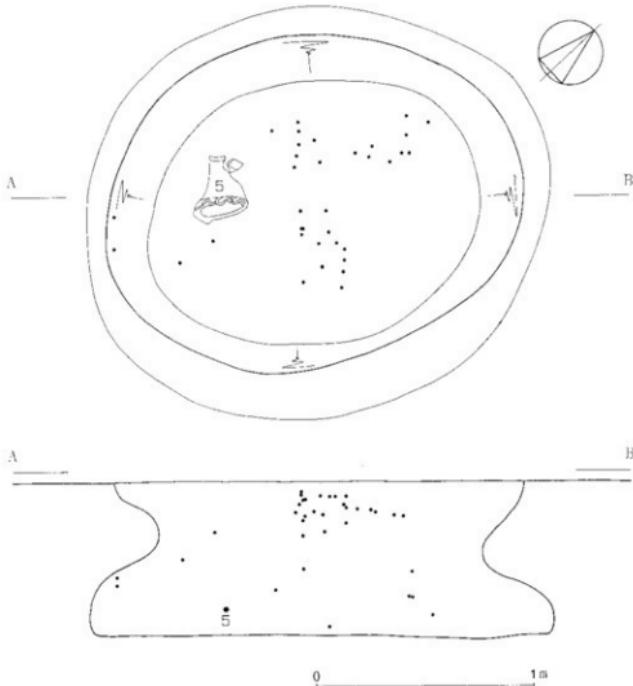
埋没土の性状は黒色土をベースにローム粒子を混入する黒褐色土の單一層である。下層部から底面直上にかけてはローム粒子の混入がやや多くなるが、区分線を入れるほどの明瞭な変化ではない。

出土遺物总数は30個で、すべて縄文土器である。

ドットマップによる平面分布の状態は、すべての遺物が開口部の範囲内から出土している。

断面図に投影した垂直分布の在り方を観ると、底面上は皆無で下層・中層部は少なく、上層部に集中する。

No 5は深鉢形土器の半完成品である。縄文時代中期の土壙であろう。



第二七図 第六号土壙実測図、遺物出土状態図

第七号土壤（第二八図）

本土壙はF-6に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は橢円形で、長径325cm、短径285cm、主軸線はN-32°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅牢で崩落の痕跡は認められない。

深さは70cmで底面は平坦である。底面形も橢円形で径273×228cm、底面は硬く踏み固められている。

埋没土の性状は黒褐色土の單一層である。

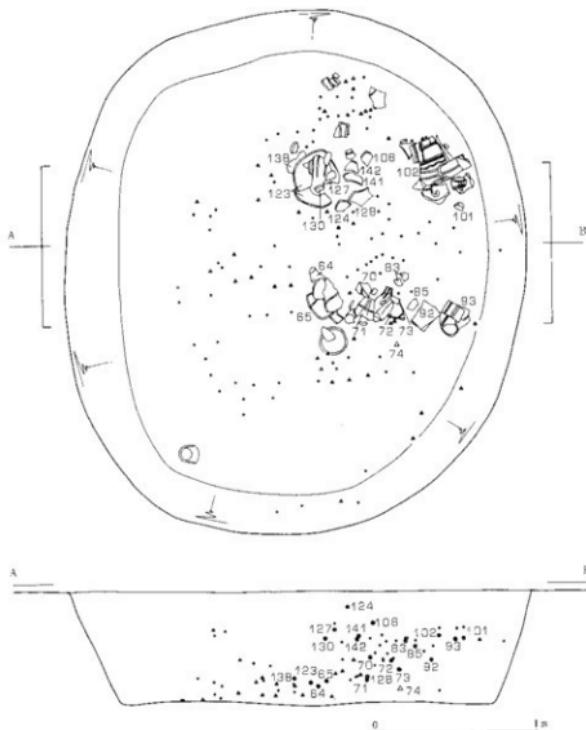
出土遺物総数は180個である。内訳は縄文土器140個、自然石40個である。

平面分布状態は、西側に空白部があるもののおおむね万遍なく出土している状態を看取することができる。

A-Bセクションを中心に幅1mの範囲を断面図に投影した垂直分布の在り方は、下層から上層まで平均して出土している。

しかし、大形破片が中層より上位に多いという事実は、埋戻しと同時に一括投棄されたものと思われる。

縄文時代中期の土壤である。



第二八図 第七号土壤実測図、遺物出土状態図

第八号土壤（第二九図）

本土壤はH-6～7に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は椭円形を呈し、長径290cm、短径228cm、主軸線はN-40°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面は堅固である。

深さは50cmで、底面は不整椭円形を呈し、平坦で硬い。

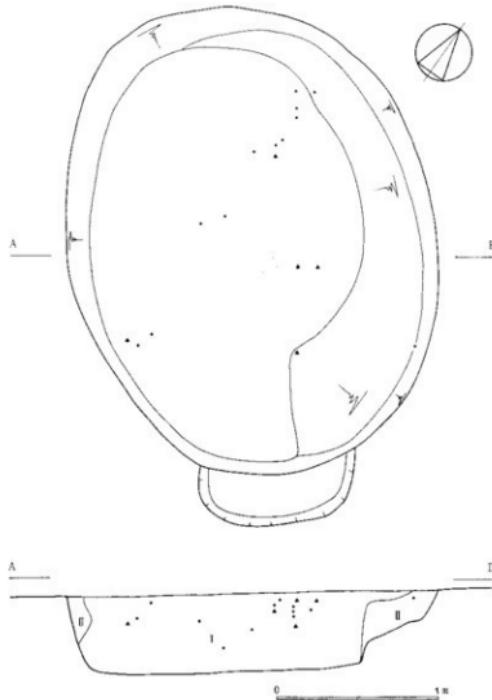
埋没土の性状は、2層に区分できる。Iは黒色土、IIはローム粒子を多量に含む褐色土である。

出土遺物总数は17個で、内訳は縄文土器片12個、自然石5個である。

平面分布の状態はきわめて散発的で空白部が多い。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上や下層部からの出土は皆無で、中層部より上位にまとまりをみせている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第二九図 第八号土壤実測図、遺物出土状態図

第九号土壤（第三〇図）

本土壙はJ-6~7に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長径296cm、短径245cm、主軸線はN-85°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面に崩落の形跡は認められない。

深さは東側32cm、西側32cm、中央部38cmで、中央部がやや深い傾向がみられるが、総体的には平坦である。

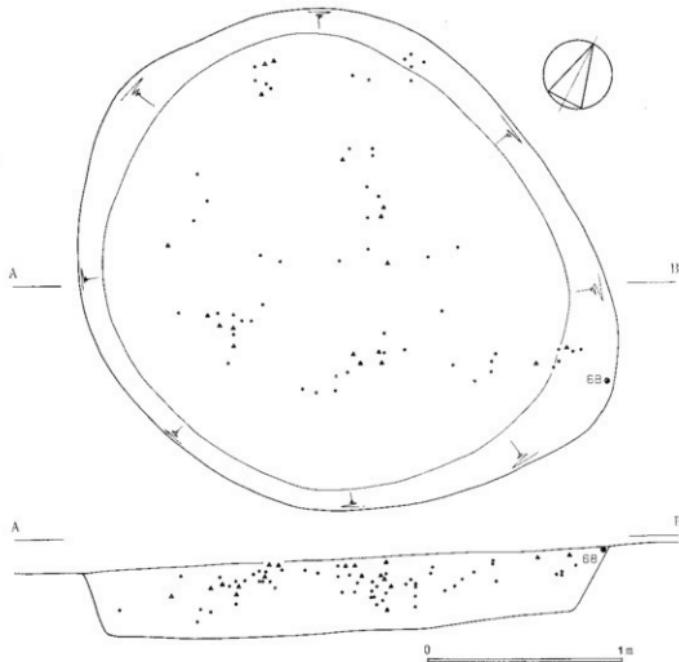
埋没土はローム粒子とローム極小ブロックを多量に混入する褐色土の單一層である。

出土遺物総数は78個で、内訳は縄文土器片60個、自然石18個である。

平面分布の状態は散発的で空白部が多い。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上や下層部からの出土は皆無で、中層から上位の層にすべての遺物がまとまっている。

縄文時代中期の土壤である。



第三〇図 第九号土壤実測図、遺物出土状態図

第一〇号土壤（第三一図）

本土壤はI～J～8に位置する。

開口部の平面形は円形を呈する。径180cmである。

掘り込みは、開口部より15cmほど垂直に掘り下げる後、外側に膨らむフラスコ状となり底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さはセクションA側が53cm、中央部48cm、セクションB側46cmを測り、西側がやや深い傾向がみられるが、総体的には平坦な底面といえるだろう。特に硬く踏み固めた痕跡はない。

埋没土は2層に区分することができる。Iはローム粒子の混在する暗褐色土、IIはローム粒子と赤橙色ローム粒子を多量に混入する褐色土である。

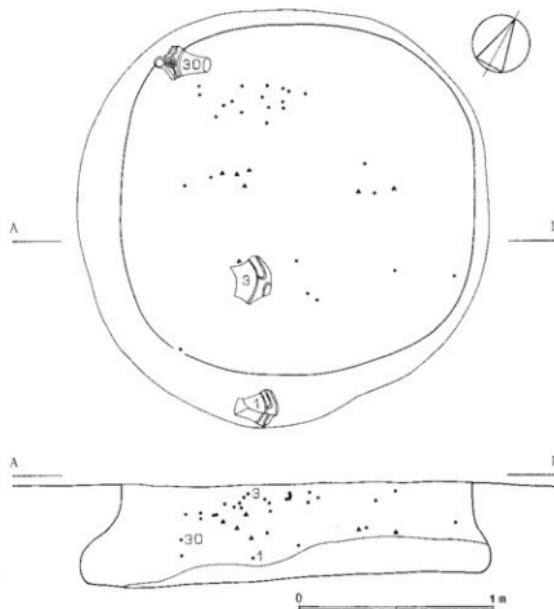
出土遺物总数は36個で、内訳は縄文土器29個、自然石7個である。

ドットマップによって平面出土状態を観察すると、大部分は開口部の範囲内にまとまっている。

垂直分布の状態を断面図に投影すると、底面上の出土は皆無で中層以上に集中している。

西壁際から深鉢形土器の完形品が出土した。

本土壤は縄文時代中期の廃絶であろう。



第三一図 第一〇号土壤実測図、遺物出土状態図

第一一号土壤（第三二図）

本土壙はD～E－9に位置する。東側は第一二号土壤と切り合っている。

開口部の平面形はほぼ円形を呈し、長径175cm、短径170cmである。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、切り合い部を除く壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは西壁40cm、切り合い部付近の東壁45cmを測り、土壤中心部の底面は2段掘り込みになっている。

埋没土の性状はローム小ブロックを混入する黒褐色土の單一層である。

出土遺物総数は22個で、内訳は縄文土器片3個、自然石19個である。

出土遺物は極めて僅少であるが、縄文時代中期の土壤であろう。

第一二号土壤（第三二図）

本土壙はE～F－9～10に位置する。西側は第一一号土壤と切り合っている。

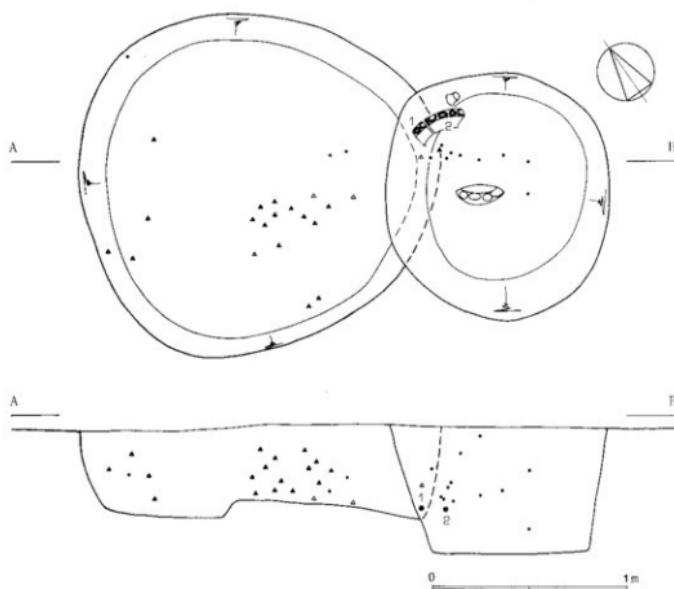
開口部の平面形は円形を呈し、長径127cm、短径115cmである。

掘り方はほぼ円筒状に内側へやや斜めに掘り込まれており、壁面は堅固である。

底面もほぼ円形を呈し、平坦で硬い。

埋没土の性状はローム小ブロックを混入する黒褐色土で、区分線を入れるような層序変化はみられない。

出土遺物総数は13個で、内訳は縄文土器11個、自然石1個である。本土壙も縄文時代中期であろう。



第三二図 第一一号（左）・第一二号（右）土壤窓測図、遺物出土状態図

第一三号土壤（第三三図）

本土壙はF-9に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は不整円形を呈し、径115×110cmを測る。

掘り方は内側へ斜めに40cmほど掘り下げて、径90×85cmの円形の頸部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは110cm、底面は鹿沼層に達しているが踏み固めて平坦な底面としている。

底面は、径175×175cmの円形である。

埋没土の性状は4層に区分される。

I 暗褐色土 黒色土がベースでローム粒子を混入する。

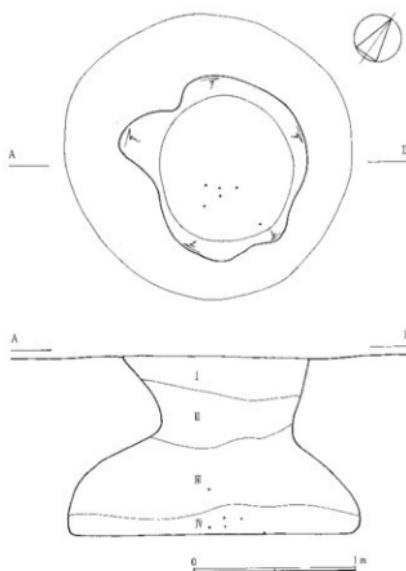
II 黒色土 ほとんど夾雜物のない黒色土。

III 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に混入。

IV 明褐色土 ロームが主体で鹿沼粒子が混在する。

出土遺物はわずかに6個である。すべて開口部の範囲内から出土し、底面直上付近にまとまっている。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第三三図 第一三号土壤実測図、遺物出土状態図

第一四号土壤（第三四図）

本土壤はF～G-9に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形はほぼ円形を呈し、径90×90cmである。

掘り方は内側へ40cmほどやや斜めに掘り下げて、径85×80cmの円形の頸部を形成した後、そこより下位は外側へ大きく開くフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

深さは92cmで、底面は鹿沼層に達しているが、踏み固めて平坦な底面としている。

埋没土の性状は4層に区分することができる。

I 暗褐色土 黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロックを混入する。

II 黒褐色土 黒色土に微量のローム粒子が混在し、固く締っている。

III 褐色土 ローム粒子とローム小ブロックが主体で、微量の黒色土が混在する。

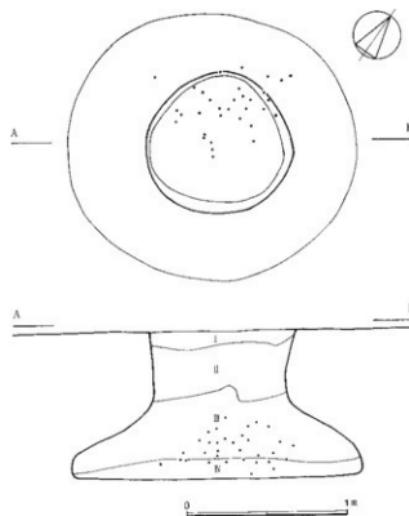
IV 明褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼粒子を多量に含む。

出土遺物総数は33個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は、大部分の遺物が開口部の範囲内にまとまりをみせている。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上から中層までの間に集中している。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第三四図 第一四号土壤実測図、遺物出土状態図

第一五号土壙（第三五図）

本土壙はH～I—9～10に位置する。

開口部の平面形はおおむね円形を呈し、径200×190cmである。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面は堅固である。

深さは東側で25cm、中央部で30cm、西側で20cmとやや凹凸はあるが、底面は硬い。

底面形もほぼ円形である。

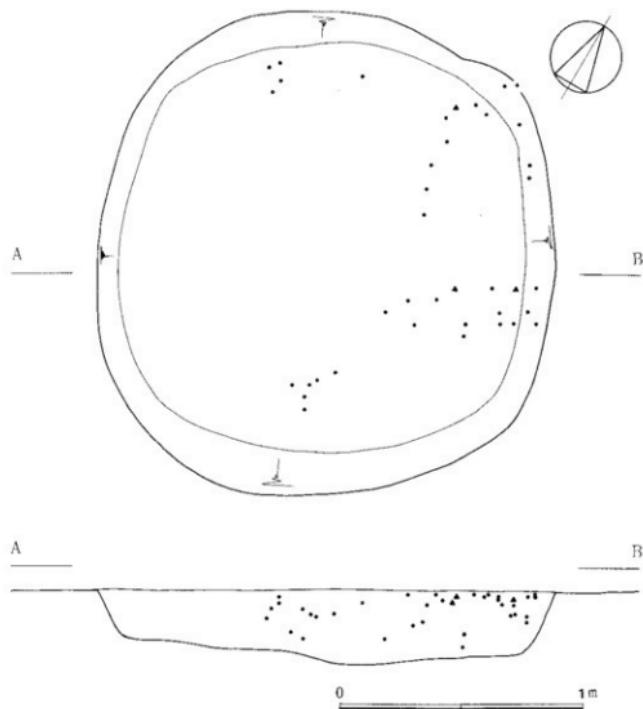
埋没土の性状は、ローム粒子を混入する黒褐色土の単一層で、層序分類の区分線は引けない。

出土遺物総数は39個で、内訳は縄文土器片36個、自然石3個となる。

平面分布の状態は、西側が全く空白で、東側にややまとまりをみせている。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上部は皆無で上層部に集中している傾向を指摘できる。

本土壙も縄文時代中期であろう。



第三五図 第一五号土壙実測図、遺物出土状態図

第一六号土壤（第三六図）

本土壤はD-E-10-11に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、径215×200cmである。

掘り方は東側と西側は内側へ斜めに掘り下げ、南側と北側は若干外側へ膨らむ袋状を呈する。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは東側52cm、中央部60cm、西側50cmを測り、掘り込み断面形は舟底状を呈するが、底面は硬く踏み固められている。底面も不整円形を呈する。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

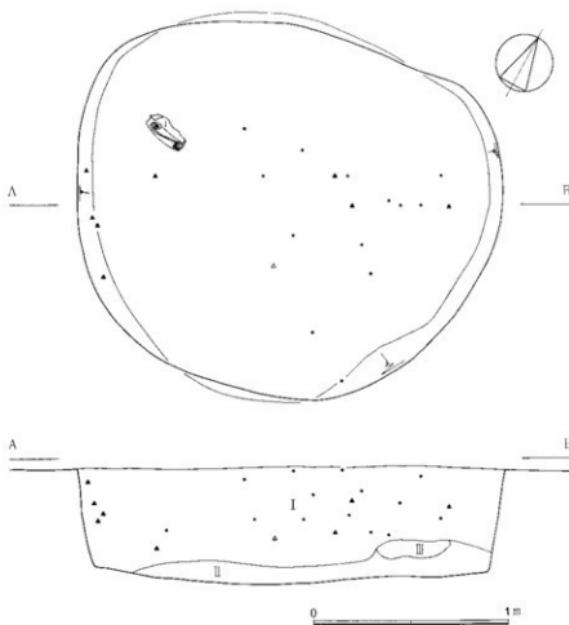
Iはローム粒子を混入する黒褐色土、IIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む褐色土、IIIは赤橙色ロームのブロックである。

出土遺物総数は23個で、内訳は縄文土器片14個、石器（打製石斧）1個、自然石8個となる。

平面分布状態はきわめて散発的で特に変った傾向を指摘することはできない。

断面図に投影した垂直分布の在り方を観察すると、底面上の出土は皆無で、すべての遺物が第I層の黒褐色土の層中にまとまっている。

本土壤も縄文時代中期であろう。



第三六号 第一六号土壤実測図、遺物出土状態図

第一七号土壤（第三七図）

本土壤はB～C-11～12に位置する。遺存状態は良好である。

平面形は橢円形を呈し、長軸490cm、短軸300cm、主軸線はN-0°を指向する。

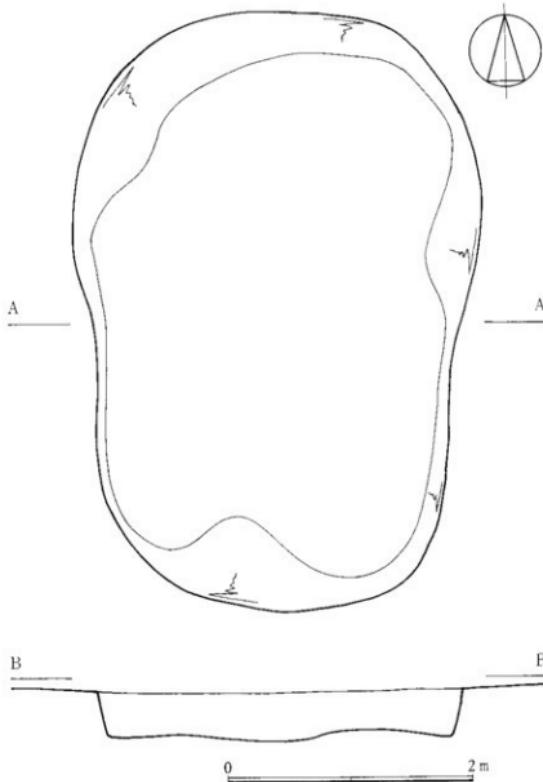
掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面に硬さはないが崩落の痕跡は認められない。

深さは40cmで、底面には若干の起伏があるがおおむね平坦である。踏み固めたような形跡はない。

底面形は不整形である。

埋没土の性状は、黒色土が主体でローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物はない。縄文時代中期の土壤であろう。



第三七図 第一七号土壤実測図

第一八号土壤（第三八図）

本土壤はC-D-11~12に位置する。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長径200cm、短径170cm、長径方向はN-54°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは40cmで、底面も梢円形を呈し、平坦で硬い。

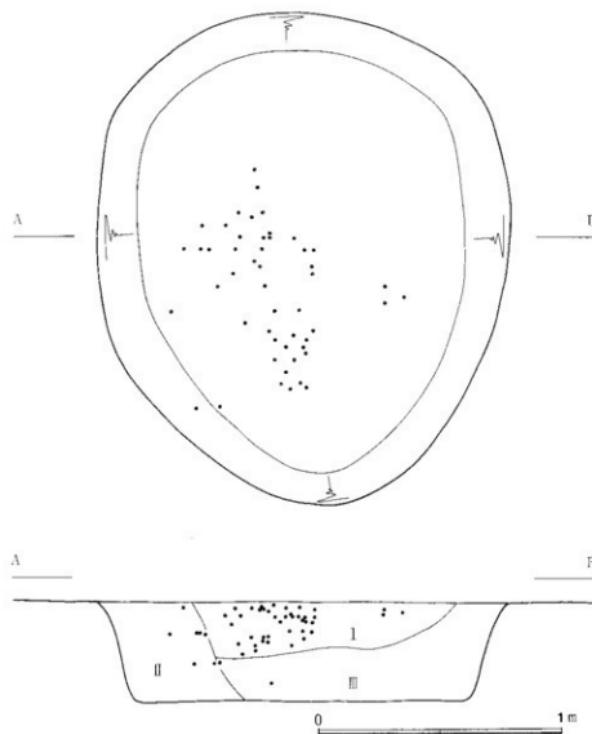
埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは黒色土、IIはローム粒子を混入する暗褐色土、IIIは赤橙色ローム粒子を多量に含む褐色土である。

出土遺物総数は50個すべて縄文土器片である。

平面分布の状態は中心部から南西方向の限られたエリアにまとまっており、断面図に投影した垂直分布の在り方はI層の黒色土中に集中する傾向を看取できる。

この状態は埋戻しと同時に投棄されたことをあらわすもので、ゴミ捨場的性格の強い土壤のように思われる。



第三八図 第一八号土壤実測図、遺物出土状態図

第一九号土壤（第三九図）

本土壤はD-12に位置する。南側の一部が第三号住居址に切られているが、遺存状態はおおむね良好である。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長径350cm（推定）、短径247cm、主軸線はN-11°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは中央部で50cmを測り、東側は38cm、西側は43cmでやや起伏はあるが、全体としては平坦である。

底面形も楕円形で径300×213cm、踏み固めたような硬さはみられない。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは黒色土をベースにローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土で、炭化物小片も混在する。

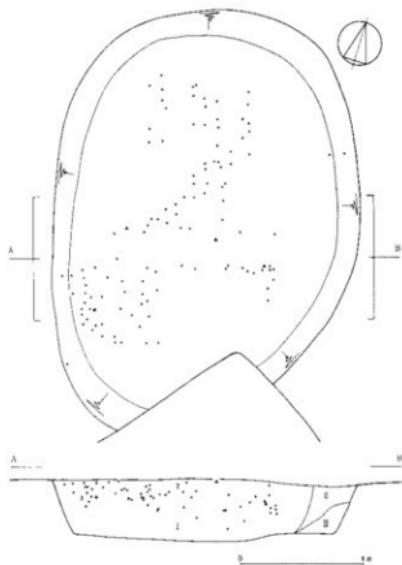
IIはローム粒子を多量に混入する褐色土、IIIは赤橙色ローム粒子を多量に含む紅褐色土である。

出土遺物総数は130個である。内訳は縄文土器126個、自然石4個である。

ドットマップによる平面分布状態を観察すると、空白部もあるが全面に分布しており、特に変った傾向を指摘することはできない。

A-Bセクションを中心に幅1mの範囲を断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面上や下層部からの出土は皆無で、中層より上位、特に上層部に集中している。

この状態は、埋戻しと同時に一括投棄されたことを物語るものであろう。縄文時代中期の土壤である。



第三九図 第一九号土壤実測図、遺物出土状態図

第二〇号土壤（第四〇図）

本土壤はG-12に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は円形を呈し、径290×280cmを測る。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは85cmで、底面も円形を呈し、平坦で硬く踏み固められている。

埋没土の性状は3層に区分される。

I 暗褐色土 黒色土が主体でローム粒子・ローム小ブロックを混入する。

II 赤橙褐色土 赤橙色ロームを多量に含む。この層は固く締っている。

III 暗褐色土 赤橙色ロームとローム粒子を多量に混入する。

出土遺物は、縄文土器片117個と自然石多數である。

平面分布状態は東西中軸線を挟んで東側が土器片、西側が自然石という偏在性を指摘することができる。

A-Bセクションの断面図に投影した垂直分布の在り方は、土器片は東側から埋没土I・IIの層序区分線に沿って傾斜状に出土し、自然石は中央より西側の底面上に敷石遺構を想わせる状態で出土した。



第四〇図 第二〇号土壤実測図、遺物出土状態図

第二一号土壤（第四一図）

本土壤はH-12に位置する。遺存状態は良好である。隣接する2基の土壤をA・Bとして21号土壤とした。開口部の平面形は、Aが径285×265cmの円形、Bが長軸345cm、短軸200cm、主軸線方向N-5°-Wの橢円形を呈する。

掘り方は両者とも内側へ斜めに掘り込んでおり、堅牢さはないが崩落の痕跡は認められない。

深さはAが63cm、Bが40cmを測る。

底面に硬さはなくAは平坦、Bは舟底状を呈する。

埋没土の性状は次のとおりである。

A 暗褐色土 黒色土がベースでローム粒子・赤橙ローム粒子を混入する。

B 暗褐色土 黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロックを混入する。

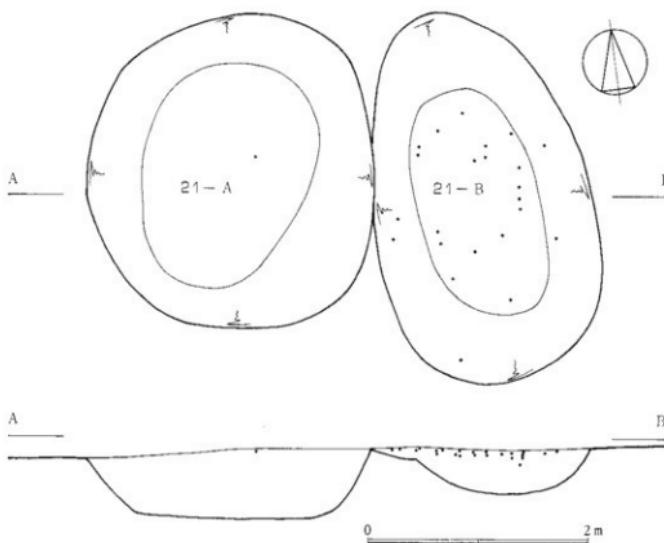
出土遺物はAが1個、Bが23個で、いずれも縄文土器片である。

Aの出土状態は中央部の確認面直下から唯一の出土であるが、Bの23個の平面分布状態は北側は空白であるが、おおむね全面に疎らに分布している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、上層部から確認面直下にまとまっている。

この出土状態は、本土壤廃絶埋戻しと同時に一括投棄されたものであろう。

縄文時代中期の土壤であろう。



第四一図 第二一号土壤実測図、遺物出土状態図

第二二号土壤（第四二図）

本土壤はG-15~16に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、長径194cm、短径192cmである。

掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは西壁27cm、中央部35cm、東壁35cmを測り、西側がやや浅い断面形状を呈するが、極端な凹凸は認められず底面はおおむね平坦である。硬く踏み固めた形跡はない。

底面の形状も円形で、長径170cm、短径160cmである。

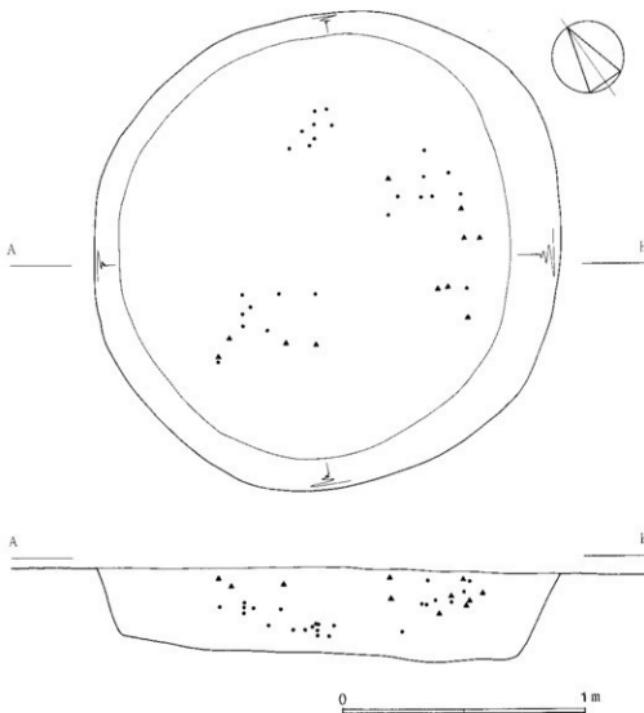
埋没土の性状は、黒色土にローム粒子を混入する暗褐色土の単一層で、区分線を引くことはできない。

出土遺物総数は37個で、内訳は縄文土器26個、自然石11個である。

出土状態をドットマップで観察すると、平面分布の状態は周壁部は空白が多く、部分的に集中する傾向がみられる。

垂直分布状態を断面図に投影すると、底面直上部の出土は皆無で、中層より上位にまとまりをみせている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第四二図 第二二号土壤実測図、遺物出土状態図

第二三号土壙（第四三図）

本土壙はC～D-15に位置する。西側は第二号住居址（弥生時代）に切られている。

開口部の平面形は円形を呈する。径185×185cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面に硬さはないが崩落は認められない。

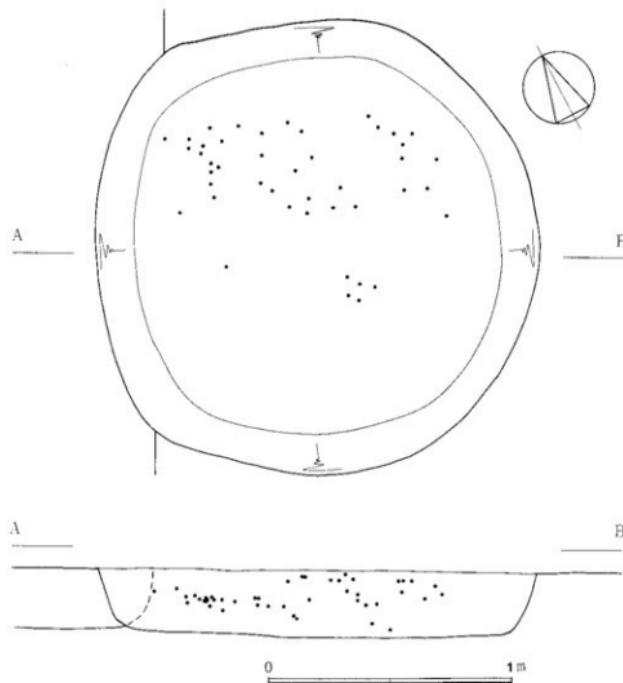
深さは28cmで、底面形も円形である。踏み固めたような硬さはない。

埋没土は暗褐色土の單一層である。

出土遺物総数は44個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態はA-Bセクションの北側に集中し、垂直分布の在り方は層全体から出土している。

縄文時代中期の土壙であろう。



第四三図 第二三号土壙実測図、遺物出土状態図

第二四号土壤（第四四図）

本土壙はD-5～6に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は円形を呈し、径165×165cmである。

掘り方は開口部より40cmほどほぼ垂直に掘り下げて頸部を形成した後、外側に大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

深さは105cmを測るが、底面は硬く踏み固められており平坦である。

底面形も円形で、径250×250cmである。

埋没土の性状は黒色土をベースとして、ローム粒子を混入する黒褐色土の單一層である。上層部には赤橙色ローム粒子の混在もみられるが、区分線を引くほどの明確な層序変化ではない。

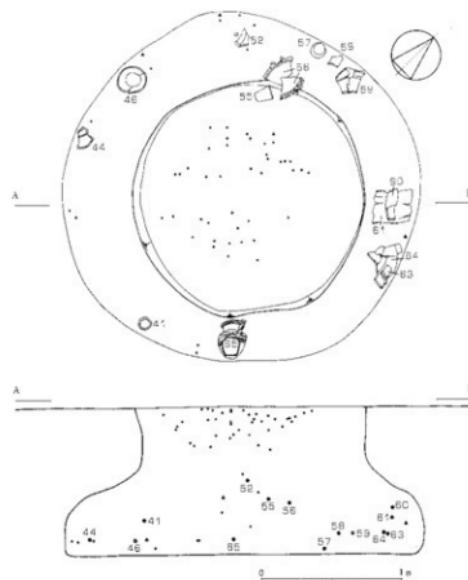
出土遺物総数は67個である。内訳は縄文土器63個、自然石4個である。

平面分布状態は中央部から壁際まで万遍なく出土している状態を把握できるが、断面図に投影した垂直分布の状態を観察すると、上層部のグループと下層部のグループに大別することができる。

上層部に集中する土器群はすべて細小破片で埋め戻しの際に一括投棄されたものと思われるが、下層部の土器群は半完形品や大型被片で、本土壙に関連する遺物であろう。

No65の半完形品は、底面上10cmの出土レベルから横位で出土した。

縄文時代中期の土壤である。規模・形態からみて土壤幕に転用したこととも考えられる。



第四四図 第二四号土壤実測図、遺物出土状態図

第二五号土壤（第四五図）

本土壤はL～M～9に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は橢円形を呈し、長径310cm、短径270cm、主軸線はN-36°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは78cmで、底面は硬く平坦である。

底面形は橢円形で長径300cm、短径225cmを測る。

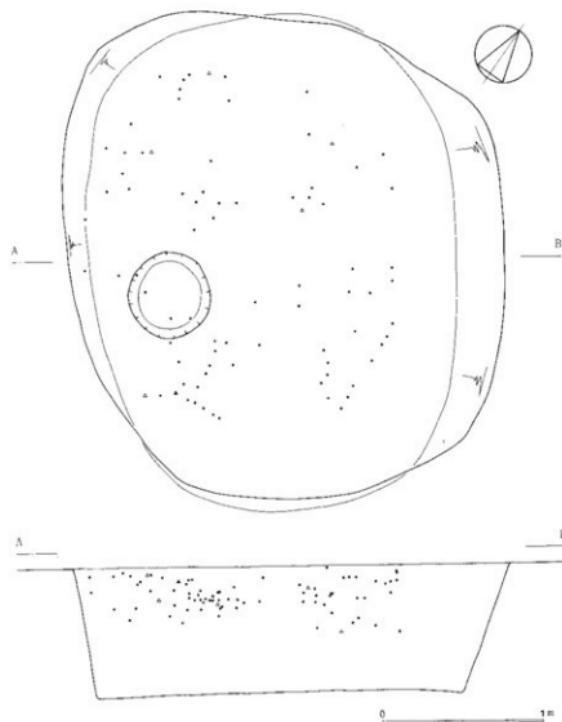
中央部西寄りにピット1個が存在する。径54×50cm、深さ55cm、土壤に付随するピットであろうが性格は不明である。

埋没土の性状は黒色土を主体としてローム粒子とローム小ブロックを混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物総数は81個で、内訳は縄文土器片75個、自然石6個となる。

ドットマップによる平面分布状態は、散発的で空白部があるものおおむね全面から出土している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、中層部より上位に集中しており、埋戻しと同時に一括投棄されたゴミ捨場的性格の強い土壤のように思われる。時期は縄文時代中期であろう。



第四五図 第二五号土壤実測図、遺物出土状態図

第二六号土壤（第四六図）

本土壤はL～M-15～16に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は円形を呈し、径300×295cmである。

掘り方は内側へ斜めに掘り込んでおり、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは中央部で55cmを測り、西側がやや深い傾向がみられるが、底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

I 暗褐色土 黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロックを混入する。

II 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む。

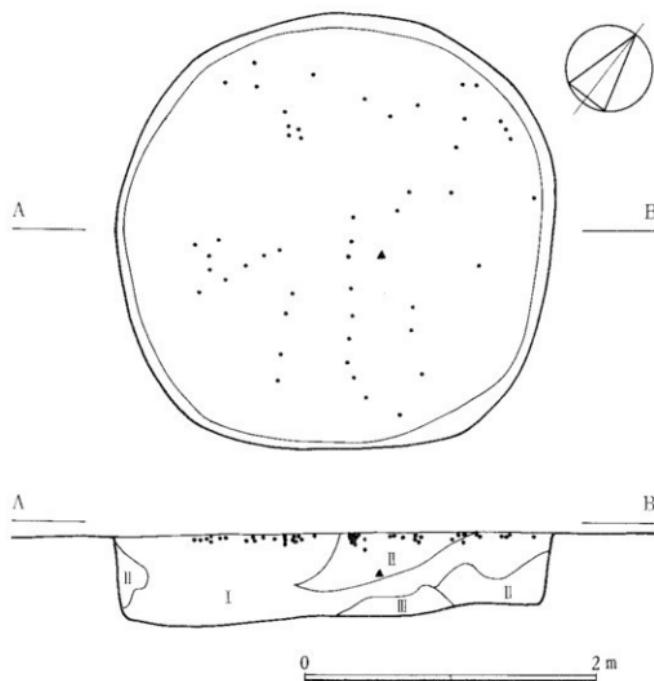
III 暗褐色土 I層に近似するが全体の色調がやや明るくなる。赤橙ローム粒子も散在する。

出土遺物総数は52個で、内訳は繩文土器片51個、自然石1個となる。

平面分布状態はほぼ全面から出土しており、特に変った傾向は指摘できない。

断面図に投影した垂直分布の在り方を観察すると、自然石以外の遺物は確認面近くの上層部に集中しており埋戻しの際に一括投棄された様相を物語っている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第四六図 第二六号土壤実測図、遺物出土状態図

第二七号土壤（第四七図）

本土壙はO～P-18～19に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は橢円形を呈し、長径274cm、短径247cm、主軸線はN-10°-Wを指向する。

掘り方は開口部から40cmほど斜めに掘り下げて、径140cmの頸部を形成した後、外側に大きく膨らむフラスク状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

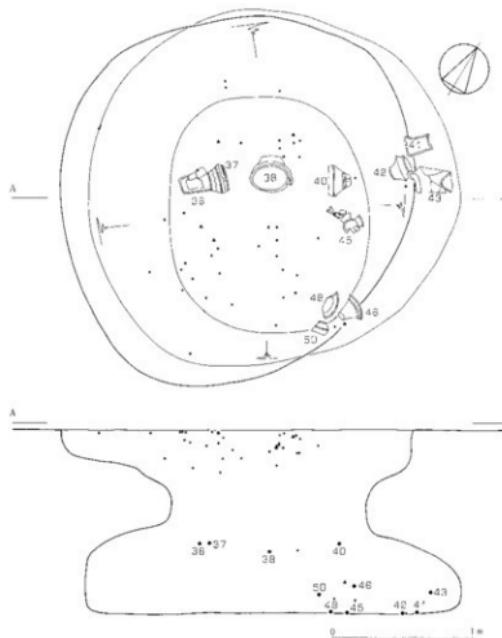
深さは130cmを測り、底面の中心部は硬く踏み固められており、径260×260cmの円形を呈する底面は平坦である。

埋没土は黒色土がベースでローム粒子を混入する黒褐色土の單一層である。

出土遺物总数は57個で、内訳は縄文土器51個、自然石6個となる。

平面分布状態は中央部より東側方向に集中する傾向を指摘することができるが、断面図に投影した垂直分布の在り方を観察すると、上層部のグループと下層部のグループに大別することができる。

上層部に集中する土器群はすべて細小破片で、埋め戻しの際に一括投棄されたものと思われるが、下層部の土器群は準完形品や大型破片で、本土壙に関連する遺物であろう。縄文時代中期の土壤である。



第四七図 第二七号土壤実測図、遺物出土状態図

第二八号土壤（第四八図）

本土壙はN～O～20に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、長径317cm、短径285cmを測る。

掘り方は、開口部から65cmほど内側へ斜めに掘り込んで径140cmの頭部を形成した後、外側に膨らむラスコ状に掘り下げて底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは182cmを測るが、底面はロームを硬く踏み固めており平坦である。

底面の形状は円形で、径200×200cmである。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは黒色土がベースで、若干のローム粒子が混在する黒褐色土、IIはローム粒子を多量に混入する褐色土、IIIはI層よりややローム粒子の混入が多い暗褐色土である。

出土遺物総数は122個を数える。内訳は縄文土器109個、自然石13個となる。

ドットマップによる平面分布状態は、土壤内からほぼ万遍なく出土しており、特に変った傾向を指摘することはできないが、A-Bセクションを中心に両側1mの範囲を断面図に投影した垂直分布の在り方は、上層部のグループと底面直上部のグループに大別することができる。

上層部の出土遺物はすべて破片であるが、底面直上部出土の土器2個はいずれも完形品である。

中層部からの出土は皆無である。

完形品のうち1個は、器高21cmの獸面把手付深鉢形土器である。

縄文時代中期の土壤である。

第二九号土壤（第四九図）

本土壙はO～P～18～19に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は円形を呈し、径330×330cmを計測する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅硬で崩落の痕跡は認められない。

深さは中央部で30cmを測り、底面は硬く平坦である。

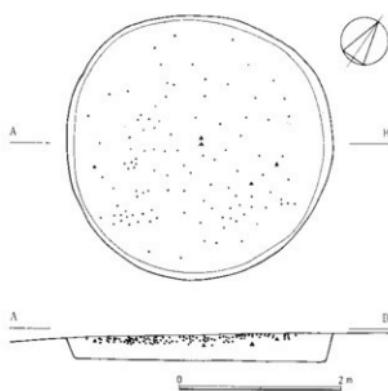
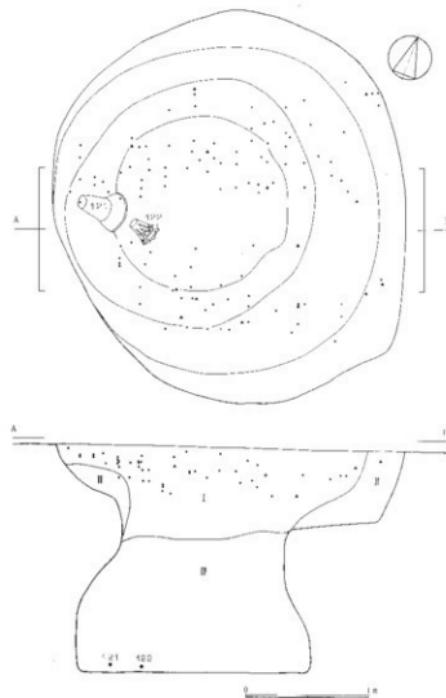
埋没土の性状は、黒色土が主体で、ローム粒子と赤橙ローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物総数は113個を数える。内訳は縄文土器片75個、自然石5個となる。

平面分布状態は全面から万遍なく出土している。

断面図に投影した垂直分布の在り方を観察すると、中層以下の出土は皆無で、すべての遺物が確認面直下から上層部にまとまっている。

この出土状態は周囲から紛れ込んだり流れ込んだものではなく、廃絶埋戻しと同時に一括投棄されたものであろう。縄文時代中期の土壤である。



第四八圖 第二八号(上)・第二九号(下)土壤実測図、遺物出土状態図

第三〇号土壤（第四九図）

本土壤はL～M-21～22に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、長径190cm、短径182cmを測る。

掘り込みは、開口部から30cmほど内側へ斜めに掘り下げて頸部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り下げて底面にいたる。

壁面は堅牢で崩落の痕跡は全く認められない。

深さは97cmを測り鹿沼層に達しているが^a、その鹿沼層を硬く踏み固めた底面は平坦である。

底面の形状も円形で、長径270cm、短径265cmを測る。

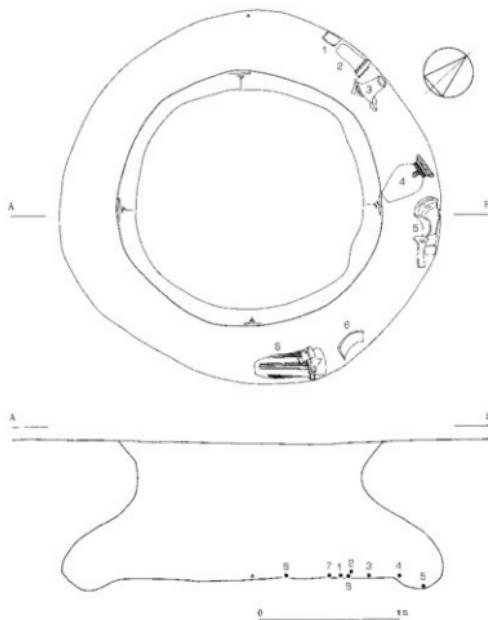
壁面直下は部分的に溝状（深さ5～7cm）の掘り込みがあるが、一巡してはいない。

埋没土の性状は4層に大別することができる。

Iは黒色土がベースでローム粒子を混入する暗褐色土、IIはローム粒子の混入が微量の黒褐色土、IIIaは夾雜物を含まない黒色土でさらさらしており、IIIbはやや粘性を帯びる。IVはローム粒子・鹿沼粒子の混合土である。

北側から東側へかけての壁際底面上から、完形品を含む大木8a式の土器群が出土した。

出土遺物総数は9個と少ないが、縄文時代中期の土壤墓の性格が強いように思われる。



第四九図 第三〇号土壤実測図、遺物出土状態図

第三一号土壙（第五〇図）

本土壙はI～J-9～10に位置する。第四号住居址のWコーナー床面下より確認された。

開口部の平面形はおおむね円形を呈する。径115×113cm。

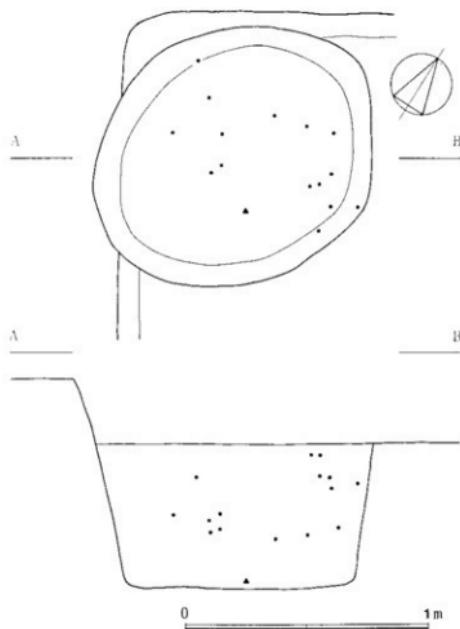
掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

深さは60cmで、底面は硬く踏み固められており平坦である。底面形もほぼ円形である。

埋没土は黒色土がベースでローム粒子を混入する暗褐色土の單一層である。

出土遺物総数は16個で、内訳は縄文土器片15個、自然石1個となる。

平面分布状態は散発的で疎らな出土状態を示し、断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面上から上層まで出土している。縄文時代中期の土壙であることはいうまでもない。



第五〇図 第三一号土壙実測図、遺物出土状態図

第三二号土壤（第五一図）

本土壤はH～I-12～13に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形はほぼ円形を呈する。径250×250cmを計測する。

掘り方は内側へ20cmほど斜めに掘り下げて平坦面を構成し、中央部に径120×120cmの円形の頭部を形成した後、そこより下位では外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは115cmで、底面は鹿沼層に達しているが、踏み固めて平坦な底面としている。

底面は径235×230cmの円形である。

埋没土の性状は4層に区分することができる。

I 暗褐色土 黒色土を主体としてローム粒子・ローム小ブロックを混入する。

II 黒褐色土 性状はI層に近似するが黒色の色調が強い。やや粘性を帯びる。

III 褐色土 黒色土とロームの均等な混合土。

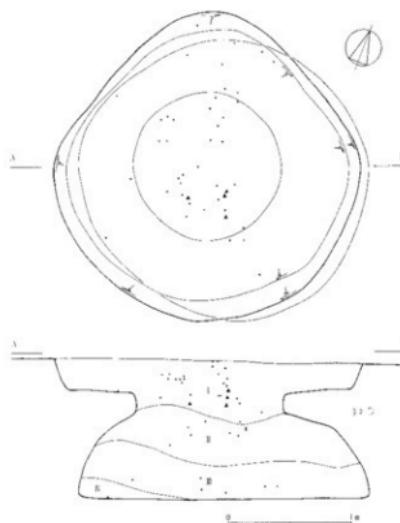
IV 明褐色土 ロームが主体で鹿沼粒子が多量に含まれている。

出土遺物総数は44個で、内訳は縄文土器片40個、自然石4個となる。

ドット・マップによって平面分布状態を観察すると、大部分の遺物は頭部の範囲内にまとまっている。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、下層から上層まではほぼ均等に出土している。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第五一図 第三二号土壤実測図、遺物出土状態図

第三三号土壤（第五二図）

本土はI～J-13～14に位置する。北側に5条のトレンチャー痕があるが、土壤を破壊するまでにはいたらず、遺存状態はおおむね良好である。

完掘後の観察で2基の土壤の重複であることが判明したが、同番号の土壤として取扱うこととした。

開口部の平面形は不整橿円形を呈し、長軸425cm、短軸300cmを測る。

掘り方は内面へ斜めに掘り下げており、北側は2段掘り込みになっている。壁面は堅固である。

深さは南側が80cm、北側は70cmである。底面はおおむね平坦であるが、10cmの段差がみられる。

埋没土の性状は3層に区分される。

I 暗褐色土 黒色土が主体でローム粒子・ローム小ブロックを混入する。

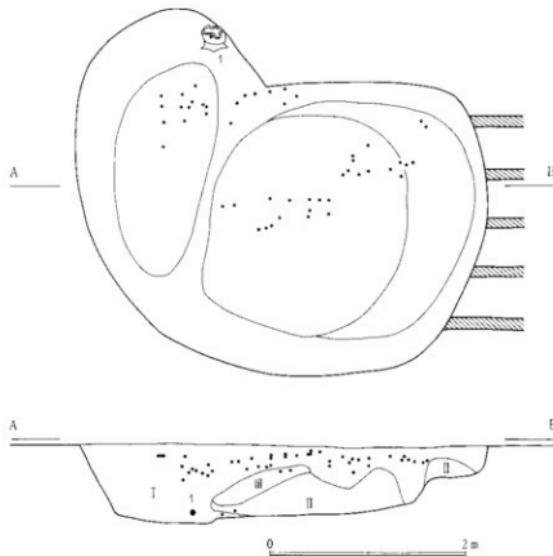
III 楠色土 黒色土とロームの混合土。

IV 赤堀色土 赤堀色ローム

出土遺物総数は50個すべて縄文土器である。

平面分布状態は、南側は空白でA-Bセクションの北側に偏在する傾向がみられる。断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面直上の出土はわずかに2個で、大部分の遺物は中層より上位に集中している。

埋没土の区分線の在り方や、遺物の出土状態から推考すると、廃絶時の埋戻しと同時に一括投棄されたものであろう。縄文時代中期の土壤であろう。



第五二図 第三三号土壤実測図、遺物出土状態図

第三四号土壤（第五三図）

本土壤はK～L-14～15に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長径260cm、短径220cm、主軸線はN-63°-Eを指向する。

掘り方は内側へわずかに斜めに掘り下げており、壁面に硬さはないが崩落は認められない。

深さは西側10cm、中央部25cm、東側24cmで西側が浅い。

底面形も梢円形で、硬さはない。

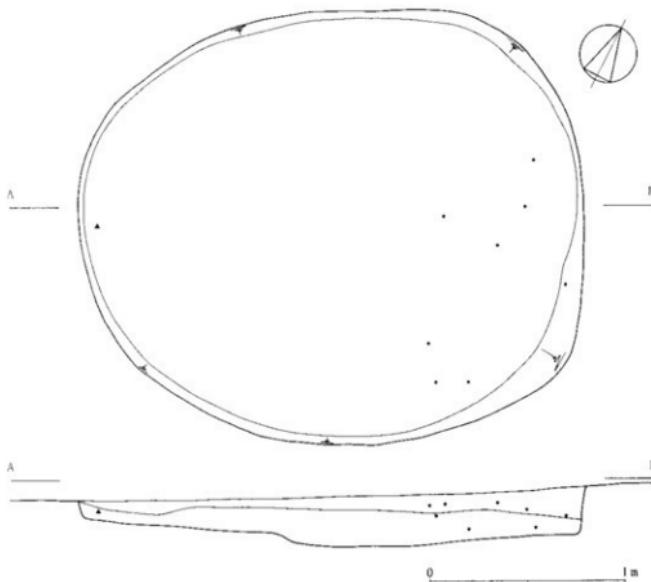
埋没土は2層に区分できる。

Iは黒色土がベースで、ローム粒子混入する暗褐色土。IIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に混入する褐色土である。

出土遺物总数はわずかに9個で、内訳は縄文土器片8個、自然石1個である。

出土状態はきわめて疎らで、土器片は東側にだけ偏在する。

縄文時代中期の土壤と考えられる。



第五三図 第三四号土壤実測図、遺物出土状態図

第三五号土壤（第五四図）

本土壤はF～14に位置する。遺存状態は良好である。

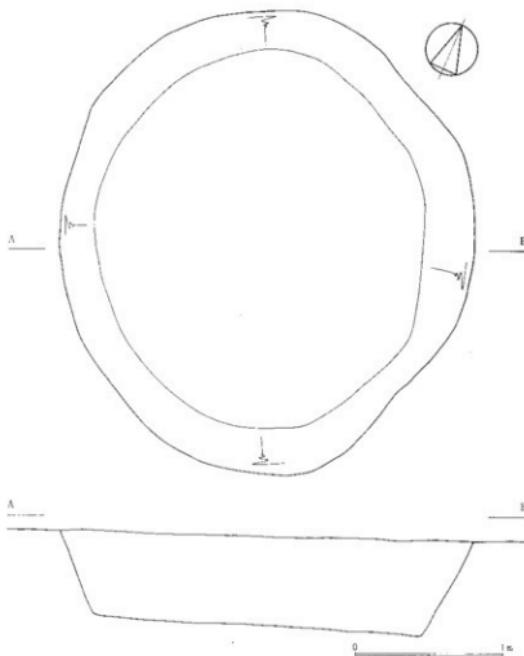
開口部の平面形は梢円形を呈し、長径313cm、短径280cm、主軸線はN-25°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは東側が65cm、西側が55cmで、東側が10cmほど深い掘り込みであるが、底面は硬く踏み固められており全体的には平坦である。底面形も径256×220cmの梢円形である。

埋没土は黒褐色土の単一層である。

出土遺物は皆無であるが、縄文時代中期の土壤である。



第五四図 第三五号土壤実測図

第三六号土壙（第五五図）

本土壙はE～F-13～14に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形は不整円形を呈し、長径343cm、短径318cmを測る。

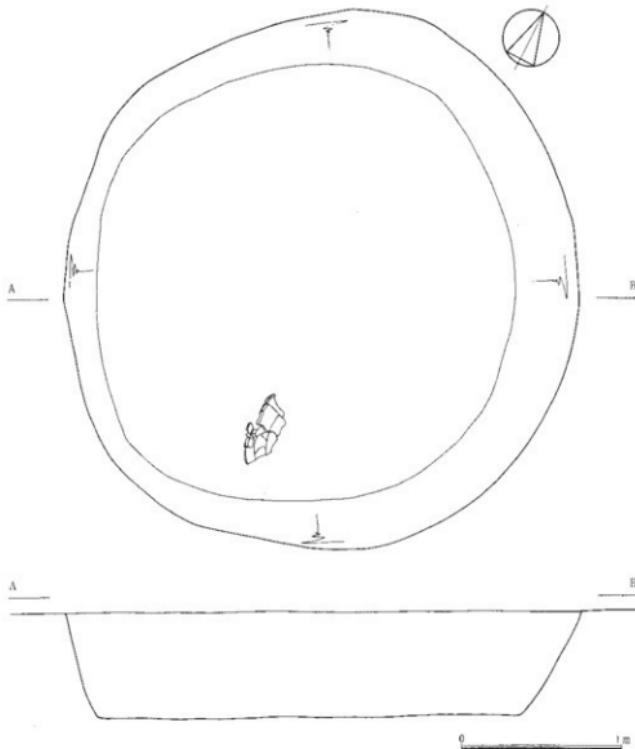
掘り方は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは65cmで、底面も不整円形を呈し、平坦で硬く踏み固められている。

埋没土の性状は黒色土にローム粒子を混入する黒褐色の單一層である。底面直上部はローム粒子の混入がやや多くなるが、区分線を入れるほどの明確な層序変化ではない。

南側壁際付近の底面上から無文浅鉢形土器が1個出土した。

縄文時代中期の土壙である。



第五五図 第三六号土壙実測図、遺物出土状態図

第三七号土壤（第五六図）

本土壤はH-I-10に位置する。遺存状態は良好である。西側に第三八号土壤が存在する。

開口部の平面形は円形を呈し、径160×150cmである。

掘り方は内側へ30cmほど斜めに掘り下げて頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。頭部径は120×117cmである。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは85cmで、底面もロームを硬く踏み固めており平坦である。

底面形もおおむね円形で、径170×155cmである。

埋没土はローム粒子を含む黒褐色土の単一層である。

出土遺物は皆無であるが、縄文時代中期の土壤である。

第三八号土壤（第五六図）

本土壤はH-I-10に位置する。遺存状態は良好である。東側に第三七号土壤が存在する。

開口部の平面形は椭円形を呈し、長径205cm、短径165cm、主軸線はN-20°-Wを指向する。

掘り方は内側へ50cmほど斜めに掘り下げて頭部を形成した後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

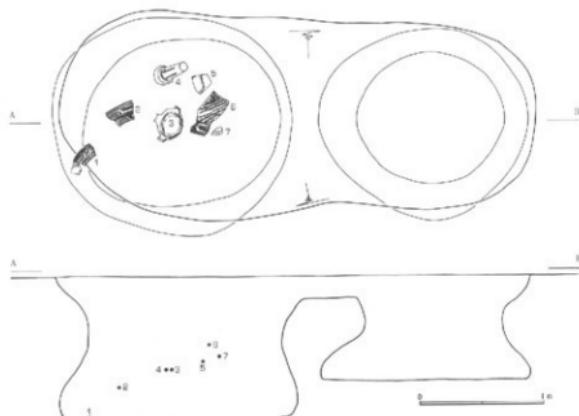
深さは115cmで、底面は鹿沼層に達しているが、鹿沼層を踏み固めて平坦な底面としている。

底面は、径190×185cmである。

埋没土は黒色土とローム粒子の均等な混合の暗褐色土の単一層である。この埋没土の性状は短時に埋戻されたことを物語るものである。

出土遺物総数は6個である。すべて縄文土器で2個の完形品が出土した。

平面分布の状態は中央部付近に集中するが、断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面上から中層までの間にまばらに散在する。縄文時代中期の土壤である。



第五六図 第三七号（右）・第三八号（左） 土壤実測図、遺物出土状態図

第三九号土壤（第五七図）

本土壤はF-10に位置する。北側は第四〇号土壤と切り合い重複している。

開口部の平面形は不整円形を呈し、東西径275cmを計測する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固である。

深さは25cmで底面は硬く平坦である。南壁寄りにピット2個が存在する。P₁は径48×47cm、深さ38cm、P₂は径34×34cm、深さ28cmである。

埋没土は黒褐色の單一層で遺物の出土はない。

第四〇号土壤（第五七図）

本土壤はE～F-10～11に位置する。南側は第三九号土壤と切り合い重複している。

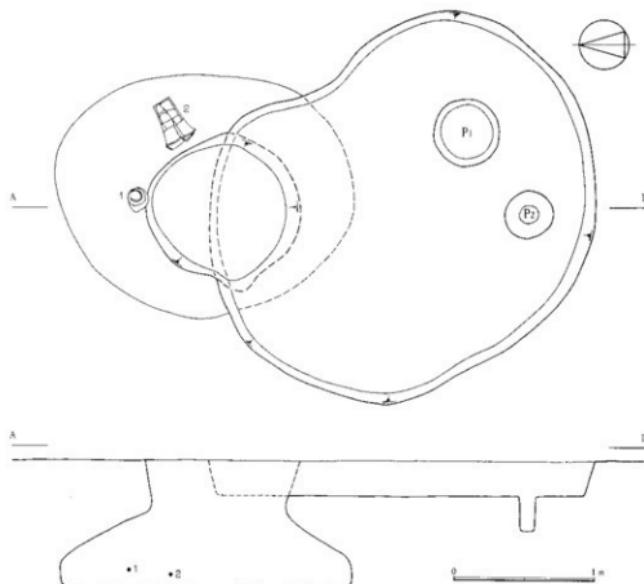
開口部の南側約50%は第三九号土壤に切られているが、平面形は不整円形を呈していたものと思われる。

開口部径は推定110×110cmほどであろう。掘り方は開口部から内側へ斜めに30cmほど掘り下げて径95cmの頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

深さは90cmで底面は鹿沼層に達しているが、底面は硬く平坦である。

埋没土の性状は、ローム粒子・赤橙色ローム粒子を混入する暗褐色土の單一層である。

出土遺物は縄文土器2個で、南側寄りの底面上8cmのレベルから深鉢形土器の大形片が出土している。



第五七図 第三九号（右）・第四〇号（左） 土壤実測図、遺物出土状態図

第四一號土壤（第五八図）

本土壤はG～H～9～10に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、長径235cm、短径223cmを測る。

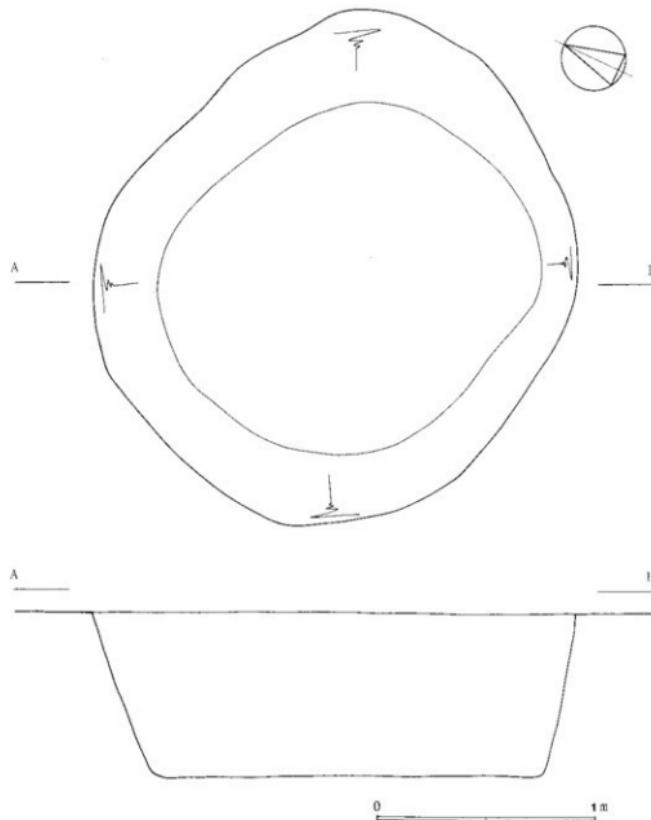
壁は内側へ斜めに掘り込まれており、壁面に崩落の形跡は認められない。

深さは75cmで底面は平坦である。底面は硬く踏み固められている。

底面の形状も不整円形で、長径175cm、短径160cmである。

埋没土の性状は、黒色土が主体でローム粒子を混入する暗褐色土の單一層である。層序区分線を入れなければならないような性状の変化は認められない。

出土遺物はない。縄文時代中期の土壤である。



第五八図 第四一號土壤実測図

第四二号土壤（第五九図）

本土塙はE-9に位置する。

開口部の平面形は円形を呈する。径190cmである。底面も円形で径160cmである。

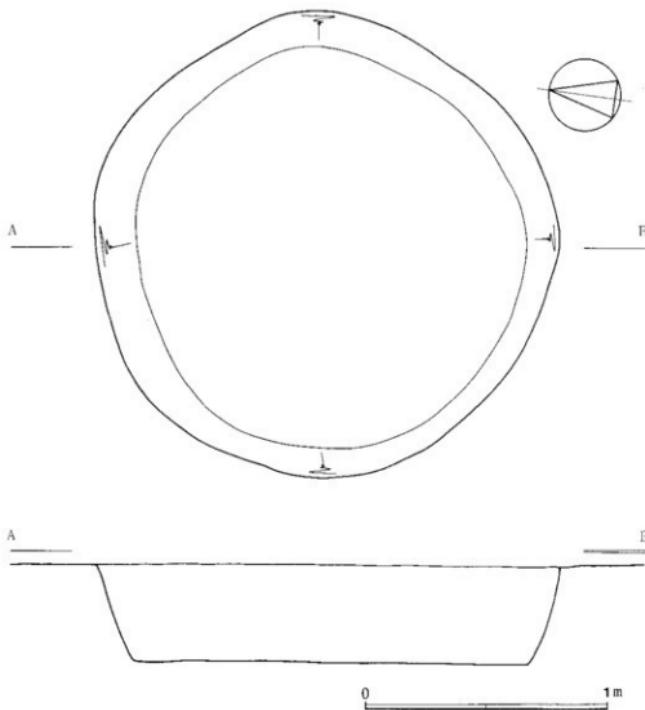
壁は斜めに掘り込まれており、壁面に崩落の痕跡は認められない。

深さは40cmで底面は平坦である。ロームを硬く踏み固めている。

埋没土の性状は、黒色土にローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

遺物の出土は皆無である。

出土遺物はないが縄文時代中期の土壤であろう。



第五九図 第四二号土壤実測図

第四三号土壤（第六〇図）

本土壤はF～G-13～14に位置する。遺存状態は良好である。

開口部の平面形はほぼ円形を呈する。径205×190cm。

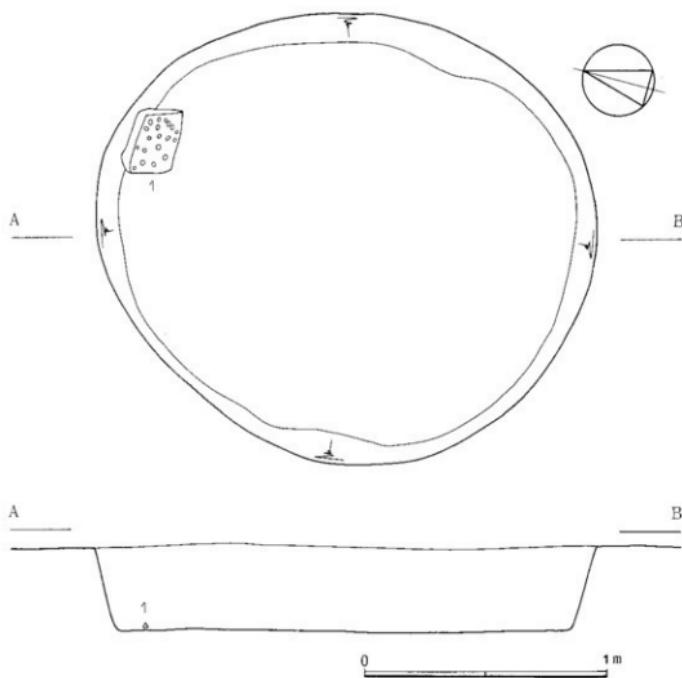
掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、壁面は堅固で崩落はない。

深さは35cmで、底面形は不整円形である。底面は硬い。

埋没土は暗褐色土の單一層である。

北側壁際の底面上から凹石1個が出土した。

縄文時代中期の土壤である。



第六〇図 第四三号土壤実測図、遺物出土状態図

第七章 石組炉址の調査

第一次調査A地区から屋外石組炉址2基を確認した。

屋外に炉址があるということは、家族単位（住居址）で食事をしたのではなく、集団全員が一つの食卓を囲んだものであろうと考えられている。

縄文時代の調理方法は大別して二通り、すなわち生で食べる方法と煮たり焼いたりする火を用いる方法が基本であったと考えられる。

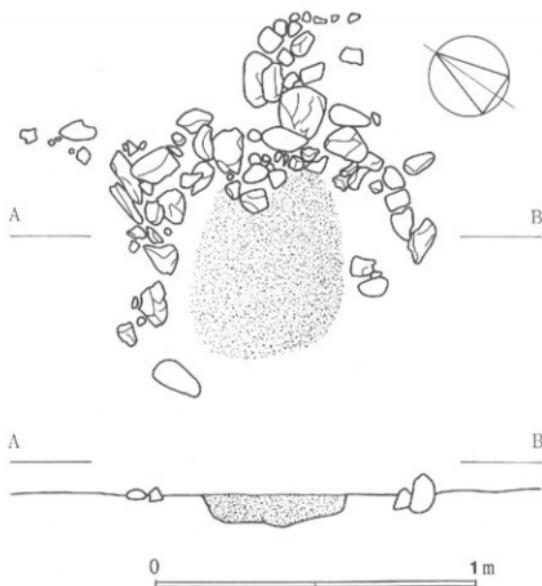
早期や前期の遺跡でみられる集石炉は、土器で煮炊きをするための炉ではなく、焼石を用いて蒸し焼きにするための調理施設であったと考えられる。

焼石を用いる調理法は、地面に凹みを設けて焼石を置き、その上に食物をのせ、さらに焼石を積み上げる方法（アース・オーブン）と、土器が出現する以前には木製あるいは皮製の容器に焼石を投げこみ、中の食物を煮る方法（ストーム・ポイリング）がある。（岡本東三による）

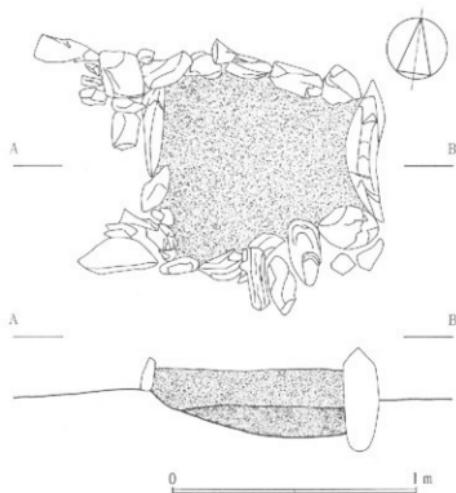
しかし、本遺跡の場合は中期の石組炉址（石囲炉址）で土器を使用した炉址である。

1 第一号石組炉址（第六一図）

本址はG-9～10に位置する屋外石組炉址である。



第六一図 第一号石組炉址実測図



第六二図 第二号石組炉址実測図

主軸線はN-55°-Eを指向しており、燃焼部を含めた全体の平面形は円形を呈する。

燃焼部を囲むように半円形状に角礫と円礫を用いて構築している。径は100cmである。

燃焼部は確認面から10cmほど掘り窪めて形成し、長さ55cm、幅45cmである。

燃焼部には、多量の焼土粒子を主体とする赤褐色土が充满しており、層の厚さは10cmを測る。

石以外の出土遺物はない。

前期後業乃至中期初頭頃の遺構のように思われる。

2 第二号石組（石圓）炉址（第六二図）

本址はJ-11~12に位置する屋外の石組（石圓）炉址である。

主軸線の方向はN-83°-Eを指向し、全体の平面形は東西に長い長方形を呈する。

構造は燃焼部を囲むようにして、円礫と角礫を利用して長方形に構築している。

各辺の長さは東80cm、西90cm、南と北は120cmである。

石組内側の燃焼部は確認面を最深部で18cmほど掘り窪めて形成し、その規模は東45cm、西70cm、南と北は80cmを測り、燃焼部の平面形は台形を呈する。

燃焼の埋没土は2層に区分される。

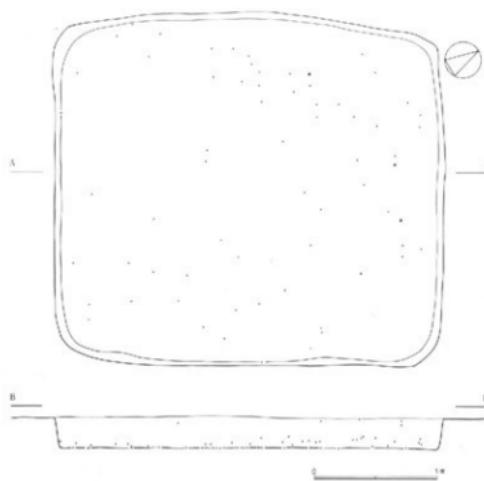
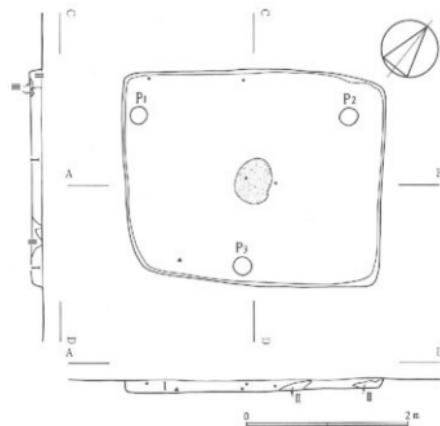
Iは焼土粒子を主体とした赤褐色土で層の厚さは15cm、IIは赤変硬化した焼土層で、層の厚さは12cmである。

石以外の出土遺物は皆無である。

前期後業から中期初頭頃にかけての遺構ではないかと考えられる。

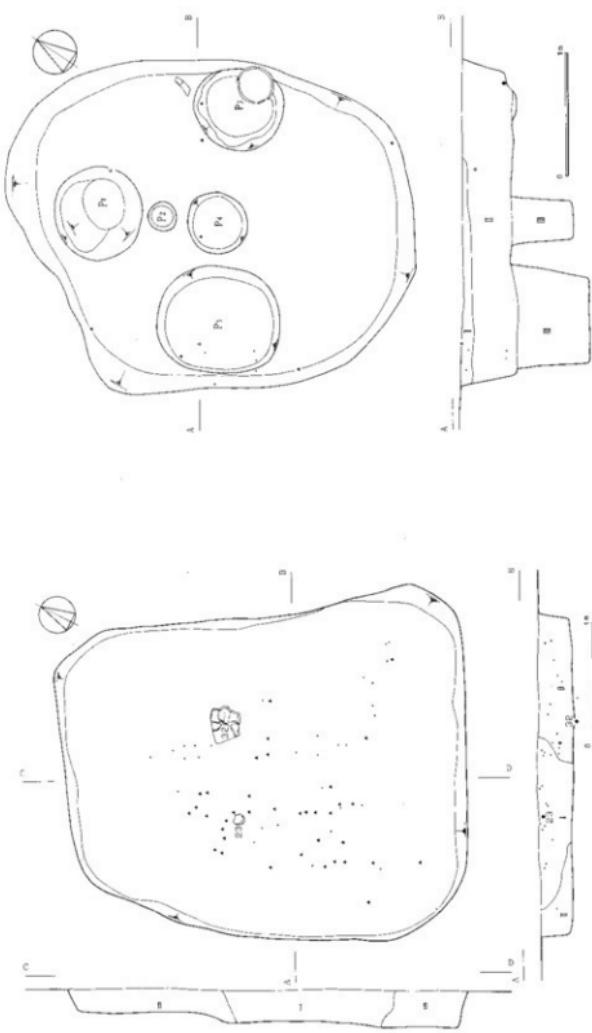
第二次調査 B地区の遺構

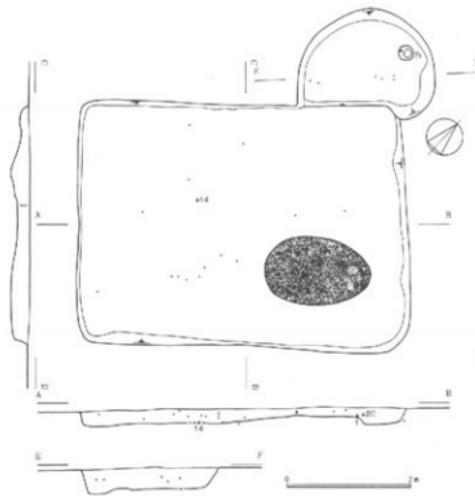
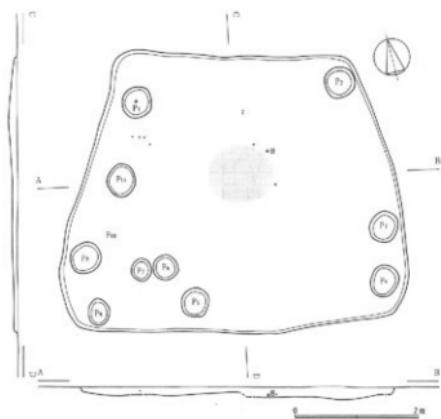
第八章 竪穴住居址実測図



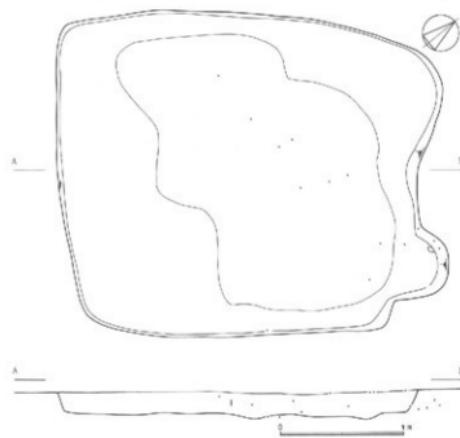
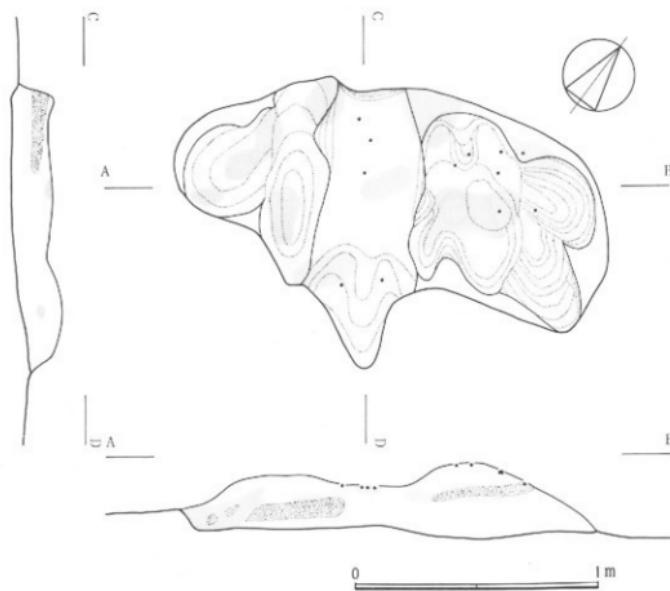
第六三図 第一号住居址実測図、遺物出土状態図（上）
第二号住居址実測図、遺物出土状態図（下）

第六四图 第三号住居址实测图，遗物出土状態圖（左）
第五号住居址实测图，遗物出土状態圖（右）

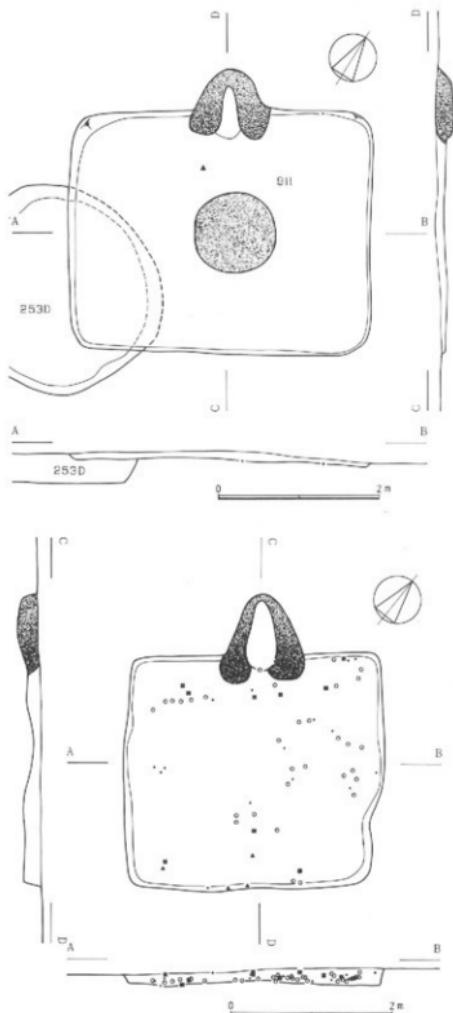




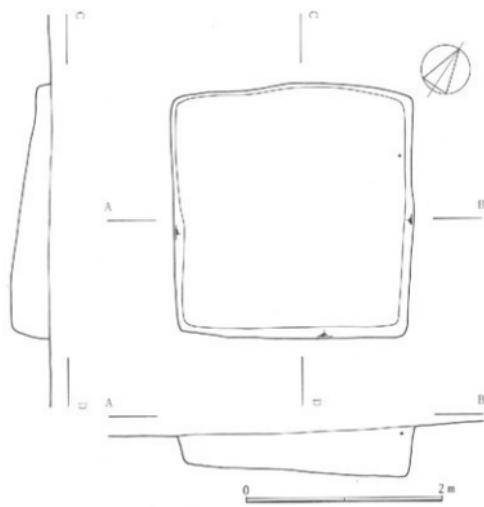
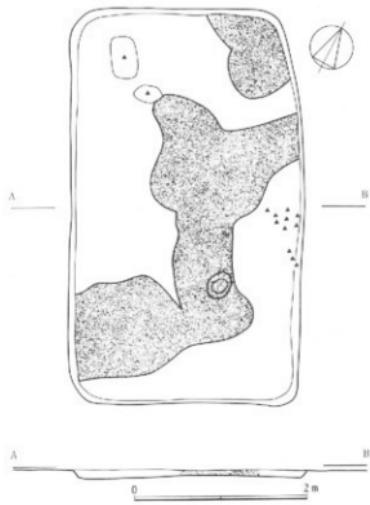
第六五圖 第六號住居址實測圖，遺物出土狀態圖（上）
第七號住居址實測圖，遺物出土狀態圖（下）



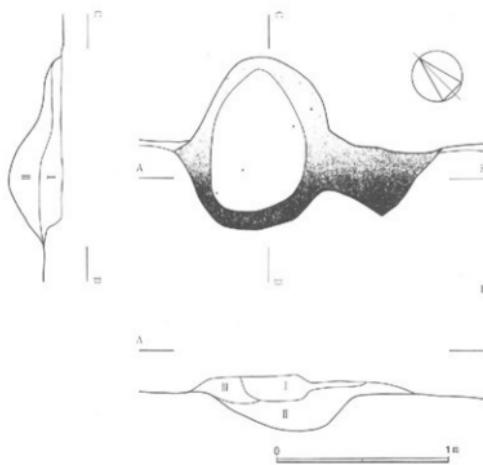
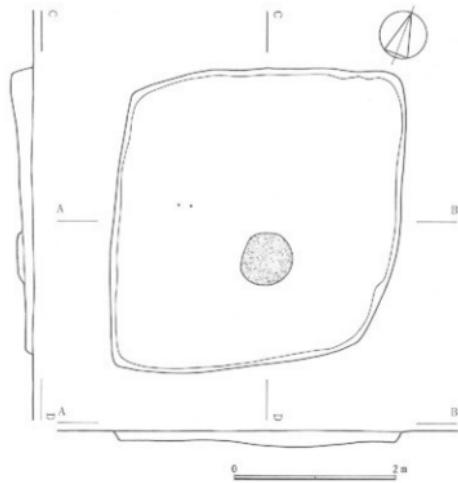
第六六図 第七号住居址焼土塊実測図（上）
第八号住居址実測図、遺物出土状態図（下）



第六七図 第九号住居址実測図、遺物出土状態図（上）
第一〇号住居址実測図、遺物出土状態図（下）

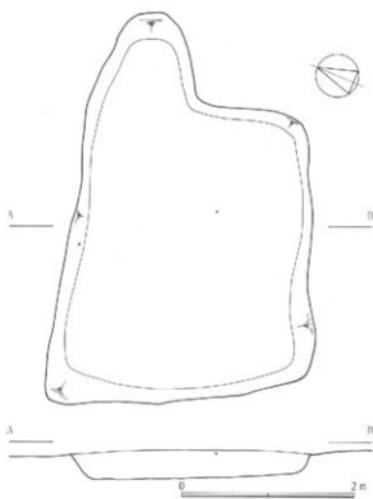
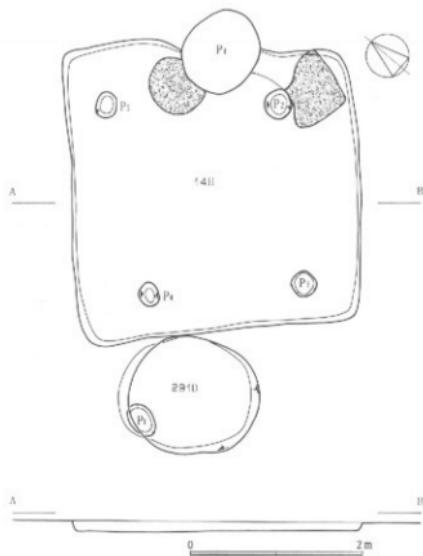


第六八圖 第一號住居址測量圖，遺物出土狀態圖（上）
第一二號住居址測量圖，遺物出土狀態圖（下）

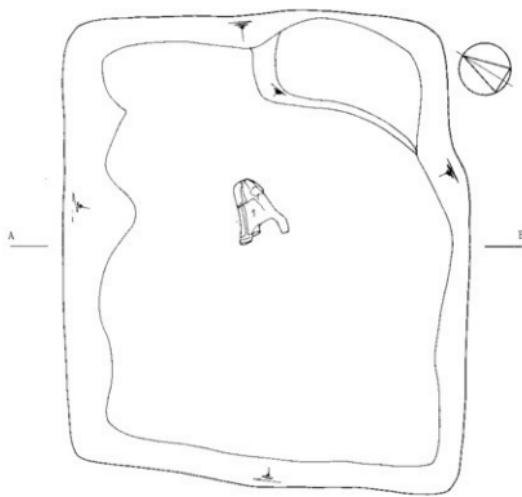
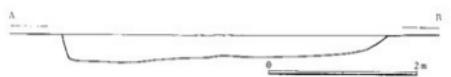
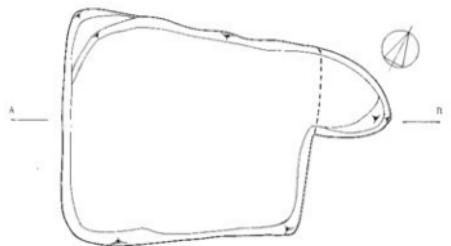


第六九図 第一三号住居址実測図（上）

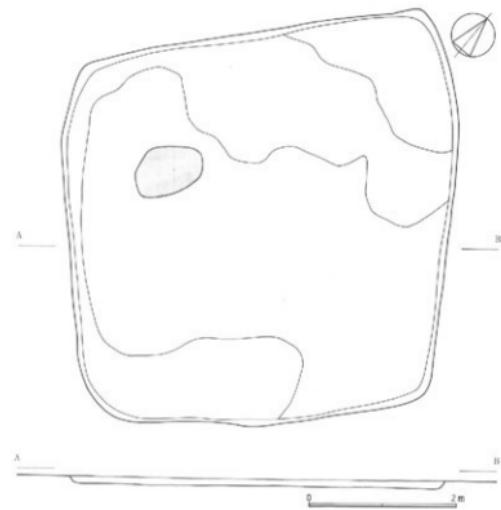
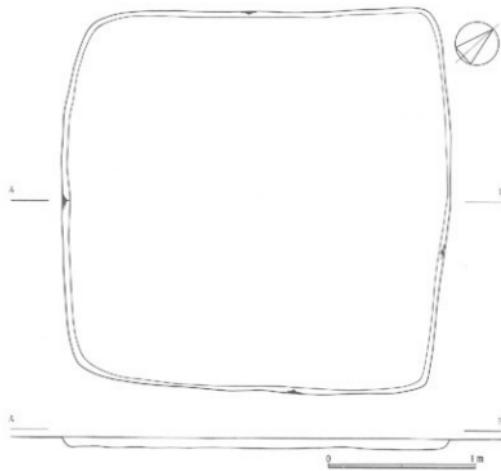
第一四号住居址カマド実測図（下）



第七〇圖 第一四號住居址實測圖，第二九一號土壤實測圖（上）
第一五號住居址實測圖，遺物出土狀態圖（下）

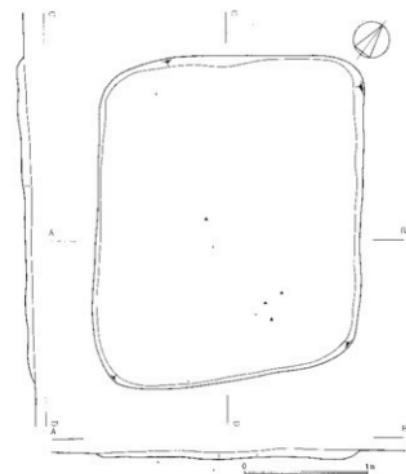
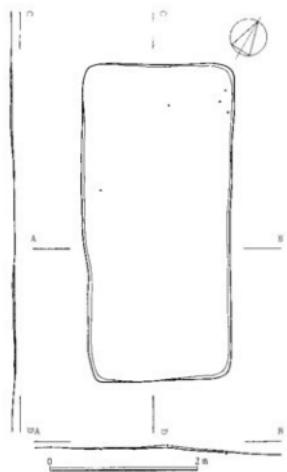


第七一図 第一六号住居址実測図（上）
第一七号住居址実測図、遺物出土状態図（下）

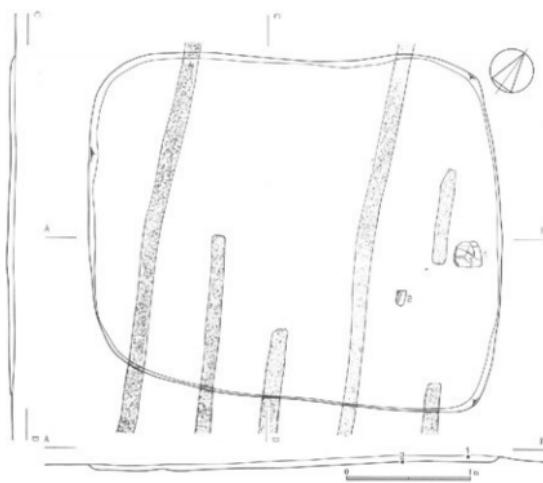
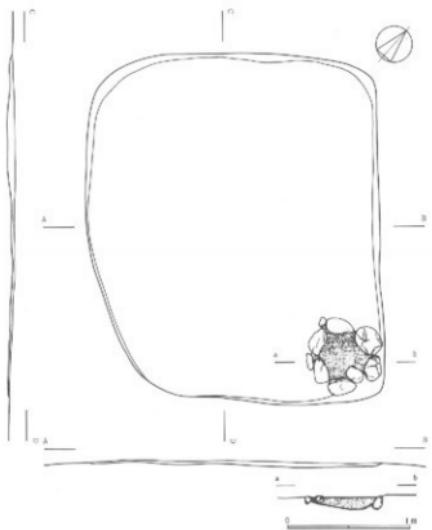


第七二図 第一八号住居址実測図（上）
第一九号住居址実測図（下）

第九章 平地式住居址実測図

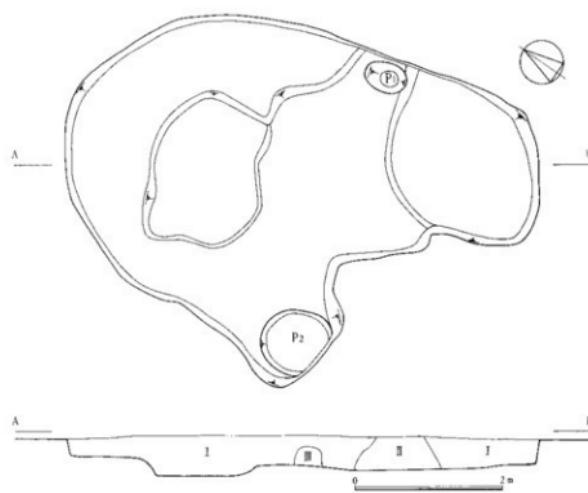
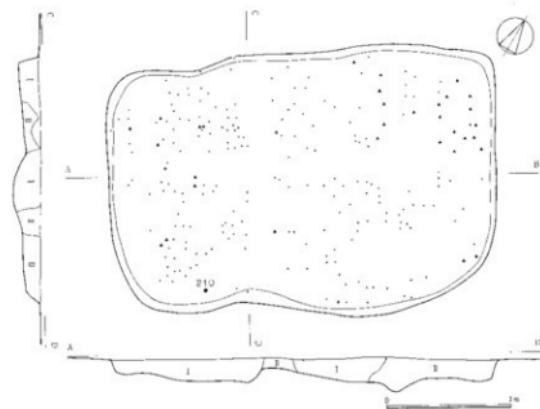


第七三図 第一号平地式住居址実測図（上）
第二号平地式住居址実測図（下）



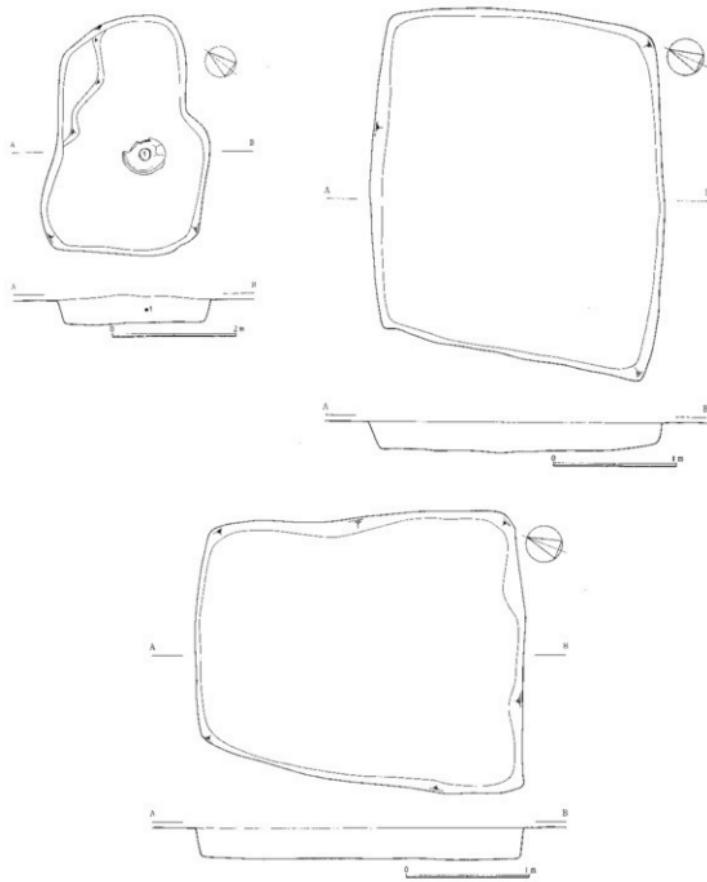
第七四圖 第三號平地式住居址實測圖（上）
第四號平地式住居址實測圖，遺物出土狀態圖（下）

第一〇章 横穴状遺構・石組炉址・溝状遺構実測図

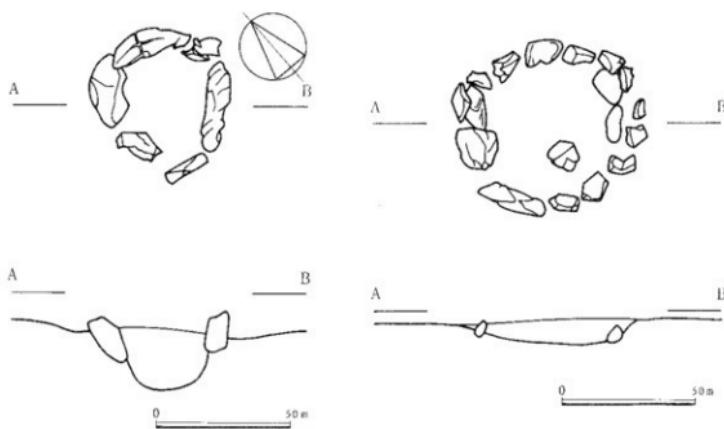
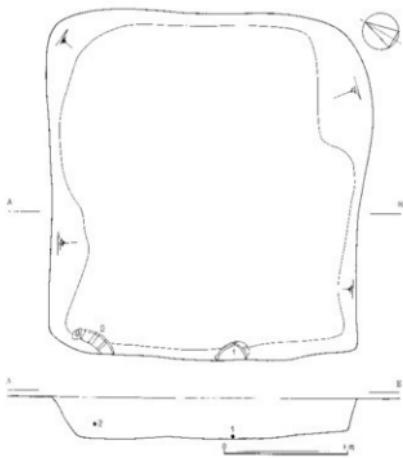


第七五図 第一号横穴状遺構実測図、遺物出土状態図（上）

第三号横穴状遺構実測図（下）



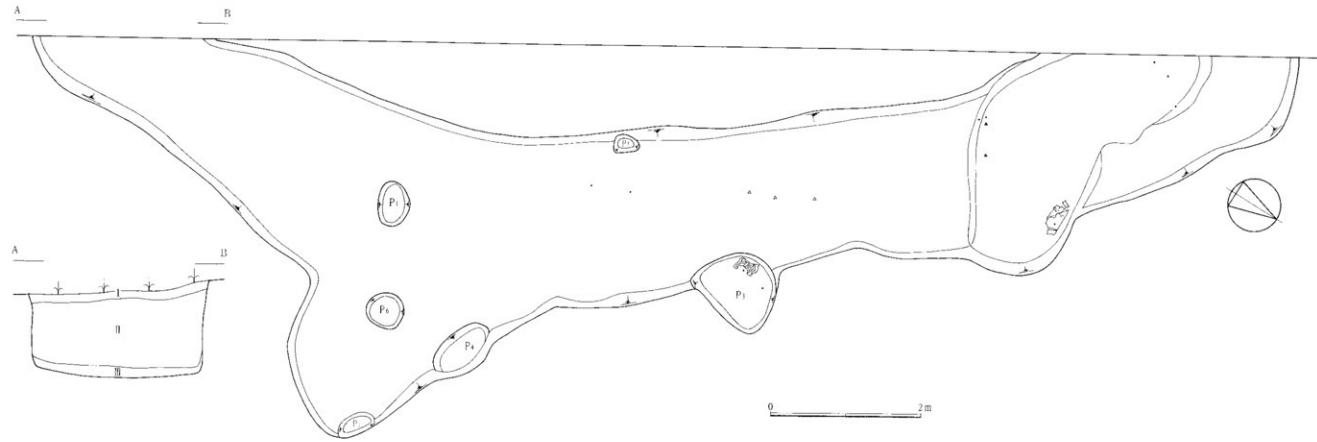
第七六圖 第四號竪穴狀遺構實測圖，遺物出土狀態圖（左上）
 第五號竪穴狀遺構實測圖（右上）
 第六號竪穴狀遺構實測圖（下）



第七七図 第七号竪穴状遺構実測図、遺物出土状態図（上）

第一号石圓炉址実測図（左下）

第二号石圓炉址実測図（右下）



第七八図 第二号溝状遺構実測図、遺物出土状態図

第一一章 土 壤 の 調 査

第二次調査では358基の土壌を調査することができた。

第一次調査と同様に主要遺物の大部分は土壌から出土している。

358基すべての土壌について記述することは紙数の関係で困難なので、本章では遺物の出土した182基の土壌について記述し、遺物の出土しない土壌については実測図にまとめるにした。

1 第一号土壌（第七九図）

本土壌はK-2~3に位置する。

平面形状はほぼ円形を呈し、径250×235cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、深さは20~24cmで周壁に崩落の痕跡はない。

底面はおむね平坦であるが、踏み固めた硬さはない。

底面から10個のピットを確認したが、規模はさまざまで大は径45×30cm、深さ40cm。小は径9×7cm、深さ10cmまであり、その性格は判然としない。

埋没土の性状は、黒色土がベースでローム粒子とローム小ブロックを混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物総数は17個で、内訳は縄文土器片15個、自然石2個となる。

平面分布状態はきわめて疎らで、垂直分布の在り方は上層と中層に多い。

加曾利E II式の土器片で縄文時代中期の土壌であろう。

2 第二号土壌（第八〇図）

本土壌はJ-K-2~3に位置する。東側は第三号土壌と重複切合っている。

平面プランの原形は楕円形を呈していたものと思われる。現存規模は長軸190cm、短軸115cmである。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、深さは10~15cmで周壁は硬い。

底面はほぼ平坦であるが硬さはない。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

出土遺物総数は28個で、内訳は縄文土器片26個、自然石2個となる。

出土状態には特に変った傾向はなく、加曾利E II式土器片と阿玉台式土器片が混在する。

縄文時代中期の土壌である。

3 第三号土壌（第八〇図）

本土壌はJ-K-2~3に位置する。西側は第二号土壌と重複切合している。

平面プランは不整形形を呈する。東壁180cm、西壁150cm、南壁200cm、北壁180cmの辺長を測り、面積約3.1m²ほどであろう。

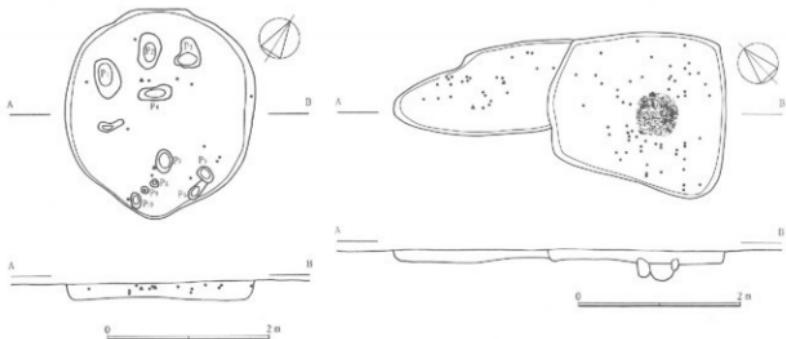
掘り方は内側へ斜めに掘り下げており、深さは15cmである。壁面は堅固ではないが崩落は認められない。

底面はおむね平坦であるが、踏み固めた痕跡は認められない。

埋没土の性状は、黒色土がベースでローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物総数は65個で、内訳は縄文土器片64個、自然石1個となる。

出土状態を観察すると、全面から万遍なく出土している。



第八〇図 第二号（左）・第三号（右）土壤実測図、遺物出土状態図

第七九図 第一号土壤実測図、遺物出土状態図

出土遺物はすべて細小破片であるが、阿玉台式土器片のようである。

底面の中央よりやや東寄りの位置から石組炉址1基を確認した。この土壤が調理施設であった可能性も否めないが速断は避けたい。縄文時代中期の土壤であろう。

4 第四号土壤（第八一図）

本土壤はK～L-3に位置する。

開口部の平面形はほぼ円形を呈し径215×200cm。

掘り方は、開口部より垂直気味に20cmほど掘り下げた後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

深さは82cmを測り、底面は平坦でロームを踏み固めている。

底面形もおむね円形で235×220cmである。

埋没土の性状は2層に区分することができる。

Iは黒色土を主体としてローム粒子を混入する暗褐色土、IIはローム粒子を多量に混入する褐色土である。

出土遺物総数は56個すべて縄文土器片である。

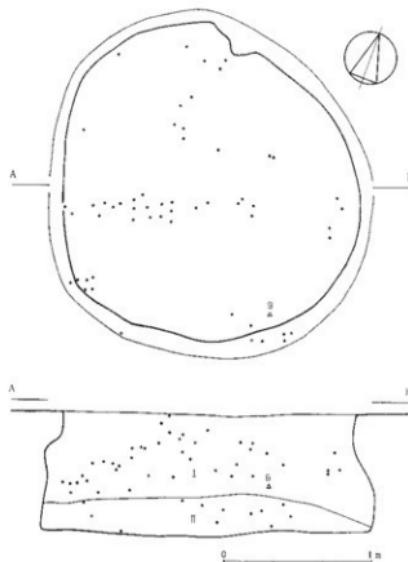
平面分布状態はA-Bセクションに沿った南側に帯状の濃密な分布がみられるものの、概して部分的に小さなまとまりで全体的には空白部が多い。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、下層から上層まで分布しているが、ピラミッド状の出土状態は、埋戻しと同時に投棄されたことを物語るものであろう。

出土土器は加曾利E式と阿玉台式の仲間であり、縄文時代中期の土壤であろう。

5 第五号土壤（第八二図）

本土壤はJ-3に位置する。



第八一図 第四号土壤実測図、遺物出土状態図

開口部の平面形はほぼ円形を呈し、径90×85cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げているが、東側は深く西側は2段掘り込みになっている。

深さは東側34cm、西側14cmである。

底面に硬さはなく、周壁も脆弱気味である。

埋没土の性状は2層に区分することができる。

Iは黒色土がベースでローム粒子を混入する暗褐色土、IIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に混入する明褐色土である。

出土遺物はわずかに5個すべて縄文土器片である。

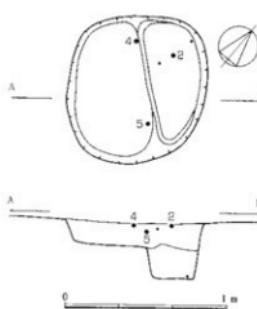
平面分布状態は空白部の多いきわめて疎らな出土状態である。

断面図に投影した垂直分布の在り方は1個が底面直上で、他は確認面直下の上層部である。縄文時代中期の土壤であろう。

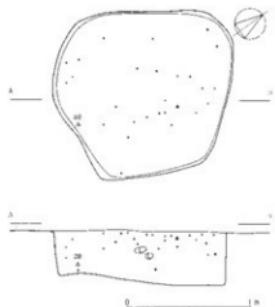
6 第六号土壤（第八三図）

本土壤はI～J-3に位置する。

平面形は不整形を呈する。長軸144cm、短軸135cm。



第八二図 第五号土壤実測図、遺物出土状態図



第八三図 第六号土壤実測図、遺物出土状態図

掘り方は内側へやや斜めに掘り下げ、深さは36~42cmで、南側が浅く北側が深い。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

底面は南高北低の傾斜を示すが際立った凹凸はない。

また、踏み固めたような形跡もみられない。

埋没土の性状は黒色土をベースにローム粒子やローム小ブロックを混入する暗褐色土の單一層で、中層部にはローム中ブロックが点在する。

出土遺物数はわずかに6個で、縄文土器片5個と自然石1個である。

平面分布状態を観察すると、きわめて散発的で空白部が多い。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、平面分布と同様に非常にまばらな状態で中層から上層にかけて点在する。
縄文時代中期の土壤であろう。

7 第七号土壤（第八四図）

本土壤はI~J-3~4に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸195cm、短軸155cm、主軸線の方向はN-56°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは25~33cmである。

東側が浅く西側が深いが、東側への緩斜面に位置するため底面は平坦である。

底面は特に踏み固められたような痕跡は認められない。

周壁の崩落はなく比較的堅固である。

埋没土の性状は2層に区分される。

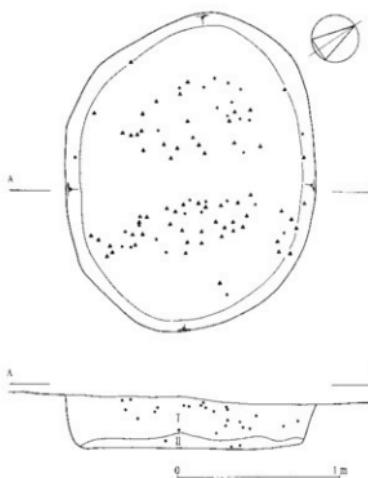
Iは黒色土がベースでローム粒子を混入する暗褐色土。IIはローム粒子を多量に混入する明褐色土である。

遺物の出土総数は92個で、内訳は縄文土器片27個、自然石65個である。

平面分布状態を観察すると、特に変った傾向はなく周壁下に空白部が目立つ程度である。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、下層から上層までの各層に分布している。

自然石の出土量が多いけれどもその性格は不明である。本土壤も縄文時代中期であろう。



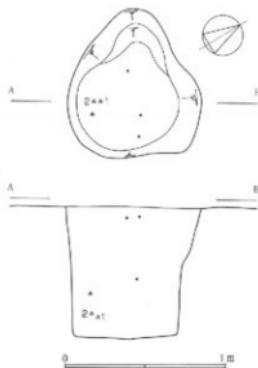
第八四図 第七号土壤実測図、遺物出土状態図

8 第八号土壤（第八五図）

本土壤はJ~K-3~4に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する。

長軸92cm、短軸82cm、主軸線方向はN-58°-W。



第八五図 第八号土壤実測図、遺物出土状態図

掘り方は内側へやや斜めに円筒状に掘り下げ、深さは82cmである。
壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

底面は平坦で硬く踏み固められている。

埋没土の性状は黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土の単一層で、底面上付近はローム粒子の混入が多くなってやや色調が明るくなるが、きわめて漸移的で区分線は引き難い。

出土遺物はわずかに6個で、内訳は縄文土器片3個、石器2個、自然石1個となる。

出土状態は平面分布・垂直分布ともにきわめて疎らな出土状態で、特に変った傾向は指摘できない。

石器の2個は凹石である。

縄文時代中期の土壤であろう。

9 第九号土壤（第八六図）

本土壤はL-3に位置する。南側の確認面には4条のトレンチャーフークが走る。

開口部の平面形は橢円形を呈し、長軸320cm、短軸200cm、

主軸線方向はN-0°である。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは中央部で57cmを測る。

壁面は堅固で崩落の痕跡はない。

底面は全体としては深さ45cmの平坦面であるが、中央部は10cmほど掘り窪めている。

西壁中央部に径25×20cm、深さ10cmのピット1個が存在するがその性格は不明である。

また、底面中央部よりやや南寄りの位置に40×35cm、厚さ10cmの粘土塊が存在する。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

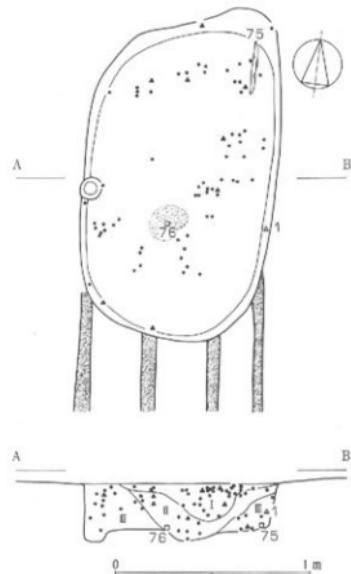
Iは黒色土、IIはローム粒子を混入する黒褐色土、IIIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物総数は76個で、内訳は土器片65個、自然石8個、石器1個、鉄製品2個となる。

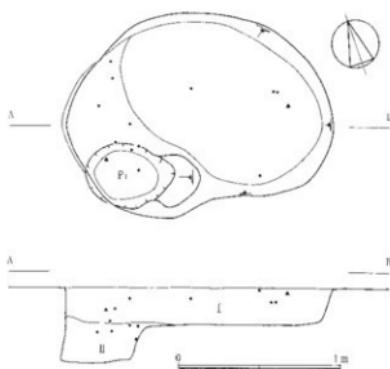
平面分布状態は、空白部はあるものおおむね全面に分布している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面上から確認面直下までの層中にはば間隙なく分布している。

石器は打製石斧、鉄製品は粘土塊の下から鉄錐、北東隅の底面上から刀剣が出土している。



第八六図 第九号土壤実測図、遺物出土状態図



第八七図 第一〇号土壤実測図、遺物出土状態図

出土遺物の平面分布状態は、きわめて散発的でまばらに散在する。

断面図に投影した垂直分布の在り方を観察すると、空白の目立つ点在的な出土状態である。

11 第一一号土壤（第八八図）

本土壤はJ～K-3～4に位置する。

開口部の平面形はほぼ円形を呈し、径135×130cm。

掘り方は開口部よりほぼ垂直に25cmほど掘り下げた後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

東側の掘り込みに不自然な形跡がみられるが、崩落痕は認められず壁面は堅固である。

深さは110cmを測り、底面は鹿沼層に達しているが、底面径250×250cmの円形を呈する底面の中央部は硬く踏み固められており、東側以外は平坦である。

埋没土の性状は、黒色土・ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼粒子の混合土で、性状に変化は認められずおそらく短時日に埋め戻されたものであろう。

出土遺物はわずかに16個で、縄文土器15個と石器1個である。

出土遺物の平面分布はまことに散発的で、強いて言及すれば南北中心線の西側に偏在する傾向がみられる。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、底面上から上層までの間にきわめてまばらに点在している。

北西隅から小形深鉢形土器が出土している。縄文時代中期の袋状土壤である。

12 第一二号土壤（第八九図）

本土壤はI～J-3～4に位置する。

長軸210cm、短軸165cm、主軸線の方向はN-68°-Wを指向する。

開口部の平面形はおむね楕円形を呈する。

掘り方は開口部から内側へ斜めに掘り下げ、深さは30cm。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

10 第一〇号土壤（第八七図）

本土壤はJ～K-4～5に位置する。

開口部の平面形は不整椭円形を呈する。

長軸170cm、短軸120cm、主軸線方向N-119°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ22cm。

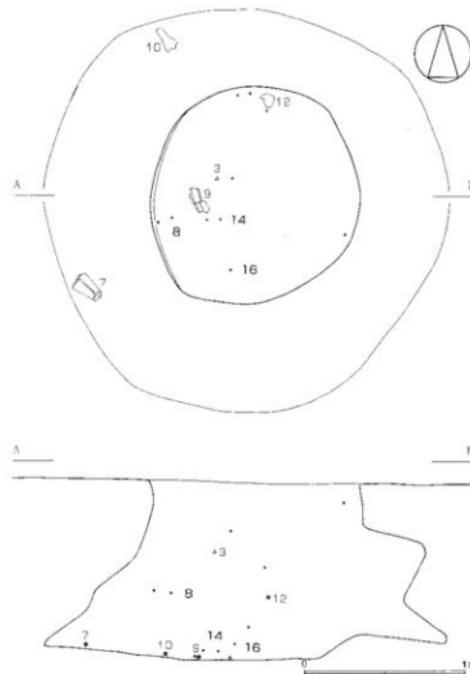
壁面は堅固で崩落の痕跡はない。

底面は硬く平坦であるが、南西部に径55×40cm、深さ76cmのピットが存在する。

埋没土の性状は2層に区分できる。

Iは黒色土がベースで少量のローム粒子を混入する黒褐色土。IIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物総数は14個で、内訳は土器片12個、自然石2個となる。



第八八図 第一號土壤実測図、遺物出土状態図

底面形も梢円形を呈し、平坦で硬い。

北側に径70×70cm、深さ20cmのピットが存在する。

埋没土の性状は黒色土をベースにローム粒子と5×5mm程度のロームブロックを混入する暗褐色土の単一層で固く縮っている。

出土遺物数は16個で、土器片10個、自然石6個となる。

平面分布も垂直分布状態もまばらである。

13 第一三号土壤（第九〇図）

本土壙はI-3に位置する。

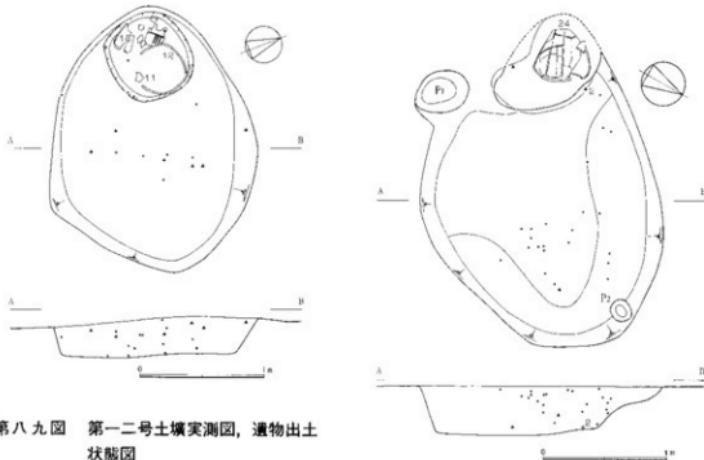
南西部の一部は区域外に埋没しているので想定ではあるが、開口部の平面形は梢円形を呈するであろう。

掘り方は内側へゆるく傾斜しながら掘り下げ、深さは中央部で40cmである。

壁面は脆弱味で壁面にも硬さはない。埋没土は暗褐色土の単一層である。

出土遺物総数は25個で、繩文土器片22個、石器（打製石斧）1個、自然石2個である。

平面分布も垂直分布もまばらで、A-Bセクションの北側に偏在する。



第八九図 第一二号土壤実測図、遺物出土状態図

14 第一四号土壤（第九一図）

本土壇はI-4に位置する。

開口部の平面形は不整橢円形を呈する。

長軸210cm、短軸170cm、主軸線方向N-121°-W。

掘り方は南側はフラスコ状に、北側は内側へ斜めに掘り下げ、深さ35cm。中央部付近は18cm。

壁面は堅固で崩落の痕跡はない。

底面は不整橢円形で、南壁際に径11×11cm、深さ16cmの小ピットが存在する。

底面は中央部が高く起状する。

埋没土の性状は4層に区分される。

Iは黒色土、IIは黒色土がベースでローム粒子を混入し、ロームブロックも点在する黒褐色土で固く締っている。

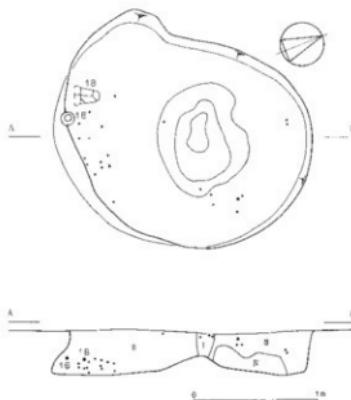
IIIは暗褐色土、IVはロームを主体とする明褐色土である。

出土遺物数は25個で、内訳は縄文土器23個、自然石2個となる。

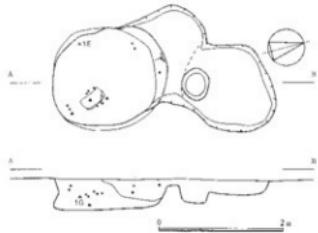
平面分布状態はまばらであるが、南壁際に小さなまとまりをみせており、深鉢形土器が出土している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は平面分布と同様に、第九一図 第一四号土壤実測図、遺物出土状態図

縄文時代中期の土壤である。



15 第一五号土壤 (第九二図)



第九二図 第一五号土壤実測図、遺物出土状態図

本土壤はH-I-4~5に位置する。

平面プラン確認時に1基の土壤として取扱うことにしたが、完掘の結果2基の土壤の切り合いであることが判明した。南側をA、北側をBとして調査した。

Aの平面形は円形を呈し、径180×170cm、深さは50cm。

Bの平面形は推定椭円形を呈し、長軸160cm、短軸140cm。

Aの掘り方は南側はややフラスコ状に、北側は内側へ掘り下げ、深さは50cm。Bは23cmの深さであるが出土遺物がないので詳述は省略する。

壁面に堅牢さはないが崩落は認められない。

埋没土の性状は2層に区分される。

Iは黒色土をベースにローム粒子を混入する暗褐色土、IIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に混入する褐色土である。

出土遺物数は14個で、その内訳は縄文土器片10個、石器（四石）1個、自然石3個となる。

平面分布・垂直分布ともに疎らな出土状態である。縄文時代中期の土壤であろう。

16 第一六号土壤 (第九三図)

本土壤はI~J-4~5に位置する。

4基が重複しているが、遺物の出土した1基のみの記述とする。

開口部の平面形はおおむね円形を呈する。

径170×155cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ25cm。

切り合ひ部を除く壁面は比較的堅固である。

底面は平坦であるが硬さはない。

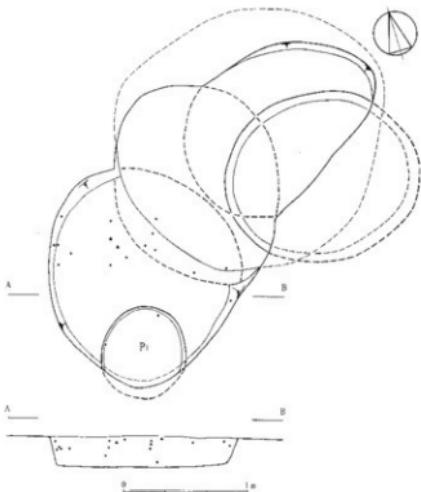
南側に径70×70cm、深さ90cmの円筒状のピットが存在する。

埋没土の性状は黒色土・ローム粒子・ローム小ブロックの均等な混合の褐色土の単一層である。

出土遺物数は19個で、その内訳は縄文土器片17個、自然石2個となる。

平面分布の状態は空白部が目立つ疎らな分布で、垂直分布では上層部にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。

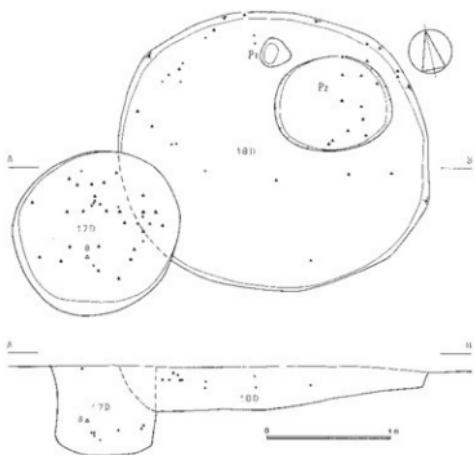


第九三図 第一六号土壤実測図、遺物出土状態図

17 第一七号土壤 (第九四図)

本土壤はI~J-5に位置する。東側は第一八号土壤と切合っている。

開口部の平面形は円形を呈し、径135×135cm。



第九四図 第一七号（左）・第十八号（右）土壤実測図、遺物出土状態図

230cm。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、東側13cm、西側36cmである。したがって東側が浅く西側が深い。底面は傾斜起伏がみられる。

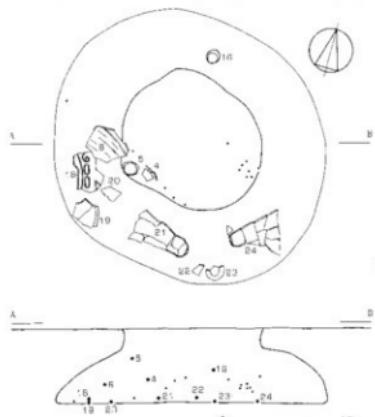
2個のピットが存在し、P₁は径25×22cm、深さ20cm。P₂は径95×75cm、深さ78cm。土壌底面より50cm下位に厚さ20cmの鹿沼層がローム層の間に介在する。

埋没土の性状は黒色土を主体としてローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は34個で、土器片11個、自然石23個となる。

平面分布状態はA-Bセクションの北側に集中し、垂直分布状態は中層より上位に散在している。

縄文時代中期の土壌であろう。



第九五図 第十九号土壤実測図、遺物出土状態図

出土遺物数は24個すべて縄文土器である。

平面分布状態はA-Bセクションの南側に集中し、垂直分布状態は底面上から中層までにまとまっている。底面上からは深鉢形土器・浅鉢形土器が出土しており、縄文時代中期の袋状土壌である。

掘り方はほぼ円錐状に掘り下げ、深さ73cm。壁面は堅固で崩落の痕跡はない。

底面は皿状を呈し硬い。鹿沼層に達している。

埋没土の性状は黒色土がベースでローム粒子が均一に混入する暗褐色土の単一層である。

短時に埋戻されたものであろう。

出土遺物数は35個で、縄文土器片が8個、他は自然石である。

土器片の平面分布状態はきわめて疎らである。

垂直分布の在り方は下層に集中している。

自然石はすべて底面上からの出土である。

縄文時代中期の土壌であろう。

18 第一八号土壤（第九四図）

本土壌はI-J-5に位置する。

西側の一部は第一七号土壤と重複しているがさしたる影響はない。

開口部の平面形は円形を呈し、径250×

230cm。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、東側13cm、西側36cmである。したがって東側が浅く西側が深い。底面は傾斜起伏がみられる。

2個のピットが存在し、P₁は径25×22cm、深さ20cm。P₂は径95×75cm、深さ78cm。土壌底面より50cm下位に厚さ20cmの鹿沼層がローム層の間に介在する。

埋没土の性状は黒色土を主体としてローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は34個で、土器片11個、自然石23個となる。

平面分布状態はA-Bセクションの北側に集中し、垂直分布状態は中層より上位に散在している。

縄文時代中期の土壌であろう。

19 第十九号土壤（第九五図）

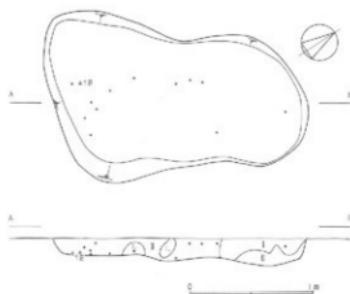
本土壌はI-J-5-6に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径115×115cm。

掘り方は開口部より内側へやや斜めに15cmほど掘り下げた後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。底面形も円形で径220×220cm。深さ60cm。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められず、底面は全く平坦で硬く締っている。埋没土は黒褐色土の単一層である。

20 第二〇号土壤 (第九六図)



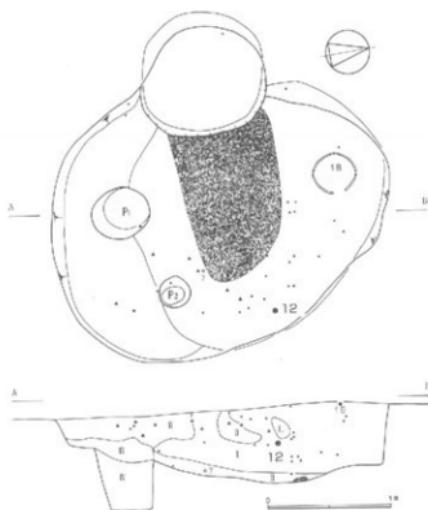
第九六図 第二〇号土壤実測図、遺物出土状態図

個である。

出土遺物の平面分布状態は、きわめて散発的であり、断面図に投影した垂直分布の在り方は、まばらではあるが各層に散在している。

縄文時代中期の土壤と思われる。

21 第二一号土壤 (第九七図)



第九七図 第二一号土壤実測図、遺物出土状態図

本土壤はI-5~6に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈する。

長軸270cm、短軸220cm、主軸線方向N-0°。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは北側で50cm、南側で22cm。

壁面は堅固である。

底面は南側が浅く北側が深く断面は皿状を呈する。底面に硬さはなく起伏がある。

中央部は鹿沼層が露出している。

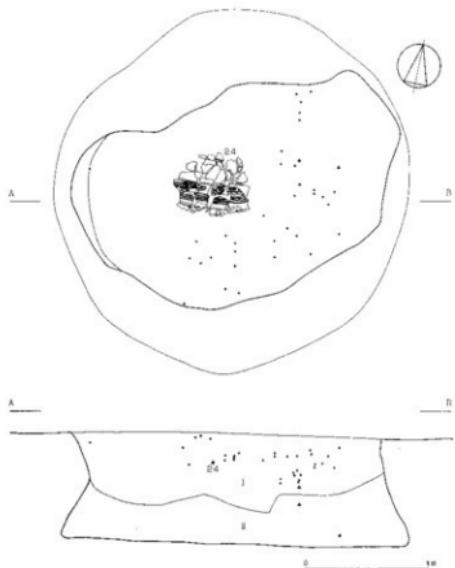
ピットが3個存在し、P₁径45×40cm、深さ77cm、P₂径25×25cm、深さ105cm、P₃は確認面からの掘り込みで径100×100cm、深さ40cm。

埋没土の性状は4層に区分される。

I 黒褐色土、II 暗褐色土、III 棕色土、IV 明褐色土。

出土遺物数は32個で、内訳は縄文土器片22個、石器凹石1個、自然石9個となる。

出土状態は平面・垂直ともにまばらに散在する。縄文時代中期の土壤であろう。



第九八図 第二二号土壤実測図、遺物出土状態図

22 第二二号土壤 (第九八図)

本土壙は J - 5 ~ 6 に位置する。

開口部の平面形は不整橢円形を呈する。

長軸 270cm, 短軸 160cm, 主軸線方向 N - 65° - E を指向する。

掘り方は 30cm 程内側へ斜めに掘り下げた後、 フラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で底面は平坦である。深さ 90cm, 底面は円形を呈し径 290 × 285cm。

埋没土の性状は 2 層に区分される。

I は黒色土, II はローム粒子を多量に混入する褐色土である。

出土遺物数は 37 個で、内訳は縄文土器 35 個、自然石 2 個となる。

平面分布状態は中央部より東側の開口部範囲内にまとまっている。垂直分布の在り方は I の黒色土層中に集中している。中央部の底面上 65cm から大木系の深鉢形土器が出土した。

縄文時代中期の袋状土壤である。

23 第二五号土壤 (第九九図)

本土壙は I ~ J - 5 ~ 6 に位置する。

開口部の平面形はほぼ橢円形を呈する。径 100 × 90cm。

掘り方は開口部より内側へ 10cm ほど斜めに掘り下げて、径 90 × 80cm の頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

底面は円形を呈し、径 160 × 150cm。平坦で硬く踏み固められている。深さは 70cm を測る。

埋没土の性状は、黒褐色土の單一層で、底面付近にはローム粒子・ローム小ブロックの混入が多くなるが、きわめて漸移的で区分線を引くほどの明確な層序変化ではない。

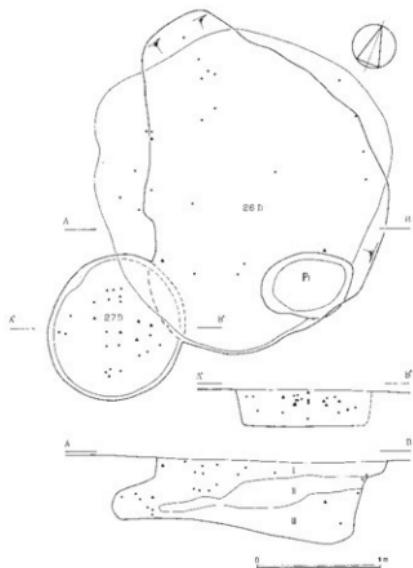
出土遺物数はわずかに 8 個で、内訳は縄文土器片 5 個、自然石 3 個

第九九図 第二五号土壤実測図、遺物となる。

出土状態図

出土遺物の平面分布状態は、中央部にのみまとまっている。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、中央部の中層から上層へかけてのごく限られた部分から出土している。縄文時代中期の袋状土壤である。



第一〇〇図 第二六号（上）・第二七号（下）土壤実測図、遺物出土状態図

小ブロックを多量に混入する褐色土である。

出土遺物数は25個で、その内訳は繩文土器片22個、自然石3個となる。出土遺物の平面分布状態は全面からきわめて疎らに出土し、垂直分布の在り方はIの黒色土層の下層から上層まで散在している。

縄文時代中期の土壤であろう。

25 第二七号土壤（第一〇〇図）

本土壤はI～J-6に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径120×110cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ30cm。

重複部分以外の壁面には崩落の痕跡はない。

底面も径110×100cmの円形を呈し、硬さはないが平坦である。

埋没土は暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は27個で、内訳は土器片22個、自然石5個となる。

平面分布状態は、壁際が少なく中央寄りにまとまっている。

垂直分布の在り方は底面上は出土しないが、層全体に分布している。縄文時代中期の土壤であろう。

26 第二九号土壤（第一〇一図）

本土壤はI～J-6～7に位置する。

24 第二六号土壤（第一〇〇図）

本土壤はI～J-6に位置する。

開口部の平面形は不整橢円形に近似する形状を呈する。南側一部は第二七号土壤と重複する。

長軸270cm、短軸190cm、主軸線方向はN-50°-Wを指向する。

掘り方は、東側は内側へ斜めに掘り下げ、西側は15cmほど垂直に掘り下げた後、外側へ膨らむラフスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面はさほど堅固ではないが崩落は認められない。

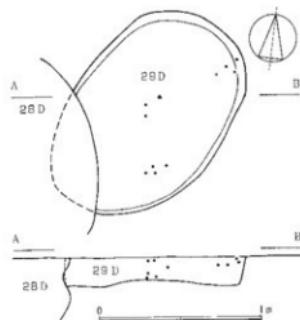
底面は径260×240cmの不整円形を呈し、深さは西側が50cm、東側が65cmで、凹凸起伏はないが緩斜面状を呈する。

南東隅にピット1個が存在する。径70×52cm、深さは13cmである。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは夾雜物のない黒色土で固く締っている。

IIはローム粒子を含む暗褐色土。IIIはローム



第一〇一図 第二九号土壤実測図、遺物出土状態図

開口部の平面形は梢円形を呈する。

長軸140cm、短軸95cm、主軸線方向はN-35°-Eを指向する。

南西側は第二八号土壙と重複している。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは14~18cm。

重複部分以外の壁面には崩落の痕跡は認められない。

底面も梢円形を呈し、硬さはなく若干の起伏がある。

埋没土は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は11個で、内訳は縄文土器片10個、自然石1個となる。

平面分布状態はきわめて散発的で空白部が目立ち、垂直分布の在り方は中央部と東側の層中に散在する。縄文時代中期の土壙であろう。

27 第三〇号土壙（第一〇二図）

本土壙はJ-7に位置する。

確認面に現れた平面プランは1基の細長い土壙として捉えたが、完掘の結果2基の土壙の重複であった。

そのうち1基は袋状土壙で、これをAとし他をBとして調査した。

A土壙 開口部の平面形は円形を呈し、径115×100cm。

掘り方は開口部より内側へ20cmほど掘り下げて円形の頭部を形成した後、

プラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

重複による切り合いは10cmほどで浅いため、壁面に大きな損傷はない、比較的堅固な状態で遺存している。

底面も円形で、径160×150cm。平坦で硬く深さは84cmである。

埋没土の性状は黒色土をベースとしてローム粒子を混入する暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は41個で、その内訳は縄文土器片40個、自然石1個となる。

平面分布状態は、南側半分は皆無で、南側にのみ集中している。

縄文時代中期の袋状土壙である。

B土壙 開口部の平面形は長方形とも梢円形とも表現し難い細長い形状をしている。

長軸450cm、短軸150cm、主軸線方向はN-10°-Wを指向する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは10~22cm。

壁面は脆弱気味である。底面に硬さはなく起伏が多い。

6個のビットが存在する。P₁ 140×110cm。深さ9cm。P₂ 70×70cm。深さ11cm。P₃ 120×90cm。深さ20cm。P₄ 70×30cm。深さ50cm。P₅ 100×55cm。深さ39cm。P₆ 25×18cm。深さ45cm。

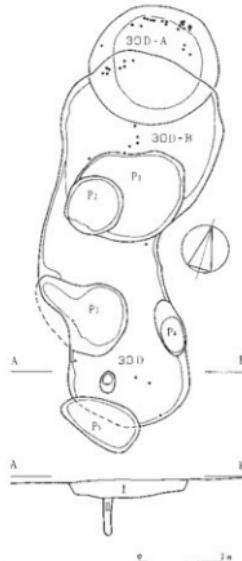
これらのビットの性格は不明である。

埋没土の性状はロームが主体の褐色土である。P₆の埋没土は明褐色土である。

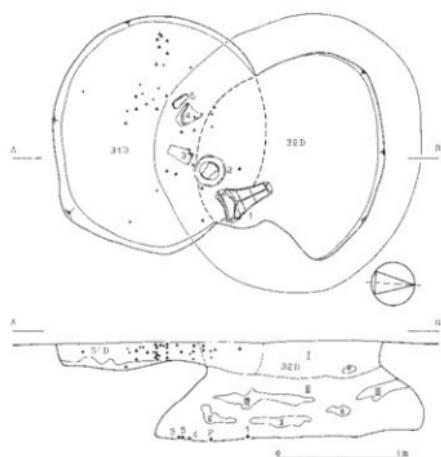
出土遺物数は11個すべて縄文土器片である。

平面分布状態はきわめて散発的で空白部が多い。

A・B两者とも縄文時代中期の土壙であろう。



第一〇二図 第三〇号土壙
実測図、遺物
出土状態図



第一〇三図 第三号（左）・第三二号（右）土壤実測図、遺物出土状態図

28 第三一号土壤（第一〇三図）

本土壤はH-5~6に位置する。

北側は第三二号土壤と重複している。

開口部の平面形は円形を呈し、東西径190cm、南北径170cm（推定）。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは15~20cm。壁面は脆弱で崩れ易く、底面には起伏がある。

埋没土の性状は2層に区分することができる。

Iは黒色土、IIは明褐色土。

出土遺物数は35個で、内訳は縄文土器片13個、自然石22個となる。

平面分布状態はまばらに散在しており空白部が多い。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、特に変った傾向はみられず各層に分布する。

縄文時代中期の土壤であろう。

29 第三二号土壤（第一〇三図）

本土壤はH-I-5~6に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。

南側は第三号土壤と重複する。

東西径165cm、南北径150cm（推定）。

掘り方は開口部より内側へ20cmほど掘り下げて頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

重複部分以外の壁面は堅固で、崩落の痕跡はない。

底面はほぼ円形を呈し、径225×220cm。おおむね平坦で硬く縮っている。深さ80cm。

埋没土の性状は3層に区分される。

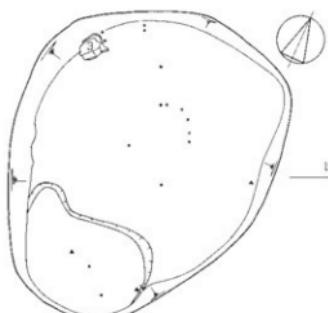
Iは黒色土。IIは黒色土が主体でローム粒子・赤橙色ローム粒子を混入する暗赤褐色土。IIIは赤橙色ロームである。

出土遺物数は5個で、すべて縄文土器である。

平面分布状態は南側の壁際にのみ偏在する。

垂直分布の在り方は南壁寄りの底面上から出土している。深鉢形土器の準完形品が出土した。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第一〇四図 第三四号土壤実測図、遺物出土状態図

30 第三四号土壤 (第一〇四図)

本土壙はH～I-6～7に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈する。長軸205cm、短軸165cm、主軸線方向はN-8°-Wを指向する。

掘り方は開口部より内側へ斜めに掘り下げ、深さは30cm。

壁面はやや脆弱気味であるが、崩落の痕跡は認められない。

底面はおおむね平坦であるが、南壁際に径80×60cm、深さ14cmの窪みがある。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは夾雜物を含まない黒色土、IIは暗褐色土で固く締っている。IIIは褐色土である。

出土遺物数は17個で、内訳は縄文土器片15個、自然石2個となる。

平面分布状態はきわめて疎らに散在し、垂直分布の在り方は中央部の層にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。

31 第三五号土壤 (第一〇五図)

本土壙はI-7に位置する。

開口部の平面形は楕円形状を呈し、長軸325cm、短軸230cm、主軸線方向N-83°-Eを指向する。

掘り方は開口部より内側へ斜めに掘り下げ、深さは36cmであるが東側は浅い。

壁面は硬さはないが崩落はない。

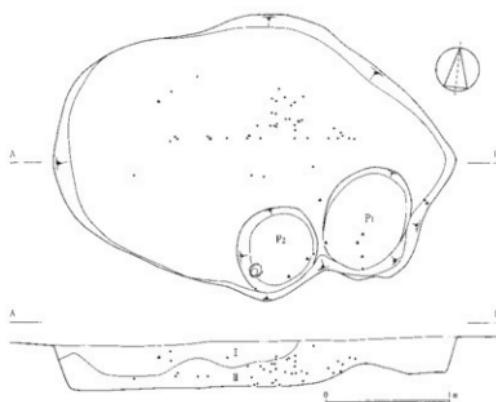
底面は大部分平坦であるが、東側の窓高は29cmとやや浅く起伏がある。

南東隅に2個のピットが存在する。P₁ 88×67cm、深さ72cm。P₂ 73×65cm、深さ57cm。

出土遺物数は58個で、内訳は縄文土器片45個、自然石13個となる。

出土遺物の平面分布状態はA-Bセクションの北側にまとまっているが、全体的には空白部が多い。

垂直分布の在り方は中層から下位にかけて多い。縄文時代中期の土壤であろう。



第一〇五図 第三五号土壤実測図、遺物出土状態図

32 第三六号土壤 (第一〇六図)

本土壤はI～J-7～8に位置する。

開口部の平面形は梢円形を呈する。

長軸215cm、短軸170cm、主軸線方向はN-29°-Wを指向する。

北西部は隣接する36D-Bと重複する。36D-Bは遺物の出土がないので記述を省略する。

掘り方は開口部より内側へ斜めに掘り下げ、深さ70cmである。

壁面は堅固で崩落ではなく、底面は若干の起伏はあるがおむね平坦である。

埋没土の性状は2層に区分される。

Iは黒色土を主体としてローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土。

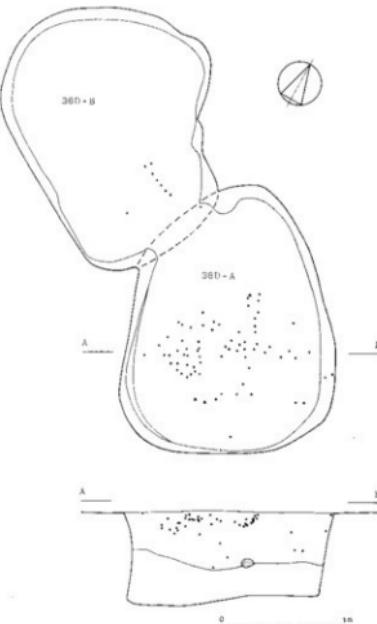
IIはローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む褐色土である。

中層部に鹿沼ブロックが介在する。

出土遺物数は85個で、内訳は縄文土器片82個、自然石3個となる。

平面分布状態は中央部付近にまとまっており、垂直分布の在り方は上層部に集中する。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一〇六図 第三六号土壤実測図、遺物出土状態図

33 第三九号土壤 (第一〇七図)

本土壤はL-7に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径165×165cm。

掘り方はほぼ垂直に、部分的にはやや外側へ膨らんで掘り下げ、深さは35cm。壁面は堅固である。

ピット2個が存在し、P₁は東側で径70×55cm、深さ25cm、P₂は西側で径70×65cm、深さ35cm。

底面はピット以外の部分は平坦であるが硬さはない。

底面形も円形である。

埋没土の性状は2層に区分できる。

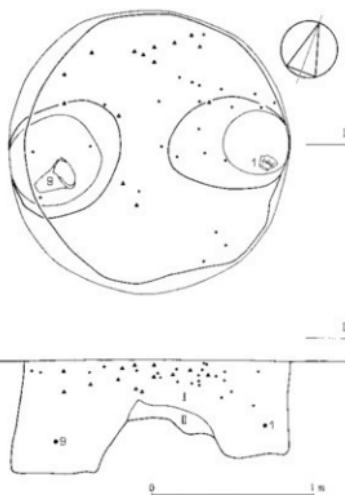
Iは黒色土・ローム粒子の均一な混合土の暗褐色土。

IIは明褐色土。

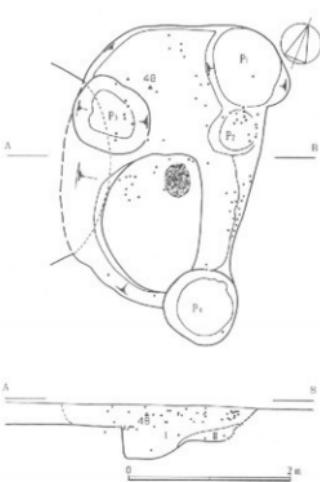
この埋没土の性状は短時に埋め戻されたものであろう。

出土遺物数は40個で、縄文土器片26個、自然石14個である。平面分布状態は北側に多く、垂直分布は上層に多い。P₂内より深鉢形土器が出土した。

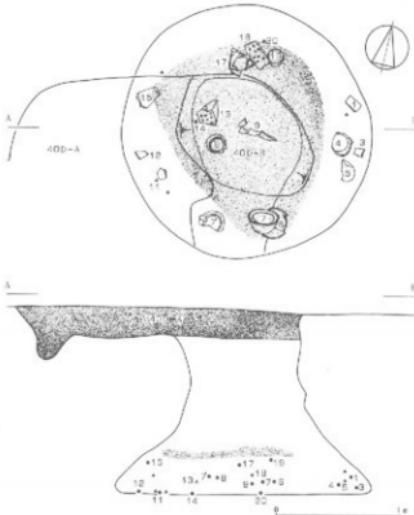
縄文時代中期の土壤である。



第一〇七図 第三九号土壤実測図、遺物出土状態図



第一〇八図 第四〇号土壤実測図、遺物出土状態図



壁面は堅固で崩落の痕跡はない。深さは130cmを測る。
底面は円形で、径200×200cm。平坦で硬い。
埋没土の性状は黒色土・ローム粒子の混合土で暗褐色土である。

底面より30cm上位に径150×120cm、厚さ5~8cmの焼土層が存在する。

出土遺物数は23個で、内訳は縄文土器17個、石器(凹石)3個、自然石3個となる。

平面分布状態は底面径内に広く分布し、断面図に投影した垂直分布の在り方は、すべての遺物が底面上から焼土層までの下層にまとまっている。

縄文時代中期の袋土壙で、土壙墓の可能性も考えられる。

36 第四一号土壙 (第一一〇図)

本土壙はM~N-7~8に位置する。

本土壙本体の平面形は楕円形を呈する。

長軸205cm、短軸180cm、主軸線方向N-0°。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは東側45cm、西側30cmで東側が深い。壁面に崩落は認められない。底面はやや脆弱気味である。

南側寄りに2個のピットが存在する。

埋没土の性状は黒色土をベースとして、ローム粒子を混入する暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は35個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態は疎らで空白部が目立つが、中央部より東側にまとまりをみせている。

垂直分布の在り方は、中央部より東側の層全体に分布している。縄文時代中期の土壙であろう。

37 第四三号土壙 (第一一一図)

本土壙はH-4~5に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈する。

長軸225cm、短軸185cm、主軸線方向N-90°-W。

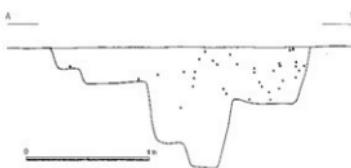
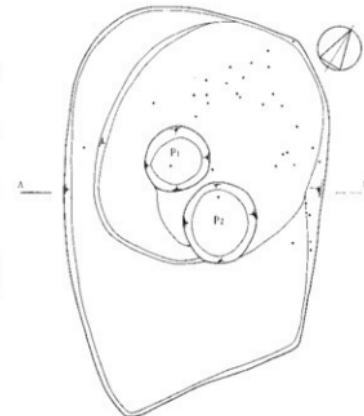
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは6~12cm。

壁面にも底面にも硬さはない。

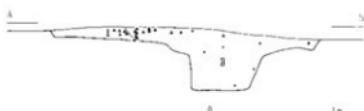
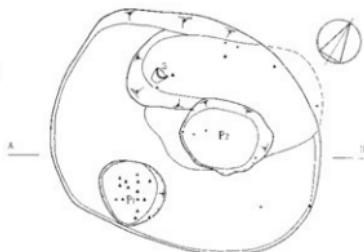
北寄りに径160×50cm、深さ20cmの掘り込みがあり、さらには2個のピットが存在する。

埋没土の性状は2層に大別される。Iは黒褐色土、IIはローム粒子を多量に混入する褐色土である。

出土遺物数は29個で、内訳は縄文土器片9個、自然石20個となる。土器片の平面分布状態はきわめて散発的、自然石の大部分はP₁内に集中する。垂直分布の在り方も点在する程度。縄文時代中期の土壙と思われる。



第一一〇図 第四一号土壙実測図、遺物出土
状態図



第一一一図 第四三号土壙実測図、遺物出土
状態図

38 第四六号土壤 (第一一二図)

本土壤はJ～K-7～8に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する。

長軸450cm、短軸400cm、主軸線方向N-75°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、深さは42cm。

周壁は比較的堅固で底面はおおむね平坦である。

5個のピットを確認した。P₁径50×45cm、深さ80cm。P₂径50×46cm、深さ76cm。P₃径25×17cm、深さ27cm。P₄径62×60cm、深さ34cm。P₅径43×35cm、深さ10cm。

埋没土の性状は2層に区分できる。

Iはローム粒子と1×1cmほどのローム小ブロックを混入する暗褐色土、IIはローム主体の明褐色土である。

出土遺物数は146個で、内訳は縄文土器片107個、自然石39個となる。

平面分布状態はA-Bセクションの南側に濃密に集中する。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一一ニ図 第四六号土壤実測図、遺物出土状態図

39 第四七号土壤 (第一一三図)

本土壤はM-5～6に位置し、東側約半分は第一号溝の掘削の際に破壊されている。

開口部の平面形は楕円形を呈していたものと想定される。

長軸250cm、短軸185cm、主軸線方向N-0°(想定)。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる跡が残存部から窺われ、深さは残存部で30cmである。

埋没土は暗褐色土の單一層である。出土遺物数は18個で、すべて縄文土器片である。

出土状態は北西隅にだけまとまっている。縄文時代中期の土壤であろう。

40 第四八号土壤 (第一一三図)

本土壤はM～N-6に位置し、南西部約40%は第一号溝の掘削によって破壊されている。

開口部の平面形は楕円形を呈していたものと想われ、長軸210cm、短軸170cm、主軸線方向N-0°。

掘り方は残存部の形状から内側へ斜めに掘り下げており、深さは残存部で30cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。出土遺物数は10個と少なく残存部から散発的に出土している。

すべて縄文土器片で、中期の土壤であろう。

41 第四九号土壤 (第一一三図)

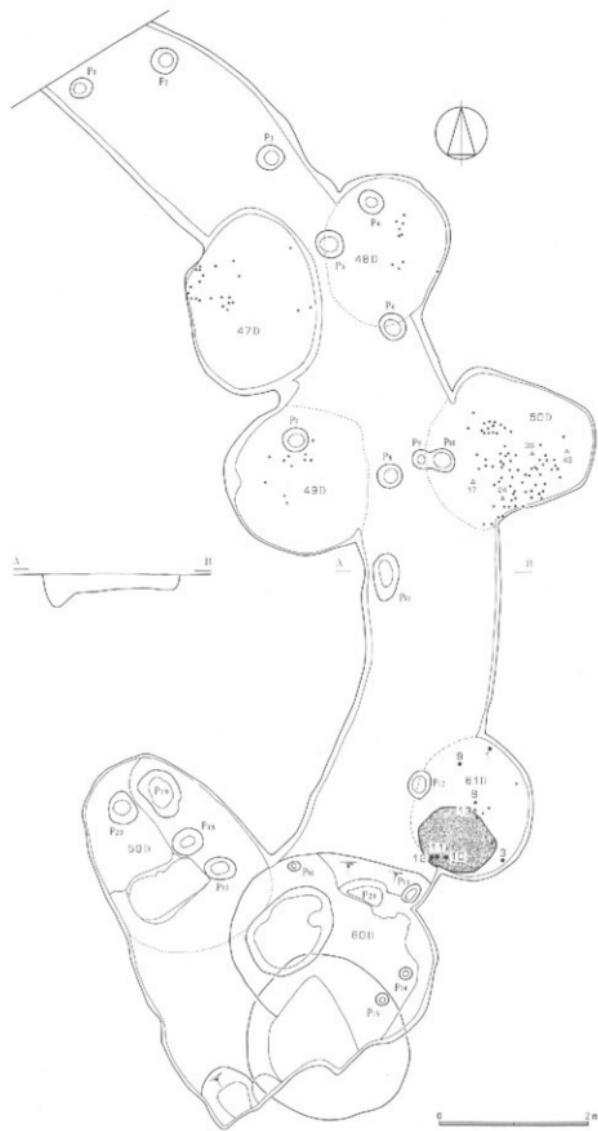
本土壤はL～M-6に位置し、東側約20%は第一号溝の掘削によって破壊されている。

開口部の平面形は円形であろう。径200×200cm。

掘り方は残存部の形状から内側へ斜めに掘り下げており、深さは30cmである。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。出土遺物数は11個すべて縄文土器片である。

出土状態は中央部に小さなまとまりがあるだけである。縄文時代中期の土壤であろう。



第一一三圖 第四七号・第四八号・第四九号・第五〇号・第五九号・第六〇号・第六一号土壤実測図、遺物出土状態図・第一号溝状遺構実測図

42 第五〇号土壤 (第一一三図)

本土壤はM-6~7に位置し、西側約30%は第一号溝の掘削によって破壊されている。

開口部の平面形は不整形であろう。長軸235cm、短軸200cm。

掘り方は残存部の状況から内側へ斜めに掘り下げており、深さは40cmである。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。出土遺物数は74個すべて縄文土器小片である。

出土状態は中央部付近から南側へかけてかなり濃密に分布する。縄文時代中期の土壤であろう。

43 第五一号土壤 (第一一四図)

本土壤はL-8~9に位置する。

開口部の平面形は不整楕円形を呈する。長軸330cm、短軸250cm。主軸方向N-0°。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは25cm。壁面は脆弱気味で底面には若干の起状がある。

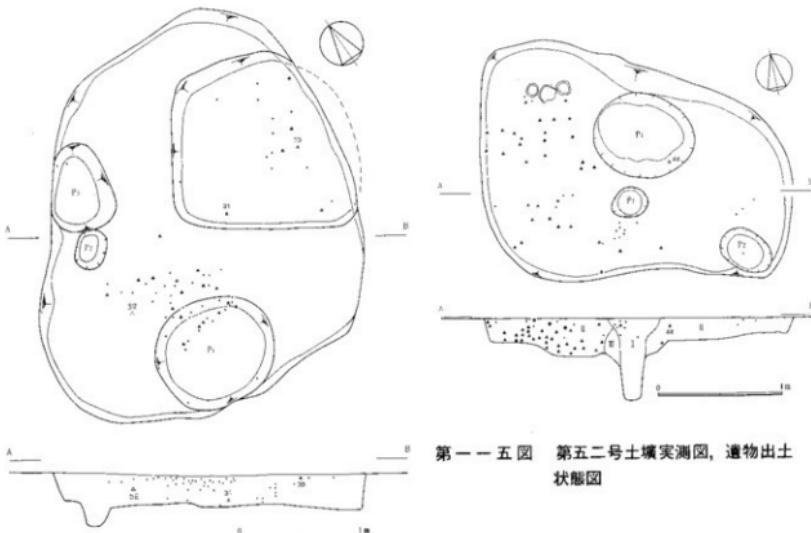
埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。出土遺物数は74個で、縄文土器片51個、石器（凹石）2個、自然石21個。出土状態は北側と南側に偏在し、垂直分布は上層部が多い。3個のピットが存在する。

44 第五二号土壤 (第一一五図)

本土壤はK-8に位置する。開口部の平面形は椭円形状。長軸255cm、短軸170cm、主軸線方向N-64°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ12~30cmで底面には起伏がある。埋没土はI 暗褐色土。II 褐色土。III 明褐色土。3個のピットが存在する。出土遺物数は56個で、内訳は縄文土器片22個、凹石1個、自然石33個。

平面分布状態は中央部より西側に偏在し、垂直分布は中央部より西側の各層に分布する。



第一一四図 第五一号土壤実測図、遺物出土状態図

45 第五三号土壤 (第一一六図)

本土壤はJ～K～8～9に位置する。

開口部の平面形は不整椭円形を呈する。

長軸380cm, 短軸235cm, 主軸線方向N-40°-W。

掘り方は西側は内側へ斜めに、東側はフラスコ状に掘り込んで深さは39～80cm。壁面に崩落痕はなく、底面は皿状を呈する。

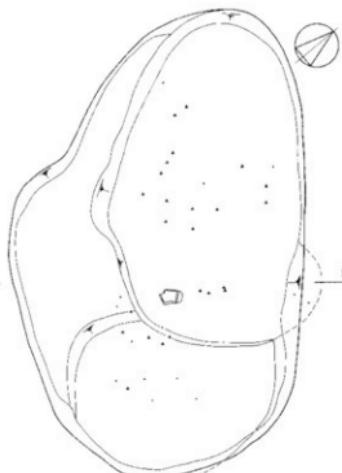
埋没土の性状はI 黒褐色土, II 暗褐色土, III 明褐色土。

出土遺物数は40個で、縄文土器片はわずかに15個で、他は自然石である。

平面分布状態は全面に散在するものの、きわめて散発的である。

垂直分布状態も非常にまばらである。

縄文時代中期の土壤であろう。



46 第五四号土壤 (第一一七図)

本土壤はL～M～8に位置する。

開口部平面形は楕円形を呈する。長軸205cm, 短軸150cm, 主軸線方向N-63°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは55cm、ピット部以外の底面は平坦。埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

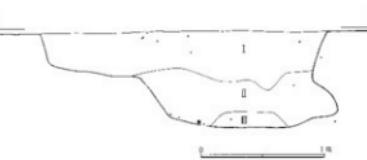
2個のピットが存在するが本土壤に付随するものかどうか不明である。

出土遺物数は71個で、縄文土器片69個、凹石1個、自然石1個である。

平面分布状態を観察すると、周壁下層辺部は皆無に近い空白部が広がり、遺物の分布は中央部に集中している。

垂直分布の在り方は中層にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一一六図 第五三号土壤実測図、遺物出土状態図

47 第五五号土壤 (第一一八図)

本土壤はM～N～8に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径170×165cm。

掘り方はほぼ垂直に箱型に掘り下げ、深さは43cm。

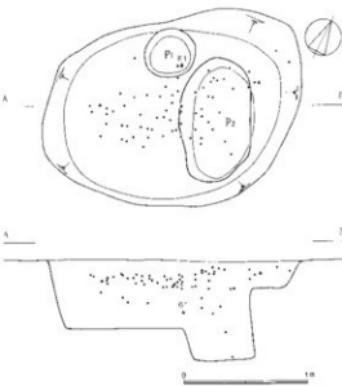
壁面は堅固で底面は平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で固く縮っている。

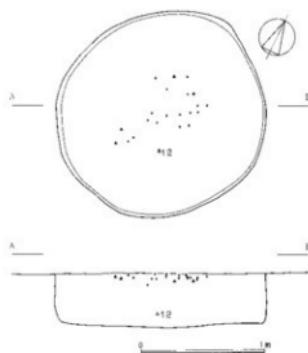
出土遺物数は18個で、内訳は縄文土器片13個、石器1個、自然石4個となる。

平面分布状態は中央部に小さなまとまりをみせている。垂直分布の在り方は中央部の上層部に集中している。

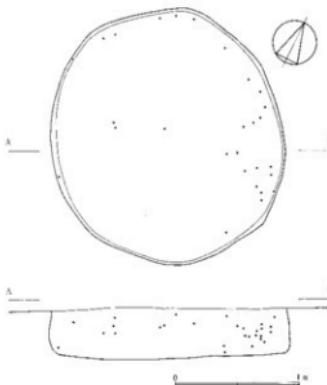
縄文時代中期の土壤であろう。



第一一七図 第五四号土壤実測図、遺物出土状態図



第一一八図 第五五号土壤実測図、遺物出土状態図



第一一九図 第五六号土壤実測図、遺物出土状態図

48 第五六号土壤（第一一九図）

本土壙はM～N～8に位置する。

開口部の平面形はおむね円形を呈する。径205×190cm。

掘り方はほぼ垂直に掘り下げて箱形を呈し、深さは42cm。

壁面は堅固で底面はほぼ平坦である。

埋没土の性状は黒褐色土の単一層である。

出土遺物数は28個すべて縄文土器片である。平面分布状態は東壁際に多く認められるが、全体としては疎らである。垂直分布の在り方は各層に散在している。縄文時代中期の土壤であろう。

49 第五七号土壤（第一二〇図）

本土壙はN～8～9に位置する。

開口部の平面形はハート状を呈する。長軸390cm、短軸235cm。

掘り方は東側の一部を除き内側へ斜めに掘り下げ、深さはA～Bセクションで52cm、C～Dセクションで15～48cm。北側が深く南側が浅い底面である。5個のピットが存在し深さは33～78cmを測る。

埋没土の性状は暗褐色の単一層である。

出土遺物数は69個で、縄文土器片32個と自然石37個である。平面分布状態はC～Dセクションの北側に散在する。垂直分布状態は中層より上位に疎らに点在する。縄文時代中期の土壤であろう。

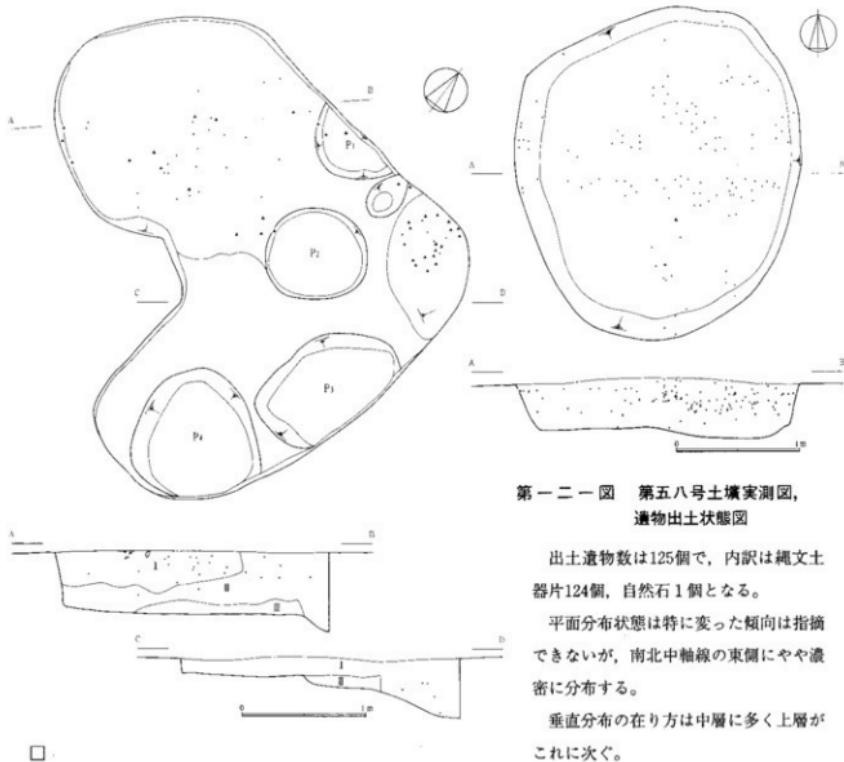
50 第五八号土壤（一二一図）

本土壙はM～N～8～9に位置する。

開口部の平面形は梢円形を呈する。長軸265cm、短軸230cm、主軸線方向N～0°。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは39～46cmで、底面には若干の起伏がある。壁面は堅固である。

埋没土の性状は黒色土をベースにローム粒子を混入する暗褐色の単一層である。



第一二〇図 第五七号土壤実測図、遺物出土状態図

51 第六二号土壤（第一二二図）

本土壙はK～L～7に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。長径265cm、短径240cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、壁面は堅固で深さは24～28cm。底面は中央部が平坦で周壁下がやや深くなり若干の起伏がある。埋没土の性状は2層に大別され、Iは黒色土をベースとしてローム粒子・ロームプロックを混入する暗褐色土、IIはロームを主体とする褐色土である。2個のピットも存在する。

出土遺物数は39個で、内訳は縄文土器片38個、自然石1個となる。

平面分布状態は中央部付近にまとまりがみられ、垂直分布の在り方は中層より下位に多くの分布がみられる。縄文時代中期の土壤であろう。

52 第六三号土壤（第一二三図）

本土壙はL～M～9に位置する。

第一二一図 第五八号土壤実測図、
遺物出土状態図

出土遺物数は125個で、内訳は縄文土器片124個、自然石1個となる。

平面分布状態は特に変った傾向は指摘できないが、南北中軸線の東側にやや濃密に分布する。

垂直分布の在り方は中層に多く上層がこれに次ぐ。

縄文時代中期の土壤であろう。

開口部の平面形は円形を呈し、径 110×105 cm。

掘り方は内側へ斜めに円筒状に掘り下げ、壁面は堅固で崩落は認められず、深さは86cmを測り底面は平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数はわずかに12個で、縄文土器片10個、自然石2個である。

平面分布状態は全面に極めて疎らに散在し、垂直分布の在り方は中層より上位に点在する。

縄文時代中期の土壤であろう。

53 第六四号土壤（第一二三図）

本土壤はM-9に位置する。

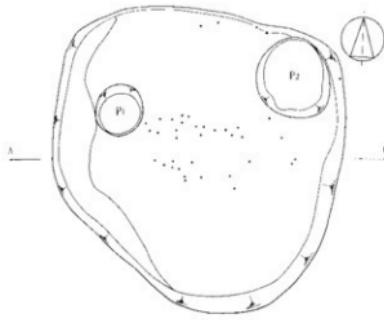
開口部の平面形は円形を呈し、径 165×160 cm。

掘り方は若干内側へ斜めに掘り下げ、壁面は堅固であ

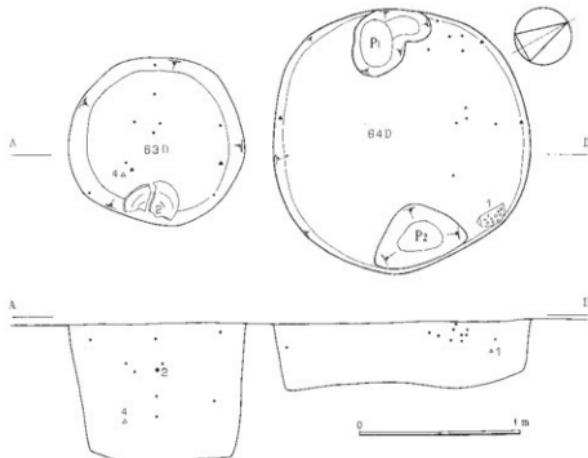
る。深さは39~41cmで緩やかな起伏がある。埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

2個のピットが存在し、深さは80cmと90cmである。

出土遺物数は15個で、内訳は縄文土器片11個、凹石1個、自然石3個となる。平面分布状態は北側に偏在し、垂直分布の在り方は北寄りの上層部にまとまっている。縄文時代中期の土壤であろう。



第一二二図 第六二号土壤実測図、遺物出土状態図



第一二三図 第六三号（左）・第六四号（右）土壤実測図、遺物出土状態図

54 第六五号土壤 (第一二四図)

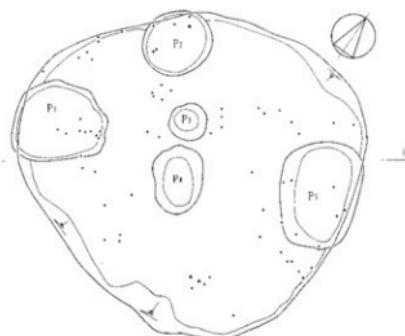
本土壤はM～N-9～10に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、長径280cm、短径260cm。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは38～40cmで、ピット部分以外はおおむね平坦である。5個のピットが存在し深さは21～48cmである。埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は71個で、内訳は縄文土器片68個、自然石3個となる。

平面分布状態は濃密ではないが全面に分布しており、垂直分布の在り方は各層に及んでいる。

縄文時代中期の土壤であろう。



55 第六六号土壤 (第一二五図)

本土壤はM～N-10に位置する。

開口部の平面形はおおむね円形を呈する。

長径130cm、短径120cm。

掘り方は内側へ斜めに箱形状に掘り下げ、深さは35cmで底面は平坦で硬い。

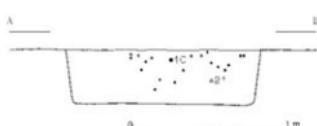
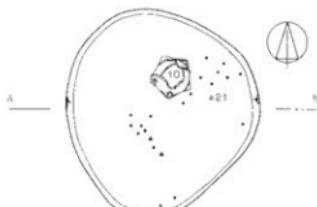
第一二四図 第六五号土壤実測図、遺物出土状態図

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は23個で、内訳は大形片を含む縄文土器片20個、石器1個、自然石2個となる。

平面分布状態は南西～北東方向に帯状に分布する。

垂直分布の在り方は中央より東側の中層より上位にまとまっている。縄文時代中期の土壤であろう。



56 第六八号土壤 (第一二六図)

本土壤はO-10に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸175cm、短軸150cm。

主軸線方向 N-57°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、周壁は堅固で深さ63cm。

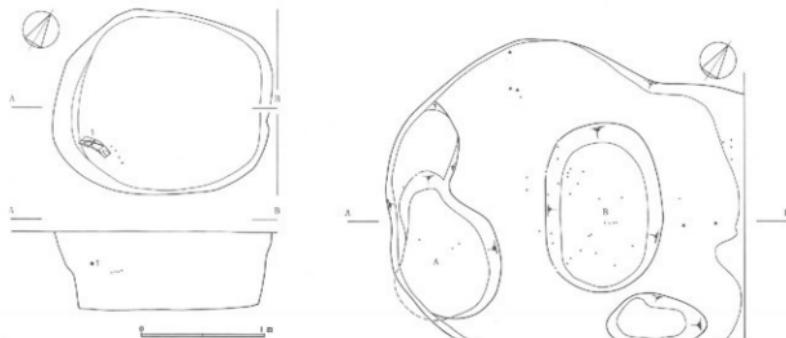
底面は平坦で硬い。埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。出土遺物数はわずかに5個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態は南壁隅の小範囲に限られ、垂直分布の在り方は南壁付近の中層に小さなまとまりがある。

第一二五図 第六六号土壤実測図、遺物出土状態図

57 第六九号土壤 (第一二七図)

本土壤はN～O-10に位置する。



第一二六図 第六八号土壤実測図、遺物出土状態図

開口部の平面形は楕円形状を呈する。
長軸550cm、短軸500cmの浅い掘り込み
の底面からA・B 2個の土壙を確認。
Aは長軸240cm、短軸160cm、主軸線方
向N-47°-Wの楕円形状を呈する。

掘り方は内側へ斜めに円筒状に
掘り下げ、深さ98cm。底面平坦。
埋没土はI 暗褐色土、II 褐色土。
出土遺物はわずかに5個で、す
べて縄文土器片である。

分布状態は平面・垂直ともにき
わめて散発的である。

縄文時代中期の土壙であろう。

Bは長軸275cm、短軸190cm。
主軸線方向N-34°-W。

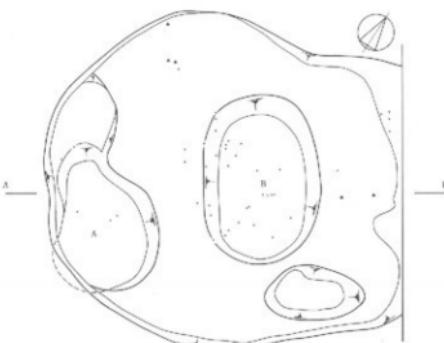
掘り方は内側へ斜めに円筒状に
掘り下げ、深さ130cm、底面平坦。

埋没土は暗褐色土の單一層。

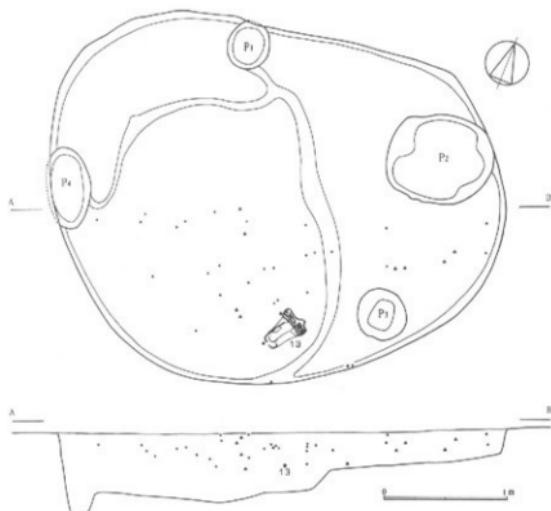
出土遺物数は30個で、すべて縄
文土器片である。

平面分布状態は南寄りに偏在
し、垂直分布の在り方は上層にま
とまりがある。

縄文時代中期の土壙であろう。



第一二七図 第六九号土壤実測図、遺物出土状態図



第一二八図 第七〇号土壤実測図、遺物出土状態図

58 第七〇号土壤 (第一二八図)

本土壤はN-10~11に位置する。

開口部の平面形は橢円形を呈する。長軸360cm、短軸290cm、主軸線方向N-67°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは中央部の東側27cm、西側55cmの2段掘り込みになっている。

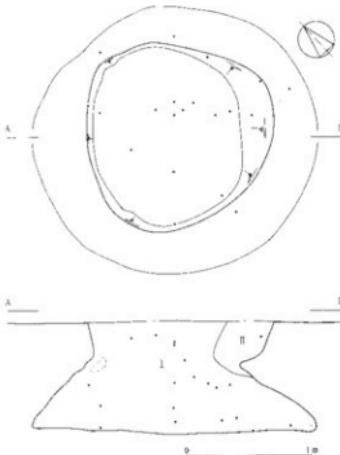
底面は硬く起伏がある。4個のピットが存在し深さは30~47cm。埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は41個で、内訳は復元可能品を含む縄文土器片30個、自然石11個となる。

平面分布状態はA-Bセクションの南側に広く分布する。

垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっている。

No13の深鉢形土器の出土レベルは底面上20cm、横位の状態で出土した。縄文時代中期の土壤である。



59 第七二号土壤 (第一二九図)

本土壤はJ-K-8~9に位置する。

開口部の平面図はほぼ円形を呈する。径150×150cm。

掘り方は開口部より内側へ斜めに30cmほど掘り下げて径100cmの頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむラスコ状に掘り込んで底面にいたる。壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。深さ90cm。

底面形は円形で径230×215cm。平坦で鹿沼層を固めている。

埋没土の性状はI 黒色土がベースでローム粒子と赤橙色ローム粒子を混入する暗褐色土。IIは黒色土とロームの均等な混合土の褐色土。西壁頭部付近に赤橙色ロームブロックが存在する。

出土遺物数は20個で、すべて縄文土器片である。平面分布状態は開口部の範囲内に多く、垂直分布の在り方は各層に散在する。縄文時代中期の袋状土壤である。

第一二九図 第七二号土壤実測図、
遺物出土状態図

60 第七五号A土壤 (第一三〇図)

本土壤はL-K-9~10に位置し、北側は第七五号B土壤に接する。

開口部の平面形は円形を呈し、径135×140(推定)。掘り方は若干袋状に掘り下げ、深さは46cm。

壁面は堅固で底面は平坦である。埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序の変化は認められない。

出土遺物数は14個で、内訳は大形破片を含む縄文土器片13個と自然石1個である。

平面分布状態は全面に分布しており、垂直分布の在り方は中層より下位にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。

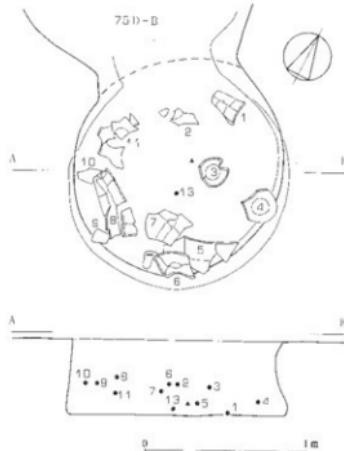
61 第七五号B土壤 (第一三一図)

本土壤はL-9~10に位置し、南側は第七五号A土壤に接する。開口部の平面形は橢円形であろう。

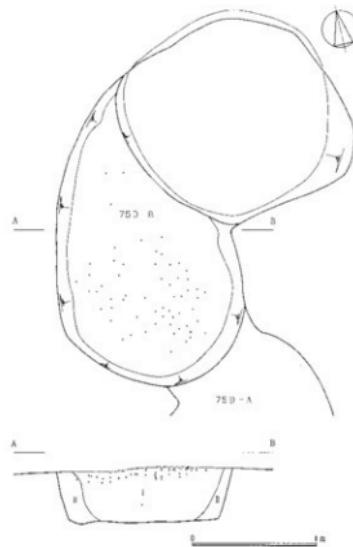
長軸250cm、短軸150cm、主軸線方向N-15°-E。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ43cm。底面平坦。

埋没土の性状はI 暗褐色土。II 褐色土。出土遺物数は縄文土器片60個で、平面分布は全面に、垂直分布は上

層にまとまっている。縄文時代中期の土壤であろう。



第一三〇図 第七五号A土壤実測図、遺物出土状態図



第一三一図 第七五号B土壤実測図、遺物出土状態図

62 第七六号土壤 (第一三二図)

本土壤はK～L-9～10に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径270×255cm。

掘り方はほぼ垂直の箱形に掘り下げ、深さ40cm。

6個のピットが存在し、深さは20～8cm。

ピット部分以外の底面は平坦であるが、北東側の底面は鹿沼層が現れている。

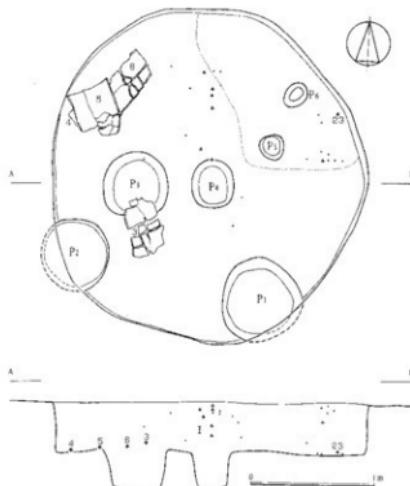
埋没土の性状は、黒色土をベースとしてローム粒子を混入する暗褐色土の単一層で固く締っている。

出土遺物数は31個で、大形破片を含む縄文土器片23個、凹石1個、自然石7個となる。

平面分布状態は空白部が目立つけれども北側に多く分布し、垂直分布の在り方は、まばらではあるが下層から上層までの各層に散在する。

ピット内出土は皆無である。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一三二図 第七六号土壤実測図、遺物出土状態図

63 第七七号土壤（第一三三図）

本土壤はL-9~10に位置し、西側は第七八号土壤と接する。

開口部の平面形はほぼ円形を呈し、径140×130cm。

掘り方は内側へ斜めに下げ、深さは東側24cm、西側20cmで、底面は西高東低の緩斜面状を呈する。

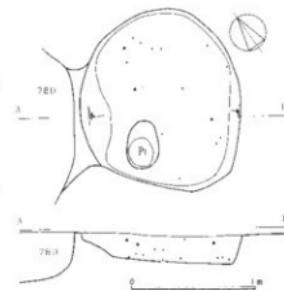
埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数はわずかに15個で、縄文土器片12個と自然石3個である。

平面分布状態は全面に認められるがきわめて散発的である。

垂直分布の在り方は下層から上層までの各層に点在する。

縄文時代中期の土壤であろう。



64 第七八号土壤（第一三四図）

本土壤はL-9~10に位置し、東側は第七七号土壤と接する。

開口部の平面形は不整形を呈し、長軸520cm、短軸320cm。主軸線方向N-56°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは25~30cmで底面には起伏がある。

3個のピットが存在し深さは54~113cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は97個で、内訳は縄文土器片47個、凹石1個、自然石49個となる。

平面分布と垂直分布も特に変った傾向は指摘できない。縄文時代中期の土壤であろう。

65 第九号土壤（第一三五図）

本土壤はM-10に位置する。

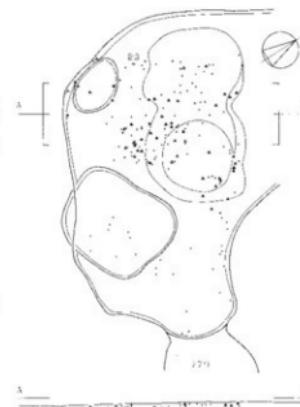
開口部の平面形は不整形を呈する。長軸550cm、短軸270cmの浅い掘り込みの中に、長径150cm、短径95cm、主軸線方向N-35°-Eの本土壤を確認した。この平面形は橢円形である。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは30cmである。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は30個で、縄文土器片17個と自然石13個である。

平面分布状態は全面に分布しており、垂直分布の在り方は中層部にまとまっている。縄文時代中期の土壤であろう。



66 第八〇号土壤（第一三六図）

本土壤はL-M-10~11に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径210×210cm。

掘り方は内側へ斜めに（部分的に起伏）に掘り下げ、深さ45cm。

底面はおむね平坦である。埋没土はI 暗褐色土、II 褐色土。

出土遺物数は18個と少ないが、南壁際ピット内より深鉢形土器が出土した。（ピットの深さ50cm。出土レベル底面上5cm。斜位）。東壁際に50×30cm、厚さ10cmの炭化物を含む焼土層が堆積する。縄文中期の土壤である。

第一三六図 第八〇号土壤実測図、
遺物出土状態図

67 第八一号土壤（第一三七図）

本土壤はM-10~11に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径200×190cm。

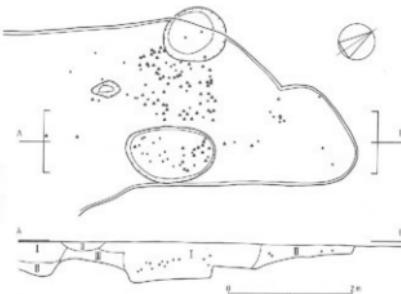
掘り方は内側へ斜めに下げる、深さは東側25cm。

底面には若干の起伏がある。

埋没土の性状は暗褐色土で固く締っている。

出土遺物数は23個で、縄文土器片13個、自然石10個となる。平面分布状態はA-Bセクションの南側に偏在するがきわめて散発的である。

垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっていれる。縄文時代中期の土壤であろう。



第一三五図 第七九号土壤実測図、遺物出土
状態図

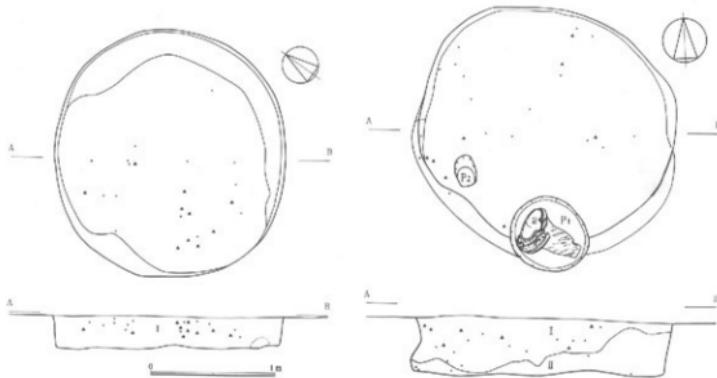
68 第八二号土壤（第一三八図）

本土壤はM-11~12に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する。東西径210cm。南北径240cm。掘り方は内側へ斜めに下げる、中央部より東側の深さ30cmで、東側が浅く西側が深い。底面は比較的軟弱である。

2個のピットが存在し、深さは18~25cmである。埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は24個で、そのうち縄文土器片は5個にすぎない。出土状態はきわめて散発的である。
縄文時代中期の土壤であろう。



第一三六図 第七九号土壤実測図、遺物
出土状態図

69 第八三号土壤（第一三九図）

本土壤はM~N-11に位置する。

東側は調査区外に接し、開口部の平面形は梢円形であったろう。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは42~60cmで底面にはかなりの起伏がある。

南東隅にピット1個が存在し深さは46cmである。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層で層序区分を必要とするような変化は認められない。

出土遺物数は大形片を含む縄文土器片10個と自然石6個の計16個である。平面分布状態は全面に広く分布しており、垂直分布の在り方も下層から上層まで及んでおり特別の傾向は指摘できない。

縄文時代中期の土壤であろう。

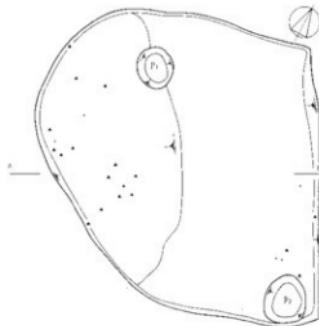
70 第八四号土壤 (第一四〇図)

本土壤はL-11に位置する。

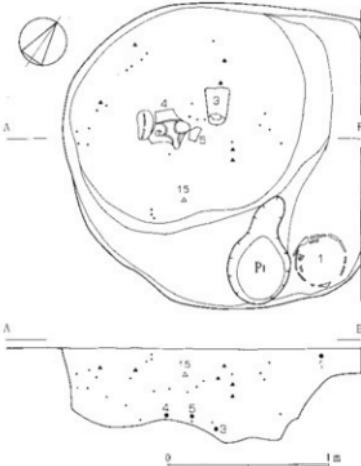
開口部の平面形は瓢箪形を呈し、長軸370cm、頭部径120cm。主軸線方向N-33°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは32cm、断面図に現れたP2の深さは112cmである。

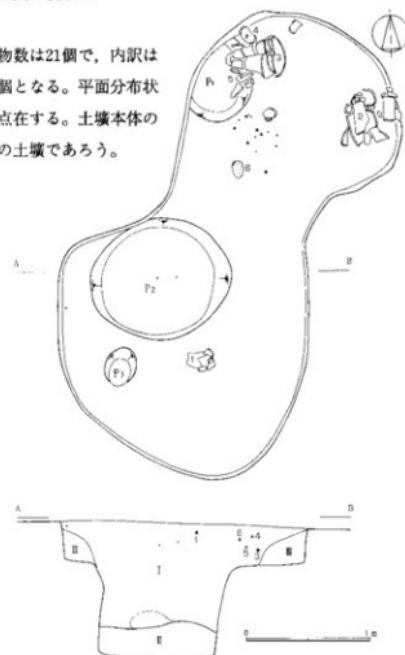
埋没土の性状はI 暗褐色土。II 明褐色土。出土遺物数は21個で、内訳は大形片を含む縄文土器片12個、凹石3個、自然石6個となる。平面分布状態は北側に偏在し、垂直分布の在り方は上層にのみ点在する。土壤本体の深さからみれば中層より上位となる。縄文時代中期の土壤であろう。



第一三八図 第八二号土壤実測図、
遺物出土状態図



第一三九図 第八三号土壤実測図、遺物出
土状態図



第一四〇図 第八四号土壤実測図、遺物出
土状態図

71 第八五号土壤 (第一四一図)

本土壤はL～M-10～11 9～10に位置する。

開口部の平面形は隅丸方形を呈し、堅穴状遺構の可能性も考えられたが、土壤として取扱った。

面積約4.7cm²。主軸線方向はN-57°-W

掘り方は内側へ斜めに下げ、深さは北側33cm、南側60cmで底面には起伏がある。

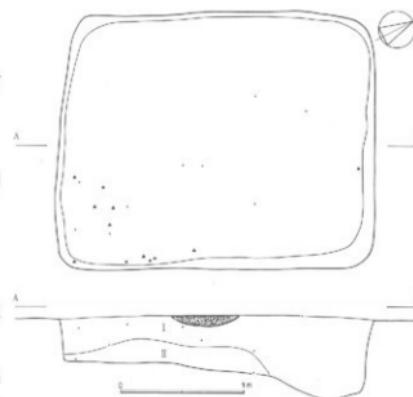
ピットは確認されず、底面に硬さはない。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

Iは暗褐色土で中央部に径55cm、厚さ8cmの焼土粒子を多量に含む赤褐色土が存在する。IIは明褐色土。

出土遺物数は21個で、内訳は縄文土器片9個と自然石12個となる。土器片の平面分布状態はきわめて散発的で、垂直分布の在り方も点在する程度である。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一四一図 第八五号土壤実測図、遺物出土
状態図

72 第八六号土壤 (第一四二図)

本土壤はO-8～9に位置し、西側は第一号住居址に接する。

開口部の平面形はおおむね円形を呈し、径95×87cm。

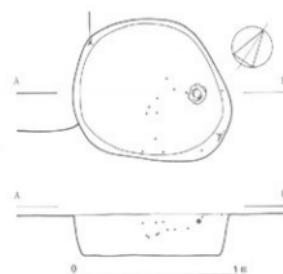
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ25cm

壁面は堅固で底面は平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は13個ですべて土師器片である。器種は壺形土器・坏形土器が認められる。

平面分布状態は南東側に偏在し、垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっている。古墳時代後期の土壤であると思われる。



第一四二図 第八六号土壤実測
図、遺物出土状態
図

73 第八八号土壤 (第一三四図)

本土壤はI～J-8～9に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、長軸460cm、短軸300cm、主軸線方向N-32°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは西侧23cm、東側34cmでやや東側が深く若干の起伏がみられる。

5個のピットが存在し、小は径20×20、大は90×55cm。深さは5～103cmを測る。

埋没土の性状は2層に区分される。Iは暗褐色土。IIは黒褐色土である。

出土遺物数は35個で、内訳は縄文土器片23個、自然石12個となる。

平面分布状態を観察すると全面にまばらに散在しており、特に変った傾向は指摘できない。

縄文時代中期の土壤であろう。

74 第八九号土壤 (第一四四图)

本土壤はH-I-8~9に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、径260×240cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは西側27cm、東側34cmで、中央部43cmを測る。

底面は起伏があるが著しい凹凸はない。

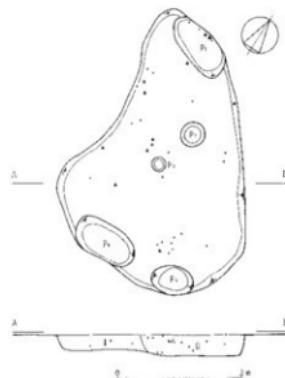
埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは炭化物の混入する黒褐色土。IIは暗褐色土。IIIは褐色土。

出土遺物数は62個で、内訳は縄文土器片39個、自然石23個となる。

平面分布状態は北側と南東側に小プロックを形成して偏在し、垂直分布の在り方は底面上を除く各層に分布している。

縄文時代中期の土壤であろう。



75 第九〇号A土壤 (第一四五图)

本土壤はI-9に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈し、径235×230cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは15~30cmで、東側が深い。底面は緩斜面状を呈する。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層で、焼土小プロック・炭化物小片が点在する。

出土遺物数は104個で、内訳は縄文土器片84個、自然石26個となる。

平面分布状態を観察すると全面に万遍なく分布している。

垂直分布の在り方はおむね各層中に分布しているが底面直上は少ない。縄文時代中期の土壤であろう。

76 第九一号土壤 (第一四六图)

本土壤はJ-9に位置する。

開口部の平面形は不整椭円形を呈し、長軸440cm、短軸360cm、主軸線方向N-0°

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは西側23cm、東側が深く底面には段差がある。

4個のピットが存在し、小は径50×37cm、大は径80×70cm、深さは10~83cmである。

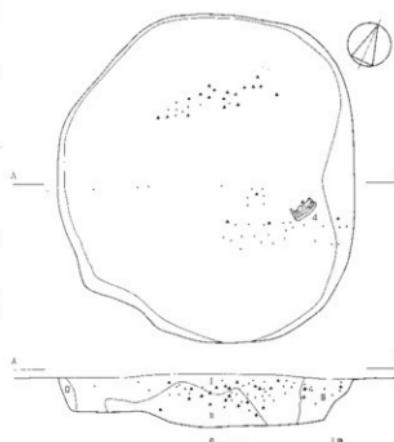
埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは黒色土。IIは暗褐色土。IIIは明褐色土。

出土遺物数は47個で、内訳は縄文土器33個、自然石14個となる。

平面分布状態はA-Bセクションの北側に集中する。垂直分布の在り方は疎らかではあるが各層に分布する。縄文時代中期の土壤であろう。

第一四三图 第八八号土壤実測図、遺物出土状態図



第一四四图 第八九号土壤実測図、遺物出土状態図

77 第九二号土壤

(第一四七図)

本土壤はK-9~10に位置する。

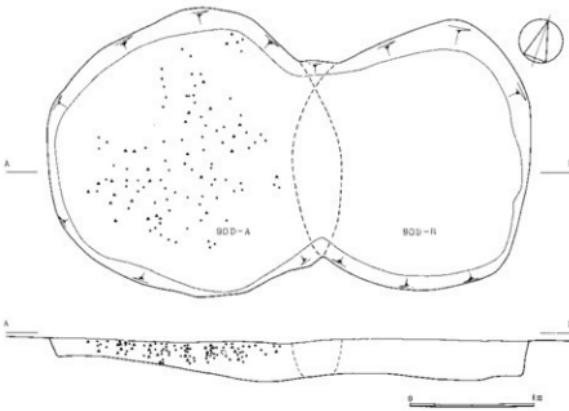
開口部の平面形は不整形を呈する。

長軸430cm、短軸310cm、主軸方向N-56°-W。

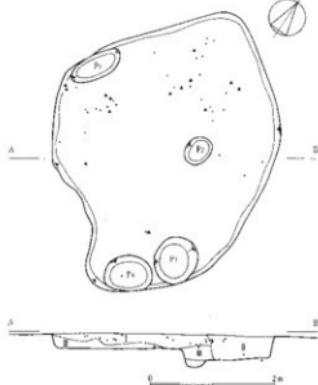
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、土壙本体の深さは15~25cm。中央部から南側にかけて掘り込みがあり、その深さは52cm。埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は32個で、すべて縄文土器片である。

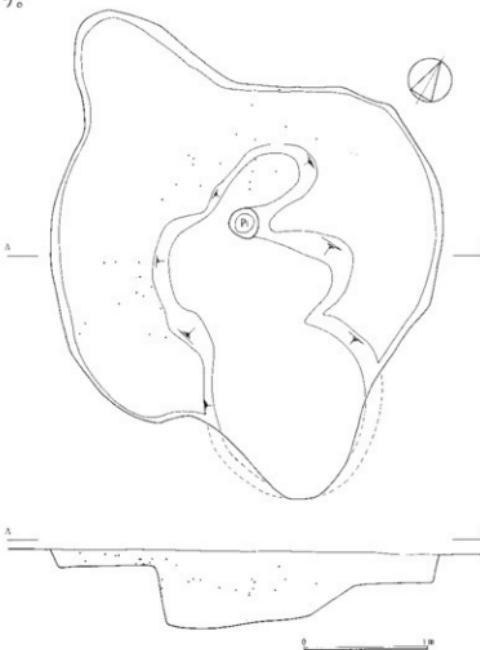
平面分布状態を観察すると、南北中心線の北西及び南西側にのみ分布し、垂直分布の在り方は中層にまとまりをみせている。縄文時代中期の土壙であろう。



第一四五図 第九〇号土壤実測図、遺物出土状態図



第一四六図 第九一号土壤実測図、
遺物出土状態図



第一四七図 第九二号土壤実測図、遺物出土状態図

78 第九三号土壤（第一四八図）

本土壤はL～K-10～11に位置する。

開口部の平面形は原形は円形を呈していたものと思われるが、確認時はかなり変形していた。

東西径200cm、西北径170cm。

掘り方は内側へ30ほど掘り下げて頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

頭部以下の壁面は堅固で崩落の痕跡は認められず、底面は硬く平坦である。

底面形は円形で径260×240cm。

深さは90cm。

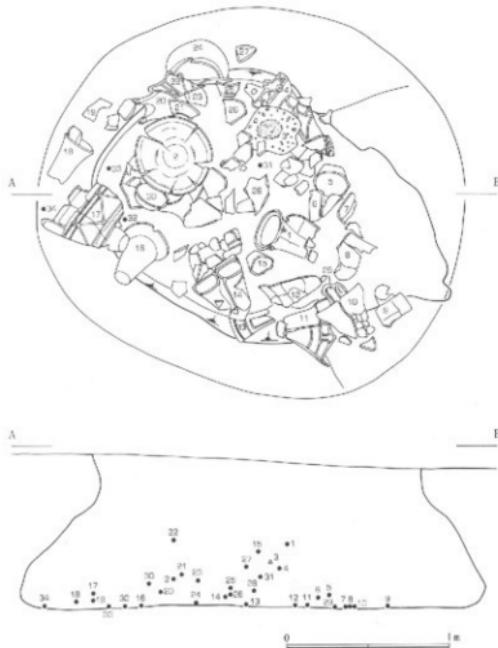
埋没土の性状は暗褐色土の單一層であるが、底面付近はやや粘性を帯びる。

出土遺物数は34個で、内訳は縄文土器33個と石器（石皿）1個である。

平面分布状態を観察すると、浅鉢形土器・深鉢形土器などの準完形品や復元可能品などをはじめ、大形破片などが開口部の範囲全域に跨なく分布している。

垂直分布の在り方は、底面直上部が特に多く、下層部がこれに亜ぎ、上層部の分布は皆無である。

縄文時代中期の袋状土壤であるが、良好な資料の多い土壤である。



第一四八図 第九三号土壤実測図、遺物出土状態図

79 第九四号土壤（第一四九図）

本土壤はL-11に位置する。

開口部の平面形は不整橿円形を呈する。竪穴状遺構の可能性もあったが土壤として取扱った。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは19～36cmである。

長軸480cm、短軸200cm、主軸線方向N-70°-Eを指向する。

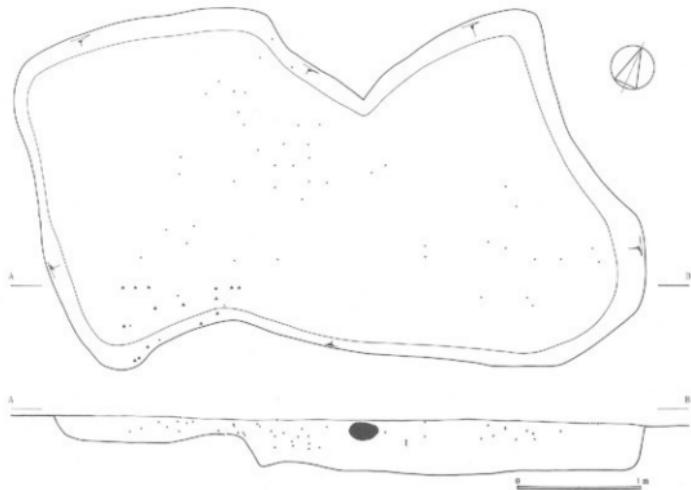
底面に硬さはなく、西側寄りの位置で2段掘りになっており、西側が浅く東側が深い。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、A-Bセクションの中央上層部には焼土ブロックが存在する。

出土遺物数は64個で、その内訳は縄文土器片48個、自然石16個となる。

出土状態に特に変った傾向はなく、平面分布状態は西側に空白部が目立つけれども、おおむね全面にまばらに散在し、垂直分布の在り方は中層より上位に分布し底面直上部は皆無である。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一四九図 第九四号土壤実測図、遺物出土状態図

80 第九五号土壤 (第一五〇図)

本土壙は I ~ J - 9~10に位置する。

開口部の平面形はおおむね円形を呈する。径 $150 \times 140\text{cm}$ 。

掘り方は開口部より内側へ 30cm ほど斜めに掘り下げて径 125cm の円形の頸部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は堅固で崩落の痕跡は認められず、底面は平坦で硬い。

底面も円形で径 $185 \times 180\text{cm}$ 。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層であるが、底面付近はやや粘性を帯びる。

出土遺物数は8個と僅少である。内訳は縄文土器片7個、自然石1個となる。

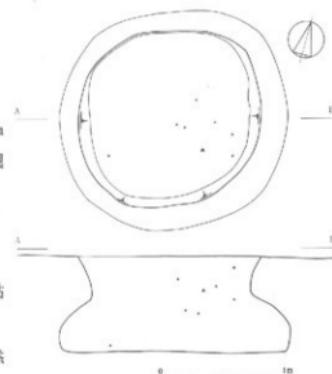
平面分布状態はA-Bセクションの南側に点在し、垂直分布の在り方は中央より東側の中層より上位に点在する。

縄文時代中期の袋状土壤である。

81 第九六号土壤 (第一五一図)

本土壙はJ-11~12に位置する。

開口部の平面形は円形を呈する。径 $145 \times 140\text{cm}$ 。北西隅はわずかに突出する。



第一五〇図 第九五号土壤実測図、遺物出土状態図

掘り方は開口部より内側へ斜めに掘り下げ、深さは中央部で50cm。底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序の変化は認められない。

出土遺物数はわずかに3個で、すべて縄文土器である。
縄文時代中期の土壤であろう。

82 第九七号土壤（第一五二図）

本土壤はG-5～6に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径200×180cm。

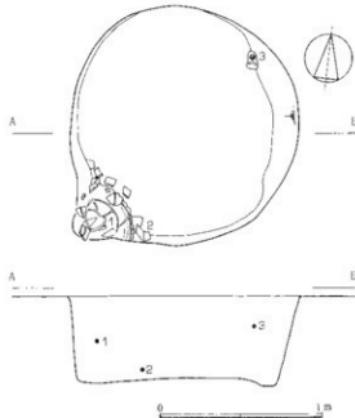
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、土壤本体の深さは11cmである。東寄りの位置に径110×110cmの円形の土壤状の掘り込みが存在し、これの深さが22cmである。

東壁際に深さ26cmのピットが存在する。

従って底面は平坦とはいはず起状がある。

埋没土の性状は2層に区分される。Iは暗褐色土、IIは褐色土である。

出土遺物数はわずかに5個で、縄文土器片3個と自然石2個である。出土状態にはきわめて散発的である。
縄文時代中期の土壤であろう。



第一五一図 第九六号土壤実測図、遺物出土
土状態図

83 第一〇四号土壤

（第一五三図）

本土壤はF-E-6-7に位置する。

開口部の平面形は椭円形を呈し、長軸210cm、短軸160cm、主輪線方向N-67°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ深さは20cm。

底面は平坦ではない。

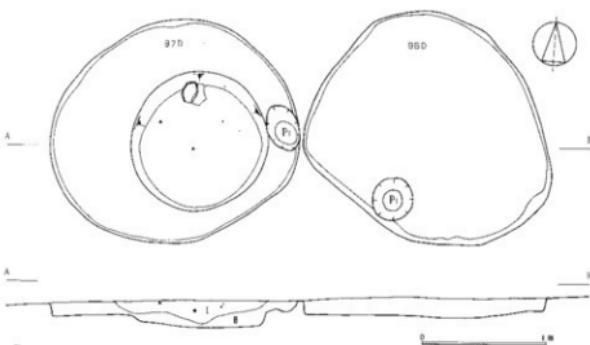
2個のピットが存在し、深さは底面下P₁53cm、P₂70cm。

埋没土の性状は2層に区分され、Iは暗褐色土、IIは褐色土である。

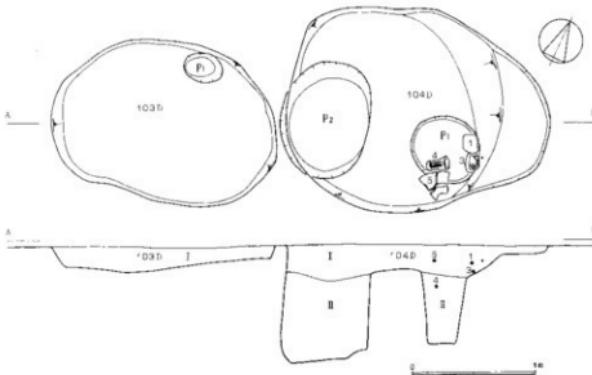
出土遺物数はわずかに5個で、すべて縄文土器である。

平面分布状態はP₁の周辺に集中し、垂直分布の在り方はP₁内から深鉢形土器が出土した以外は、P₁の上位に相当する土壤本体の中層部に点在している。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一五二図 第九七号(左)・第九八号(右)土壤実測図、遺物出土状態図



第一五三図 第一〇三号(左)・第一〇四号(右)土壤実測図、遺物出土状態図

84 第一〇八号土壤 (第一五四図)

本土壙はG-7~8に位置する。開口部の平面形は円形を呈し、径195×190cm。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは14cm。

底面は南壁際のピットを除けばおむね平坦である。

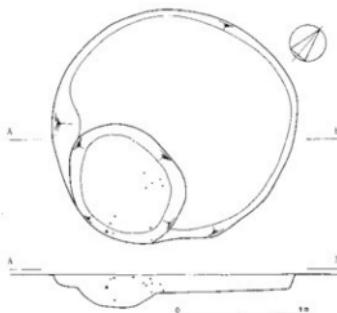
ピットは径104×85cm、深さは底面下13cm。

埋没土は暗褐色土の單一層。

出土遺物数は12個で、内訳は縄文土器片11個、自然石1個となる。

平面分布状態はピット開口部の範囲内にすべての遺物が分布し、垂直分布の在り方はピットの下層部から土壤本体の上層部まで点在する。

縄文時代中期の土壤であろう。



85 第一〇九号土壤 (第一五五図)

本土壙はF~G-8に位置する。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長軸270cm、短軸213cm、主軸線方向N-55°-E。

西側に3条のトレンチャー痕が存在するが、微かに痕跡が残る程度なので構造への影響はない。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、底面は比較的堅く平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、層序の変化は認められない。

出土遺物数は29個で、内訳は大形片を含む縄文土器片20個、自然石9個となる。

出土状態の平面分布は中央部周辺に集中しており、垂直分布の在り方は中層部に多い。

縄文時代中期の土壤であろう。

第一五四図 第一〇八号土壤実測図、遺物出土状態図

86 第一一二号土壤

(第一五六図)

本土壤はH～G～8～9に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、
径220×220cm。

掘り方はわずかに斜めに内側
へ掘り下げ、ピット部を除けば
底面は平坦である。

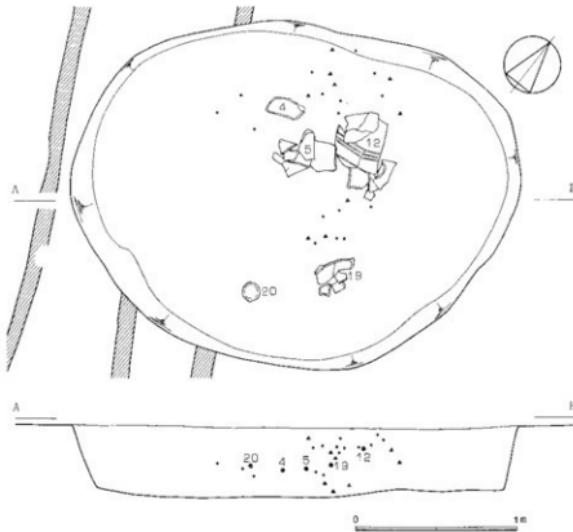
4個のピットが存在し、深さ
は底面下45～60cm。

埋没土は暗褐色の単一層。

出土遺物数は16個で、縄文土
器片12個、自然石4個となる。

平面分布状態はきわめて散發
的で空白部が目立ち、垂直分布
の在り方は中層部にまとまる。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一五五図 第一〇九号土壤実測図、遺物出土状態図

87 第一一三号土壤 (第一五七図)

本土壤はG～H～9に位置する。

開口部の平面形はやや楕円形を呈し、長軸204cm、短軸
190cm、主軸線方向N-63°-W。

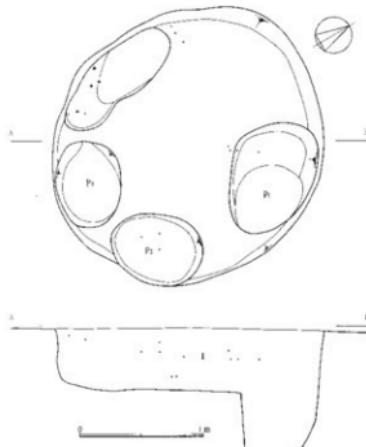
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ35cm。

底面に硬さはないがおおむね平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土が充満しているが、部分的に黒
色土Ⅱが存在する。

出土遺物数は33個で、内訳は縄文土器片28個、自然石5
個となる。平面分布状態は南側に圧倒的に多く北側は皆無
状態に近い。垂直分布状態は各層に散在する。

縄文時代中期の土壤であろう。



88 第一一四号土壤 (第一五八図)

本土壤はH～I～9に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈するが、土壤としての掘り
込みは、長軸280cm、短軸240cm程度であろう。

掘り込みは内側へ斜めに掘り下げ、土壤本体の深さは45cm。大形ピットが2個存在し、更に小ピット1個が
あり、全体で3個のピットが存在する。

第一五六図 第一一二号土壤実測図、遺
物出土状態図

深さは底面下18~70cm。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層であるが、焼土ブロックが点在する。

出土遺物数は83個で、縄文土器片50個と自然石33個である。

平面分布状態は中央部に集中しており、垂直分布状態は中層にまとまっている。

縄文時代中期の土壌であろう。

89 第一一六号土壌（第一五九図）

本土壌はF-8~9に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈する。長軸300cm、短軸200cm、主軸線方向N-0°。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは中央部で25cm。

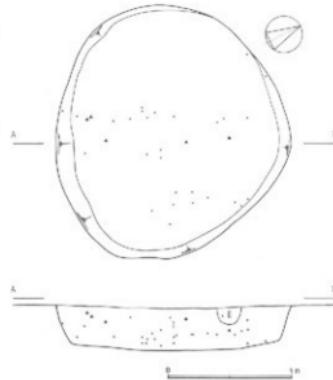
底面には起伏があり、3個のピットが存在する。

ピットの深さは20~45cmである。

埋没土の性状は3層に区分され、Iは黒色土、IIは暗褐色土、IIIは褐色土である。

出土遺物数は縄文土器の大形片2個のみである。南壁際より出土し、出土レベルは底面上3~10cmである。

縄文時代中期の土壌と思われる。



第一五七図 第一一三号土壌実測図、
遺物出土状態図

90 第一一八号土壌（第一六〇図）

本土壌はH-7~8に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、

径130×130cm。

掘り方はほぼ同様に掘り下げ
深さは112cm。

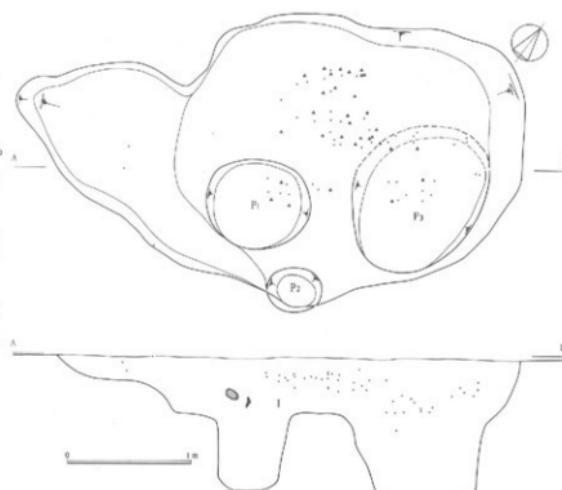
壁面は堅固で底面は平坦である。

埋没土の性状は黒褐色土の単一
層である。

出土遺物数は12個で、すべて縄
文土器片である。

平面分布状態は南側寄りにまば
らに散在し、垂直分布の在り方は
上層にのみまとまっている。

縄文時代中期の土壌であろう。



第一五八図 第一一四号土壌実測図、遺物出土状態図

91 第一一九号土壤 (第一六一図)

本土壤はF～G～9に位置する。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長軸290cm、短軸230cm、主軸線方向N-31°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ53cm、ピット部以外の底面はおおむね平坦である。

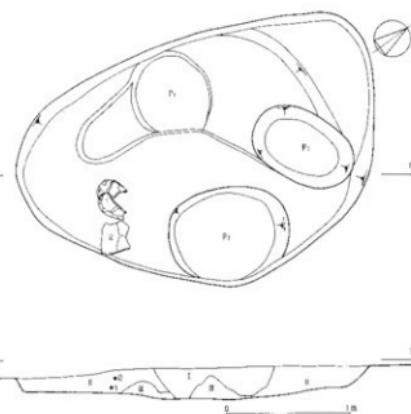
2個のピットが存在し、深さP₁24cm、P₂48cm。

埋没土の性状は2層に区分され、Iは暗褐色土、IIは黒褐色土、ところどころに焼土の小ブロックが点在する。

出土遺物数は34個で、大形片を含む縄文土器片32個と自然石2個である。

平面分布状態は北側に多く分布し、垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一五九図 第一一六号土壤実測図、遺物出土状態図

92 第一二一号土壤 (第一六二図)

本土壤はF～G～10に位置する。

開口部の平面形はほぼ円形を呈し、径130×130cm。掘り方はやや袋状に掘り込んで底面にいたる。

深さ70cm。底面形も円形で径は

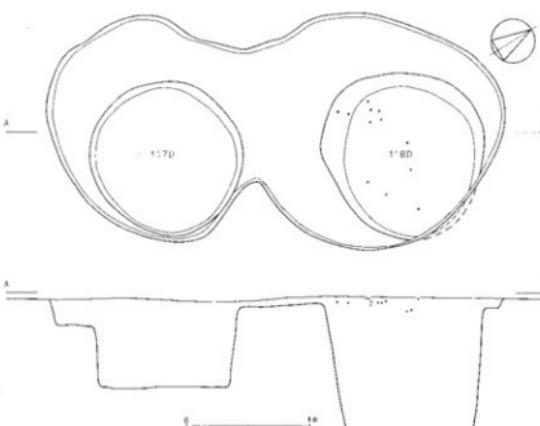
160×160cm。

埋没土の性状は2層に区分され、Iは暗褐色土、IIは明褐色土。

出土遺物数は14個で、縄文土器片13個、自然石1個である。

平面分布状態は開口部の範囲内に散在し、垂直分布の在り方は底面上と下層部に多い。

縄文時代中期の土壤であろう。



93 第一二二号土壤 (第一六三図)

本土壤はH～G～10に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径120×120cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ36cm。底面は平坦である。

出土遺物数は35個で、内訳は縄文土器片28個、自然石7個である。平面分布状態は中央より南東側にかけて多く、垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっている。縄文時代中期の土壤であろう。

第一六〇図 第一一七号(左)・第一一八号(右)土壤実測図、
遺物出土状態図

94 第一二四号土壤 (第一六四図)

本土壤はH-I-10-11に位置する。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長軸は200cm、短軸145cm。

掘り方は25~30cmほど内側へ斜めに掘り下げて頭部を形成した後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

底面は円形で径は235×230cm。深さ95cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

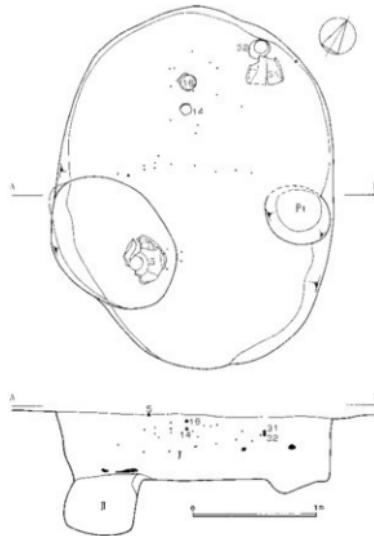
底面には多少の起伏があるもののおおむね平坦である。

出土遺物数はわずかに9個で、縄文土器片8個と自然石1個である。

平面分布状態はきわめて散発的である。

垂直分布の在り方は自然石を除いてすべて下層部に集中している。

縄文時代中期の土壤である。

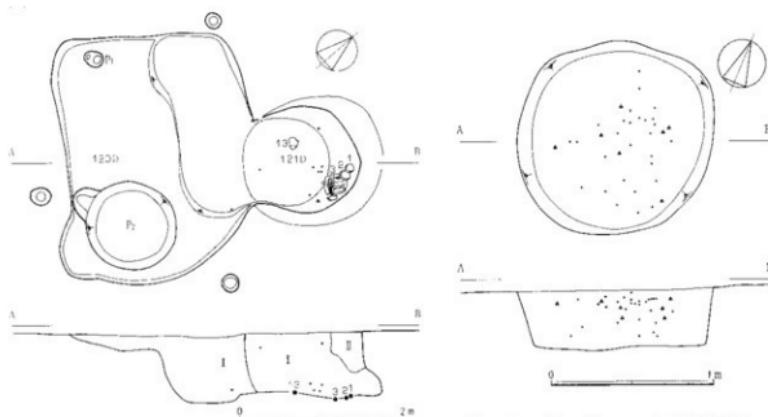


第一六一図 第一一九号土壤実測図、遺物出土状態図

95 第一二五号土壤 (第一六五図)

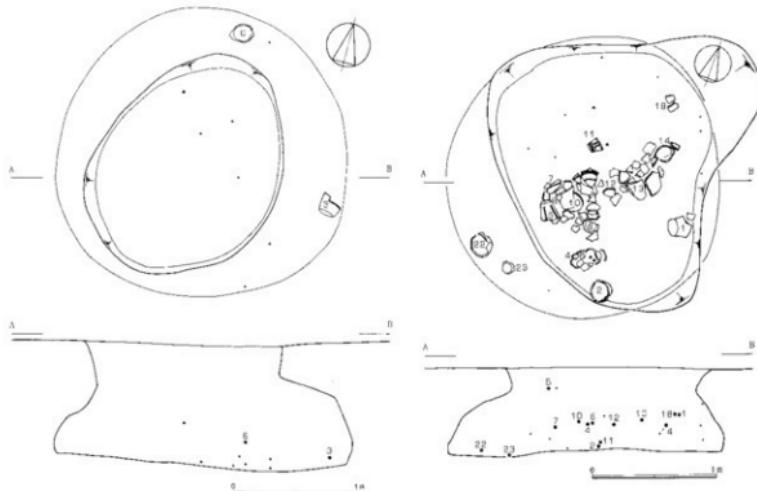
本土壤はL-10-11に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する、東西径170cm、南北径240cm。



第一六二図 第一二〇号(左)・第一一二号(右)
土壤実測図、遺物出土状態図

第一六三図 第一二二号土壤実測図、
遺物出土状態図



第一六四圖 第一二四號土壤實測圖，遺物出土狀態圖

第一六五図 第一二五号土壤実測図、遺物出土状態図

掘り方は20cmほど内側へ斜めに掘り下げて頭部を形成した後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

壁面は硬く崩落の痕跡は認められない。深さ70cmで底面には若干の起伏がある。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序を区分するような変化は認められない。

出土遺物数は27個で、内訳は縄文土器片23個と自然石4個となる。

平面分布状態はまばらではあるが全面に分布し、垂直分布の在り方は中層より下位にまとまっている。

縦文時代中期の土壌である。

96 第一二九量土壠（第一六六圖）

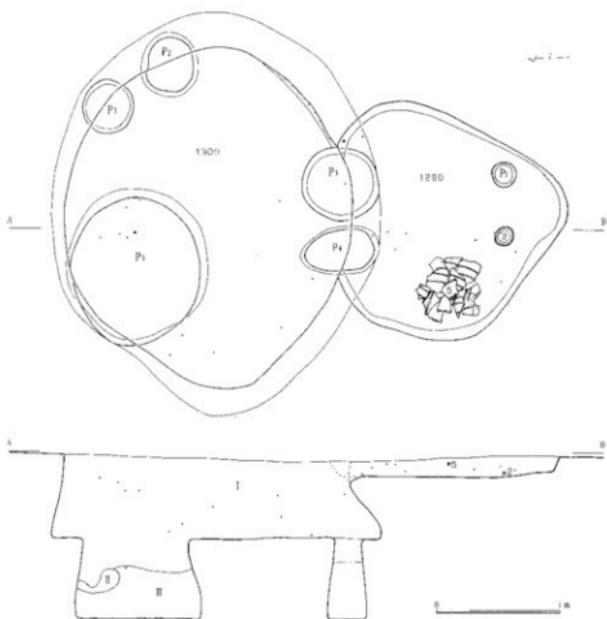
本土壇はL～K=13に位置し、北側は第一三〇号土壇と一部重複する。

開口部の平面形は不整形を呈し、東西径190cm、南北径190cm。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ深さ17cm。

底面はおむね平坦である。埋没土は暗褐色土の單一層。出土遺物数は10個で大形片を含む縄文土器片である。出土状態はきわめて散発的である。縄文時代中期の土壌であろう。

97 第一三〇号土壤 (第一六六图)

本土壤はL-K-13に位置し、南側は第一二九号土壌と一部重複する。開口部の平面形は梢円形を呈し、長軸325cm、短軸270cm、主軸線方向N-90°-E。掘り方はフ拉斯コ状に掘り込み深さ63cm。底面は平坦であるが5個のピットが存在する。深さ53-65cm。埋没土はI 黒色土、II は明褐色土、III 黒褐色土。出土遺物数は14個で、縄文土器片12個、自然石2個である。出土状態は平面・垂直とともに散発的。縄文時代中期の土壌である。



第一六六図 第一二九号（左）・第一三〇号（右）土壤実測図、遺物出土状態図

98 第一三一号土壤（第一六七図）

本土壙はJ～I-11～12に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸115cm、短軸98cm、主軸線方向N-53°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、深さは15cm、ピット以外の底面は平坦であるが踏み固めたような硬さはない。

A-Bセクションの東壁際と西壁際で2個のピットが存在する。

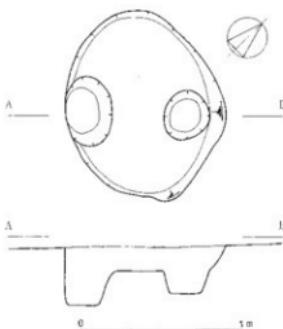
西壁際のP₁は径42×29cm、底面からの深さ21cm。東壁際のP₂は径30×29cm、底面からの深さ14cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序の変化は認められない。

出土遺物は1個で、硬玉製大珠である。

中央部北寄りの位置から出土し、出土レベルは底面上10cmである。

縄文時代中期の土壤である。



第一六七図 第一三一号土壤実測図、遺物出土状態図

99 第一三二号土壤（第一六八図）

本土壙はL～M-12～13に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸190cm、短軸160cm、主軸線方向N-50°-W。

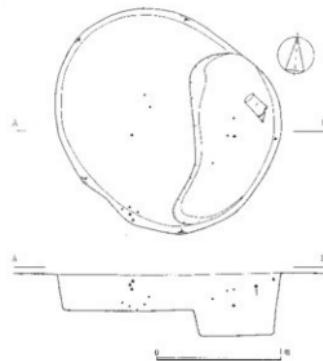
掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、本土壙の深さは29cmで平坦である。

東側には底面下20cmの掘込みがあり、この底面も平坦である。
埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序の変化は認められない。
出土遺物数は14個で、内訳は大形片を含む縄文土器片9個と、
自然石5個である。

平面分布状態はきわめて散発的で特に変った傾向は指摘できない。
垂直分布の在り方は、中層から下層に多い。
縄文時代中期の土壌と思われる。

100 第一三七号土壤（第一六九図）

本土壙はH-12に位置する。
開口部の平面形は不整椭円形を呈する。
長軸165cm、短軸110cm、主軸線方向N-59°-E。
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、中央部より北側は円形に掘り
込んでいる。円形部の深さは40cmで底面はほぼ平坦である。
南西部に径30×19cm、深さ18cmのピットが1個存在する。
埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。
出土遺物数は25個で、すべて縄文土器片である。平面分布状態は円形部内に集中し、垂直分布の在り方は、
中層より上位にまとまっている。縄文時代中期の土壙であろう。

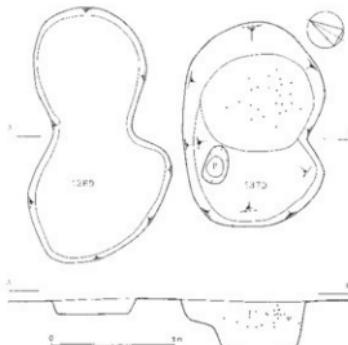


第一六八図 第一三二号土壤実測
図、遺物出土状態図

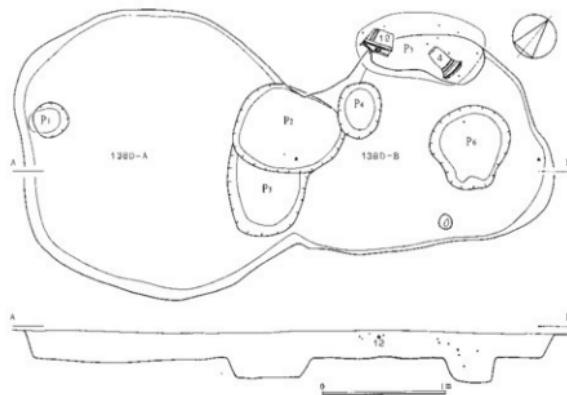
101 第一三八号土壤（第一七〇図）

本土壙はD-7～8に位置する。
椭円形状のA・B 2基の重複土壤であるが、遺物の出土しないAは割愛し、遺物の出土したBについてのみ記述する。
開口部の平面形は不整椭円形を呈する。
長軸推定200cm、短軸170cm、主軸線方向N-50°-E。
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、ピット部以外はおむね
平坦である。深さは22cm。
Bには6個のピットが存在するが、北壁際のP₅は径105cm
×55cm、底面下の深さは34cmで、大半の遺物はP₅のプラン
内から出土している。P₅以外のピットの深さは9～30cmで
ある。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序の変化はない。
出土遺物数は16個で、深鉢形の準完形品を含む縄文土器片
14個と自然石2個である。
平面分布状態を観察すると、土器のすべてはP₅のプラン
内に集中しており、垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっている。
No. 4の深鉢形土器の出土レベルは底面上30cm、横位で出土している。
縄文時代中期の土壙と思われる。



第一六九図 第一三七号土壤実測図、
遺物出土状態図



第一七〇図 第一三八号土壤実測図、遺物出土状態図

102 第一四一号土壤 (第一七一図)

本土壙はD-9に位置する。

平面形は不整形を呈し、東西径350cm、南北径390cm。

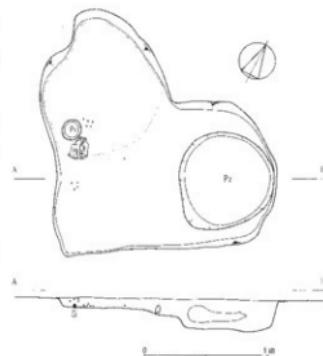
掘り方は内側へ斜めに掘り下げる。本土壙本体の深さは15cm前後で、東側に155×150cm、底面下30cmの深さの円形の土壤状掘り込みがある。底面には起伏がある。

埋没土の性状は2層に大別できるが、基本的には黒褐色土の單一層で、東壁寄りの埋没土中層にロームを主体とするブロック状の明褐色土が介在する。

出土遺物数は11個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態は西壁際の小範囲に偏在しており、垂直分布の在り方は深さ15cmの層中に点在する。

縄文時代中期の土壤であろう。



103 第一四三号土壤 (第一七二図)

本土壙はM-14に位置する。

北側一帯は調査区域外になってしまっており、開口部の平面プランは不整長方形状を呈する。確認プランの計測値は長軸420cm、短軸130cm、長軸線方向N-30°-E。

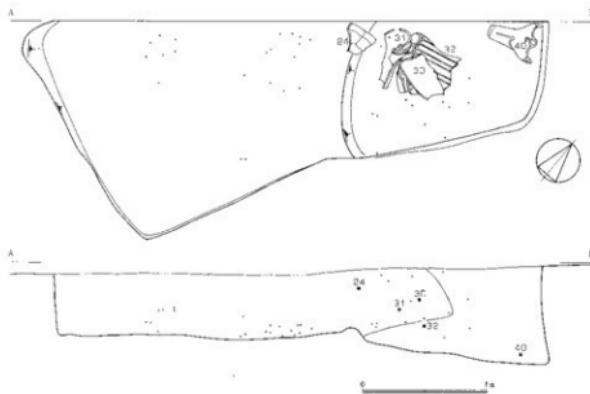
掘り方は西側はやや内側へ斜めに、東側は若干外側へ膨らむフラスコ状に掘り込み、東側が深く西側が浅い。

深さは東側80cm、西側50cmで底面には起伏がある。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は、準完形品や大形片を含む縄文土器片40個である。

第一七一図 第一四一号土壤実測図、遺物出土状態図



第一七二圖 第一四三號土壤実測図、遺物出土状態図

104 第一四四号土壤 (第一七三圖)

本土壙はG～H-12～13に位置する。

開口部の平面形は不整瓢箪形を呈するが、2基の土壤の重複である。遺物の出土した土壤の東西径は260cm、南北径260cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは黒褐色土で、黒色土がベースでローム粒子を混入する。

IIはI層よりわずかに明るい色相で、ローム小ブロックの混入が多い。暗褐色土である。

IIIは明褐色土で、II層より更に明るい色相になり、赤橙色ローム小ブロックが混在する。

出土遺物数は準完形深鉢形土器を含む縄文土器片19個と、多数の自然石である。

土器の平面分布状態を観察すると、きわめて限られた小範囲の2か所に分布しており、その1か所である北西隅からは深鉢形の準完形品が出土した。(No.19) 土器の垂直分布の在り方は、底面上の出土は皆無で中層にのみ分布する。

底面上には多数の自然石が配石遺構状に配列されている。

縄文時代中期の土壤であろう。

105 第一四六号土壤 (第一七四圖)

本土壙はE～F-8に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する。長軸450cm、短軸220cm、長軸方向はN-53°-W。

東壁に沿って幅55cmの浅い溝状遺構が走り、さらに幅8～12cm、深さ5cmのトレンチャー痕が2条、南北方向に走る。従って遺存状態良好とはいえない。

掘り方は斜めに掘り下げ、深さは20～30cmである。

4個のピットが存在し径55~120cm、深さは20~55cmである。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は13個で、縄文土器片12個と石器(石礫)1個である。

平面分布状態はきわめて散発的で空白部が多い。垂直分布の在り方は中層に多い。

縄文時代中期の土壤であろう。

106 第一四八号土壤 (第一七五図)

本土壤はD~E-7~8に位置する。

北側は調査区域外で、開口部の平面形は橢円形状を呈する。東西径220cm、南北径200cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは37cm。

ピット部以外の底面はおおむね平坦である。

2個のピットが存在し、P₁は径100×95cm、深さ45cm。P₂は径35×20cm、深さ35cm。

埋没土の性状はⅡの暗褐色土單一層であるが、埋没土の上に厚さ20cmの表土(耕作土)Ⅰが堆積する。

出土遺物数は27個で、深鉢形準完形品を含む縄文土器片である。

平面分布状態は、東から南東側にかけてやや濃密に分布しており、北から北西側にかけては皆無状態に近い。垂直分布の在り方は、中層にのみ散在している。No.1の出土レベルは底面上10cmで横位出土である。

縄文時代中期の土壤である。

107 第一四九号土壤 (第一七六図)

本土壤はE-8に位置する。

開口部の平面形は不整長橢円形を呈するが、2基の土壤の重複である。A・Bに分割したが、遺物の出土したBについてのみ記述することとする。

Bの長軸250cm、短軸175cm。長軸方向N-54°-W。東側は第一五〇号土壤と重複する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは80cmを測り、底面はほぼ平坦である。

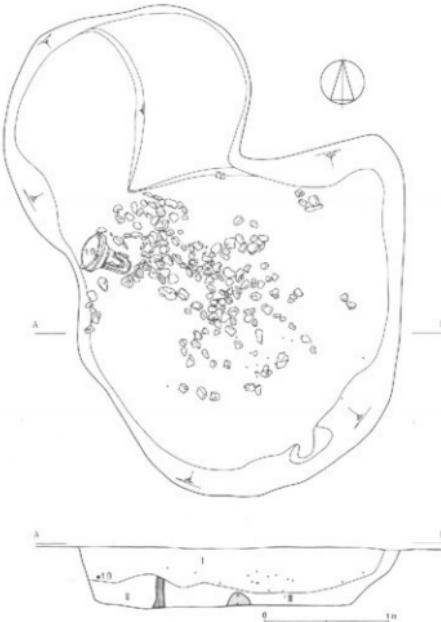
埋没土の性状は暗褐色の單一層で、層序を区分する変化は認められない。

出土遺物数は20個で、深鉢形土器の大形片を含む縄文土器片である。

平面分布状態はB土壤の北側にのみ集中している。

垂直分布の在り方は、すべての遺物が底面上10~20cmの間にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一七三図 第一四四号土壤実測図、遺物出土状態図

108 第一五〇号土壤（第一七七図）

本土壤はE-8~9に位置する。

開口部の平面形はほぼ円形を呈する。西側は第一四九号土壤と重複する。

東西径180cm, 南北径170cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは33cmである。

底面はピット部を除いておむね平坦であるが、西側は起状がある。

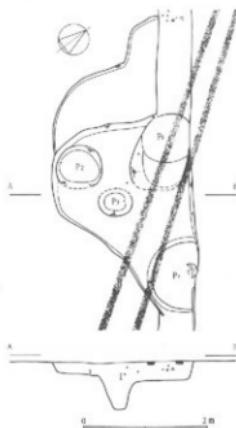
北壁際に1個のピットが存在する。長径75cm, 短径50cm。深さ52cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は14個で、縄文土器片13個と自然石1個である。

平面分布状態は空白部が多く、A-Bセクションに沿ってわずかに散在する。垂直分布のあり方は下層から上層までの間に点在する。

縄文時代中期の土壤であろう。

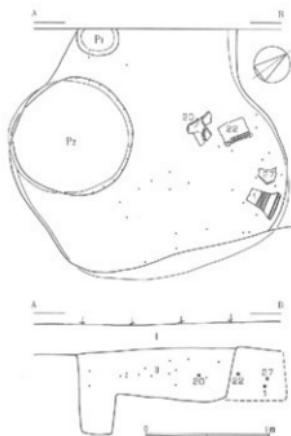


109 第一五二号土壤（第一七八図）

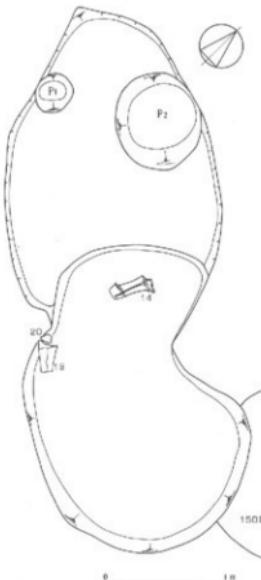
本土壤はF-9に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈しており、完掘後4個の土壤が重複していることが判明した。A-Dに4分割したが、遺物の出土はA・Bの2基なのでこの2基について記述する。

両者の開口部の平面形は不明であるが、底面形はAが椭円形、Bは円形を呈する。



第一七四図 第一四六号土壤実測図、遺物出土状態図



第一七五図 第一四八号土壤実測図、遺物出土状態図

第一七六図 第一四九号土壤実測図、遺物出土状態図

Aの長径265cm、短径220cm。Bの長径275cm、短径260cm。

東西径180cm、南北径170cm。

深さA55cm、B35cm。底面はおおむね平坦である。

7個のピットが存在し、規模は径23×20cm。深さ31cmから大は径110×80cm、深さ70cmとなる。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は46個で、縄文土器片43個と石器（凹石）3個である。

平面分布状態は、Aは8個できわめて散発的、BはA-Bセクションの両側70cmの範囲にまとまりがみられる。

垂直分布のあり方は中下層に多い。

縄文時代中期の土壤であろう。

110 第一五三号土壤 (第一七九図)

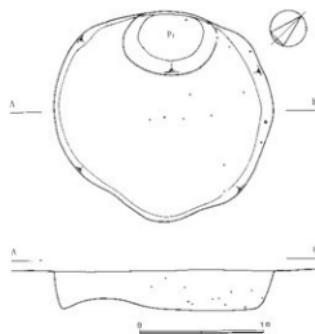
本土壤はE～F-10に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する。東西径260cm、南北径350cm。主軸線方向N-24°-E。

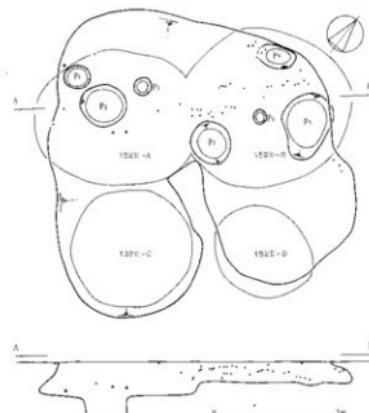
掘り方は若干内側へ斜めに掘り下げ、深さは20～30cmである。ピット部以外の底面はおおむね平坦である。

3個のピットが存在し、P₁径90×80cm、深さ17cm。P₂径115×90cm、深さ95cm。P₃径85×70cm、深さ78cm。埋没土の性状は暗褐色土の單一層。

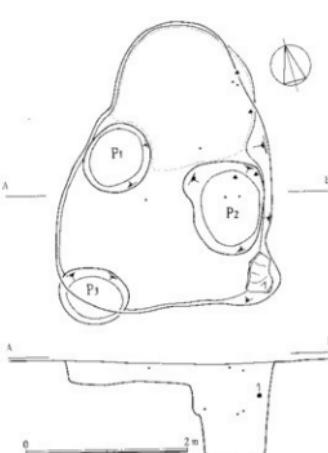
出土遺物数は11個で、縄文土器片7個と自然石4個である。



第一七七図 第一五〇号土壤実測図、遺物出土状態図



第一七八図 第一五二号A・B・C・D土壤実測図、遺物出土状態図



第一七九図 第一五三号土壤実測図、遺物出土状態図

平面分布状態はきわめてまばらで散発的である。

垂直分布のあり方は、竪穴内の出土は3個、P₂内出土が4個。

縄文時代中期の土壌であろう。

111 第一五四号土壌 (第一八〇図)

本土壌はE-10に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径110×105cm。

掘り方は開口部から外側へ膨らむフラスコ状に掘り下げ、深さは90cm。

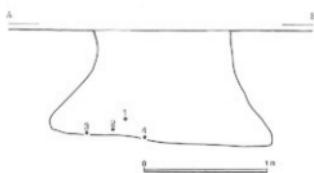
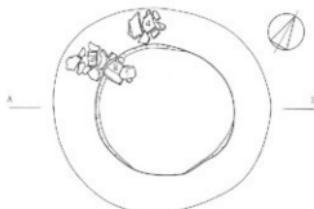
底面形も円形で径175×165cm。底面には若干の起状がある。

埋没土の性状は黒褐色土の単一層で層序区分線を入れるような変化は認められない。

出土遺物数は14個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態は北西隅の小範囲にまとまっており、垂直分布の在り方は底面上と下層部から出土している。

縄文時代中期の土壌であろう。



第一八〇図 第一五四号土壌実測図、遺物出土状態図

112 第一五五号土壌 (第一八一図)

本土壌はE-F-11に位置する。

2基が重複しており南北方向の長軸430cm、東西方向の短軸250cm。

北側をBとし南側をAとする。

両者とも内側へ斜めに掘り下げ、Aの深さ40cm、Bの深さ85cm。

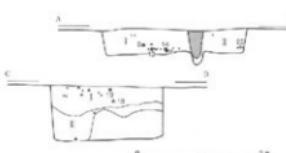
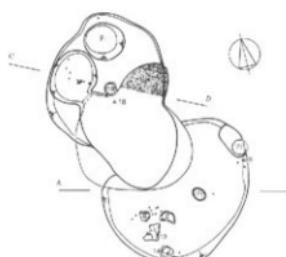
埋没土の性状はAが2層、Bは3層に区分される。

AのIは暗褐色土、IIは黒褐色土。

BのIは暗褐色土、IIは黒褐色土、IIIは明褐色土である。

出土遺物総数は30個で、縄文土器片25個、石器（石鏃）1個、自然石4個である。

平面分布状態も垂直分布の在り方も特に変った傾向は指摘できない。縄文時代中期の土壌であろう。



113 第一五六号土壌 (第一八二図)

本土壌はF-11-12に位置する。

開口部の平面形は北側に一部重複があるがおおむね梢円形が原形のように思われる。長軸480cm、短軸250cm。主軸線方向N-32°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは45cm。

ピット部以外の底面はほぼ平坦である。

9個のピットが存在し、径35×25cm、深さ19cmから径140×70cm、深さ50cmの規模である。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層であるが、セクションA側の中間層に厚さ5cm前後の帯状の鹿沼層が介在

第一八一図 第一五五号土壌実測図、遺物出土状態図

する。

出土遺物数は55個すべて縄文土器片である。

平面分布状態はA-Bセクションに沿った面に多く分布している。

垂直分布の在り方は中層より上位にまとまっている。
縄文時代中期の土壤であろう。

114 第一五七号土壤 (第一八三図)

本土壤はF~G-11に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径150×150cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ深さは42cm。

底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は12個と僅少で、縄文土器片7個と自然

石5個にすぎない。

平面分布状態はきわめて散発的、垂直分布も非常にまばらである。

縄文時代中期の土壤であろう。

115 第一五九号土壤 (第一八四図)

本土壤はG-12~13に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径240×220cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ75cm。底面は硬く平坦である。

南側にピット1個が存在し、径55×50cm、深さ65cm。

埋没土の性状は2層に区分される。

Iは黒褐色土、IIは褐色土で繰りがある。

出土遺物数は96個で、縄文土器半完成品を含む縄文土器片82個、石

器(凹石)2個、自然石12個である。

平面分布状態を観察すると南側3分の1程の面は全くの空白であるが、A-Bセクションの北側はおおむね万遍なく分布している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、下層と上層は皆無状態で中層部にのみ集中している。

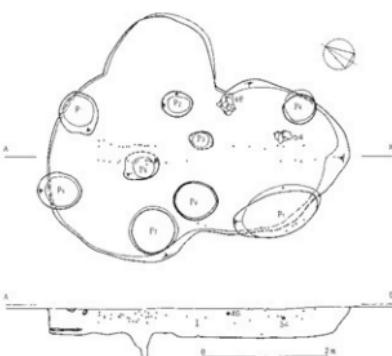
縄文時代中期の土壤であろう。

116 第一六三号土壤 (第一八五図)

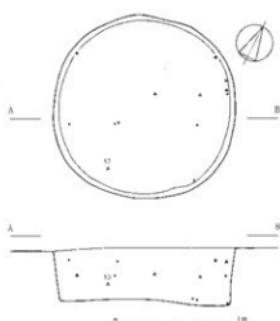
本土壤はG~H-14~15に位置する。

開口部の平面形は長楕円形状を呈する。長軸430cm、短軸200cm。長軸線方向N-0°。

掘り方は全体として内側へ斜めに掘り込んでいるが、中央部の東寄りに径140×140cm、深さ85cmの掘り込みがあり、これの東壁はフンスコ状を呈している。



第一八二図 第一五六号土壤実測図、遺物出土状態図



第一八三図 第一五七号土壤実測図、遺物出土状態図

深さは西が浅く東が深く、断面形は階段状を呈する。

西側20cm、東側90cm。

埋没土の性状は3層に区分できる。

Iは黒褐色土でローム粒子を微量混入。

IIは暗褐色土で炭化物少量散在。

IIIは褐色土でローム粒子の混入が多い。

出土遺物数は32個すべて縄文土器片である。

平面分布状態はA-Bセクションの南側にのみ分布する。

垂直分布の在り方は中層にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。

117 第一六四号土壤 (第一八六図)

本土はK-13~14に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径205×190cm。

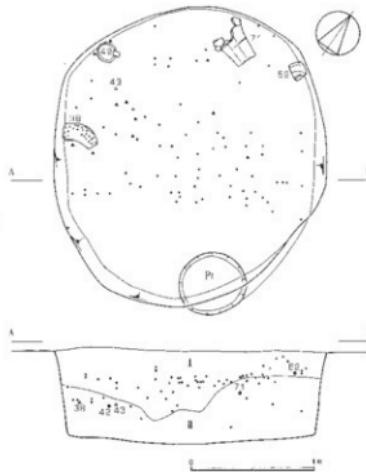
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは45cm。

底面はおむね平坦である。

埋没土の性状は2層に区分される。

Iは黒褐色土で炭化物細片が散在する。

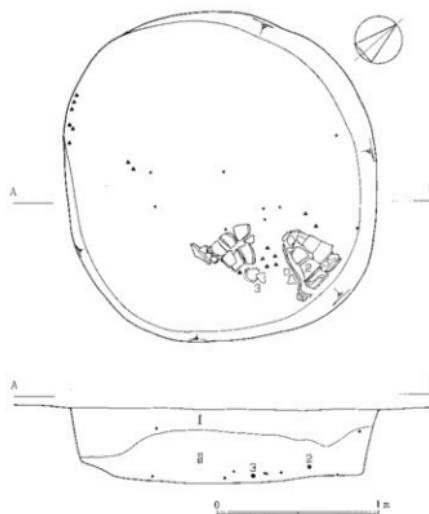
IIは褐色土でローム粒子の混入が多い。



第一八四図 第一五九号土壤実測図、遺物出土状態図



第一八五図 第一六三号土壤実測図、遺物出土状態図



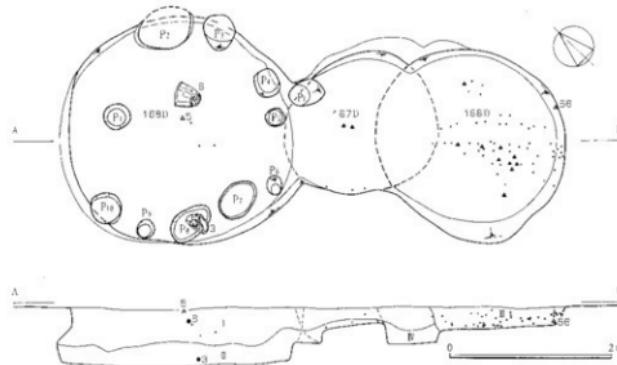
第一八六図 第一六四号土壤実測図、遺物出土状態図

出土遺物数は27個で、内訳は復元可能の深鉢形土器を含む縄文土器片11個と自然石16個である。

平面分布状態は土器についてのみ観れば南東隅のごく限られた小範囲に分布する。

垂直分布の在り方は下層に多く、特に変った傾向は指摘できない。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一八七図 第一六六号（右）・第一六七号（中）・第一六八号（左）土壤実測図、
遺物出土状態図

118・119・120 第一六六号（右）・第一六七号（中）・第一六八号（左）土壤（第一八七図）

本土壤は

3基の土壤が重複するが、分離せずに同一図面上に作成した。

開口部の平面形は各々円形を呈し、径は第一六六号240×235cm、第一六七号190×180cm、第一六八号は285×285cmである。

掘り方は第一六八号の西壁がフラスコ状に掘り込まれているが、他は内側へ斜めに掘り下げ、深さは28cm、23cm、70cmを測る。底面は第一六八号はほぼ平坦であるが、他は起状がある。

埋没土層観察のためのベルト設定は、3基一線上のA-Bセクションとした。

埋没土の性状は4層に大別することができる。Iは黒褐色土で微量のローム粒子を混入する。IIはローム粒子と赤橙色ローム小ブロックを混入する褐色土。IIIはローム粒子を混入する暗褐色土。IVはローム粒子の混入が多い褐色土である。

第一六八号土壤には10個のピットが存在する。規模は25×23cm、深さ33cm～75×22cm、深さ52cm。

出土遺物数は第一六六号土壤は66個で、内訳は縄文土器細小片55個、石器（凹石）1個、自然石10個である。

平面分布状態は中央部から東側にかけて濃密であり、垂直分布の在り方は下層から上層まで万遍なく分布している。ゴミ捨場的な様相が窺える。第一六七号は5個で、縄文土器片3個と自然石2個となる。

平面分布状態は南壁際にわずかに分布するのみで垂直分布の在り方も上層と下層に点在する。

第一六八号は7個で、深鉢形土器の半完形品を含む縄文土器6個と凹石1個である。

平面分布状態は中央部に小さなまとまりをみせている。垂直分布の在り方は中央部に限られるが下層から上層まで点在する。3基ともに縄文時代中期の土壤であろう。

121 第一六九号土壤 (第一八八図)

本土壤はL-14に位置する。

開口部の平面形は円形 (200×190cm) と不整長方形状の2基が重複する複雑なプランを呈するが、一括して第一六九号土壤とした。

長方形状の長軸360cm、短軸210cm、主軸線方向N-36°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、円形プランの深さは45cm、長方形状の深さは25~40cm。

底面に硬さはなく平坦な部分と起状のある面がある。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序を区分できるような変化は認められない。

円形プランの南壁際にピットが1個存在する。径50×40cm。

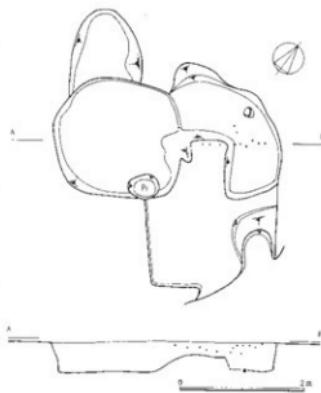
深さは35cm。性格は不明である。

出土遺物数は14個すべて縄文土器片である。

平面分布状態はきわめて偏在的で、長方形状土壤のA-Bセクションに沿ったごく限られた範囲内にのみ分布する。

垂直分布の在り方は底面上が2個で、大部分は中層と上層にまとまっている。

縄文時代中期の土壤と考えられる。



第一八八図 第一六九号土壤実測図、遺物出土状態図

122 第一七〇号土壤 (第一八九図)

本土壤はL-14~15に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。径240×220cm。南側は第一七一号土壤と重複する。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは40×48cm。底面はピットを除いておおむね平坦であるが、中央部はやや深い傾向を示す。3個のピットが存在し断面図に現れたP₂は径48×45cm。深さ50cmである。

埋没土の性状は3層に区分することができる。Iは黒褐色土、IIは暗褐色土、IIIは明褐色土。

出土遺物数は28個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は中央部にまとまっており、垂直分布の在り方は下層と上層には少なく中層に多い。

縄文時代中期の土壤と思われる。

123 第一七一号土壤 (第一九〇図)

本土壤はK-15に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。径290×320cm。北側は第一七〇号土壤と、南側は第一八一号土壤と重複している。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは30cm前後で若干の起伏はあるものおおむね平坦である。その底面に4個のピットが存在し、規模は40×40cm~85×80cm、深さ30~55cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、区分線を入れるような層序の変化は認められない。

出土遺物数は17個で縄文土器片16個と自然石1個である。平面分布状態は中央部付近にわずかに散在する程度で、垂直分布の在り方は中層と上層に多い。

縄文時代中期の土壤であろう。

124 第一七二号土壤 (第一九〇図)

本土壤はJ-15に位置する。

開口部の平面形は北側が方形に近く南側は半円形状を呈する。東西径300cm、南北径317cm。

掘り方は確認面から50cmの深さまでは内側へ斜めに掘り下げて径185×170cmの円形の頭部を形成し、さらに外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる底面形も円形で径280×250cm。深さ103cm。

底面は鹿沼層に達しており、硬さはない。ゆるやかな起状はあるがおおむね平坦である。

埋没土の性状は4層に区分することができる。

Iは炭化物の点在する黒褐色土。IIはローム粒子を多量に混入する褐色土。IIIは黒色土。IVは少量の鹿沼粒子を含む暗褐色土である。

出土遺物総数は23個で、縄文土器片17個と磨石1個と自然石5個となる。

平面分布状態はA-Bセクションの南側は皆無空白で、北側にまばらに散在する。

垂直分布の在り方は中層から上層にかけて点在する。

縄文時代中期の土壤である。

125 第一七四号土壤 (第一九一図)

本土壤はI-14に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径180×165cm。

掘り方はわずかに斜め内側へ掘り下げ、深さは40cm。

底面は平坦で硬い。掘り方断面は箱形を呈する。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序を区分できるような変化は認められない。

出土遺物数は65個で、浅鉢形土器の大形片を含む縄文土器片である。

平面分布状態は特に変った傾向を指摘することはできないが壁面直下を除いて広く分布している。

垂直分布の在り方は中層に多く集中している。この出土状態から看取できることはゴミ捨棄的性格を有する縄文時代中期の土壤のように考えられる。

126 第一七五号土壤 (第一九二図)

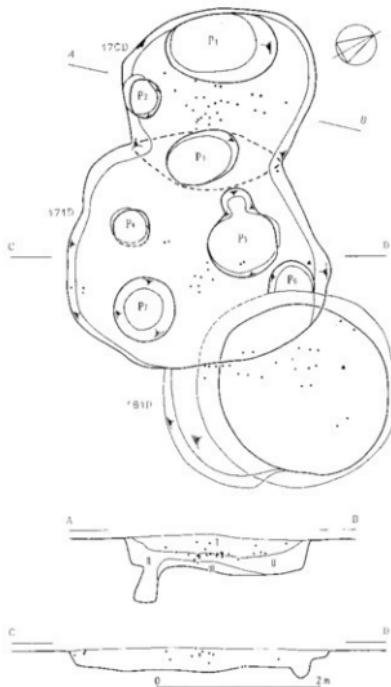
本土壤はM-15に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。東西径145cm、南北径125cm。

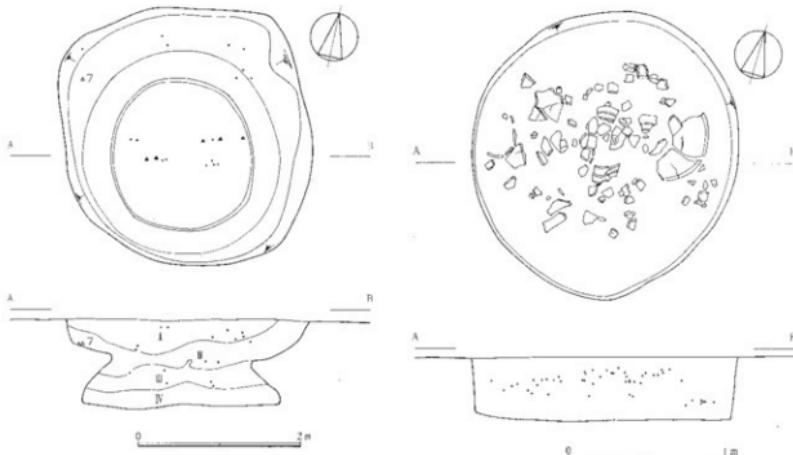
掘り方は西側をほぼ垂直に、東側はフラスコ状に掘り下げて深さは73cmを測る。底面は平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で層序に変化は認められない。

出土遺物数は16個で、深鉢形土器の完形品1個を含む縄文土器片である。



第一八九図 第一七〇号(上)・第一七一号(中)・第一八一号(下) 土壤実測図、遺物出土状態図



第一九〇図 第一七二号土壤実測図、遺物出土状態図

平面分布状態は中央部から北側にかけては全くの空白で、南側寄りにわずかに散在する。No14の深鉢形土器は西壁際の中層より横位で出土している。

垂直分布の在り方は中層に帯状にまとまっている。
縄文時代中期の土壤である。

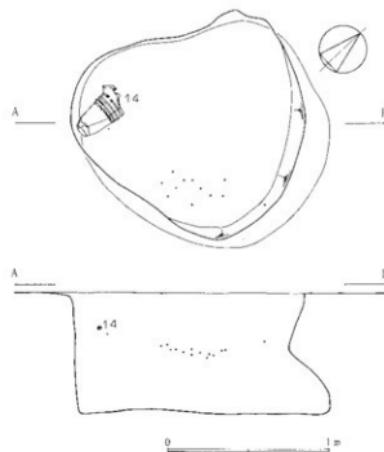
127 第一七六号土壤（第一九三図）

本土壤はN-15に位置する。
開口部の平面形は梢円形を呈する。
長軸120cm、短軸97cm、長軸線方向N-36°-W。
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ深さは430cm。
底面は硬く平坦である。
埋没土の性状は暗褐色土の單一層。
出土遺物は浅鉢形土器1個で北西隅の底面上12cmのレベルから出土した。縄文時代中期の土壤である。

128 第一七八号土壤（第一九四図）

本土壤はM-15に位置する。
開口部の平面形は梢円形を呈する。東側は第一七九号土壤とわずかに重複する。
長軸340cm、短軸260cm。長軸線方向N-90°-W。

第一九一図 第一七四号土壤実測図、遺物出土状態図



第一七四図 第一九二号土壤実測図、遺物出土状態図

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる底面にいたる。深さ25~40cm。

底面には2個のピットが存在し、深さは41~52cm。さらに東側には径170×120cm、深さ40cmの掘り込みがある。

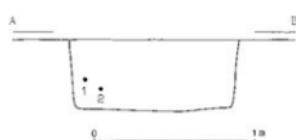
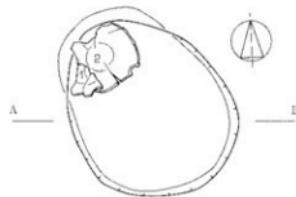
ピット部を除いた底面には起状が多く平坦ではない。

埋没土の性状は3層に区分することができる。

Iは黒褐色土で炭化物を混入する。IIは明褐色土、IIIは褐色土である。

出土遺物数は55個で、深鉢形土器の復元可能品1個を含む縄文土器片である。平面分布状態はまばらではあるが全面に分布している。

垂直分布状態の在り方は下層から上層まで各層に分布しているが、特に上層に多い。復元可能な深鉢形土器は南西隅の底面上10cmのレベルから横位で出土した。縄文時代中期の土壤である。



第一九三図 第一七六号土壤実測図、遺物出土状態図

129 第一七九号土壤 (第一九四図)

本土壤はL~M-15に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径160×150cm。西側は第一七八号土壤とわずかに重複する。

掘り方は内側へ斜めに掘り込んだ部分とフラスコ状の部分があり、底面に浅い掘り込みもある。

深さは50cm前後で硬さはない。埋没土の性状は暗褐色土の単一層。

出土遺物数は12個で、縄文土器10個と自然石2個である。

平面分布・垂直分布ともにきわめて

まばらである。

縄文時代中期の土壤であろう。

130 第一八〇号土壤 (第一九五図)

本土壤はL-14~15に位置する。

開口部の平面形は不整椭円形を呈する。長軸370cm、短軸205cm。長軸線方向N-0°。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ深さは45~65cmで中央部が深い。

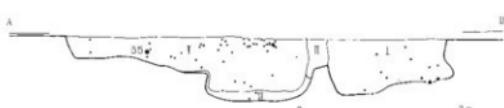
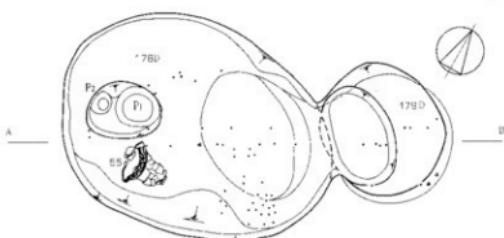
底面に硬さはない。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

ピット1個が存在し径45×45cm、深さ37cm。北東隅に深さ15cmほどの窪み

がある。出土遺物数は18個で、大形片を含む縄文土器片である。平面分布状態は南東隅に大形片が集中する以外はまばらに散在する。垂直分布状態は中層より下位にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。



第一九四図 第一七八号(左)・第一七九号(右)土壤実測図、遺物出土状態図

131 第一八一号土壙(第一八九図)

本土壙はK-L-15~16にある。
開口部の平面形は円形を呈し、
径210×205cm。

西側は第一七一号土壙と重複する。掘り方はフラスコ状に掘り込んで深さ70cm。

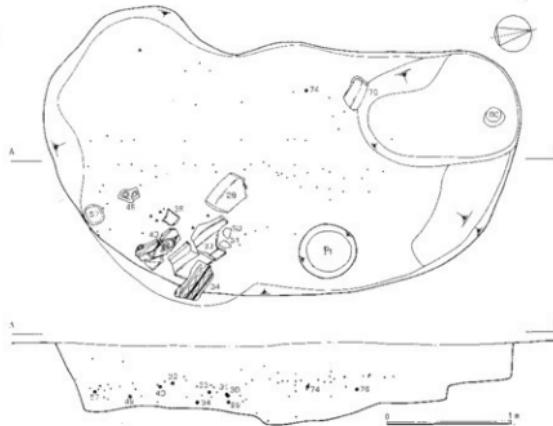
底面径は240×240cmで円形を呈する。底面は平坦で硬い。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は26個で縄文土器片25個と自然石1個である。

平面分布状態は南側はほとんど空白で、北側にまとまりをみせて
いる。垂直分布の在り方は中層に集中する。

縄文時代中期の土壙であろう。



垂直分布の在り方は中層より下位に集中し、底面直上部の分布も多い。

火炎系完形土器の出土地点は南壁際の底面上で横位の出土である。

133 第一八五号土壤 (第一九七図)

本土壤は I ~ J - 16 に位置する。

開口部の平面形は橢円形を呈し、長軸 420cm、短軸 290cm、主軸線方向 N - 24° - W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、本体の深さは 35cm。

南東側に深さ 10cm ほどの窪みがある。

5 個のビットが存在し、その規模を長径 × 短径 × 深さ (単位 cm) の順に列記すると次のとおりである。

P₁ = 85 × 50 × 40, P₂ = 30 × 30 × 13, P₃ = 40 × 40 × 37, P₄ = 72 × 65 × 23, P₅ = 65 × 60 × 45 を計測し、本土壤に付随するビットであろう。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、区分線を入れるような層序の変化は認められない。

出土遺物数は 16 個で、縄文土器片 15 個と自然石 1 個である。平面分布状態は南東側にわずかに散在する程度である。垂直分布の在り方は底面直上部と中層に多い。縄文時代中期の土壤であろう。

134 第一八六号土壤 (第一九八図)

本土壤は J ~ K - 16 に位置する。

開口部の平面形は不整形を呈する。東西壁間 260cm、南北壁間 270cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは 23 ~ 30cm で底面に硬さはなく起伏が多い。埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、出土遺物は皆無である。

南東側の底面下より袋状土壤が現れたが第一八六号土壤として調査することとした。

開口部の平面形は橢円形を呈し、長軸 180cm、短軸 130cm、主軸線方向 N - 90° - E。

掘り方は内側へ斜めに 25 ~ 30cm ほど掘り下げて頭部を形成した後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。深さは確認面より 95cm。

底面形も橢円形を呈し、長軸 245cm、短軸 195cm。底面は平坦で硬い。

埋没土の性状は 2 層に区分することができる。

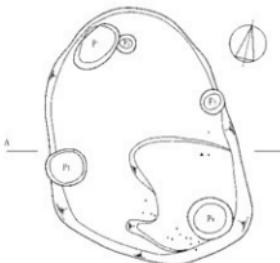
I は暗褐色土、II は黒褐色土で固く締っており炭化物粒子が点在する。

出土遺物数は 11 個と少なくすべて縄文土器片である。

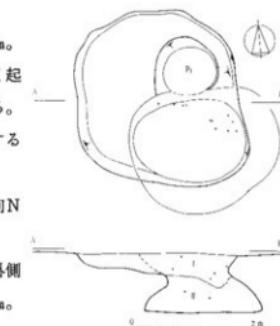
平面分布状態は空白部が多く、北側の小範囲にわずかに点在する程度である。

断面図に投影した垂直分布の在り方は中層から上層にかけてまばらに散在している。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第一九七図 第一八五号土壤
実測図、遺物出土状態図



第一九八図 第一八六号
土壤実測図、
遺物出土状態図

135 第一八七号土壤（第一九九図）

本土壤はJ～K-16～17に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸313cm、短軸260cm、主軸線方向N-33°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、土壤本体の深さは42cmで、ピット存在部以外の底面はおおむね平坦である。北側に4個、南側に1個、計5個のピットが存在し、その規模は径45×40cm～95×60cm。深さは30～55cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

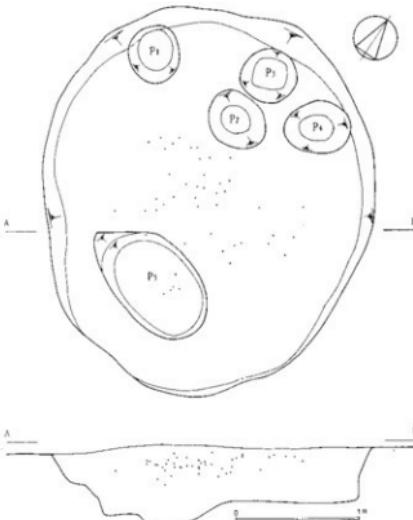
出土遺物数は48個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は壁面下周縁部は全くの空白で、中央部付近にまとまっている。

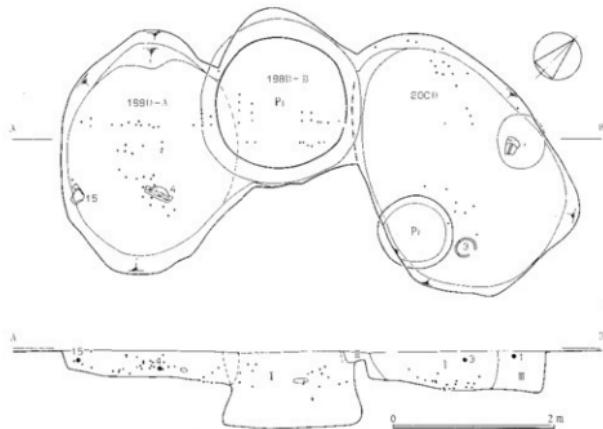
垂直分布の在り方は中層から上層にかけて散在している。

この出土状態は、土壤廃絶後の埋戻しと同時に投棄されたことを物語るものであろう。

縄文時代中期の土壤と思われる。



第一九九図 第一八七号土壤実測図、遺物出土
状態図



第二〇〇図 第一八八号A・第一八八号B・第二〇〇号土壤実測図、遺物出土
状態図

136 第一八八号土壤 (第二〇〇図)

本土壤はK-16に位置する。

開口部の平面形は梢円形と円形の重複したプランで、西側（左）をA、東側（右）をBとし、第一八八号土壤として調査することとした。

Aの開口部は梢円形で、長軸300cm、短軸220cm、主軸線方向N-45°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り込み、深さは25~35cmで底面に硬さはなく若干の起伏があり、東側がやや深い。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層で層序の変化は認められないがロームブロックが存在する。

出土遺物数は43個で、縄文土器片36個と自然石7個である。

平面分布状態は中央部に多く、垂直分布の在り方は各層に散在する。縄文時代中期の土壤であろう。

Bの開口部は円形で径160×160cm。東側はわずかに第二〇〇号土壤と重複する。

掘り方は開口部から内側にわざかに斜めに30cmほど掘り下げて頸部を形成し、そこより外側へ膨らむフラスク状に掘り込んで底面にいたる。深さ95cmで底面に硬さはないが平坦である。

底面形も円形を呈し、径200×200cmを測る。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層であるが、ローム中ブロックが1個存在する。

出土遺物数は25個すべて縄文土器片である。

平面分布状態を観察すると、中央より北側は空白皆無で、南側にのみ散在する。

断面図に投影した垂直分布の在り方は中層にまとまっている。

縄文時代中期の袋状土壤である。

137 第一九〇号土壤 (第二〇一図)

本土壤はL-15に位置し北側は第一九二号土壤と重複。

開口部の平面形は円形を呈し、径110×110cm。

掘り方は内側へわざかに斜めに掘り下げ、深さ32cm。

南側に深さ27cmのピット1個が存在し、このピット内より縄文土器片1個、自然石1個、計2個の遺物が出土しただけである。縄文時代中期の土壤と思われる。

138 第一九一号土壤 (第二〇一図)

本土壤はL-15に位置し東側は第一九二号土壤と重複。

開口部の平面形は円形を呈し、径130×125cm。

掘り方は円筒形に掘り下げ底面は鹿沼層に達し、深さは105cm。底面の硬さはないがおおむね平坦である。

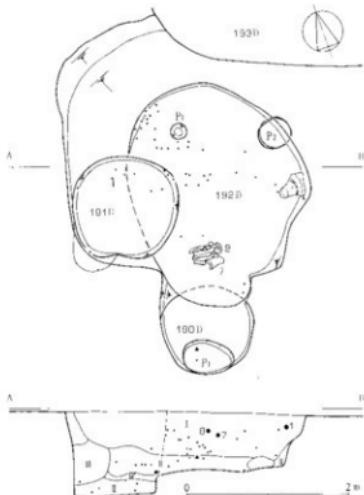
埋没土の性状は3層に区分できる。

Iは黒色土に微量のローム粒子を混入している。

IIは黒褐色土。IIIは暗褐色土。III'は暗褐色土の層中に赤橙色ローム粒子が散在する。

出土遺物数は11個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態は北側に多く、垂直分布の在り方は中層よ



第二〇一図 第一九〇号・第一九一号・
第一九二号土壤実測図、遺
物出土状態図

り下位にまとまっている。

縄文時代中期の土壙である。

139 第一九二号土壤 (第二〇一四)

本土壤はL-15-16に位置し、北側部分は第一九〇号土壤と、南側部分は第一九一号土壤と重複する。本土壤がわずかに新しい。

開口部の平面形は橢円形を呈し長軸275cm, 短軸220cm。主軸線方向N-25°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ72cm。底面には若干の起伏があるがおおむね平坦である。深さ85cmと28cmのビットが2個存在する。

埋没土の性状は2層に大別される。

Iは黒色土。IIは墨褐色土である。

東壁下底面上にはローム中ブロックが存在する。

出土遺物数は40個で、大木8a式深鉢形土器を含む縄文土器片である。

平面分布状態は、中央部より北側に濃密に分布している。

断面図に投影した垂直分布の在り方は、中層部に集中している。

No 1 の出土レベルは確認面下12cm。No 7・8 は確認面下20cmである。

縄文時代中期の土壌である。

140 第一九三号土壤 (第二〇二図)

本土壤はM-15~16に位置する。

開口部の平面形はやや椭円形を呈する。長軸250cm、短軸185cm。

掘り方は西側をほぼ垂直に、東側をフラスコ状に掘り込んでいる。

深さは西側が60cm、東側は80cmを

底面形は円形で、径230×215cm。

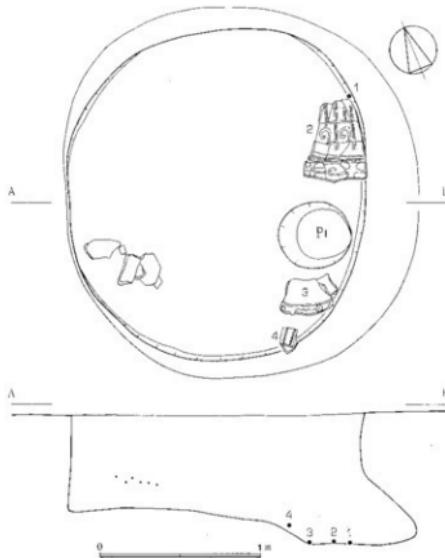
埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、区分線を入れるような層序の変化は認められない。

南東側にピット 1 個が存在する。規模は径 45×40cm、深さ 55cm である。本土壤に付随するピットであろう。
出土遺物数は 10 個で、復元可能な大木 8 a 式深鉢形土器を含む縄文土器片 9 個と、土製品（輪鼓状耳飾り）
1 個である。

平面分布状態を観察すると、東側の開口部に沿って分布しており、南西部にも同一個体片がある。

垂直分布の在り方は、東側開口部直下の底面上および直上部の出土が大半を占める。

縄文時代中期後半の土壤であろう。



第二〇二図 第一九三号土壤実測図、遺物出土状態図

141 第一九四号土壙（第二〇三図）

本土壙はM-N-16に位置する。

開口部確認時の黒色土プランは複雑な不整形を呈していたが、南側の浅い擾乱状の部分を除いて北側の円形状のプラン2基を土壙として調査することとした。

右図の左側が第一九四号、右側が第一九五号土壙である。

開口部の平面形は径220×220cmの円形であったろうと想定される。

掘り方も内側へ斜めに掘り込んだものと思われる。深さは70cm。3個の遺物が出土している。縄文土器である。

縄文時代中期の土壙であろう。

142 第一九五号土壙（第二〇三図）

本土壙はM-16~17に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。

皿状に近い掘り方で、深さは23cm。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

遺物数は2個で縄文土器である。

きわめて散発的な出土状態であることはいうまでもない。

縄文時代中期の土壙であろう。

143 第一九六号土壙（第二〇四図）

本土壙はL-16~17に位置する。

開口部の平面形は不整円形と思われる。

東西径175cm（推定）、南北径185cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ62cm。

底面は皿状である。

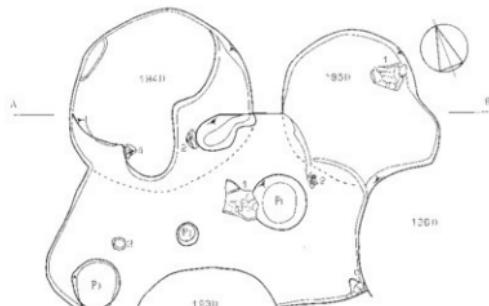
埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は27個で、縄文土器片22個、自然石5個となる。

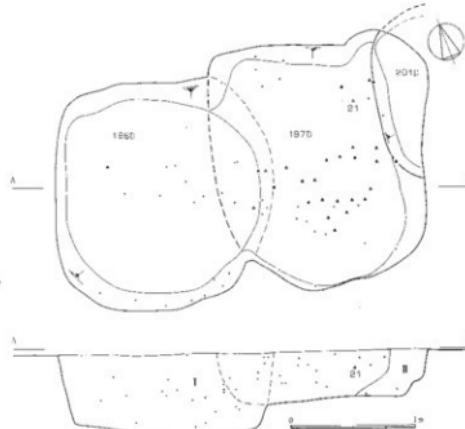
平面分布状態はまばらに散在している。

垂直分布の在り方は下層から上層にわたっている。

縄文時代中期の土壙と考えられる。



第二〇三図 第一九四号（左）・第一九五号（右）土壙実測図、遺物出土状態図



第二〇四図 第一九六号（左）・第一九七号（右）土壙実測図、遺物出土状態図

144 第一九七号土壤 (第二〇四図)

本土壤はL～M-16～17に位置し、東側は第二〇一号土壤、西側は第一九六号土壤と重複している。

開口部の平面形は隅丸方形形状を呈し、東西壁間170cm、南北壁間200cmを測る。

掘り方は内側へ斜めに掘り込み、深さは37cm。底面に硬さはないが、おおむね平坦である。

埋没土は2層に大別され、Iは暗褐色土、IIは褐色土である。

出土遺物数は43個で、縄文土器片20個、石器（石鎌）1個、自然石22個となる。

平面分布状態はほぼ全面に散在し、垂直分布の在り方は各層におよんでいる。縄文時代中期の土壤であろう。

145 第一九八号土壤 (第二〇五図)

本土壤はL～M-16に位置し、東側は第一九九号土壤と重複する。

開口部の平面形は円形を呈するものと思われる。推定径は200×200cmほどであろう。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは15～35cmで西側が深く、底面には起伏がある。

埋没土はI 黒色土・II 黒褐色土・III 暗褐色土・IV 褐色土である。

2個のピットが存在し、P₁径100×90cm、深さ40cm。P₄径55×47cm、深さ45cmである。

出土遺物数は29個で、大形片を含む縄文土器片6個と自然石23個である。

平面分布状態は南西隅に集中し、垂直分布の在り方は各層に点在する。縄文時代中期の土壤と考えられる。

146 第一九九号土壤 (第二〇五図)

本土壤はL-16～17に位置し、西側は第一九八号と重複する。

開口部の平面形は不整形を呈し、東西径280cm、南北径300cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは西側15cm、東側45cmで、底面は西から東へ傾斜する。

2個のピットが存在し、P₂径33×33cm、深さ18cm。P₃径115×55cm、深さ67cm。

埋没土の性状は2層に区分することができる。

Iは黒色土、IIは黒褐色土で比較的締りがある。

出土遺物数は63個で、縄文土器片61個、石器（石鎌）1個、自然石1個となる。

平面分布状態はほぼ全面に万遍なく分布しており、特に変った傾向は指摘できない。

断面図に投影した垂直分布の在り方は下層から上層までに及んでいる。

縄文時代中期の土壤であろう。

147 第二〇〇号土壤 (第二〇〇図)

本土壤はL-16～17に位置する。南西部は第一九八号土壤とわずかに重複する。

開口部の平面形は梢円形を呈し、長軸340cm、短軸230cm、主軸線方向N-90°-W。

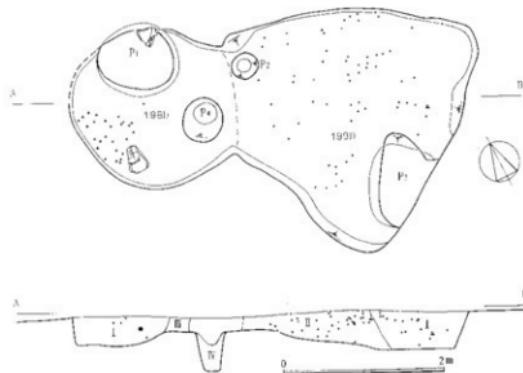
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは西側30cm、中央部47cm、東側50cmを測る。

2個のピットが存在し、P₁径93×90cm、深さ48cm。P₂径68×60cm、深さ30cm。

埋没土の性状は3層に区分できる。Iは暗褐色土、IIは褐色土、IIIは明褐色土。

出土遺物数は27個ですべて縄文土器片である。平面分布状態はきわめて散発的であり、垂直分布の在り方は底面上と直上部の分布が多い。

縄文時代中期の土壤であろう。



第二〇五図 第一九八号（左）・第一九九号（右）土壤実測図、遺物出土状態図

148 第二〇一号土壤（第二〇六図）

本土壙はL-17に位置する。

本体の開口部平面形は橢円形を呈する。

長軸340cm、短軸260cm、主軸線方向N-43°-W。北西側は袋状土壤と重複し、東側は深さ25cmのピットによって東壁の一部に損傷がある。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ23cm。

ピット存在部以外の底面は平坦である。

底面東寄りの位置に径100×100cm、深さ50cmのピットが1個存在する。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層で層序の変化は認められない。

出土遺物数は41個で、縄文土器片31個、自然石9個、石器（凹石）1個である。

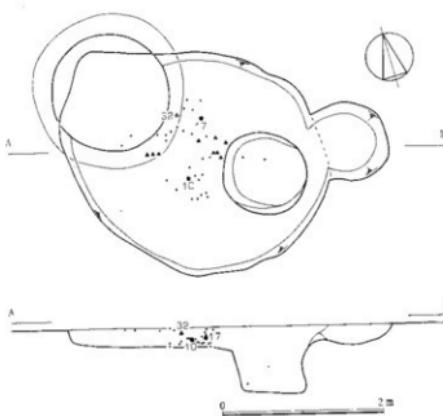
平面分布状態は中心部にのみ集中している。

垂直分布の在り方は中央部の幅110cmの層中にまとまっている。ピット内出土は2個である。

縄文時代中期の土壤であろう。

149 第二〇四号土壤（第二〇七図）

本土壙はL-18に位置する。



開口部の平面形は橢円形を呈する。

西側は第二〇三号土壙と、南東側は第二〇五号土壙と接している。

長軸240cm、短軸180cm、主軸線方向N-40°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ30cm。

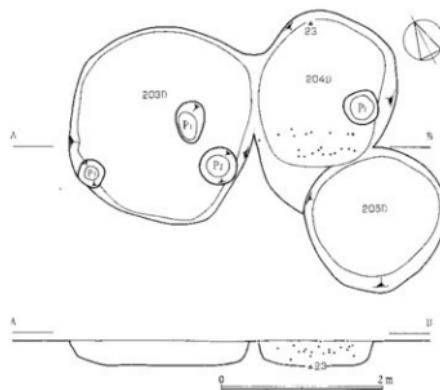
西寄りにピット1個が存在するが、底面はおむね平坦である。

埋没土の性状は黒褐色土の單一層である。

出土遺物数は22個で、縄文土器片21個と石器(石錐)1個である。

平面分布状態は北壁直下に石器が出土した以外は南側にのみ偏在する。

垂直分布の在り方は石器のみ底面直上で土器片は各層にまばらに散在する。
縄文時代中期の土壙と思われる。



第二〇七図 第二〇三号・第二〇四号・第二〇五号
土壙実測図、遺物出土状態図

150 第二一三号土壙 (第二〇八図)

本土壙はL-M-18-19に位置する。

開口部の平面形はおおむね円形を呈し、径220×220cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは東側31cm、西側46cmで、南東部に深さ30cmの掘り込みがある。

底面は顯著な凹凸はないが起伏が認められる。

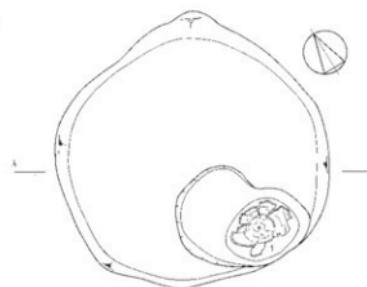
埋没土の性状は3層に大別することができる。

Iは黒色土、IIは黒褐色土、IIIは明褐色土である。

出土遺物は1個で、縄文土器浅鉢形土器である。

南東部の底面上より出土している。

縄文時代中期の土壙である。



151 第二一四号土壙 (第二〇九図)

本土壙はL-M-18-19に位置する。

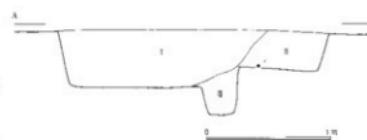
開口部の平面形は不整形を呈し、長軸330cm、短軸220cm、主軸線方向N-50°-E。

平面プランの形状から2基の土壙の重複を予測したが完掘によって重複が明白になりA・Bとした。

記述は遺物の出土したAのみとする。

Aの開口部は不整橢円形を呈し、長軸230cm、短軸200cm(推定)、主軸線方向N-0°。

掘り方は西側はフラスコ状に、東側は内側へ斜めに掘り下げ、深さは47cm。底面は平坦である。



第二〇八図 第二一三号土壙実測図、遺物出土状態図

埋没土の性状は2層に区分され、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土である。

出土遺物数は13個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は中央部から南東部にかけての部分的な範囲に偏在しており、垂直分布の在り方は中間層に多い。

縄文時代中期の土壌であろう。

152 第二一五号土壤（第二一〇号）

本土壌はM~N-18に位置する。

北側は調査区域外で、確認した開口部の平面形は不整形。東西径300cm、南北220cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ48cm。

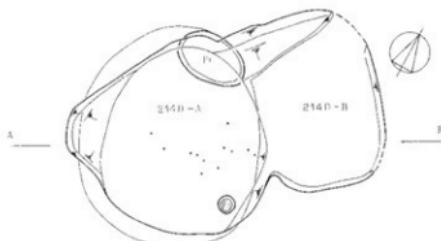
東側には径170×140cm、深さ75cmの土壤と径50×45cm、深さ50cmのピットが存在する。

底面は硬さがなく起伏が多い。埋没土は黒色土とロームの混合土である。

出土遺物数は28個で、縄文土器26個と石器（凹石）2個である。

平面分布状態は全体にまばらに散在し、垂直分布は特に変った傾向はないが、阿玉台式土器の良好資料は土壤内土壌の確認面下50cmから出土した。

縄文時代中期の土壌である。



第二〇九図 第二一四号A(左)・第二一四号B(右)
土壤実測図、遺物出土状態図

153 第二一六号土壤（第二一一図）

本土壌はM~N-18~19に位置する。

開口部の平面形は不整形円形を呈する。

径180×180cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、東側の深さ63cm、西側の深さ35cm、底面は12°の斜度で東側へ傾斜する。

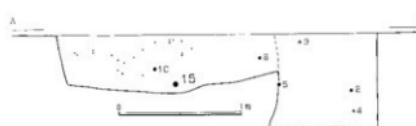
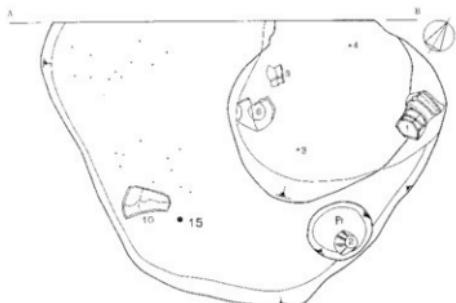
北側に2個のピットが存在し、P₁は60×25cm、深さ25cm。P₂は45×40cm、深さ18cm。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

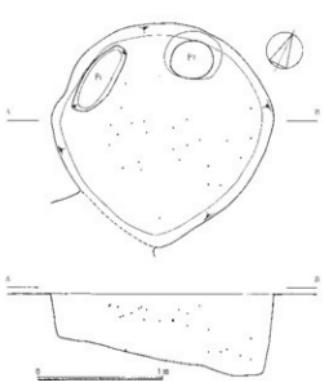
出土遺物数は25個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は中央部周辺にまばらに散在し、垂直分布の在り方は西側に空白部があるが中層にまとまりがみられる。

縄文時代中期の土壌であろう。



第二一〇図 第二一五号土壤実測図、遺物出土状態図



154 第二一七号土壤（第二一二図）
本土部はN-19に位置し、北側は調査区域外である。

プランの半分程は区域外に埋没しているため全容は確認できなかった。

開口部の平面形は楕円形を横に半截したような形状を呈し、東西径230cm、南北径200cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは37cm。

東側に底面下の深さ55cmの振り込みがある。

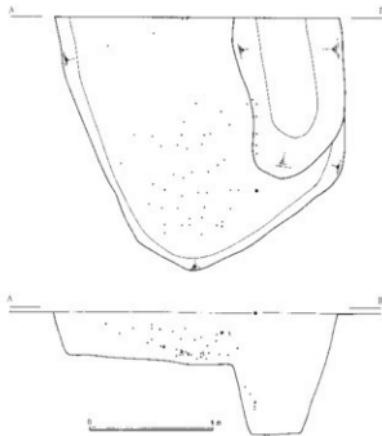
振り込み部以外の底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、区分線を入れるような変化は認められない。

出土遺物数は55個で、平面分布状態は南側に集中し、垂直分布の在り方は中層と下層が多い。

振り込み内の遺物は埋め戻しの際の流れ込みと思われる。

縄文時代中期の土壤と思われる。



155 第二一八号土壤（第二一三図）
本土部はN-19~20に位置し、北側は調査区域外である。

プランの北側半分程は区域外に埋没している。

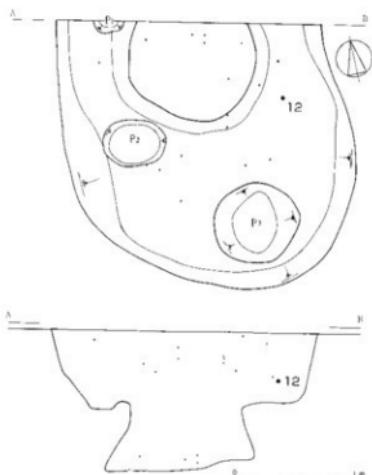
開口部の平面形は楕円形を横に半截したような形状を呈し、東西210cm、南北210cm。

プラン本体の掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは55cm。底面下より3個のピットと袋状土壤が検出された。

P₁の確認部は24×10cm、深さ18cm。P₂は50×38cm、深さ35cm。P₃は70×65cm、深さ49cm。

袋状土壤の規模は底面下開口部東西径100cm、南北径（確認部）80cm、底面下の深さ55cm。

第二一一図 第二一六号土壤実測図、遺物出土状態図
第二一二図 第二一七号土壤実測図、遺物出土状態図



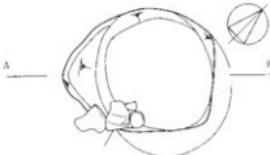
第二一三図 第二一八号土壤実測図、遺物出土状態図

埋没土の性状は黒色土とロームの混合土で短時日の間に埋戻されたものであろう。

出土遺物数は17個と僅少ですべて縄文土器片である。

平面分布状態はきわめて散発的であり、垂直分布の在り方も中層より上位と袋状土壌の底面付近に点在する程度である。

縄文時代中期の土壌である。



156 第二二一号土壤（第二一四図）

本土壤はM-19~20に位置する。

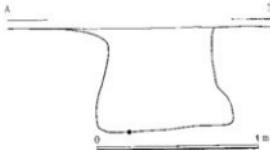
開口部の平面形は不整形を呈し、東西径90cm、南北径75cm。

掘り方は開口部から内側へ斜めに10cmほど掘り下げて、径70×70cmのほぼ円形の頸部を形成したのち、外側へ膨らむフラスコ状に掘り下げて底面にいたる。深さ60cm。西側がやや深い。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層で、特別な層序の変化は認められない。

出土遺物は縄文土器片1個で南西隅の底面より出土している。

縄文時代中期の袋状土壌である。



第二一四図 第二二一号土壤
実測図、遺物出土状態図

157 第二二七号土壤（第二一五図）

本土壤はM-20に位置する。

北側は調査区域外に埋没しているため全容を把握することはできなかった。

確認できたプランの平面形は不整形である。

A-Bセクションで165cm、南北260cm、主軸線方向N-51°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ27cm。

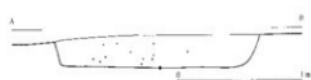
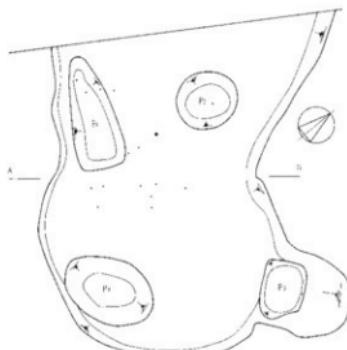
4個のピットが対角線状に存在し、P₁・93×33cm、深さ24cm。P₂・50×46cm、深さ24cm。P₃・43×35cm、深さ32cm。P₄・75×51cm、深さ90cm。これらのピットは本土壤に付随するものであろう。ピット存在部以外の底面は平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は17個と僅少ですべて縄文土器片である。

平面分布状態は北寄りの面にまばらに散在し、垂直分布の在り方は中央より西側の各層に点在する。

縄文時代中期の土壌であろう。



第二一五図 第二二七号土壤実測図、遺物出土状態図

158 第二二八号土壤（第二一六図）

本土壤はM-N-20~21に位置する。

北側は調査区域外に埋没しているため全容を調査することはできなかったが、プランはおそらく楕円形であ

ろう。

確認できた平面形は東西200cm、南北290cm、主軸線方向N-38°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ23cm。

4個のピットが存在しその規模はP₁・22×22cm、深さ25cm。P₂・72×55cm、深さ53cm。P₃・52×34cm、深さ70cm。P₄・75×73cm、深さ52cm。

ピット存在部以外の底面は平坦である。

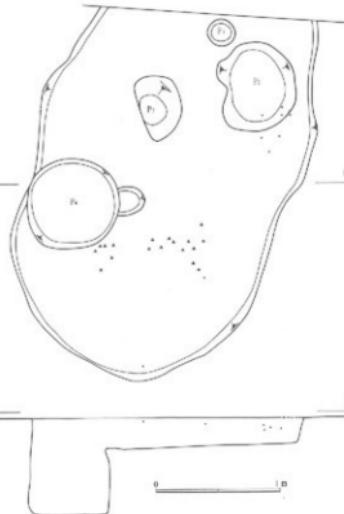
埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、層序の変化は認められない。

出土遺物数は27個で、縄文土器片9個と自然石18個である。

平面分布状態を観察すると、土器片の出土はきわめてわずかでP₂周辺に小さなまとまりをみせており、自然石はP₄の東側に集中している。

垂直分布の在り方は東壁際の小範囲の中～上層に大部分がまとまり、自然石は底面上に集中する。

縄文時代中期の土壤であろう。



第二二八号土壤実測図、遺物出土状態図

159 第二二九号土壤（第二一七図）

本土壤はI-17～18に位置する。

開口部の平面形は不整椭円形を呈する。

長軸275cm、短軸190cm、主軸線方向N-81°-W。

掘り方は内側へ斜めに30cmほど掘り下げて頭部を形成した後、外側へ膨らむフラスコ状に掘り込んで底面に至る。

底面東側に2個のピットを検出。P₁・32×28cm、深さ23cm。P₂・30×22cm、深さ48cm。

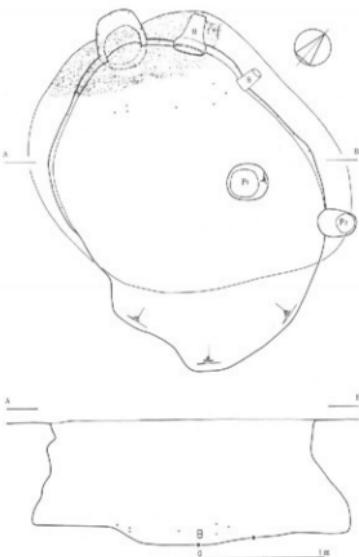
埋没土の性状は暗褐色土の單一層であるが、北壁際の底面上に長さ150cm、幅50cm、厚さ7～10cmの焼土層が堆積している。

土壤の深さは中心部が100cmと皿状にやや深く、他の面は80cmである。

出土遺物数は9個で、深鉢形土器完形品2個を含む縄文土器である。

平面分布状態は北側部分にのみ分布し他は全くの空白である。垂直分布の在り方は下層に集中しており、No 8は焼土層より横位で出土した。

縄文時代中期の袋状土壤である。



第二二九号土壤実測図、遺物出土状態図

160 第二三一号土壤 (第二一八図)

本土壤はH～I-18～19に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し径250×220cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる。断面形は箱型を呈する。底面は硬く平坦である。深さ43cm。

底面にピット1個を検出。径43×42cm、深さ32cm。

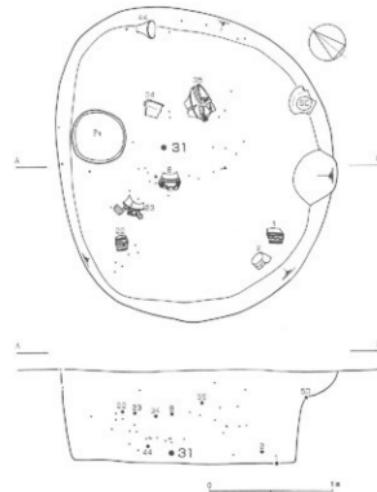
埋没土の性状は暗褐色土の単一層で層序の変化は認められない。

出土遺物数は50個で、深鉢形・浅鉢形土器の大片を含む縄文土器片48個と自然石2個である。

平面分布状態は北側に偏在する傾向がみられるもののおおむね全面に分布する。

垂直分布の在り方は底面から上層まで各層に普く分布している。

縄文時代中期の土壤である。



161 第二三二号土壤 (第二一九図)

本土壤はH～I-19に位置する。

開口部の平面形は南北方向に長い楕円形状を呈するが本体の平面形状は東西方向に長い楕円形である。

長軸225cm、短軸180cm。主軸線方向N-85°-W。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、深さ77cmである。

底面は硬く平坦である。

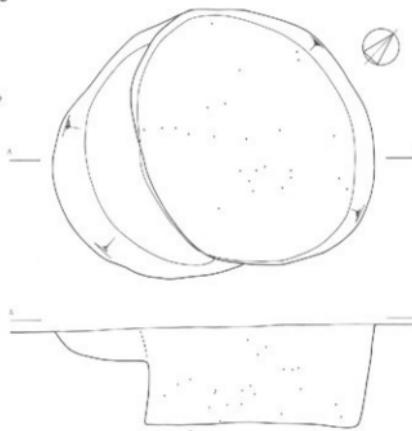
埋没土の性状は暗褐色土の単一層で、区分線を入れるような層序の変化は認められない。

出土遺物数は26個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は非常にまばらではあるが、おおむね全面に散在し、垂直分布の在り方もきわめて粗であるが各層に涉っている。

縄文時代中期の土壤と思われる。

第二一八図 第二三一号土壤実測図、遺物出土状態図



162 第二三七号土壤 (第二二〇図)

本土壤はH～I-20～21に位置する。

開口部の平面形は楕円形を呈する。

長軸145cm、短軸110cm。主軸線方向N-63°-W。

掘り方は開口部から50cmほど垂直に掘り下げる後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。底面形は円形で径220×215cm、底面はおおむね平坦である。深さ105cm。底面は鹿沼層に達する。

確認面上に5個のピットが存在する。

第二一九図 第二三二号土壤実測図、遺物出土状態図

P₁・24×23cm, 深さ21cm。P₂・35×35cm, 深さ55cm。P₃・52×48cm。P₄・28×25cm, 深さ10cm。P₅・25×20cm, 深さ17cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層。底面直上部は鹿沼粒子が混在するが層序の性状を変えるほどの変化ではない。

出土遺物数はわずかに2個で縄文土器片である。

南側の底面上と底面上12cmのレベルで出土している。

縄文時代中期の袋状土壌である。

163 第二三八号土壤 (第二二一図)

本土壌はI～J-20に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。径250×230cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、西側が深く東側が浅い。

西側40cm、東側30cm。東側に擾乱状の掘り込みがある。

底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は断面図では2層に区分されているが、Iは土壤本体の埋没土で暗褐色土の單一層であり、IIは擾乱土である。

出土遺物数は6個と少ないが縄文土器の大形片が多い。

きわめて散発的な出土状態である。縄文時代中期の土壤と思われる。

164 第二四〇号土壤 (第二二二図)

本土壌はH-20～21に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径115×100cm。

掘り方は円筒状に掘り下げる、深さ50cm。

底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土が充満している。

出土遺物数は2個であるが同一個体で碗形の縄文土器である。

南壁際の中層より出土している。

縄文時代中期の土壤であろう。

165 第二四一号土壤 (第二二三図)

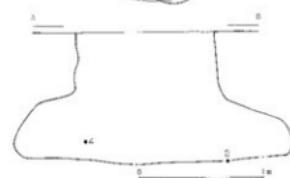
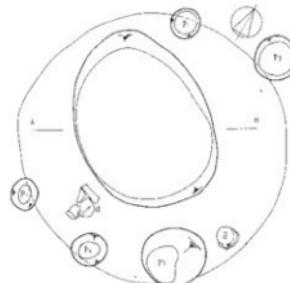
本土壌はG～H-20に位置する。

完掘によって3基の土壤の重複であることが判明

したが、もっともプランの大きい土壤を第二四一号とした。

開口部の平面形は不整円形を呈し、径270×260cm。北西部に重複する土壤は径125×125cmの円形で、深さは36cm。南東部の底面下土壤は径120×110cmの円形で、深さ66cm。两者とも円筒状の掘り込みである。

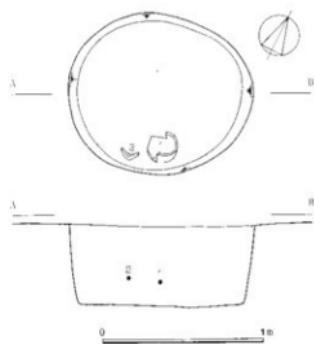
本体の掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、深さは25cm。底面には若干の起伏がある。



第二二〇図 第二三七号土壤実測図、遺物出土状態図



第二二一図 第二三八号土壤実測図、遺物出土状態図



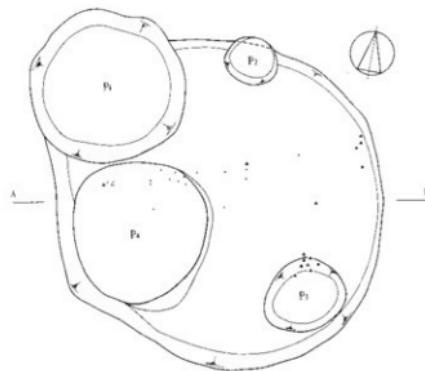
第二二二図 第二四〇号土壤実測図、
遺物出土状態図

埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。

出土遺物数は29個で、縄文土器片14個、石斧1個、自然石14個である。

平面分布状態はA-Bセクションに沿って分布しており、垂直分布の在り方は中層から上層にかけてまばらに散在する。

縄文時代中期の土壤と思われる。



第二二三図 第二四一号土壤実測図、遺物出土
状態図

166 第二四四号土壤（第二二四図）

本土壙はG-19に位置する。

開口部の平面形は不整円形を呈する。

径270×250cm。南東部に60cmほど張り出している。

深さ29cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは41cm。

底面は部分的に若干の起伏はあるがおおむね平坦である。

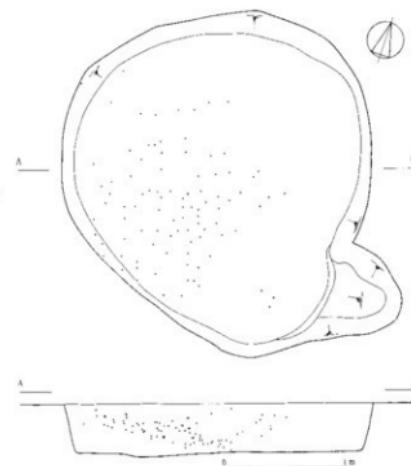
埋没土の性状は暗褐色土の単一層で特に区分線を入れるような変化は認められない。

出土遺物数は92個すべて縄文土器片である。

平面分布状態は中央部から南西部にかけて集中している。

垂直分布の在り方は東側に空白部があるが、西側の上層から中央部の下層にかけて傾斜状に分布している。この状態は埋戻しと同時に一括投棄されたことを物語るものであろう。

縄文時代中期の土壤と思われる。



第二二四図 第二四四号土壤実測図、遺物出土
状態図

167 第二四五号土壤 (第二二五図)

本土壤はR～S-24に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径 120×115 cm。

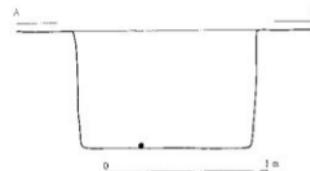
掘り方は円筒状に掘り下げる、深さ73cm。底面は平坦である。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層で、底面付近はローム粒子の混入もみられるが、きわめて漸移的で強いて区分線を入れるほど変化ではない。

出土遺物は深鉢形土器の同一個体破碎片である。

すべて底面上より出土している。

縄文時代中期の土壤と思われる。



168 第二四六号土壤 (第二二六図)

本土壤はS-24に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径 250×250 cm。

掘り方はこの面から内側へ斜めに50cmほど掘り下げるで径140×140cmの円形の頸部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ形状に掘り込んで底面にいたる。底面形は円形で径 220×210 cm。深さは130cmで鹿沼層に達しているが平坦である。埋没土の性状は2層に区分され、Iは黒色土でローム粒子とローム極小ブロックが含まれている。

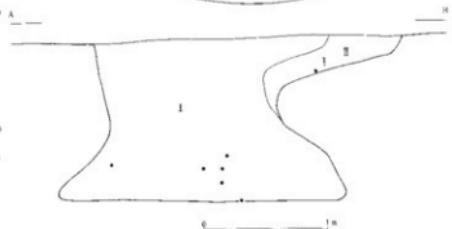
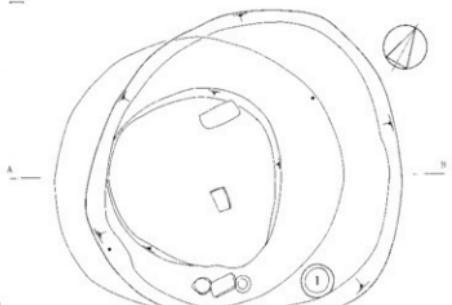
IIは赤橙色ロームである。底面南東隅に27×26cm、深さ15cmのピットが1個存在する。

出土遺物数は6個で、すべて縄文土器である。

出土状態はきわめて散発的で底面上35cm以内に点在する。

縄文時代中期の袋状土壤である。

第二二五図 第二四五号土壤実測図
遺物出土状態図



169 第二四七号土壤 (第二二七図)

本土壤はR-23～24に位置し、南側は溝状遺構が走る。

開口部の平面形は円形を呈し、径 200×200 cm。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げる、深さは120cm。

底面下にピット1個が存在し、径 85×80 cm、深さ38cm。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は9個すべて縄文土器である。

確認面下20～65cmの埋没土中より出土している。

縄文時代中期の土壤である。

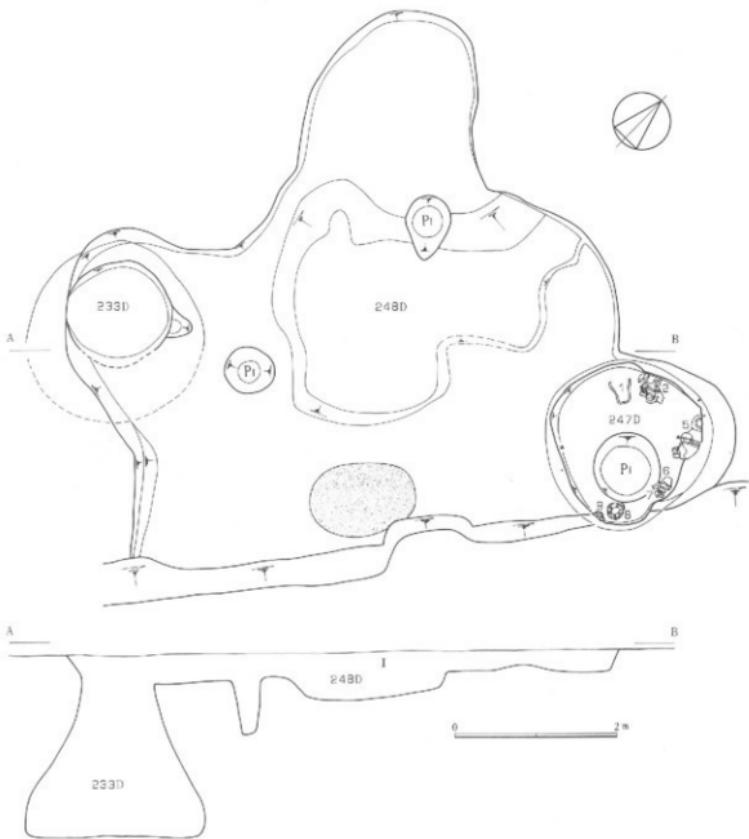
170 第二四九号土壤 (第二二八図)

本土壤はK～L-20に位置する。

開口部の平面形は北側に若干張り出した不整円形を呈し、径 200×180 cm。掘り方は円筒状に掘り下げる、深さは90cmで底面は平坦。埋没土は暗褐色土が充満する。出土遺物はわずかに3個で縄文土器片。

平面分布は北側に偏在し、垂直分布は中層に点在する。縄文時代中期の土壤であろう。

第二二六図 第二四六号土壤実測図、遺物出土状態図



第二二七図 第二三三号（左）・第二四七号（右）・第二四八号（中）土壤実測図、遺物出土状態図

171 第二五〇号土壤（第二二九図）

本土壤はL～M-20～21に位置する。開口部の平面形は南北方向に長い長楕円形状を呈する。

南端部は深さ85cmの袋状土壤と重複し、北端部は浅い掘り込みがある。

長軸400cm、短軸200cm、主軸線方向N-0°。この長大なプラン内にある遺構を包括して第二五〇号土壤とした。図示のとおり全体としての掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは50cmで底面は平坦である。

北端部のピット状の掘り込みは確認面からの深さが56cmである。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。出土遺物数は24個すべて縄文土器である。

平面分布状態はまことにまばらであるが、北端部のピット内からは深鉢形土器が2個出土している。

垂直分布の在り方もところどころに散在する程度である。縄文時代中期の土壤と考えられる。

172 第二五一号土壤 (第二三〇図)

本土壤はM～N-21～22に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径160×150cm。

70cmほど掘り下げたところで頸部を形成し、その下は外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

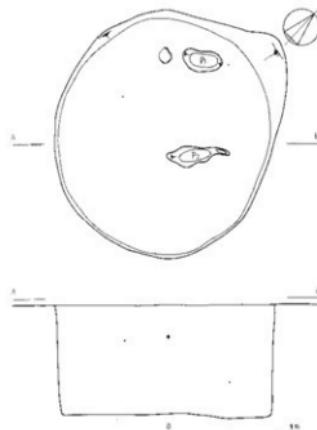
底面形は円形で径185×185cm、深さ135cmで底面は鹿沼層に達している。

埋没土の性状は暗褐色土の単一層であるが、底面付近はやや色調が明るくなる。

出土遺物数は11個すべてで縄文土器である。

平面分布状態は南北中心線の西側に偏在し、大木8a式的良好な資料No 1・3は開口部の範囲内に分布する。

垂直分布の在り方は底面上と頸部より下位の層にまとまっている。縄文時代中期の袋状土壤である。

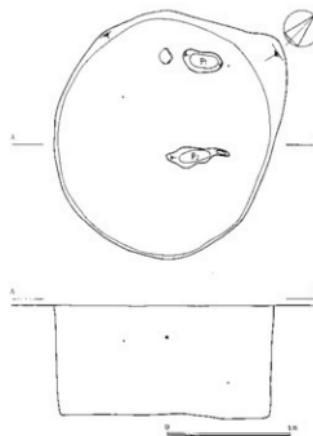


173 第二五六号土壤 (第二三一図)

本土壤はM～N-23に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、径165×160cm。掘り方は内側へ大きく斜めに掘り下げ、深さは70cm。底面はほぼ平坦。

第二二九図 第二五〇号土壤実測図
図、遺物出土状態図



第二二八図 第二四九号土壤実測図、遺物出土状態図

埋没土の性状は暗褐色土が充満している。

出土遺物は1個のみで縄文土器片である。北側の中層より出土している。

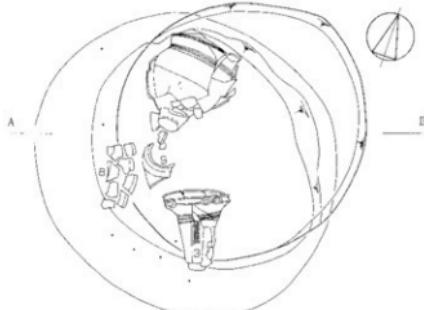
縄文時代中期の土壤であろう。

174 第二五八号土壙（第二三二図）

本土壙はN～O-22に位置する。
開口部の平面形は梢円形状を呈する。
長軸290cm、短軸170cm、主軸線方向N-90°-W。

掘り方はやや斜めに内側へ掘り下げ、深さ55cm。
底面はほぼ平坦である。
西側に1個のピットがあり深さ63cm。
埋没土は暗褐色土の單一層。
出土遺物は2個で縄文土器。1個は深鉢形の準完形品である。

中央部の中層より出土している。
縄文時代中期の土壙である。

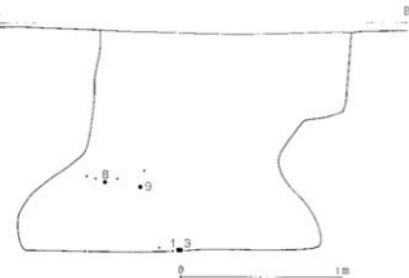


175 第二五九号土壙（第二三二図）

本土壙はO-22に位置する。
開口部の平面形は円形を呈し、径165×160cm。
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは25cm。
底面には起伏がある。

2個のピットが存在し深さは31・36cmである。
埋没土は暗褐色土の單一層。
出土遺物はわずかに5個で縄文土器片である。

出土状態はまばらに点在する程度である。縄文時代中期の土壙と思われる。



第二三〇図 第二五一号土壙実測図、遺物出土状態図

176 第二六二号土壙（第二三三図）

本土壙はO～P-24に位置し、南東部は第二六三号土壙と接する。
開口部の平面形は東西方向に主軸線を持つ梢円形状を呈し、長軸330cm、短軸240cm、主軸線方向N-90°-E。
掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは北側30cm、南側60cmで底面は南側へ傾斜する。

1個のピットが存在し径170×60cm、深さ35cm。埋没土は暗褐色土が充満する。ロームブロックもみられる。
出土遺物数は12個と僅少で、縄文土器片11個と自然石1個である。
平面分布状態は中央部付近にまばらに散在し、垂直分布の在り方は各層に点在する。
縄文時代中期の土壙であろう。

177 第二六三号土壙（第二三三図）

本土壙はO-24に位置し、北西部は第二六二号土壙と接する。
開口部の平面形は円形を呈し、径210×210cm。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ45cm。底面には起伏があり南側がやや浅い。埋没土の性状はI 黒褐色土、II 褐色土である。出土遺物数は10個で、縄文土器片9個、自然石1個である。出土状態は北側に偏在し、中～下層に帯状に分布する。縄文時代中期の土壙であろう。

178 第二六五号土壤 (第二三四図)

本土壤はR-25に位置し、西側は第二六四号土壤と接する。

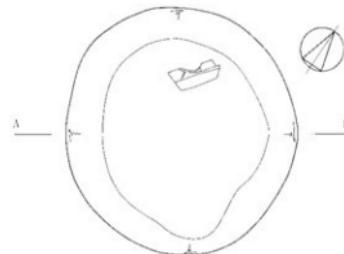
開口部の平面形はおおむね円形を呈し、径 $250 \times 280\text{cm}$ 。掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ 50cm 。

西側がやや浅い。埋没土の性状は黒褐色土と暗褐色土である。小ビットが3個存在し深さは $25 \sim 30\text{cm}$ 。

出土遺物数は35個で、すべて縄文土器片である。

平面分布状態は中央部より北側に多く、垂直分布の在り方は中～下層にまとまっている。

縄文時代中期の土壤であろう。



179 第二六六号土壤 (第二三五図)

本土壤はQ～R-25～26に位置する。

本土壤の本体は袋状土壤である。

開口部は深さ 15cm ほどのトレンチャー痕が2条南北方向に走るが大きな損傷ではない。

開口部の平面形はおそらく円形を呈していたものと想定され、径 $120 \times 120\text{cm}$ 位ではなかったかと考えられる。

掘り方は内側へ斜めに 50cm ほど掘り下げて、径 $75 \times 75\text{cm}$ 位の頭部を形成した後、外側へ大きく膨らむフラスコ状に掘り込んで底面にいたる。

深さは 105cm を測り鹿沼層に達しているが底面は平坦である。

底面形も円形で径 $200 \times 200\text{cm}$ 。

埋没土の性状は3層に区分できる。

Iは黒褐色土、IIは暗褐色土、頭部より下層はII層よりやや色調の強い暗褐色土。

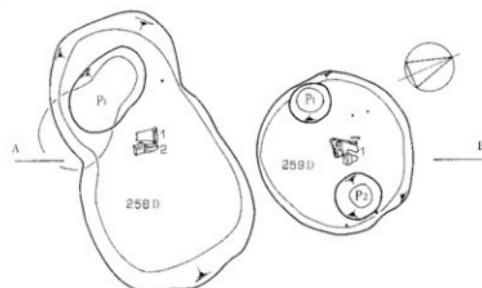
出土遺物数は30個で、阿玉台式の土器を含む縄文土器である。

平面分布状態は大部分が開口部の範囲内にまとまっているが、垂直分布の在り方は中層から下層にかけて集中している。

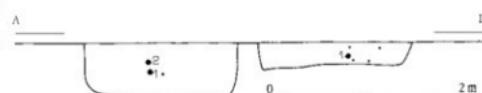
阿玉台式の深鉢形土器が底面上 10cm のレベルで横位出土している。

縄文時代中期の袋状土壤である。

第二三一図 第二五六号土壤実測図、遺物出土状態図



第二三二図 第二五八号(左)・第二五九(右)土壤実測図、遺物出土状態図



第二六九号土壤 (第二五〇圖)

本土塘はP-26~27に位置する。

北側は調査区域外に埋没している。

開口部の平面形は不整橢円形を呈し、長軸340cm、短軸270cm、主軸方向はN -63° -E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さは中央部で55cm、周壁は35cm。

これは中央部に東西方向の浅い掘り込みがあるためである。

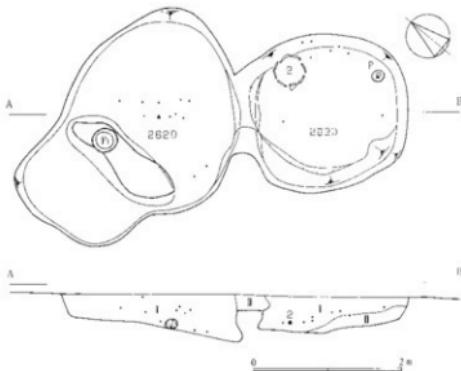
北側に45×25cm, 厚さ7cmの焼土塊が存在し, 中央西寄りに65×55cm, 深さ26cmのピットが存在する。

埋没土の性状は2層に区分できる。

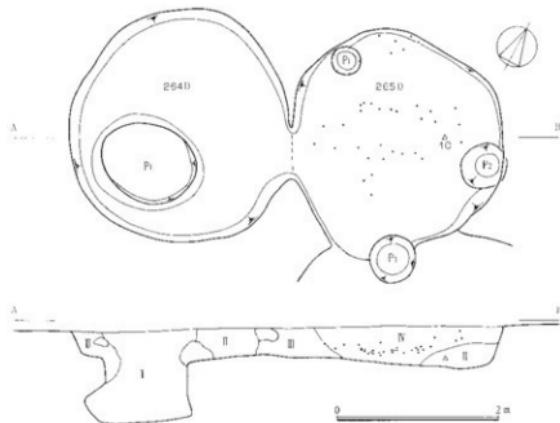
I は暗褐色土、 II は褐色土である。

出土遺物数は19個で、縄文土器片18

個と自然石1個である。平面分布状態は南側に偏在する傾向が看られ、垂直分布の在り方はA-Bセクション南側の上層～中層にまとまっている。縄文時代中期の土壤と考えられる。



第二三三図 第二六二号(左)・第二六三号(右)土壤実測図、
遺物出土状態図



第二三四図 第二六四号(左)・第二六五号(右)土壤実測図、遺物出土状態図

181 第二七〇号土壤 (第二五〇図)

本土壤はO～P-27に位置する。

開口部の平面形は橢円形を呈する。

長軸330cm、短軸270cm、主軸線方向N-65°-E。

掘り方は内側へ斜めに掘り下げ、深さ40cm。底面はおむね平坦である。

4個のピットが存在し深さは43cm～56cm。

埋没土の性状は2層に区分できる。

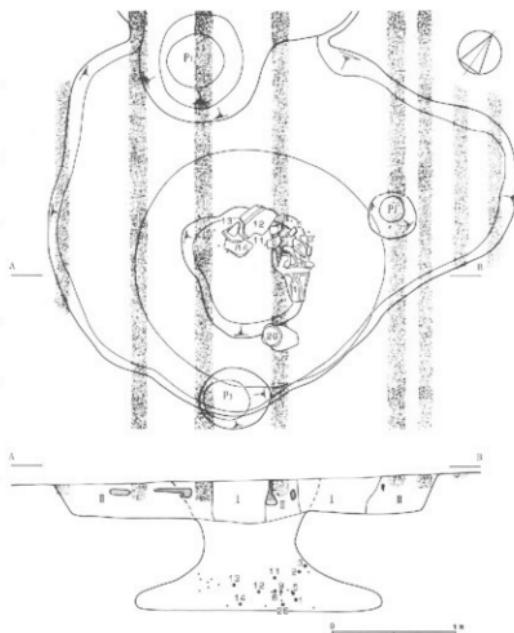
Iは暗褐色土、IIはローム粒子を多量に混入する褐色土。

東側の確認面上には焼土層が存在する。埋没土断面の南側上層部にも厚さ10cm、幅40cmの焼土層がある。

出土遺物総数は51個で、縄文土器片35個と自然石16個となる。

平面分布状態は南側に空白部が多いが特に変った傾向はなくところどころ小グループを形成して広範囲に散在する。垂直分布の在り方は、底面上出土はないが各層に遍く分布している。

縄文時代中期の土壤であろう。



第二三五図 第二六六号土壤実測図、遺物出土状態図

182 第二七二号土壤 (第二五一図)

本土壤はN-25～26に位置する。

開口部の平面形は円形を呈し、210×195cm。

A-Bセクションによって掘り方を観察すると、中央部が舟底状でもっとも深く30cmを測るが、周壁に向って緩斜面状の断面形を示し、壁面の立ち上がりがない。特に東側において顕著である。

中央部には東西方向に浅い溝状の掘り込みが走る。

埋没土の性状は暗褐色土の單一層である。

出土遺物数は23個であるが、土器は1個だけ他は自然石である。土器は縄文土器の深鉢形土器の胴部下位～底部片で、南壁際の底面上部より逆位で出土している。自然石は西壁際に集中している。

縄文時代中期の土壤であろう。

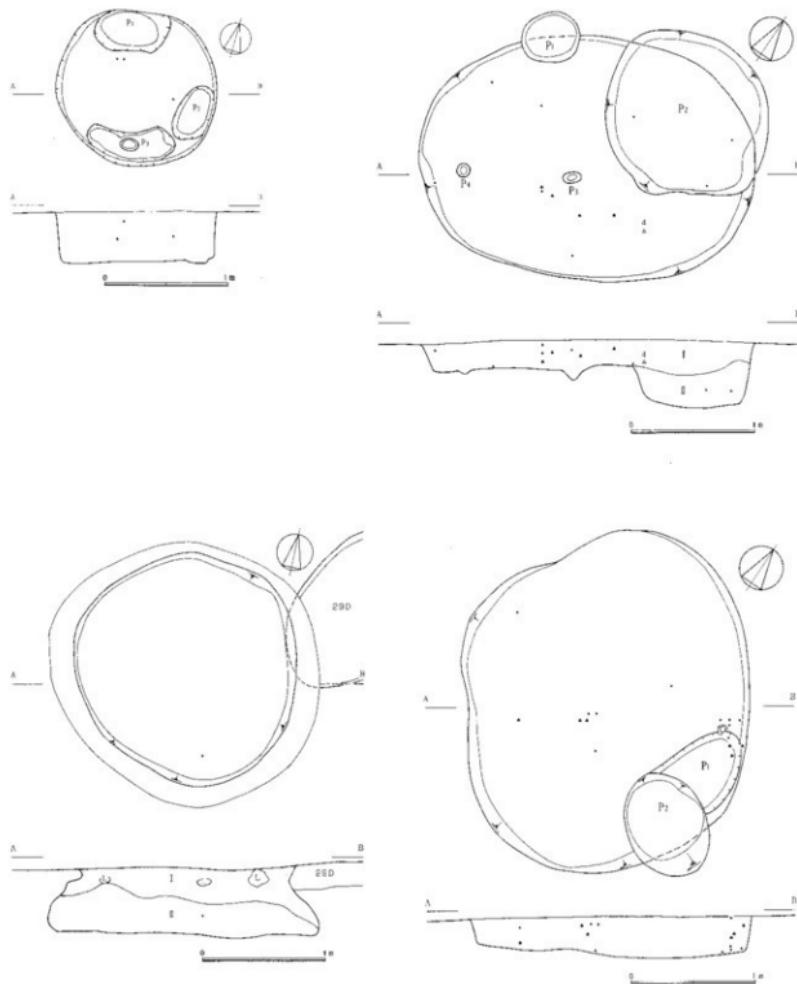
183 第二七五号土壤 (第二五一図)

本土壤はM～N-25～26に位置する。

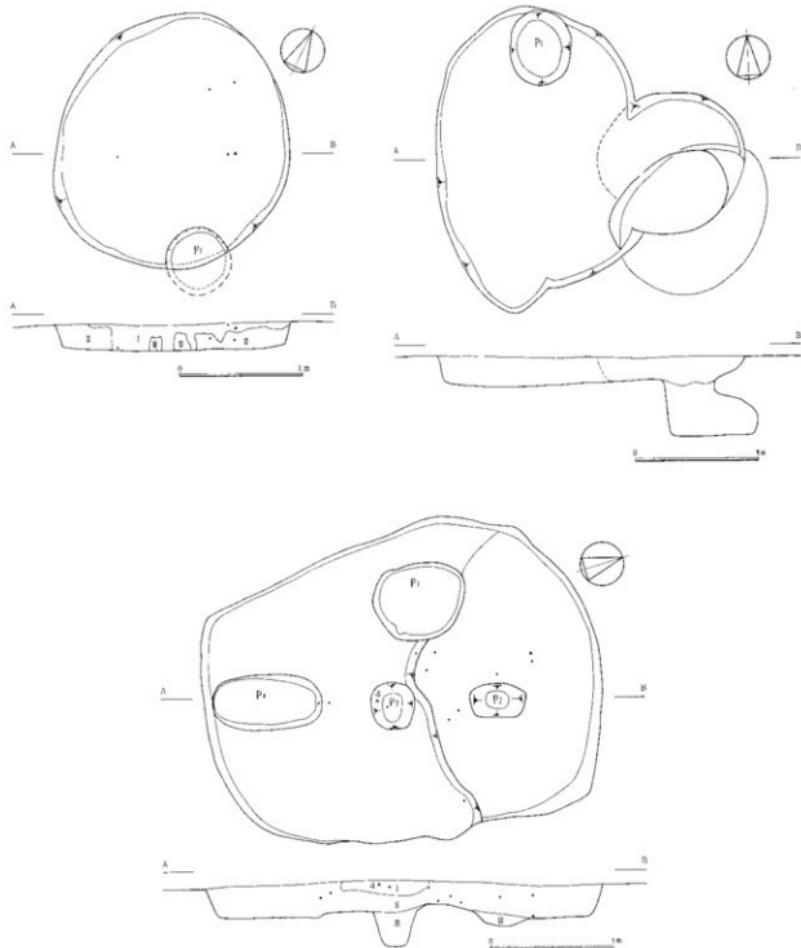
本土壤以下は紙数の関係で説明を省略し、実測図を掲載する。

第一二章

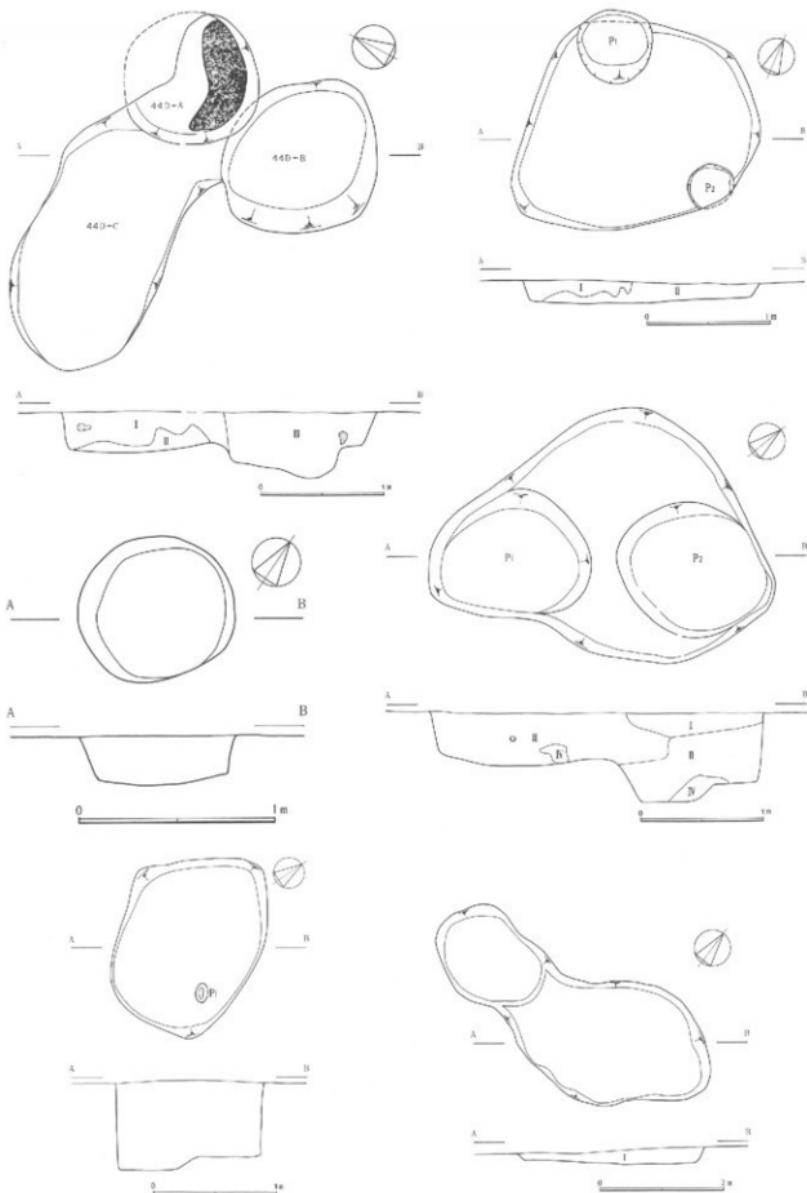
B 地区土壤実測図



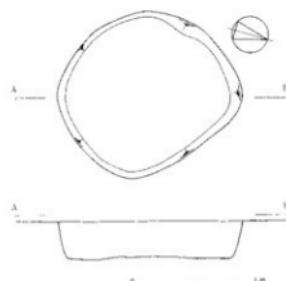
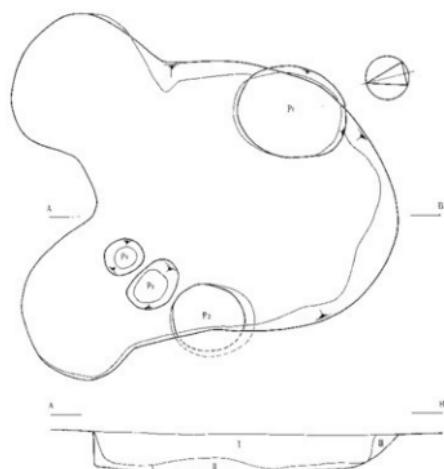
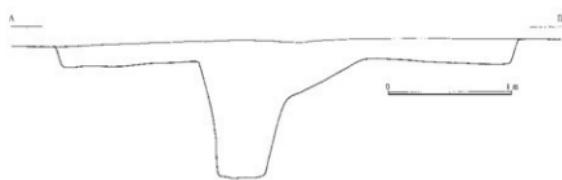
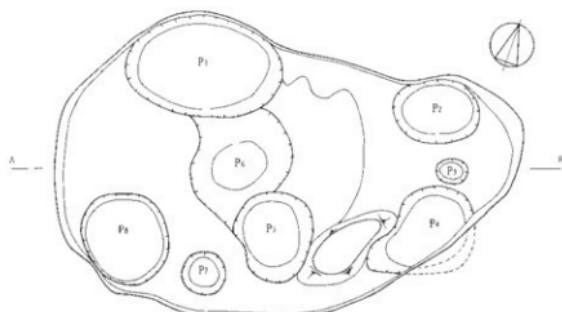
第二三六圖 第二三号・第二四号・第二八号・第三三号土壤実測図



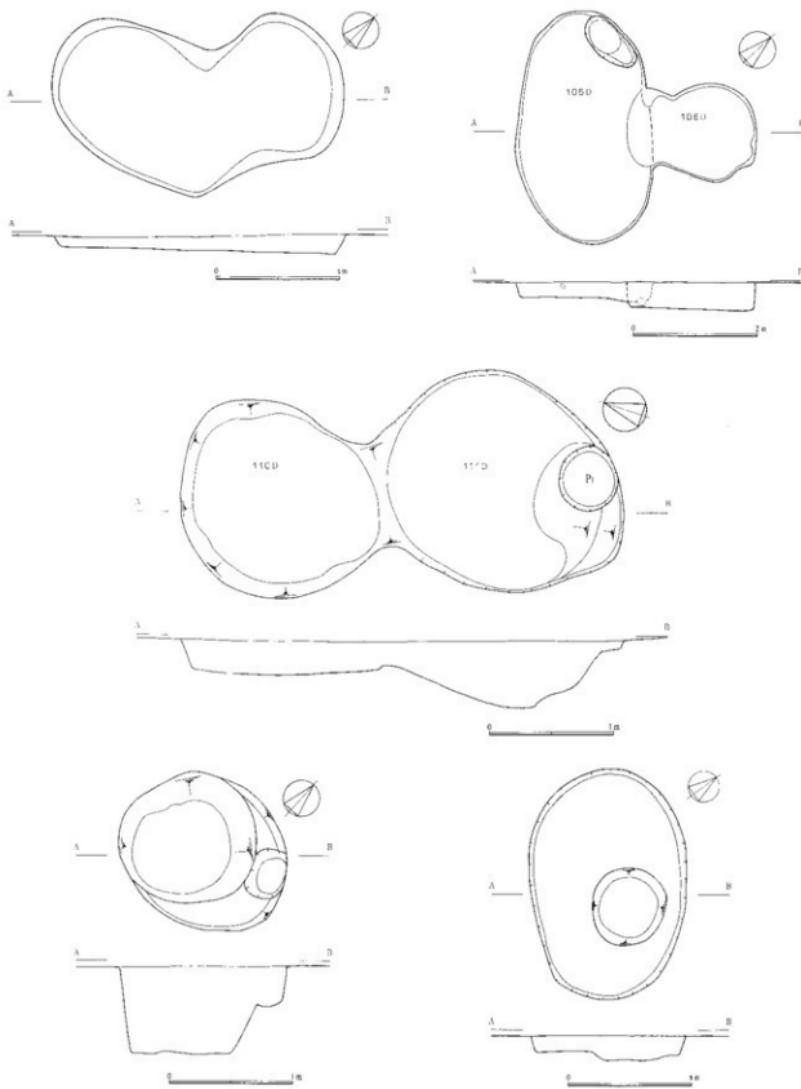
第二三七図 第三七号・第三八号・第四二号土壤実測図



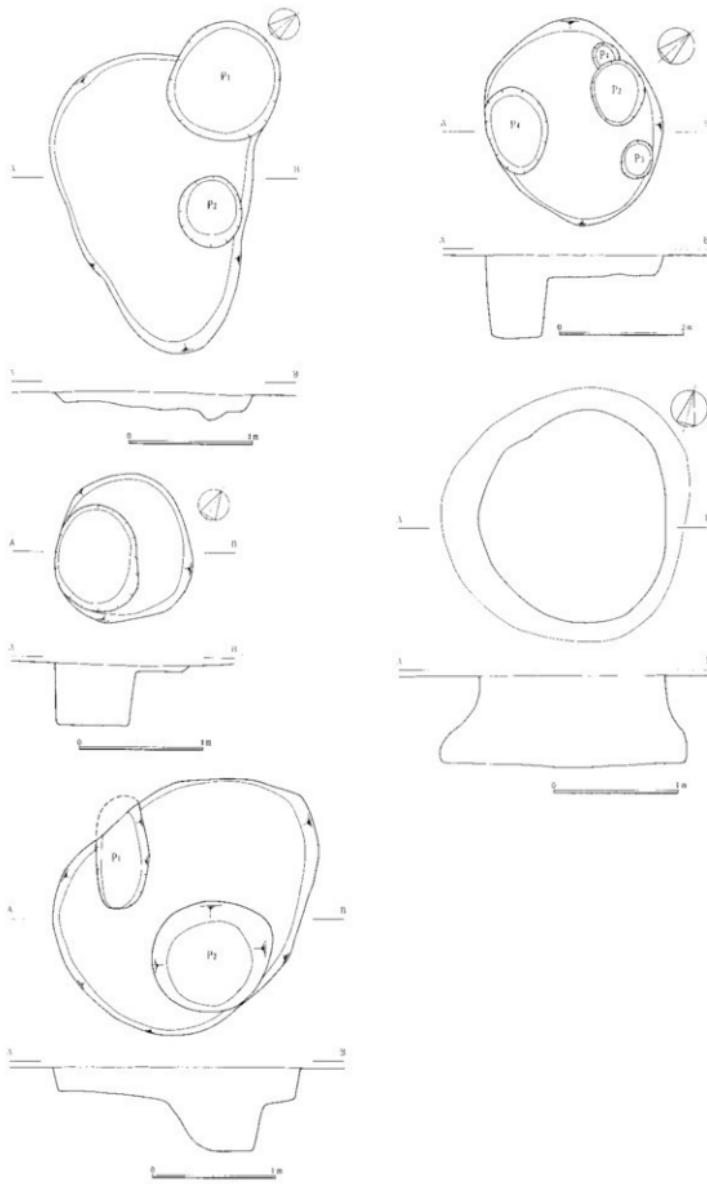
第二三八図 第四四号・第四五号・第六七号・第七三号・第七四号・第八七号土壤実測図



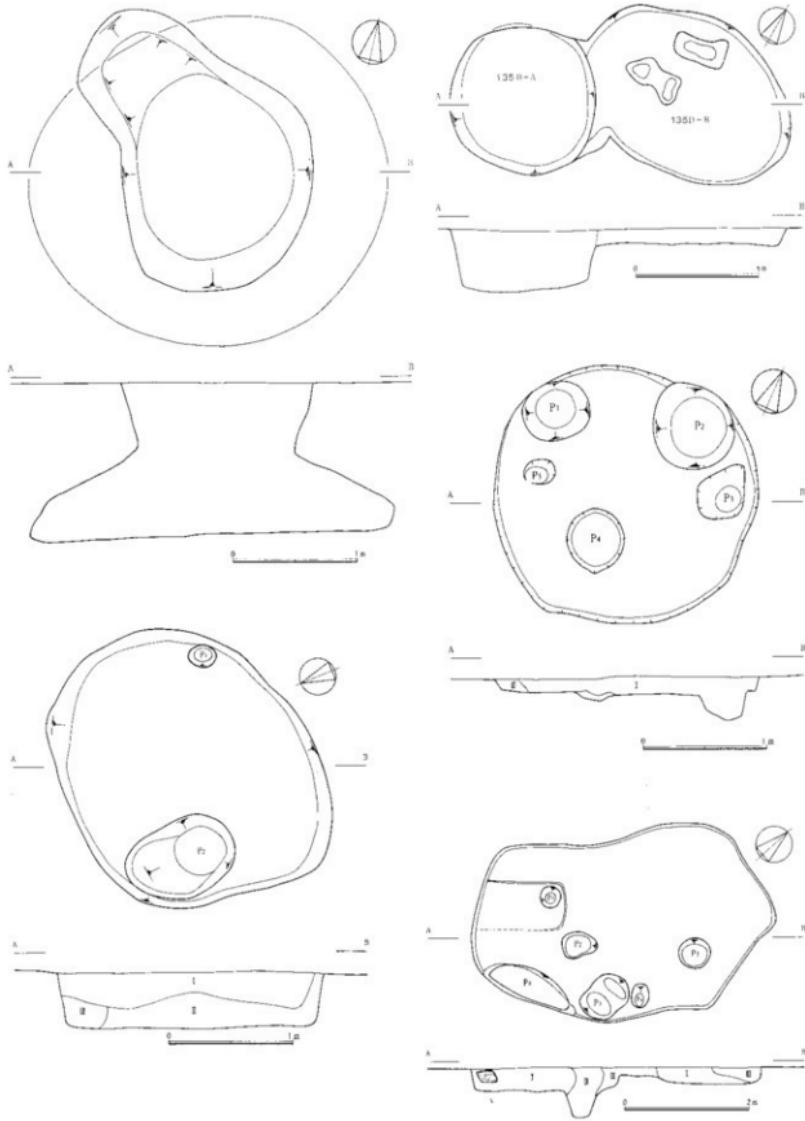
第二三九圖 第九九號・第一〇〇號・第一〇一號土壤實測圖



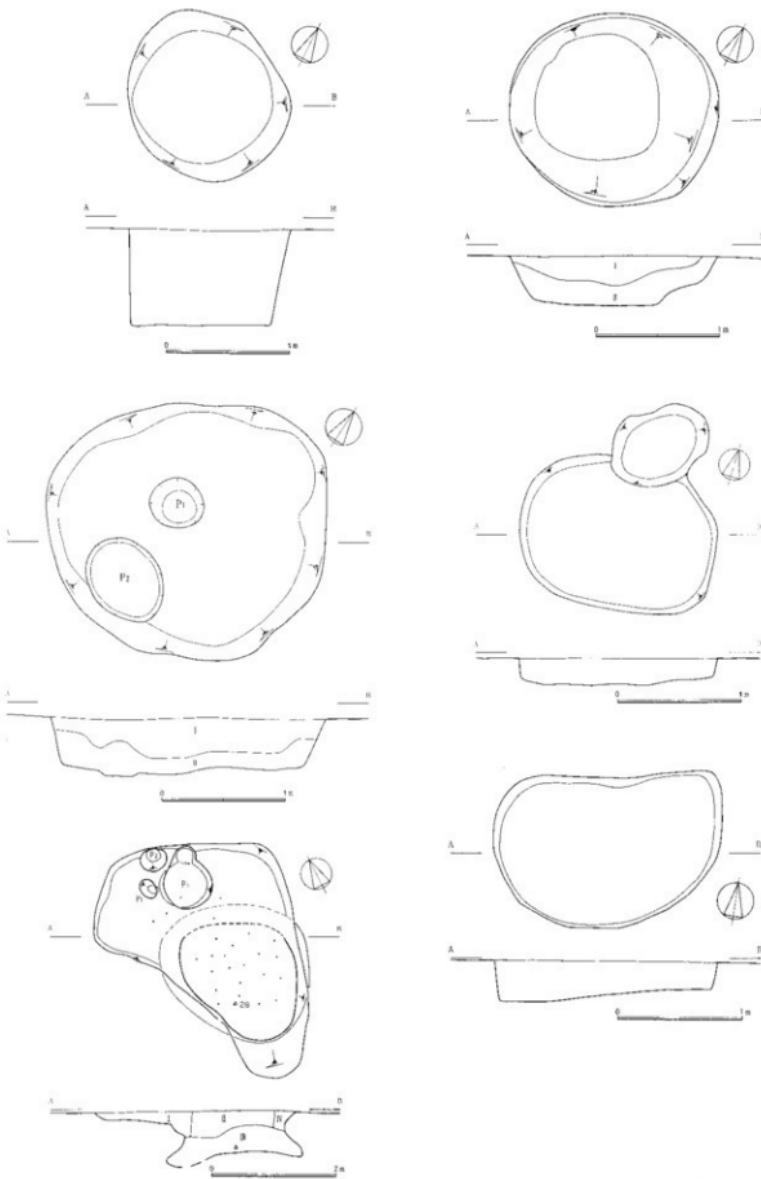
第二四〇圖 第一〇二号・第一〇五号・第一〇六号・第一〇七号・第一一〇号
第一一一号・第一一五号土壤実測図



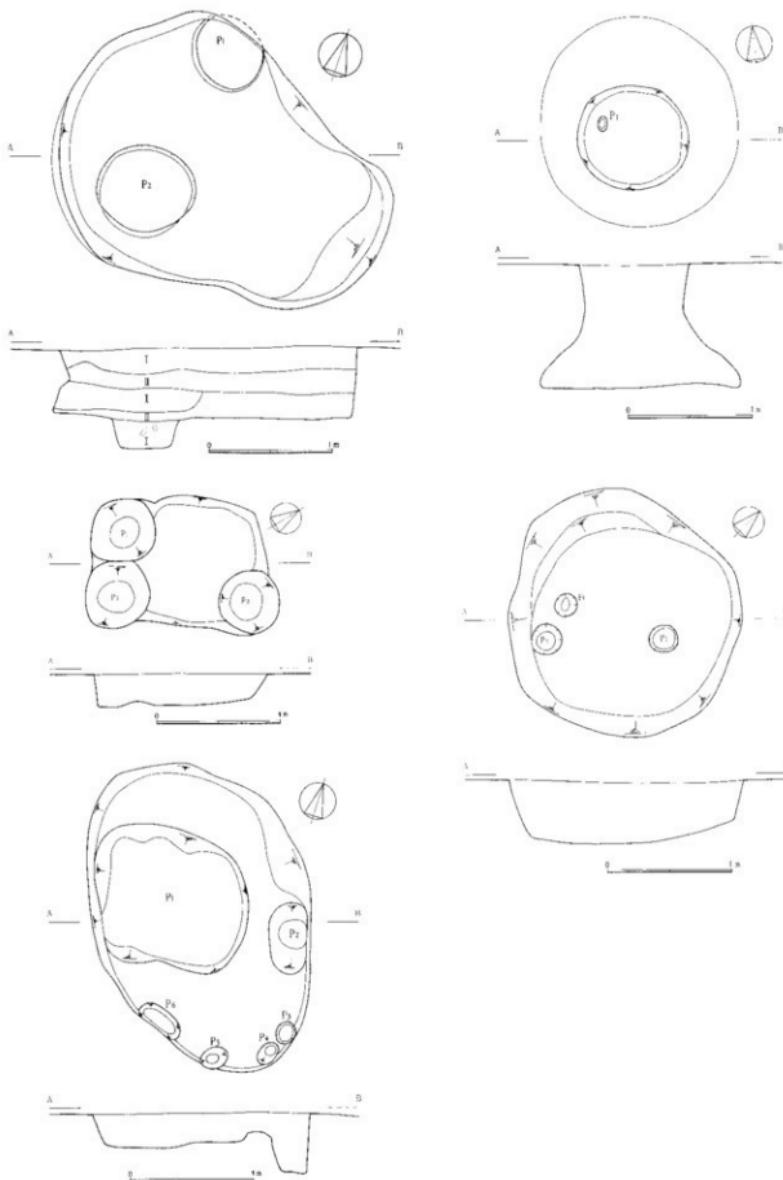
第二四一圖 第一二三號・第一二六號・第一二七號・第一二八號・第一三三號土壤實測圖



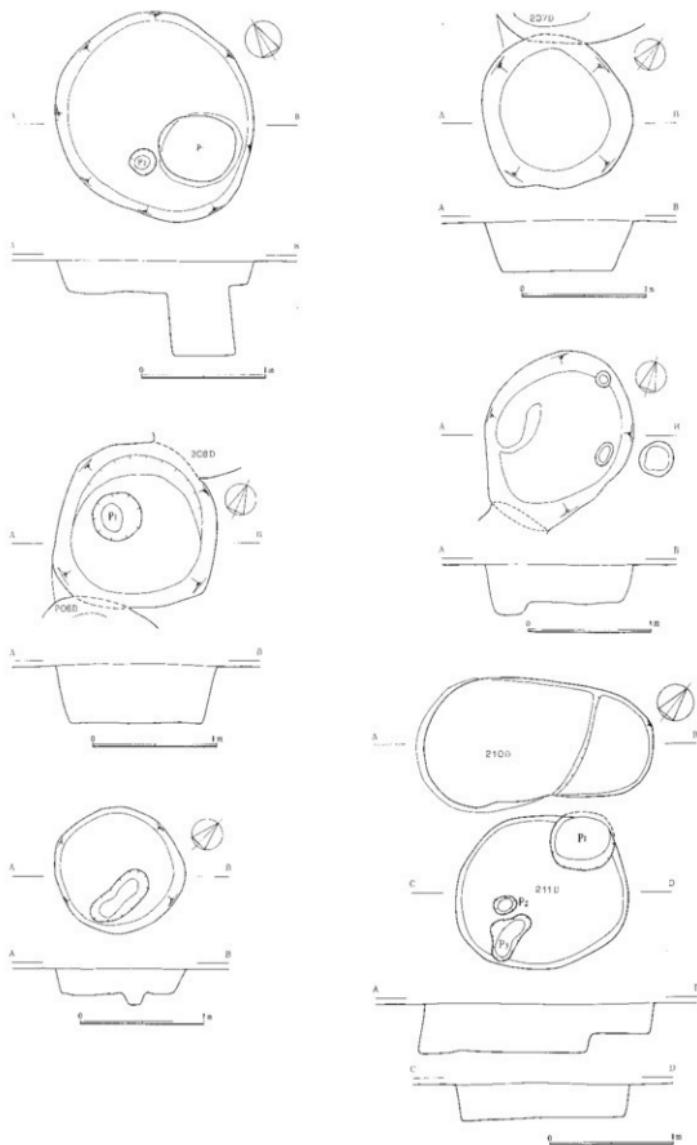
第二四二圖 第一三四号・第一三五号・第一四二号・第一四五号・第一四七号土壤実測図



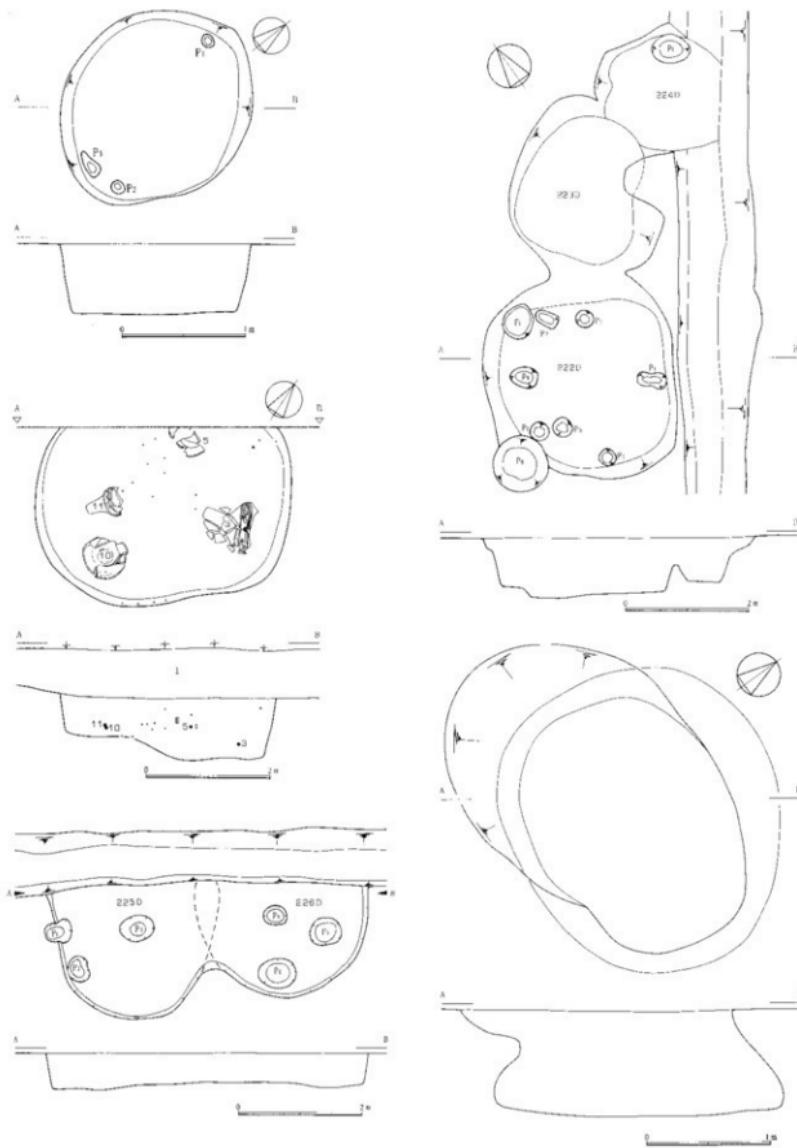
第二四三圖 第一五一號，第一五八號，第一六〇號，第一六一號，第一六二號，第一七三號土壤實測圖



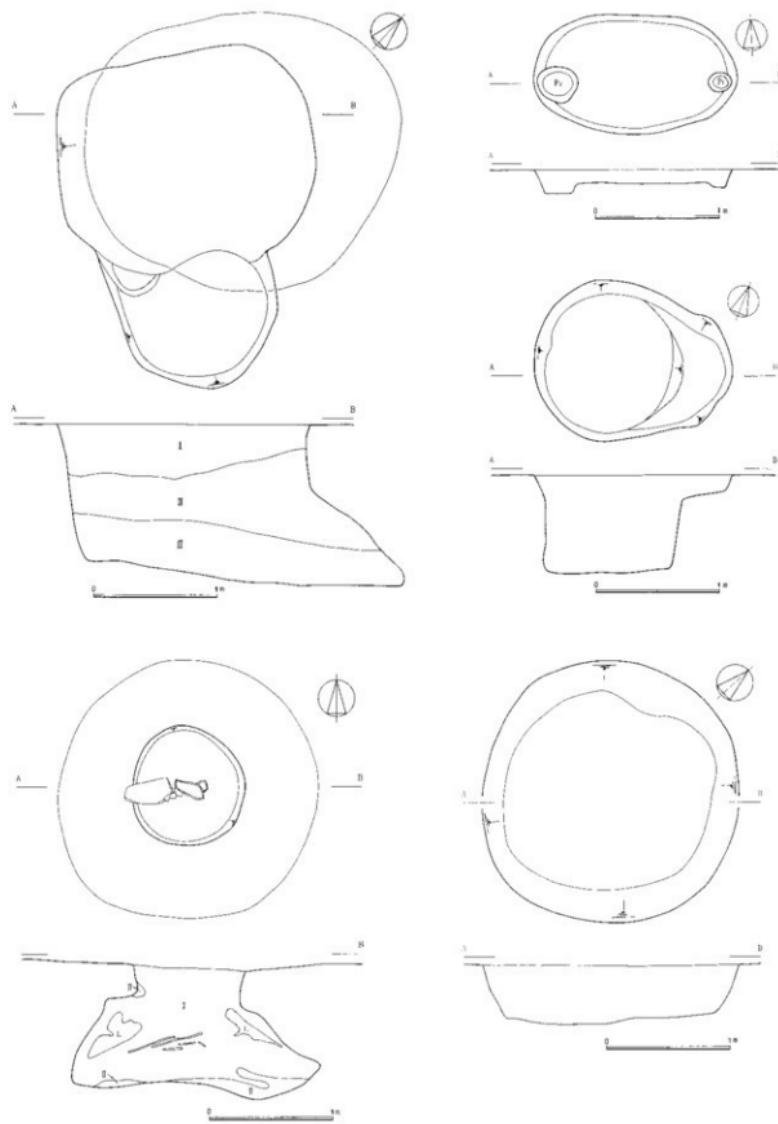
第二四四圖 第一六五号·第一七七号·第一八三号·第一八四号·第一八九号土壤实测图



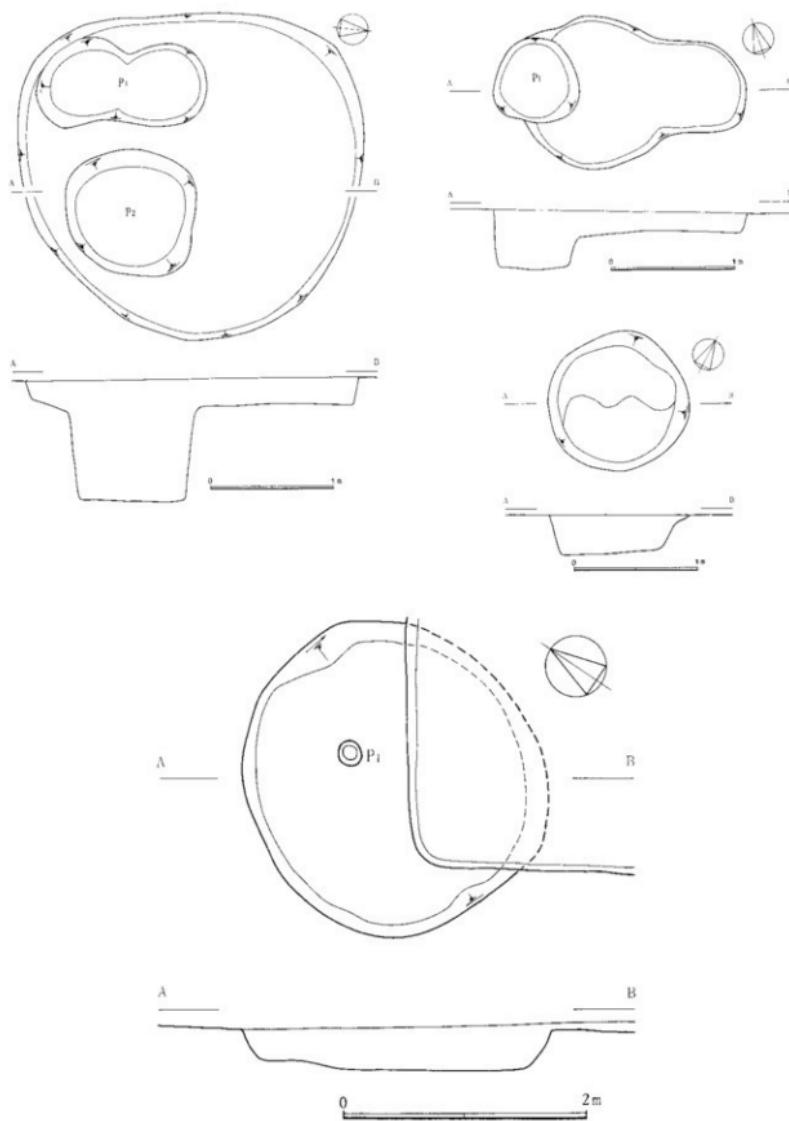
第二四五圖 第二〇二號，第二〇六號，第二〇七號，第二〇八號，第二〇九號，
第二一〇號，第二一一號土壤實測圖



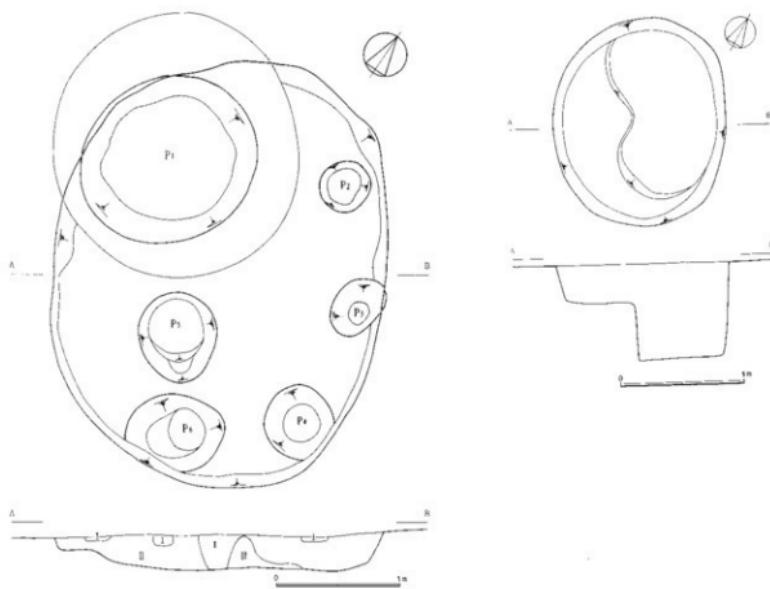
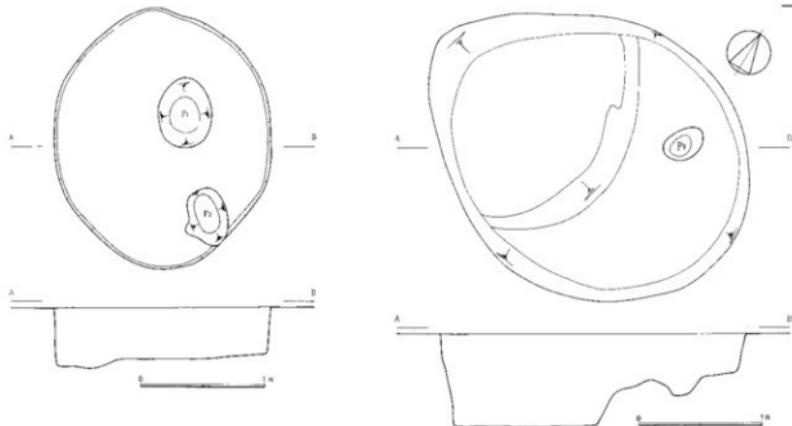
第二四六圖 第二一二号・第二一九号・第二二〇号・第二二二号・第二二三号・第二二四号
第二二五号・第二二六号土壤実測図



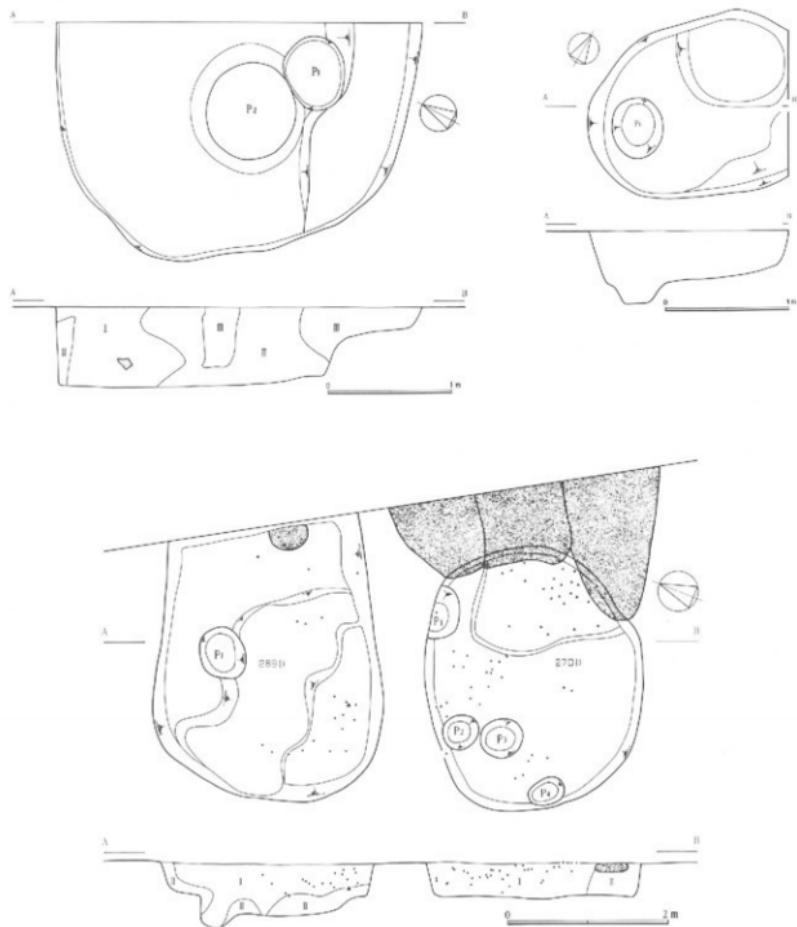
第二四七図 第二三〇号・第二三四号・第二三五号・第二三六号・第二三九号土壤実測図



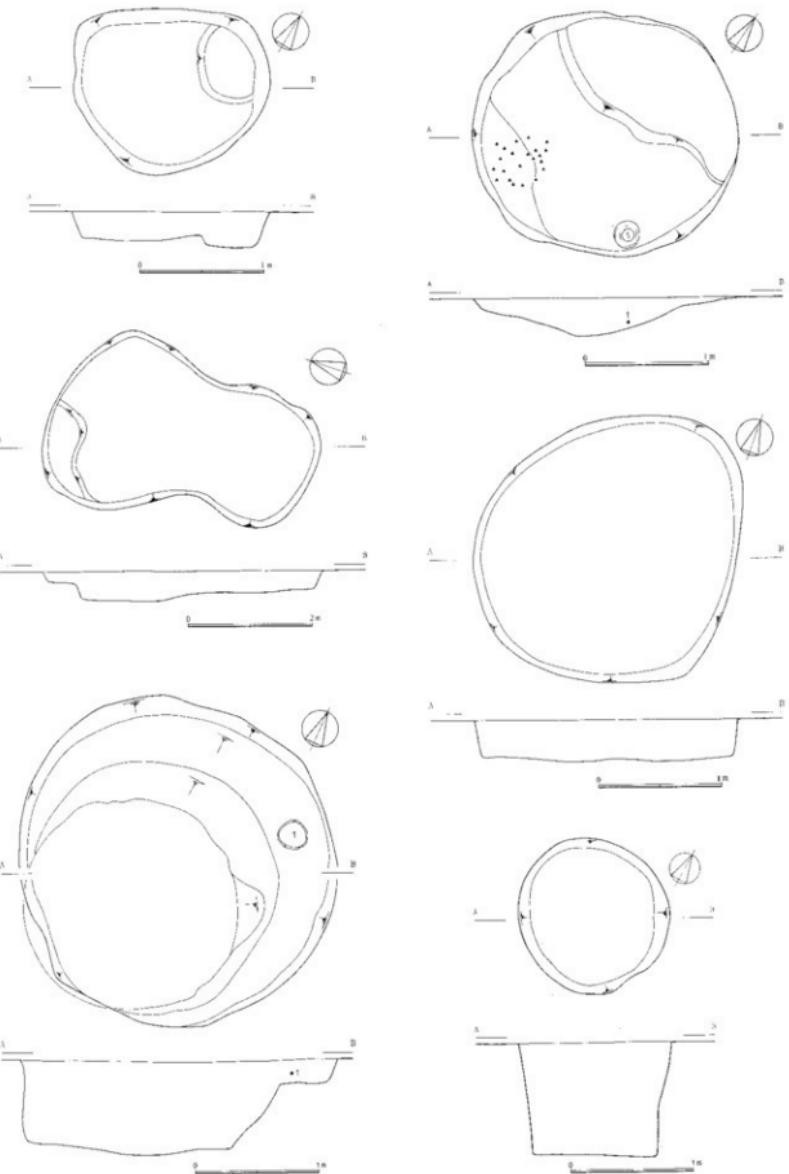
第二四八図 第二四二号・第二四三号・第二五二号・第二五三号土壤実測図



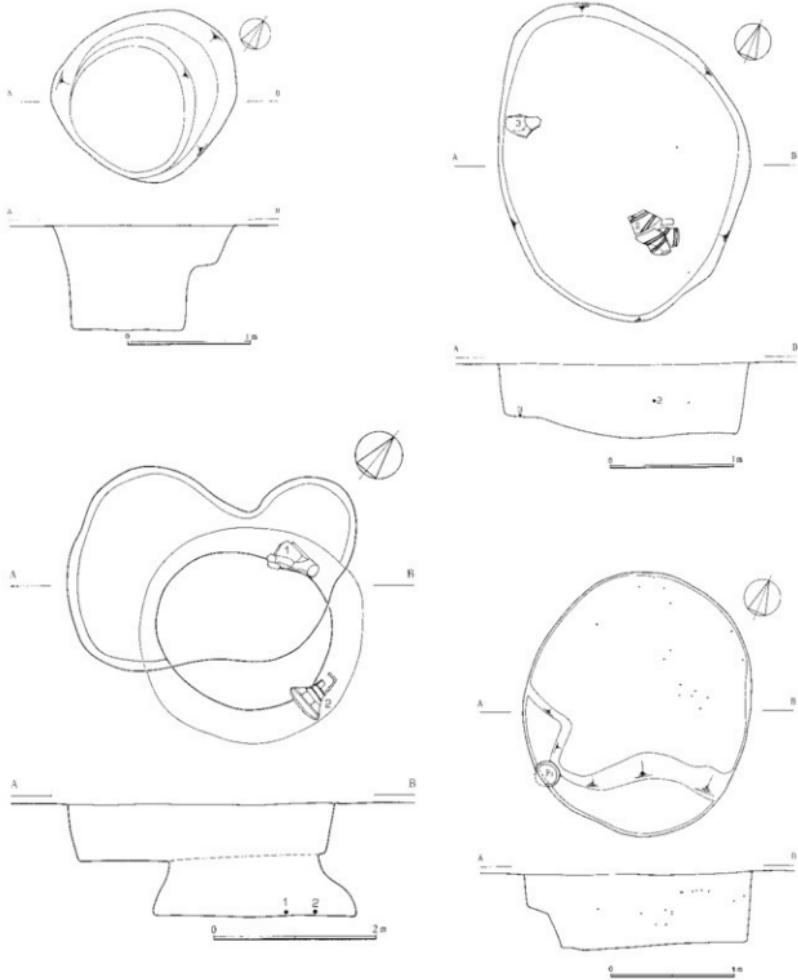
第二四九圖 第二五四号・第二五五号・第二五七号・第二六一号土壤実測図



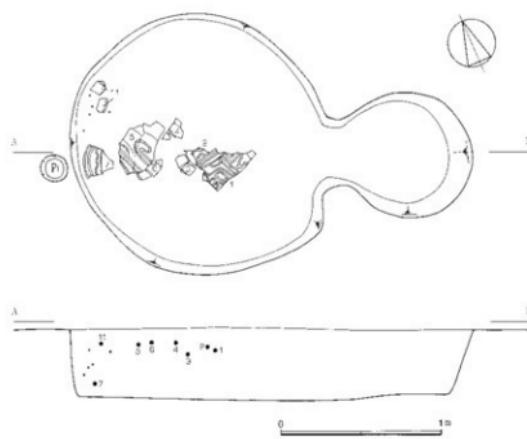
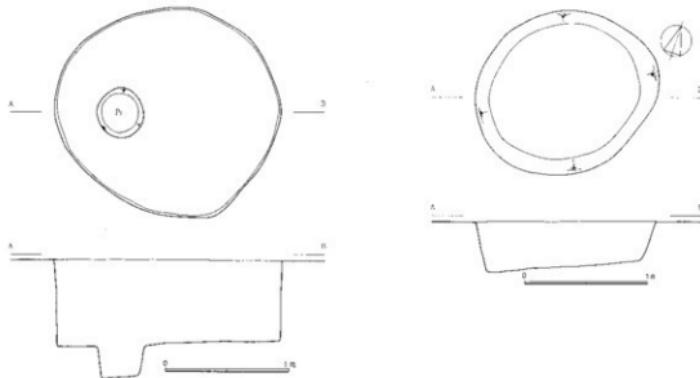
第二五〇圖 第二六七号・第二六八号・第二六九号・第二七〇号土壤実測図



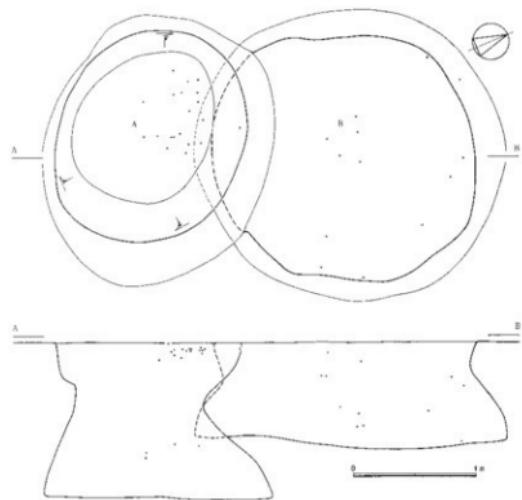
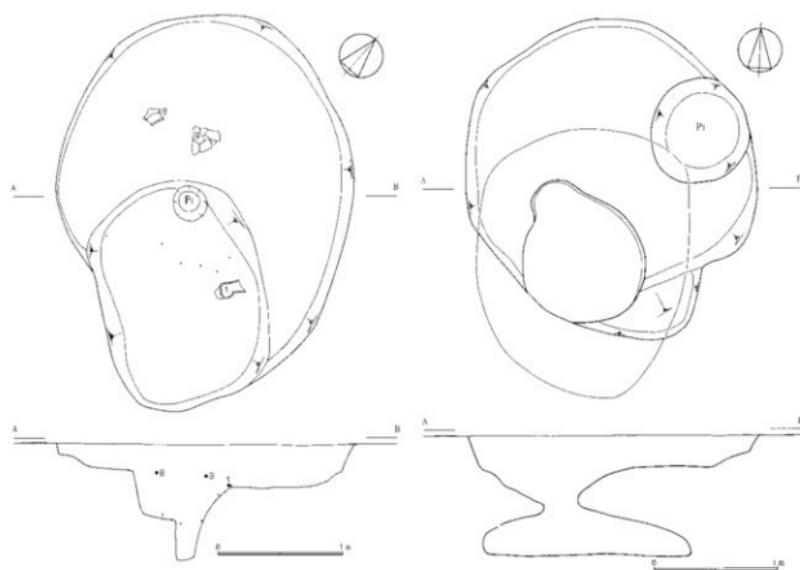
第二五一圖 第二七一號・第二七二號・第二七三號・第二七四號・第二七五號・第二七六號土壤實測圖



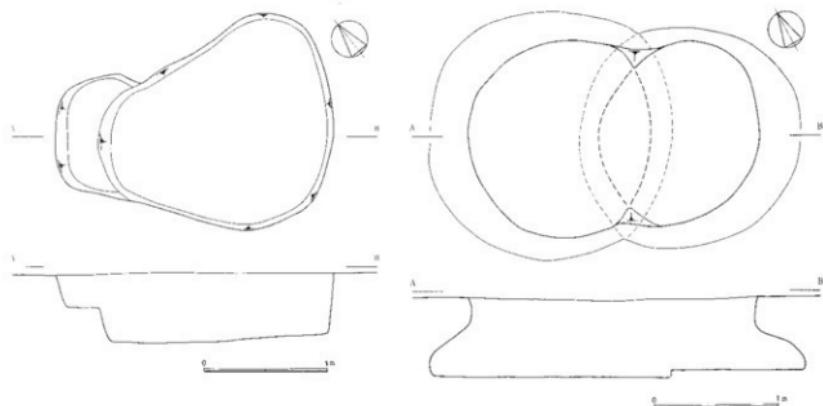
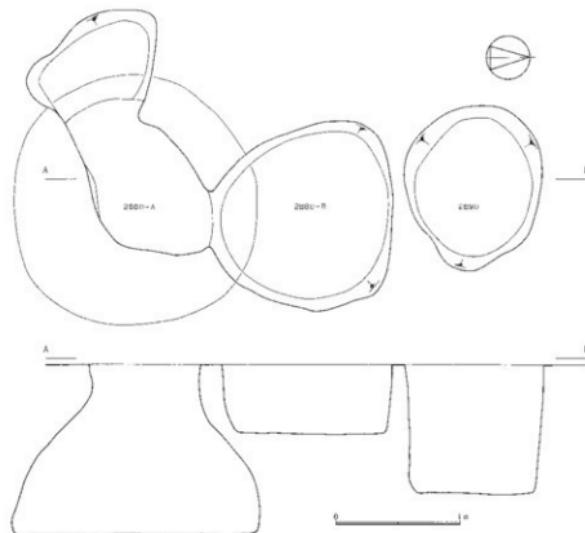
第二五二図 第二七七号・第二七八号・第二七九号・第二八〇号土壤実測図



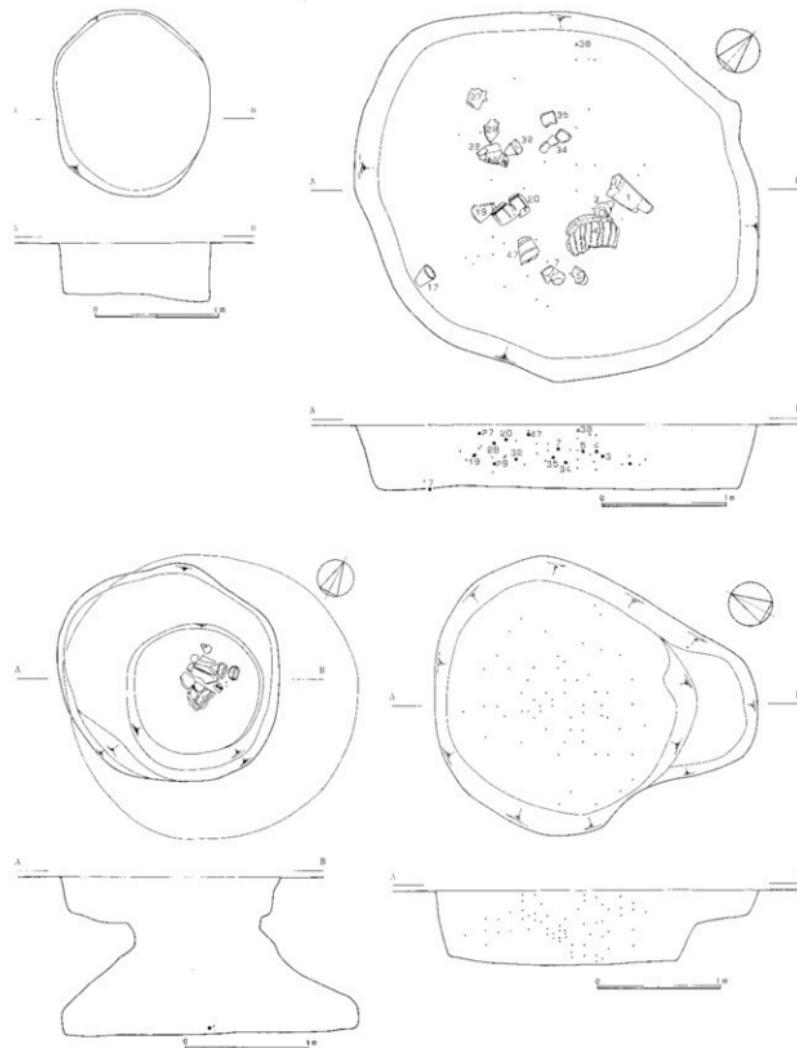
第二五三圖 第二八一號，第二八二號，第二八三號土壤實測圖



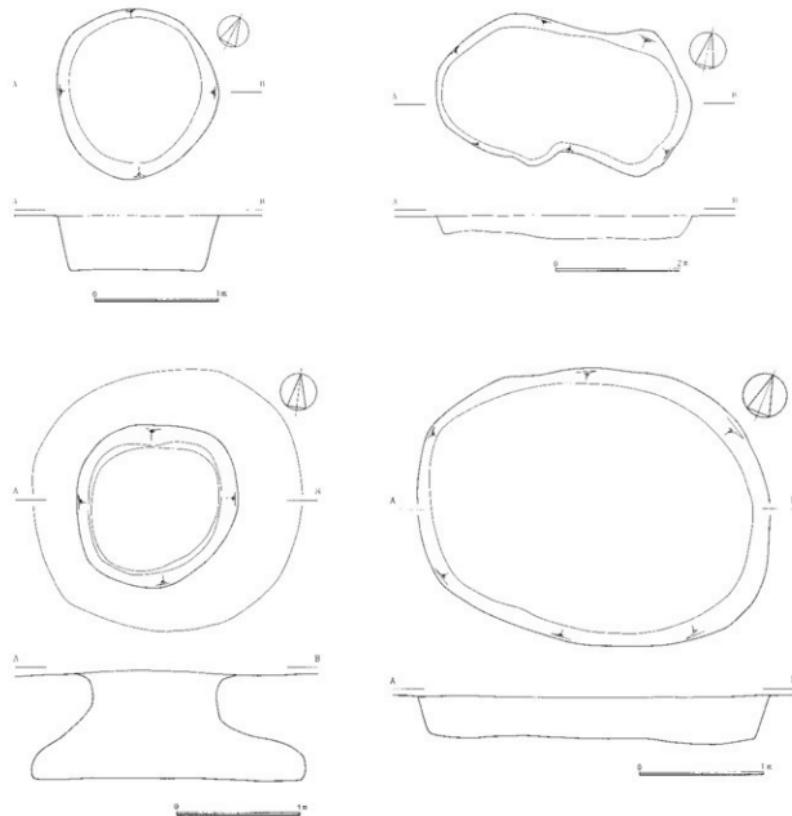
第二五四圖 第二八四号・第二八五号・第二八六号土壤実測図



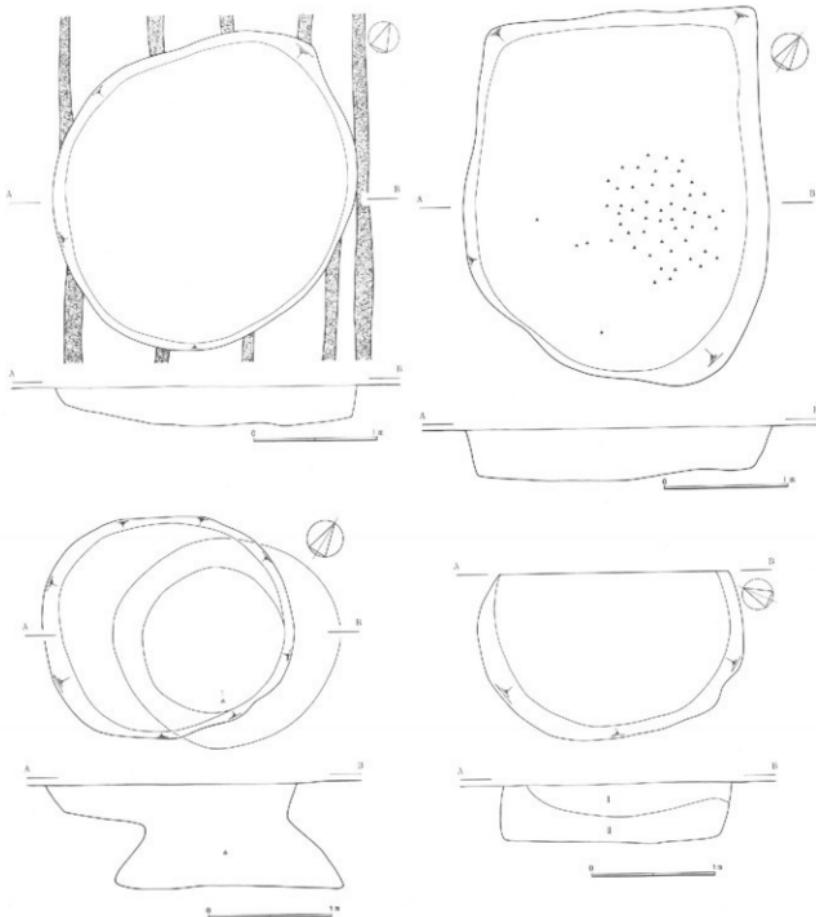
第二五五圖 第二八七号・第二八八号・第二八九号・第二九〇号土壤実測図



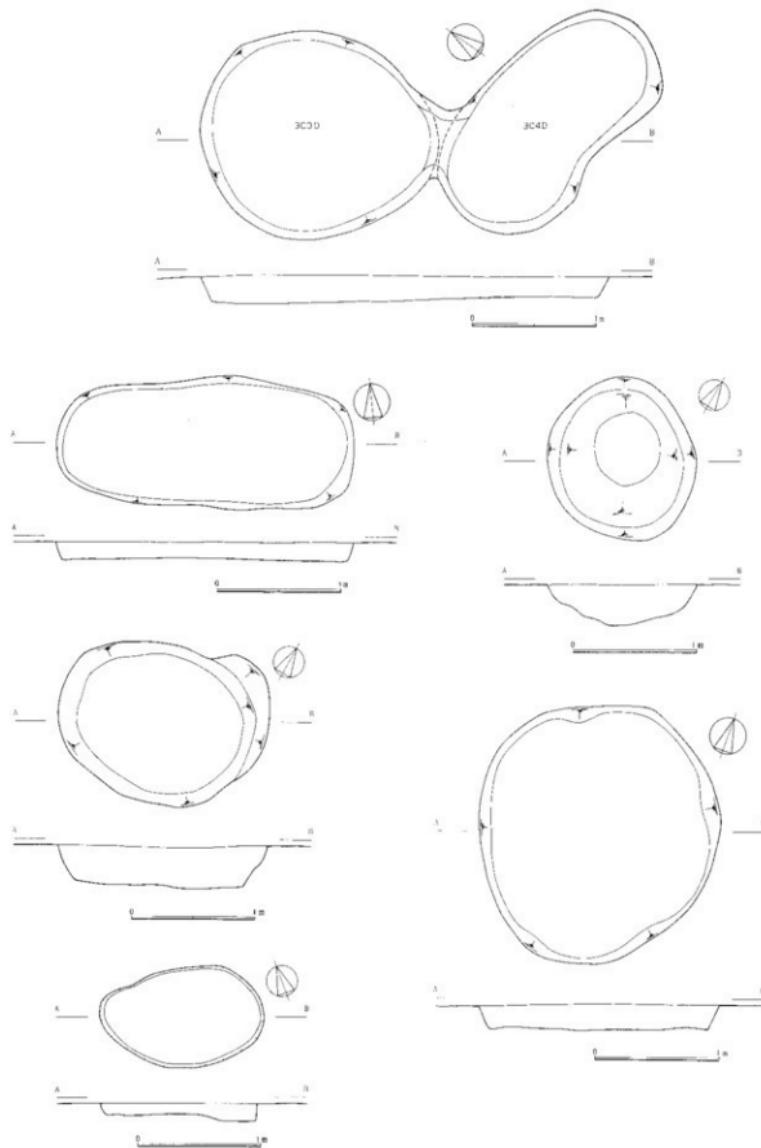
第二五六园 第二九一号·第二九二号·第二九三号·第二九四号土壤实测图



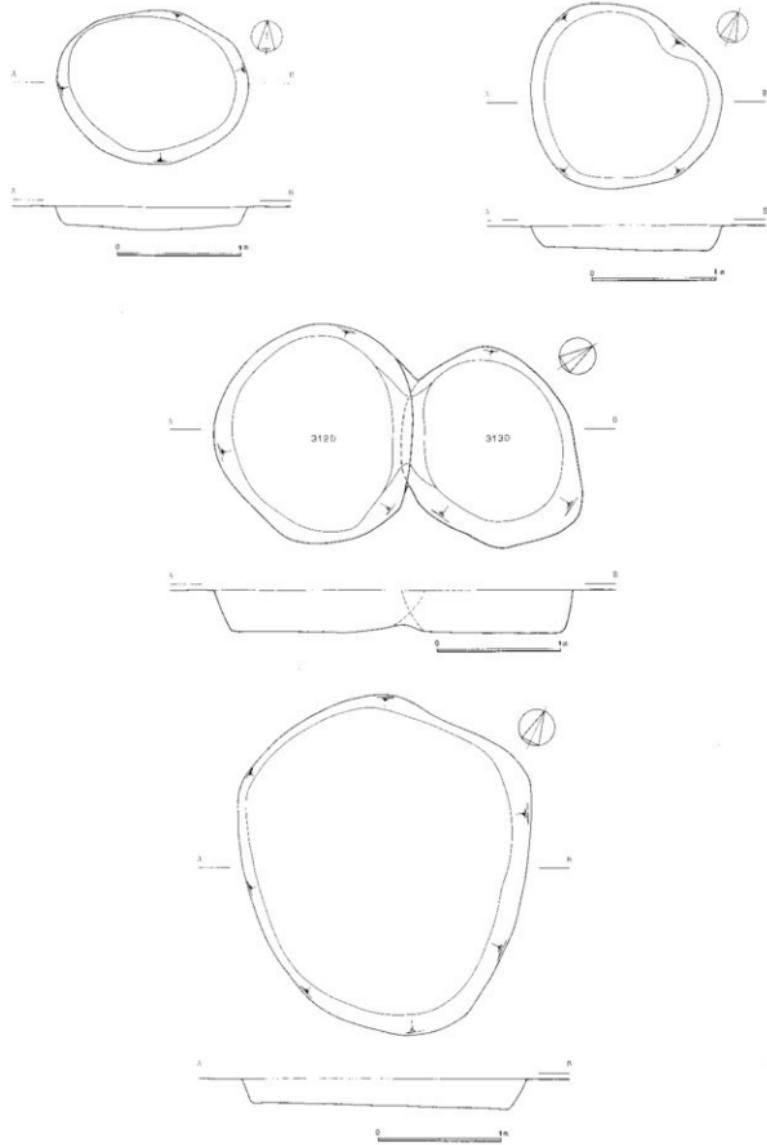
第二五七図 第二九五号・第二九六号・第二九七号・第二九八号土壤実測図



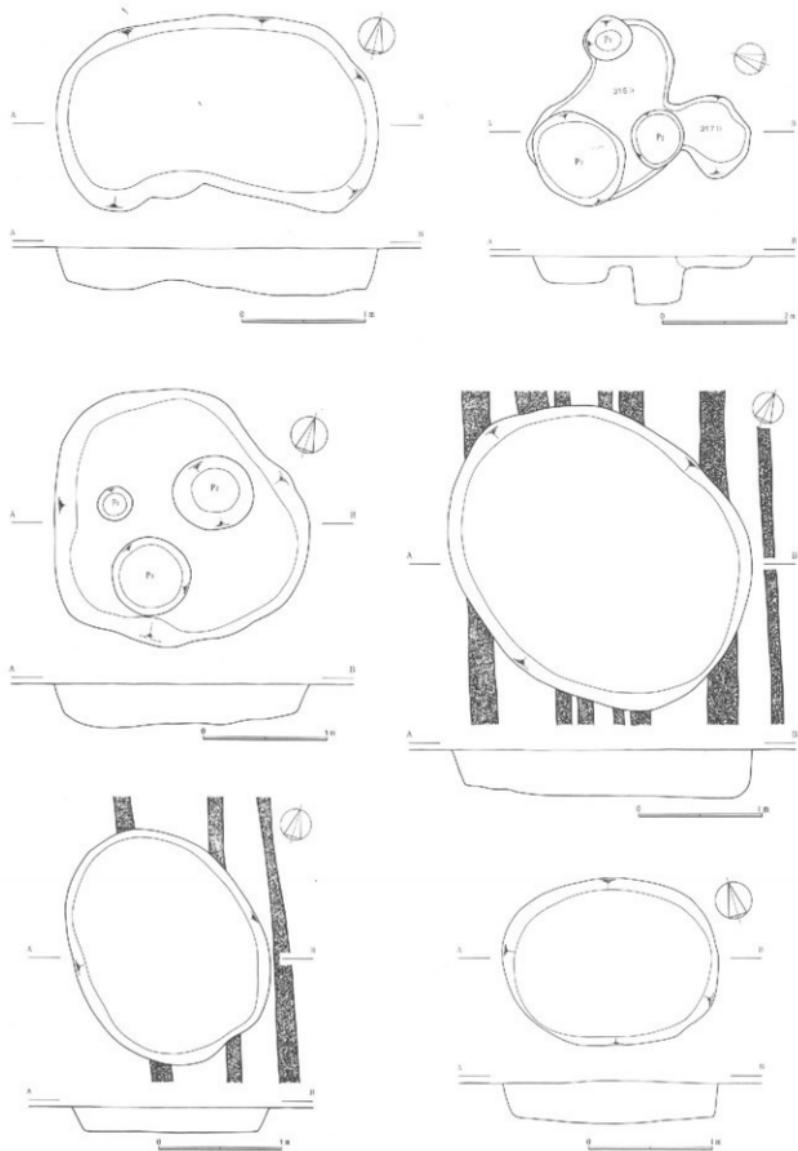
第二五八図 第二九九号・第三〇〇号・第三〇一号・第三〇二号土壤実測図



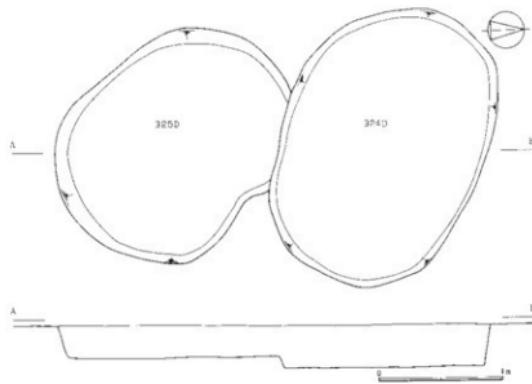
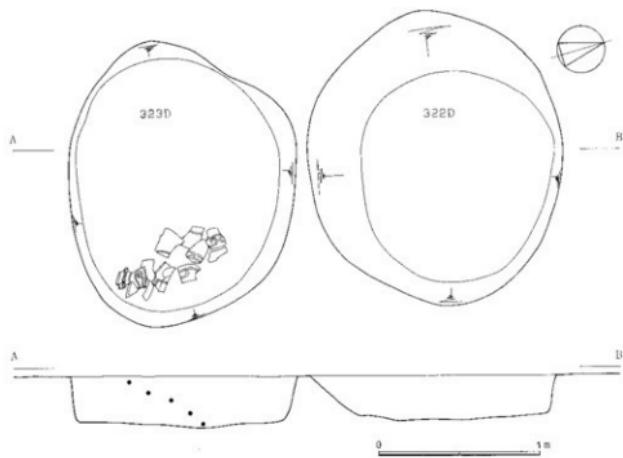
第二五九圖 第三〇三号・第三〇四号・第三〇五号・第三〇六号・第三〇七号・
第三〇八号・第三〇九号土壤実測図



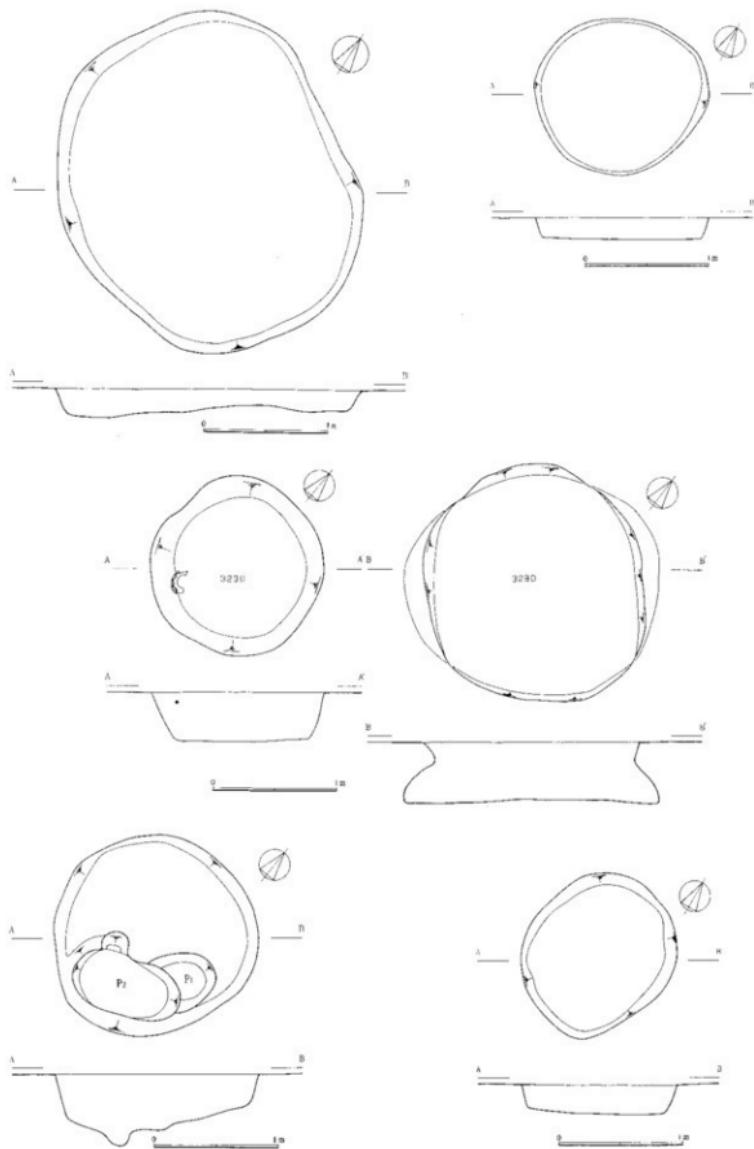
第二六〇圖 第三一〇号・第三一一号・第三一二号・第三一三号・第三一四号土壤実測図



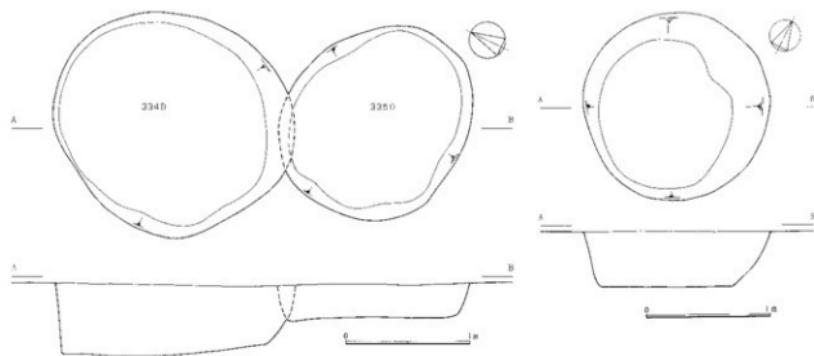
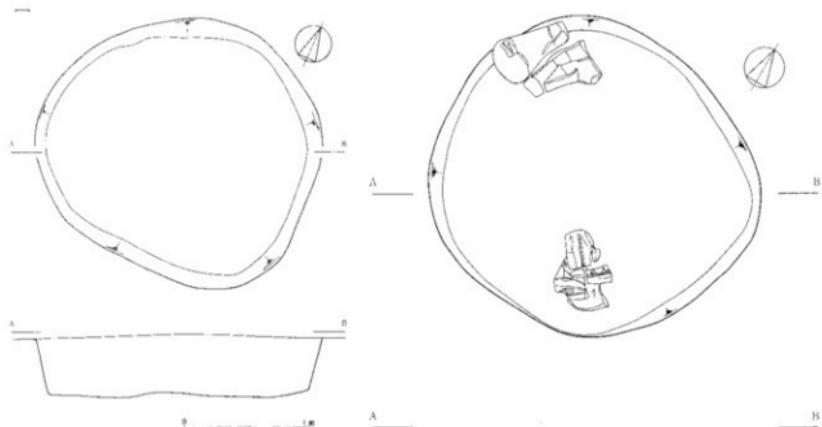
第二六一圖 第三一五號・第三一六號・第三一七號・第三一八號・第三一九號・
第三二〇號・第三二一號土壤實測圖



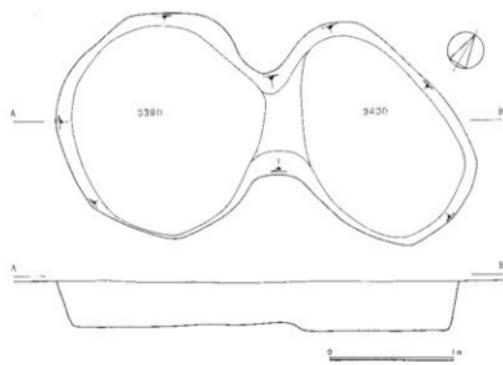
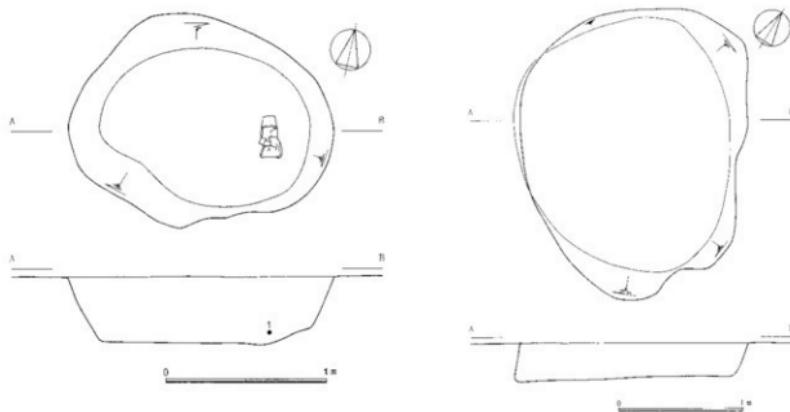
第二六二圖 第三二二号・第三二三号・第三二四号・第三二五号土壤実測図



第二六三圖 第三二六號・第三二七號・第三二八號・第三二九・第三三〇・
第三三一號土壤實測圖



第二六四圖 第三三二號・第三三三號・第三三四號・第三三五號・第三三六號土壤實測圖



第二六五圖 第三三七號・第三三八號・第三三九號・第三四〇號土壤實測圖

第一三章 硬玉製大珠

坪井上遺跡の発掘調査でB地区から3個の硬玉製大珠を発見した。(原色図版第一〇)

発掘調査以前に、農作業中に採集された5個を加えると、ひとつの遺跡から8個の硬玉製大珠が発見されたことになる。

県内では29遺跡36点の出土があるようであるが、かなり大規模な拠点的な集落跡でも1箇程度が一般的であるのに対して、坪井上遺跡の8個というのは県内に例がなく、全国的にも特異な遺跡といえるだろう。

3個の大珠の出土地点は、第1号が土壌内、第2・3号は遺構内ではなく遺構確認面である。

第1号は径10cm、深さ15cmの第一三一号土壌で、確認面より-5cmの位置より出土した。大珠以外の遺物出土はない。

第2・3号は調査区の東端部付近の確認面で、第2号はグリッドJ-K-23~24、第一三号住居址と第一四号住居址の北壁を結ぶ中間地点の確認面上。

第3号は南東部端のグリッドG-H-29~30、第三一四号土壌と第三一九号土壌との中間地点の確認面上。これらの大珠はどこから齎されたものであろうか。

ヒスイは漢字で「翡翠」と書く。カワセミという鳥がいるが雄を翡、雌を翠というそうだ。

緑色に透き通った羽と類似するので同じ文字が当てられたらしい。軟玉と硬玉を総称して翡翠と呼ぶこともあるが、考古学では硬玉に限定している。

硬玉というだけあって、硬度は6.5~7で硬く、ハンマーで叩いても容易に割れないという。

現在日本における硬玉の原産地は、①新潟県糸魚川市の小流域と青海町の青海川を一括する糸魚川産地、②鳥取県若桜町角谷の若桜産地、③兵庫県養父郡大屋町加保の大屋産地、④岡山県大佐町の大佐産地、⑤長崎県長崎市長崎産地などがあり、ほかにヒスイに類似する石の産地として⑥北海道日高町千栄の日高産地、⑦長崎県大瀬戸町の雪の浦産地が知られている。

また、未確認ではあるが海底に想定されているものに⑧富山县朝日町の宮崎産地がある。

このうち、考古学の遺物として加工されているものは①の糸魚川産地のものに限られる。

京都大学原子炉実験所の薬科哲男氏の非破壊による蛍光X線分析法によれば、北海道から九州までの全国で出土しているヒスイ製造物は、時代を問わずすべて糸魚川産としてよいという。

糸魚川市の長者ヶ原遺跡は全面積13万m²以上におよぶ大規模な集落遺跡で、硬玉製飾り玉類の製作が日本で最初に確認された遺跡とて1971年に国の史跡指定を受けた。

硬玉製大珠は縄文中期の代表的な装身遺物であるが、特に、長さが5cm以上の大きな玉を大珠とよんでいる。

体部に1孔が開けられているのが一般的で、全国で250例ほどが知られている。

寺村光晴氏は、硬玉製大珠の加工工程として、原石採取(採拾)→荒削り→形割り→微調整削離→研磨→穿孔→仕上げ研磨(修正)→完成、を経ることを考察している。

富山県氷見市の朝日貝塚で出土した鰐節形の硬玉製大珠は全長15.9cmで、今まで発見されている硬玉製品の中では最大である。

また、福島県会津若松市の大町出土と伝えられる硬玉製大珠は11.9cmで、ともに重要文化財の指定を受けている。

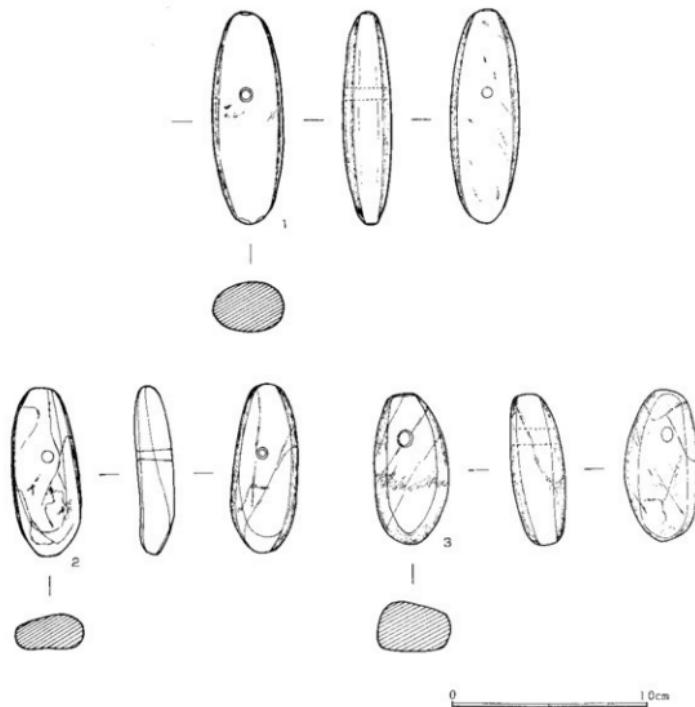
本遺跡出土の1号硬玉製大珠(原色図版第一〇・第二六六図)も全長11cmあり、出土当時は県内最大の大きさであった。

今回の調査では3個の硬玉製大珠が発見されたが、注目すべきことは過去の農作業において5個の硬玉製大珠が発見されていることである。これらのうち4個は町指定文化財になっている。

同一遺跡から8個の硬玉製大珠が出土した例は県内ではなく、全国的にも稀有な例といえるだろう。

硬玉製大珠実測値

番号	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	11.0	3.6	2.5	170.1	淡紅色地。光沢なし。
2	8.6	3.4	1.8	104.0	鮮やかな緑色の光沢あり。
3	7.8	3.8	2.6	140.0	光沢は2よりやや鈍い。



第二六六図 硬玉製大珠実測図

引用文献 藤田富士夫『玉とヒスイ』同朋舎出版 1992

第一四章 石帶

本石帶はB地区の第二五〇号土壙付近の確認面より発見された。(第二六七図、原色図版第一)

古墳時代以降、わが国では中国の制にならない、豪族・貴族・官人などの束帶の一部として鈎帶が用いられた。

鈎帶とは鈎とよぶ金属製の飾具を付けた革帶または腰帶のことであり、特に律令制に入ると身分・官位に基づいてその種類と使用を区別した。

また、鈎帶は延暦15年(796)と弘仁元年(810)の2度にわたり、その使用を禁じられており、これ以降革帶・腰帶の飾具は石製または玉製のものが用いられた。

このうち石製の飾具をつけた革帶・腰帶を石帶と称する。

石製飾具には鈎と同様、方形の巡方、半円形の丸綱の種類があり、石質は大理石・蠟石・瑪瑙などである。

また、巡方・丸綱ともに透文のあるものと、装飾のないものがある。

石帶の分布は鈎帶とともに本州全域に及んでおり、官衙・寺院・集落などの遺跡から発見されている。

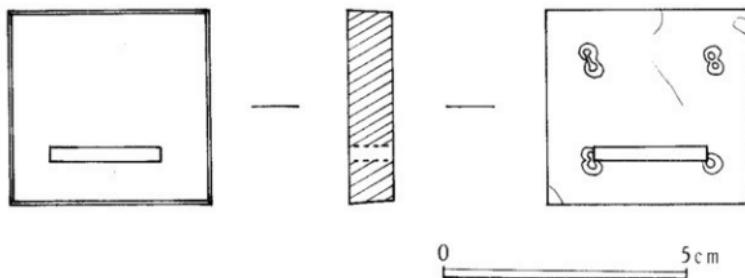
石帶の製法は、石を10個ほど白糸で十文字に縫じつけ、左端の絞具という水尾金で締めるようにした。

奈良時代には五位以上のものには金銀装腰帶と呼ばれて金銅などでこれを作り、透文のあるものもあったが、六位以下の有位者や無位のものは烏油腰帶と呼び、無文で黒漆塗の銅製のものを用いていたことは正倉院御物によって知ることができる。

地方では大理石製のごときものも用いられていたらしいことは本遺跡からの出土品によってもこれを察することができる。

これがすべて石製の鈎となって石帶の名が用いられるようになったのは、鎌倉時代に入ってからのことらしい。

本遺跡出土の石帶は大理石製の巡方石帶で、大きさは4.0×4.2cm、厚さ9mm、重量36.0gである。

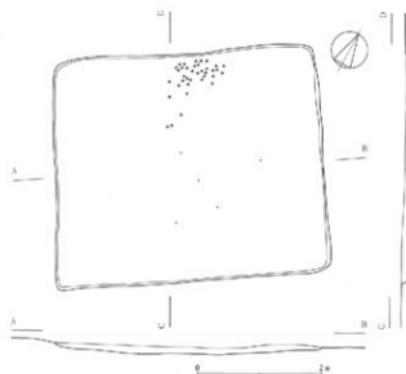
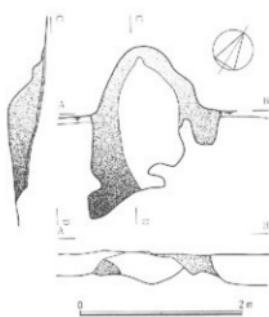
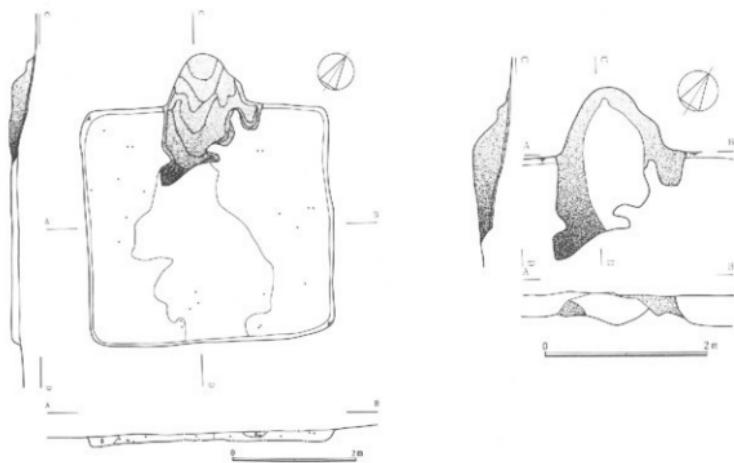


第二六七図 石帶 実測図

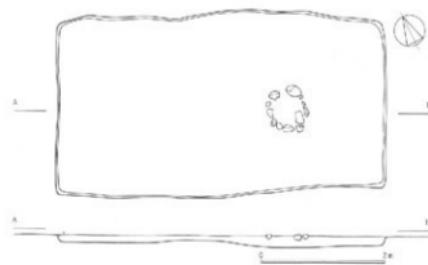
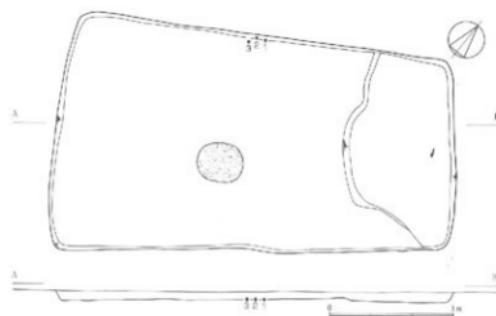
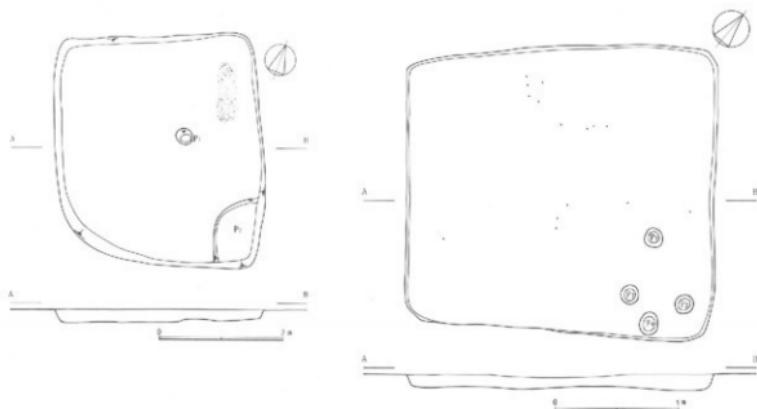
第一五章

C 地区遺構実測図

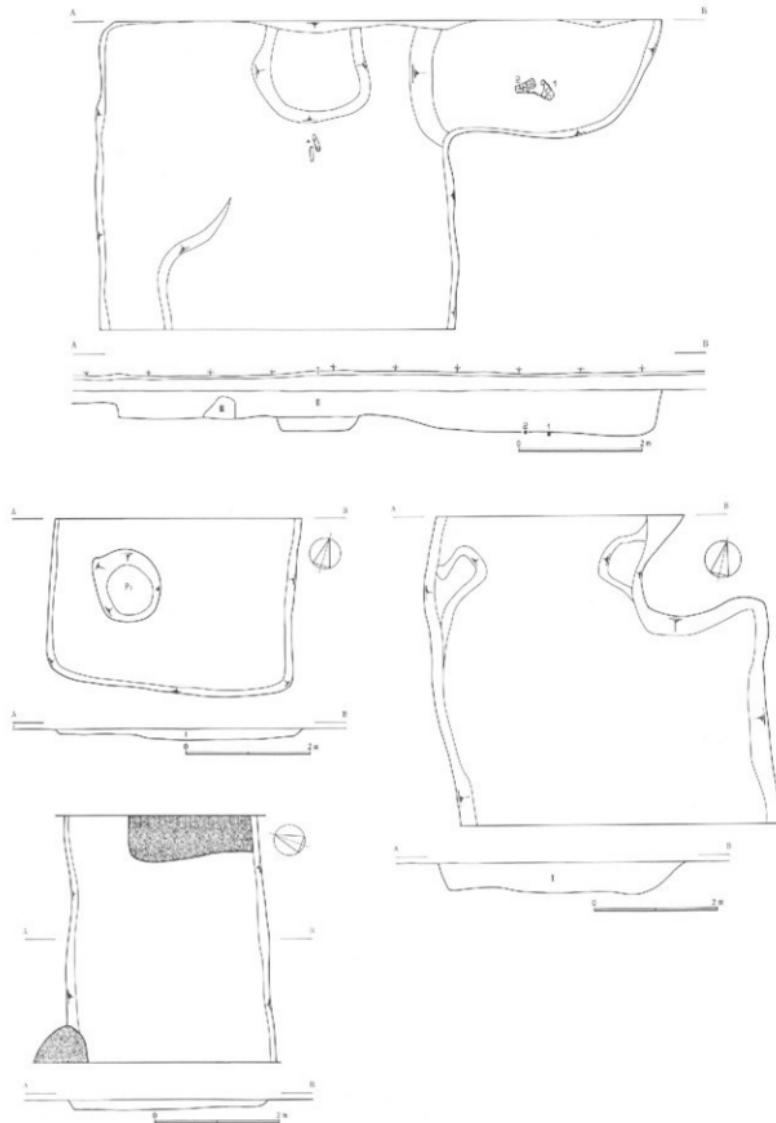
豎穴住居址・豎穴状遺構・周溝・土壙



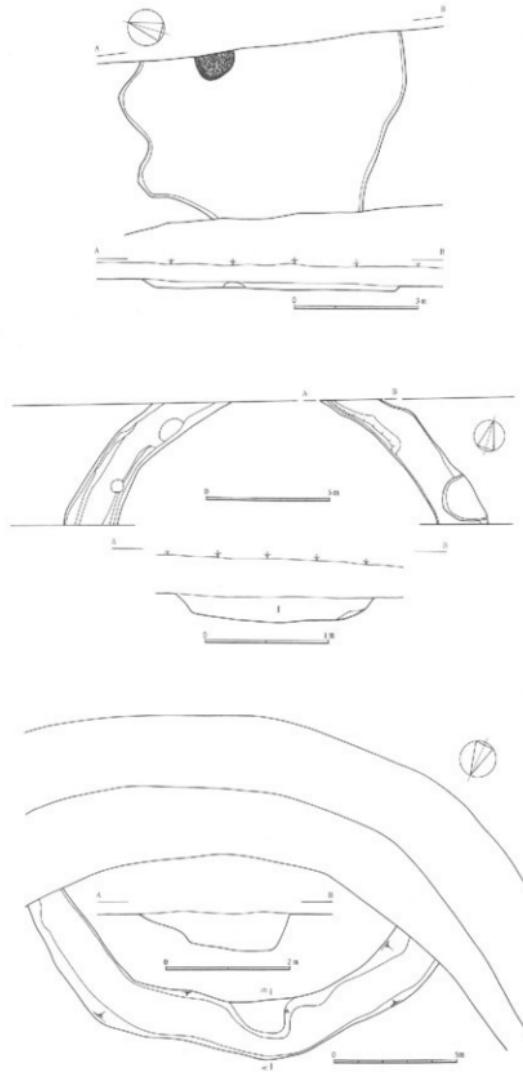
第二六八図 C地区第一号住居址・カマド実測図
第二号住居址実測図



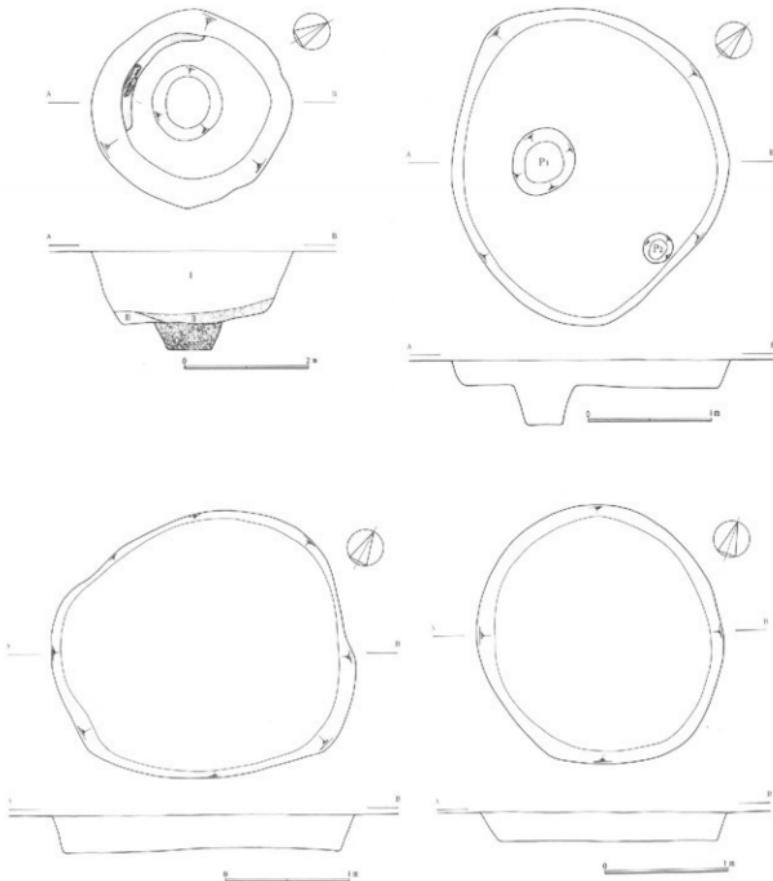
第二六九圖 C 地區第一号・第二号・第三号
竪穴状遺構実測図（一）



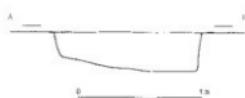
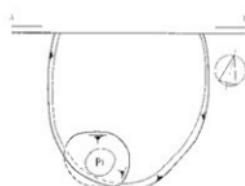
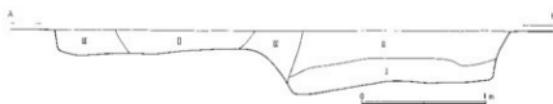
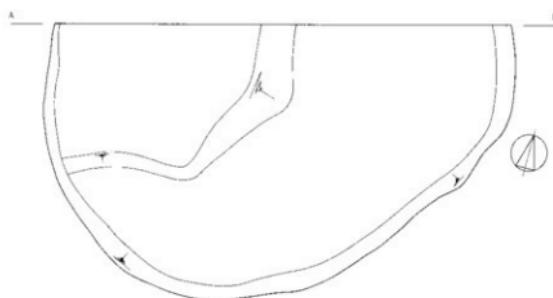
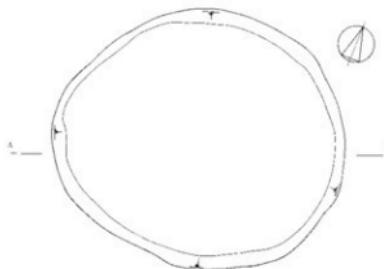
第二七〇圖 C 地區豎穴狀遺構實測圖（二），遺物出土狀態圖



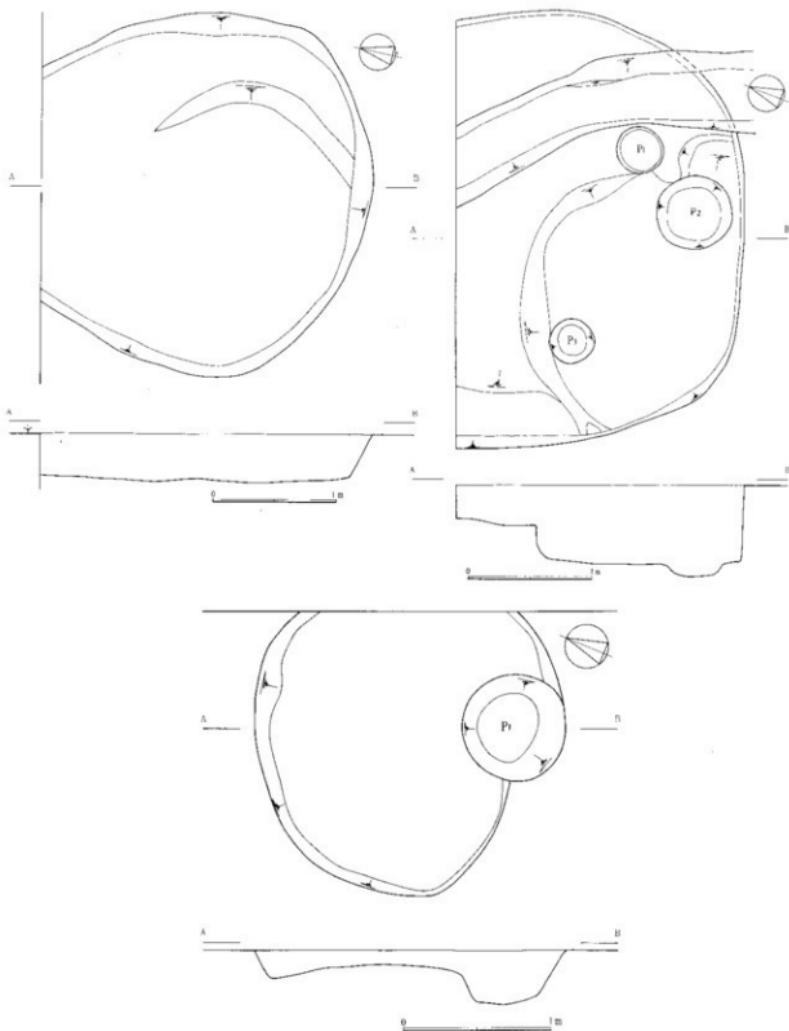
第二七一図 C地区堅穴状遺構実測図(三), 周溝実測図



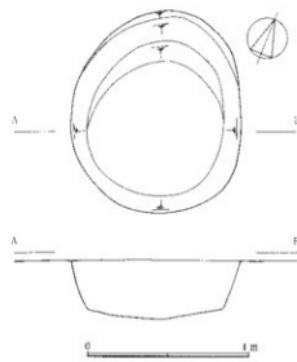
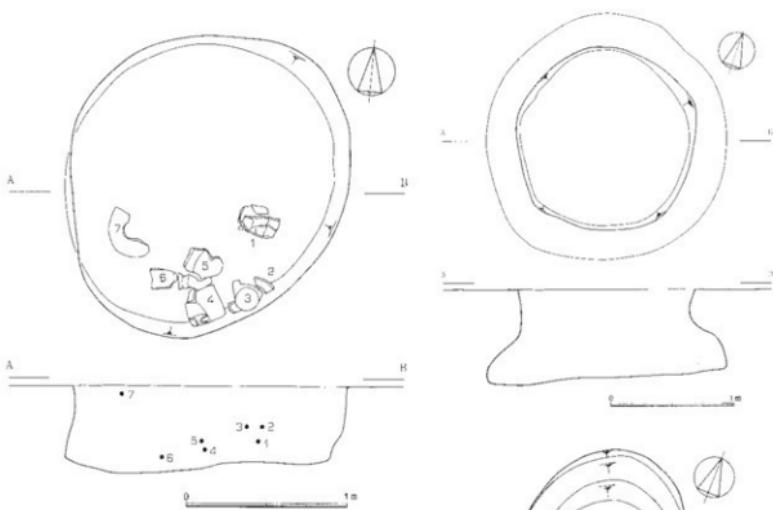
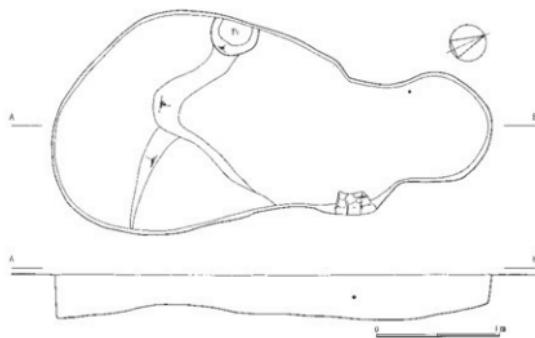
第二七二圖 C 地區土壤實測圖（一）



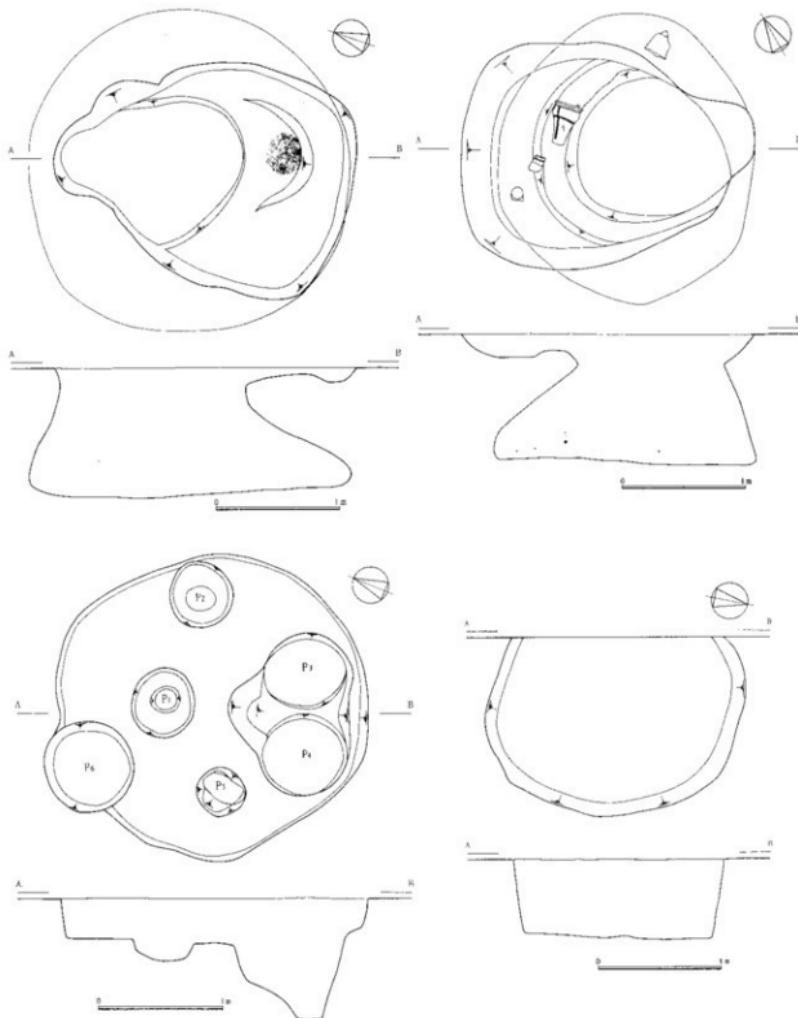
第二七三図 C 地区土壤実測図 (二)



第二七四圖 C 地區土壤實測圖（三）



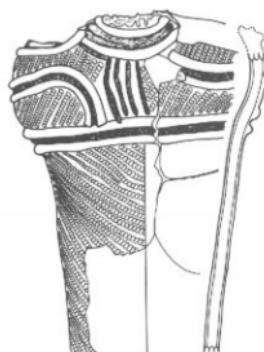
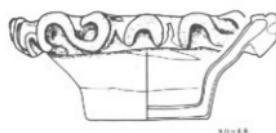
第二七五圖 C 地區土壤實測圖 (四)



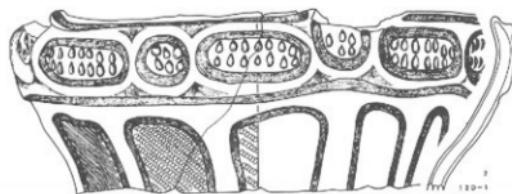
第二七六図 C 地区土壤実測図（五）

第一六章

遺物実測図



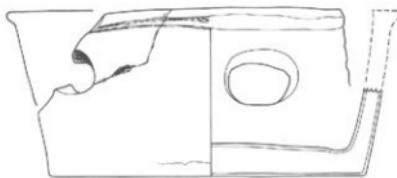
20-1



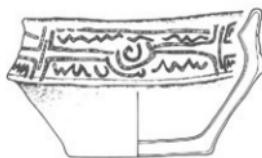
20-1



20-30



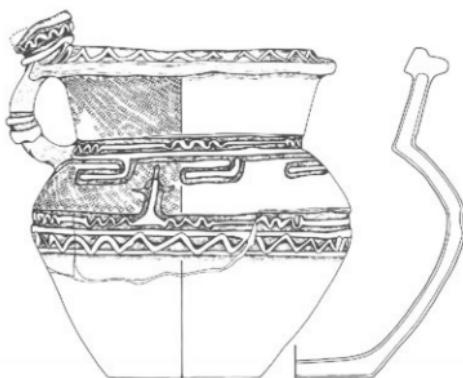
20-69



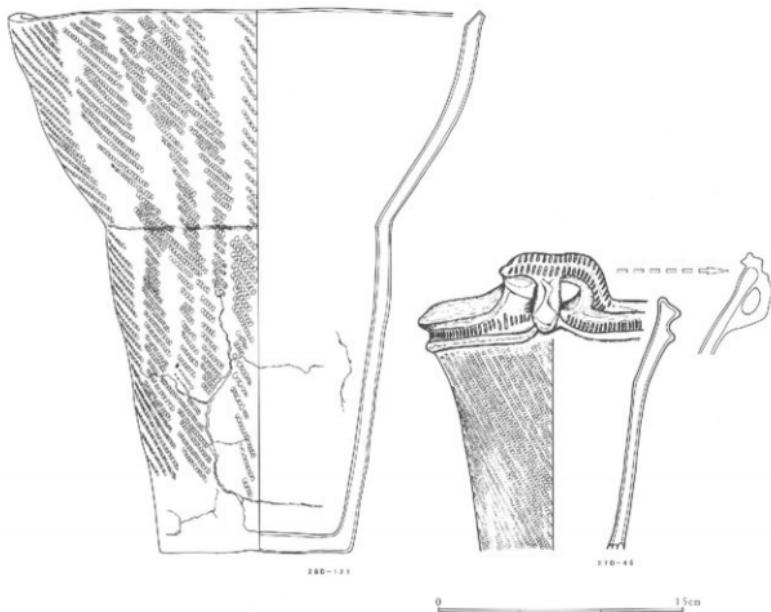
20-42

0 1 cm

第二七七圖 第一次調查 A 地區出土遺物實測圖（一）



ZAD-65

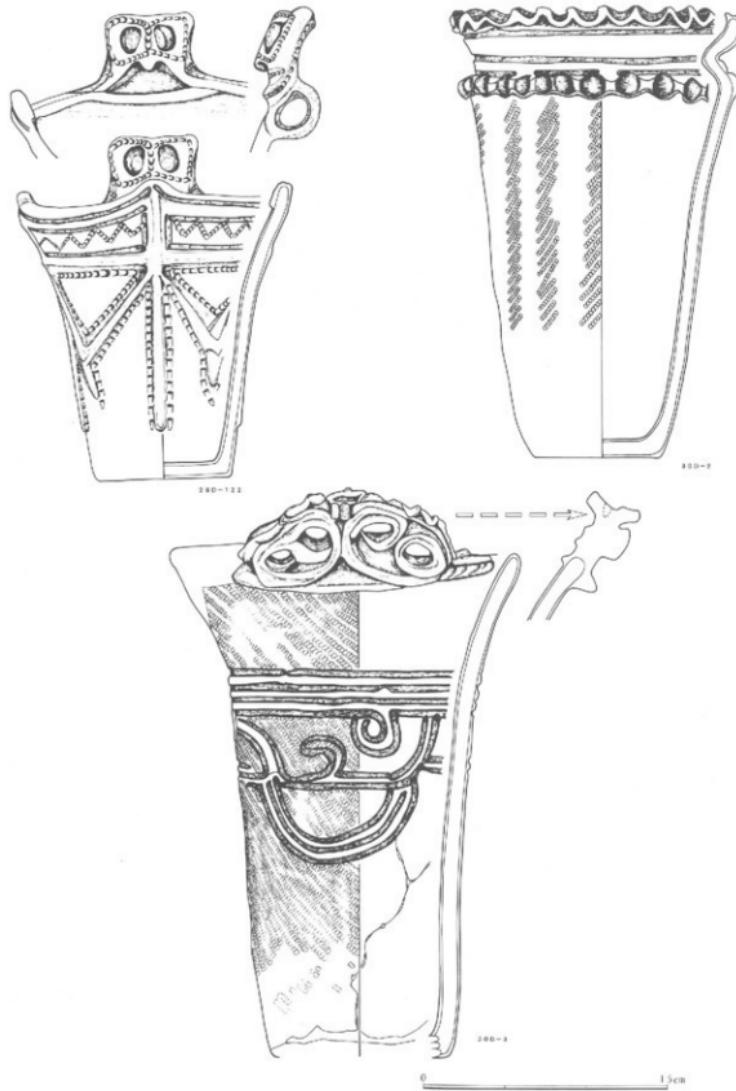


ZAD-121

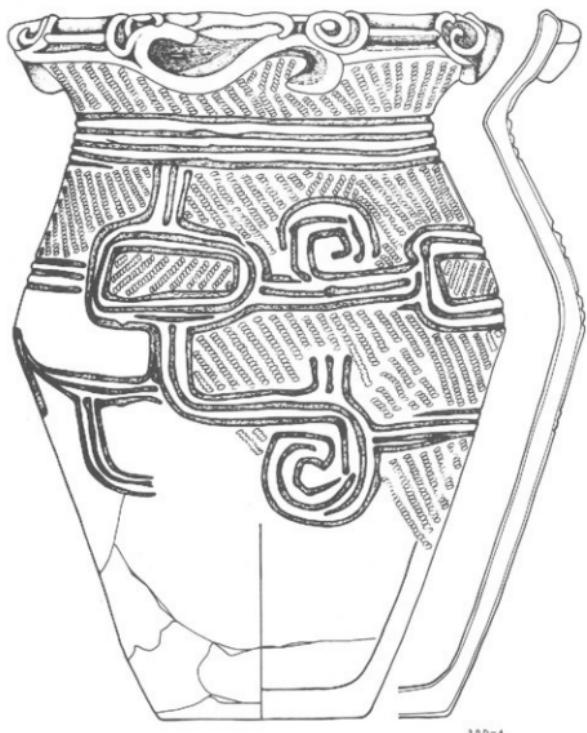
ZAD-45

0 15cm

第二七八図 第一次調査A地区出土遺物実測図(二)

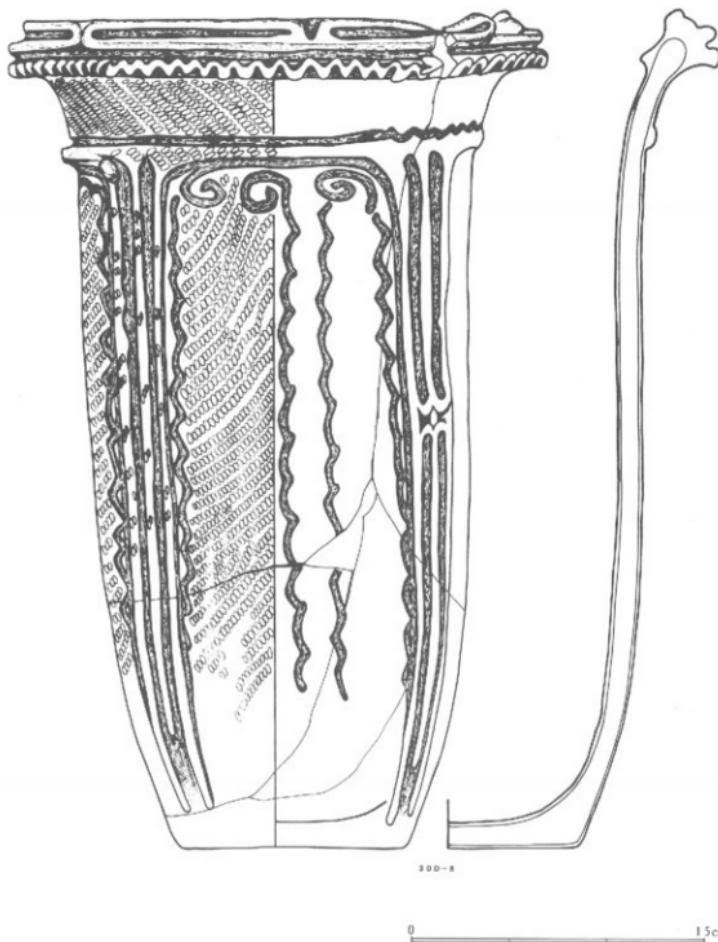


第二七九圖 第一次調査 A 地区出土遺物実測図（三）

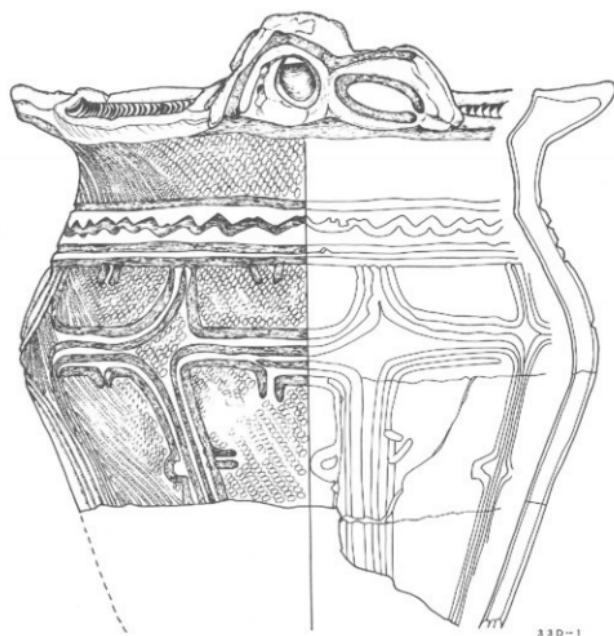


0 15 cm

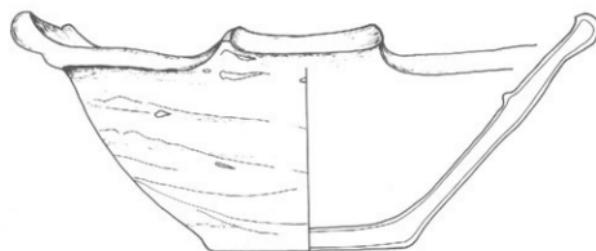
第二八〇図 第一次調査 A 地区出土遺物実測図（四）



第二八一図 第一次調査A地区出土遺物実測図(五)



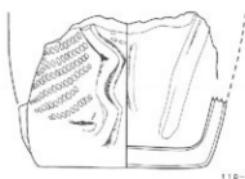
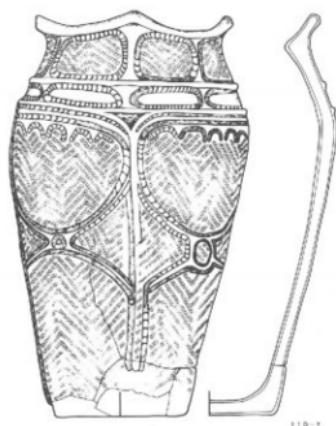
33D-1



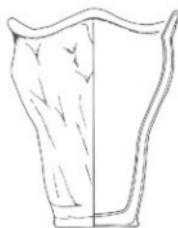
38D-3

0 1.5 cm

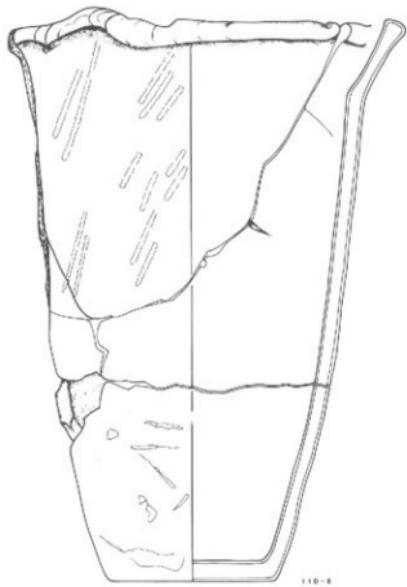
第二八二図 第一次調査A地区出土遺物実測図（六）



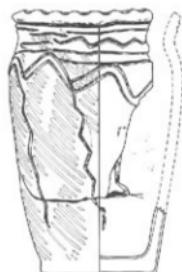
E 10-5



E 10-10



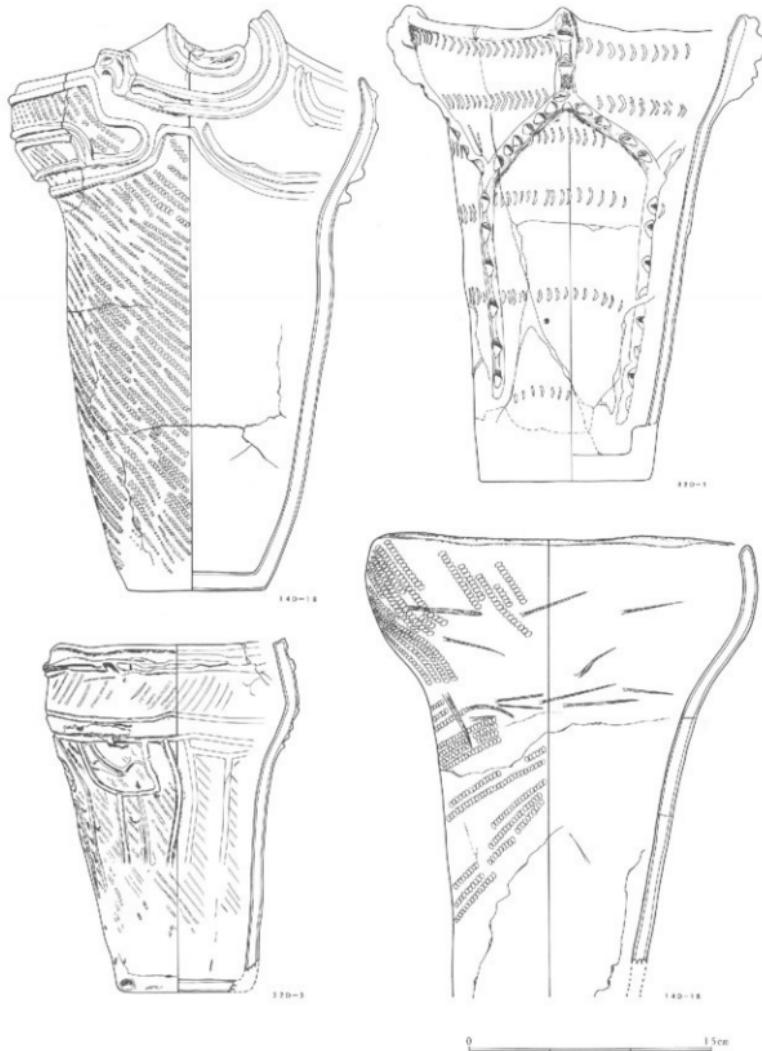
E 10-8



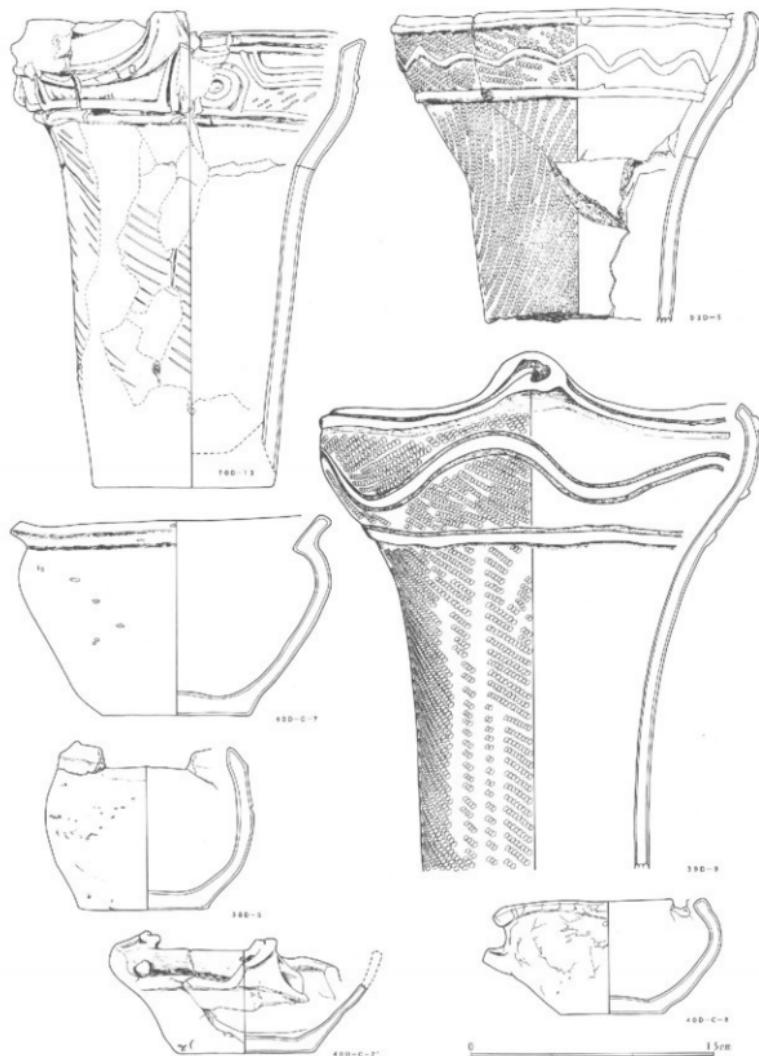
E 10-14-1

0 10cm

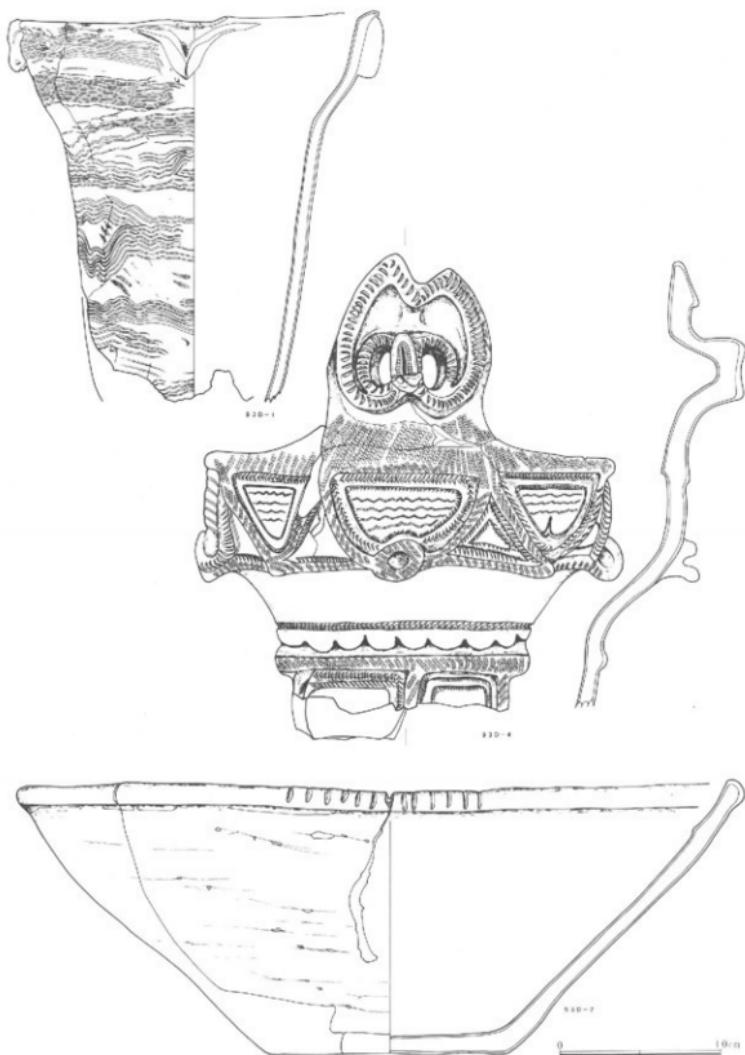
第二八三圖 第二次調查B地區出土遺物實測圖（一）



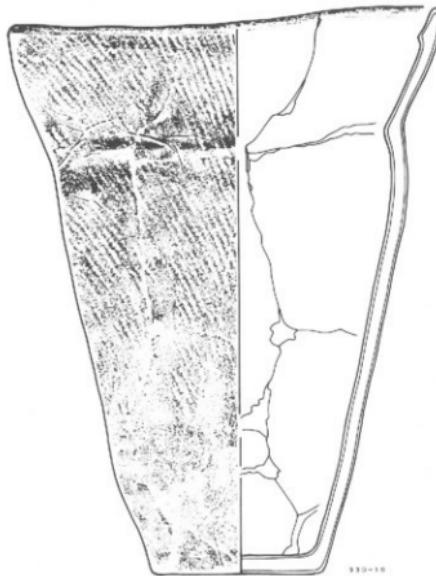
第二八四図 第二次調査B地区出土遺物実測図（二）



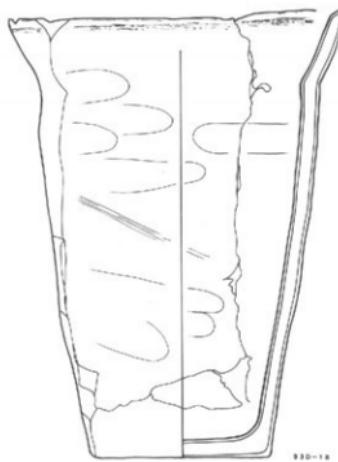
第二八五圖 第二次調査B地区出土遺物実測図（三）



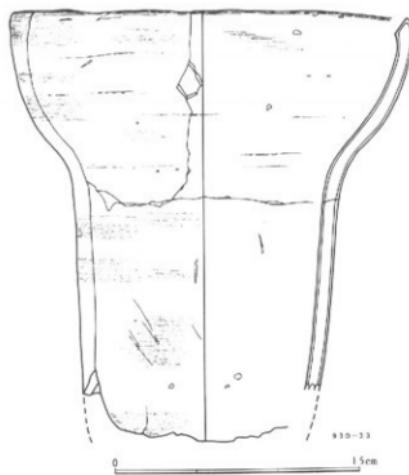
第二八六図 第二次調査B地区出土遺物実測図(四)



930-10

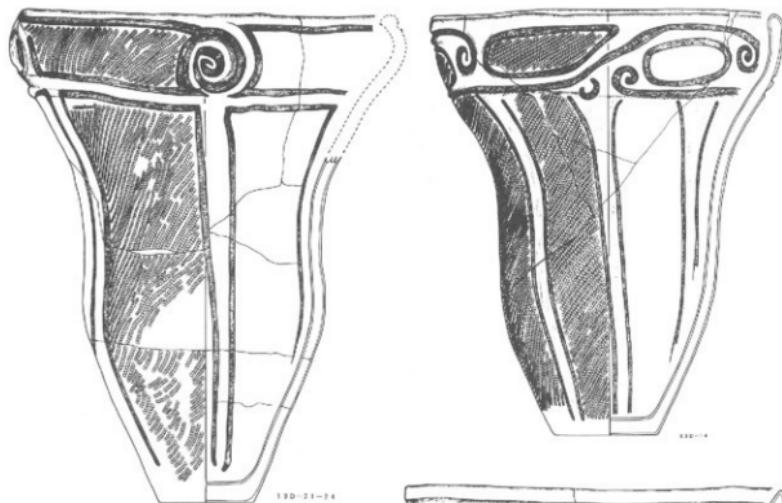


930-18



930-23
15cm

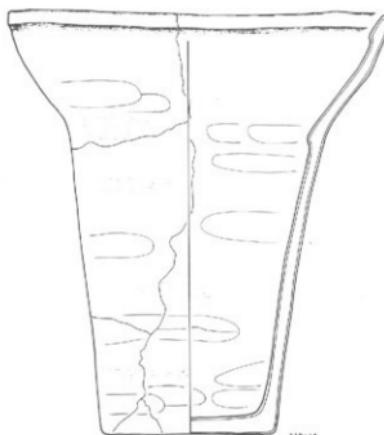
第二八七圖 第二次調查B地区出土遺物実測図（五）



13D-21-74

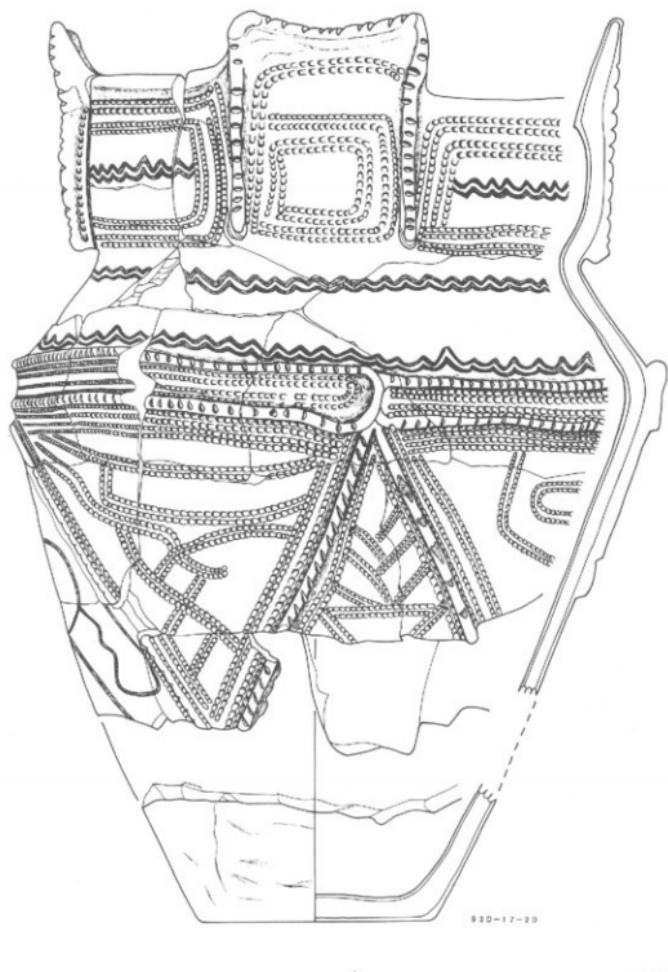


13D-11

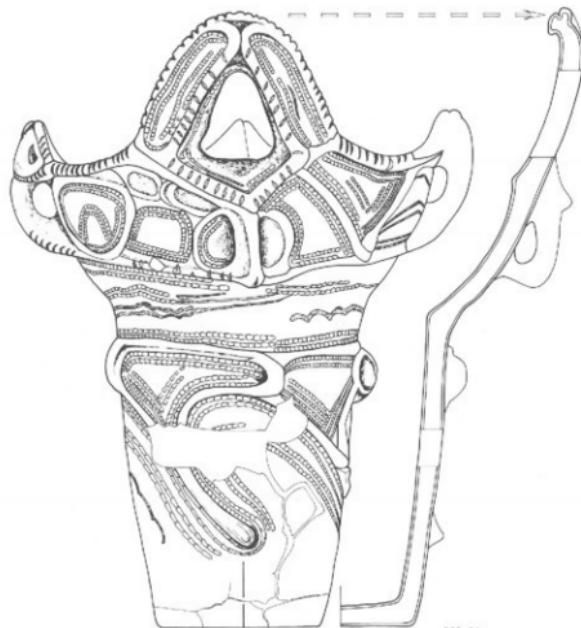


0 1 2 3 cm

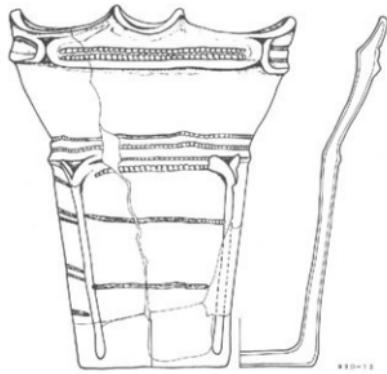
第二八八圖 第二次調查B地區出土遺物實測圖（六）



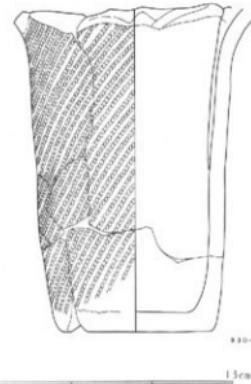
第二八九圖 第二次調查B地区出土遺物実測図（七）



*30-34



*30-13

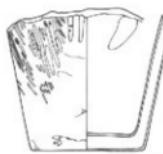
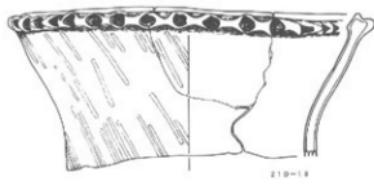
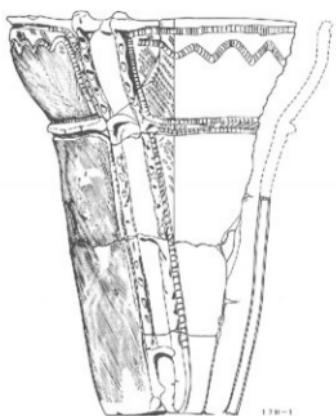
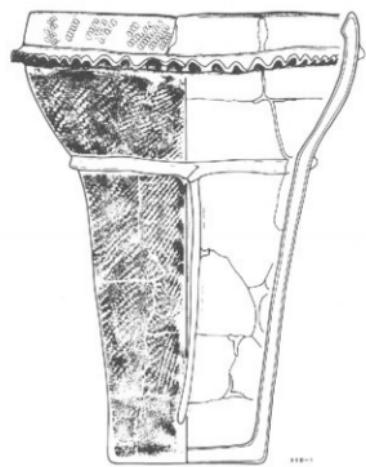


*30-34

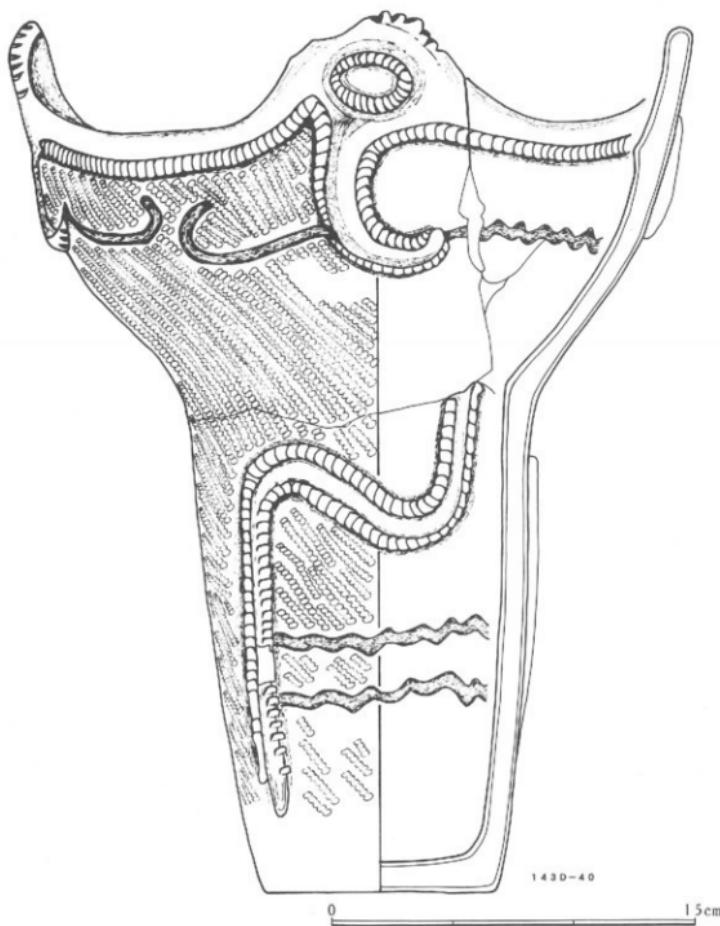
第二九〇図 第二次調査B地区出土遺物実測図（八）



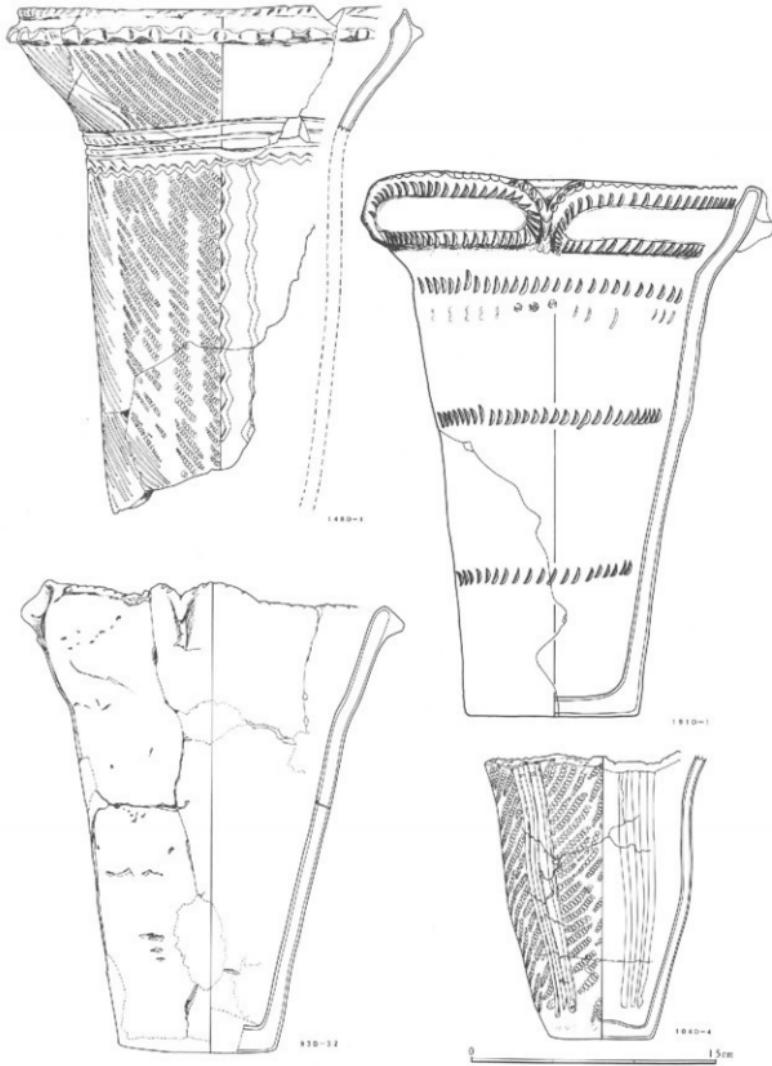
第二九一図 第二次調査B地区出土遺物実測図（九）



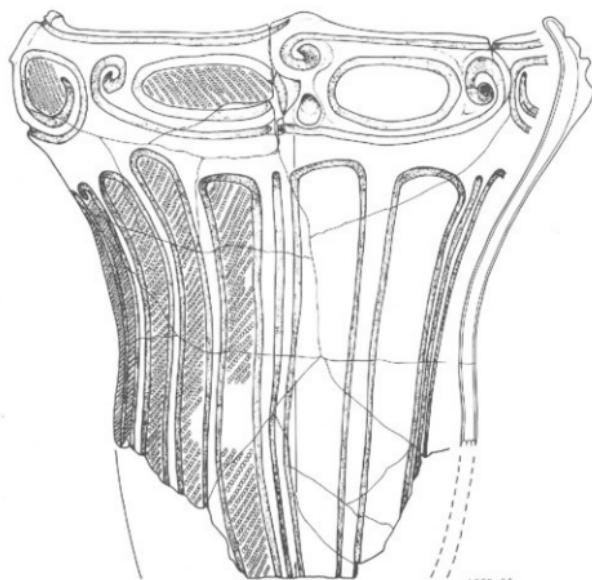
第二九二図 第二次調査B地区出土遺物実測図(一〇)



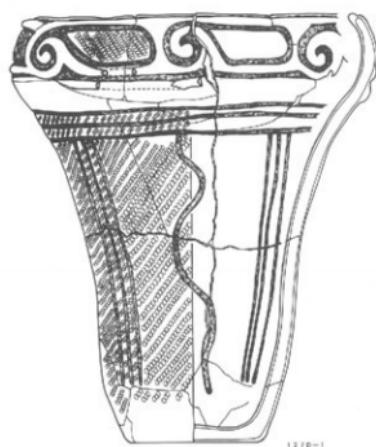
第二九三圖 第二次調査B地区出土遺物実測図(一)



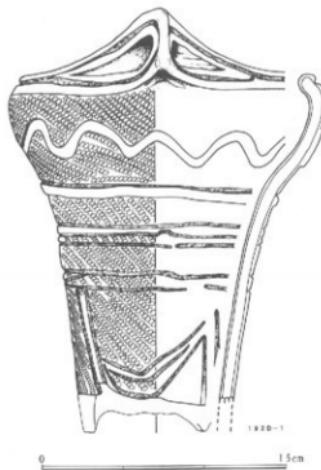
第二九四図 第二次調査B地区出土遺物実測図（一二）



1240-55

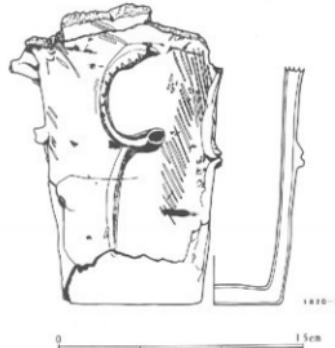
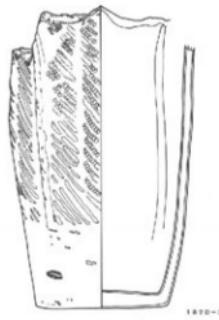
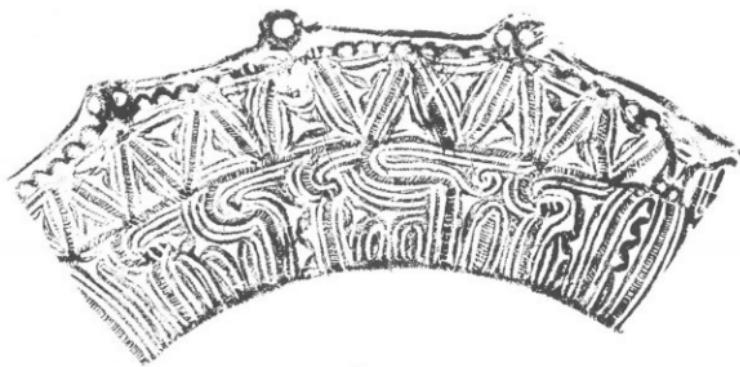


1220-1



15cm

第二九五図 第二次調査B地区出土遺物実測図（一三）



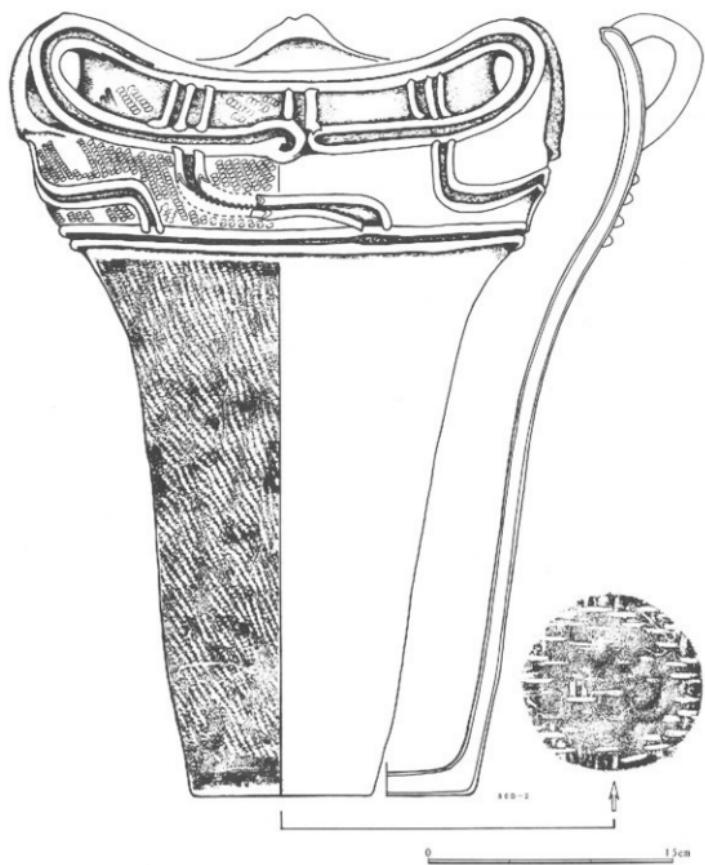
第二九六圖 第二次調查B地區出土遺物實測圖（一四），拓影圖



第二九七図 第二次調査B地区出土遺物実測図（一五）



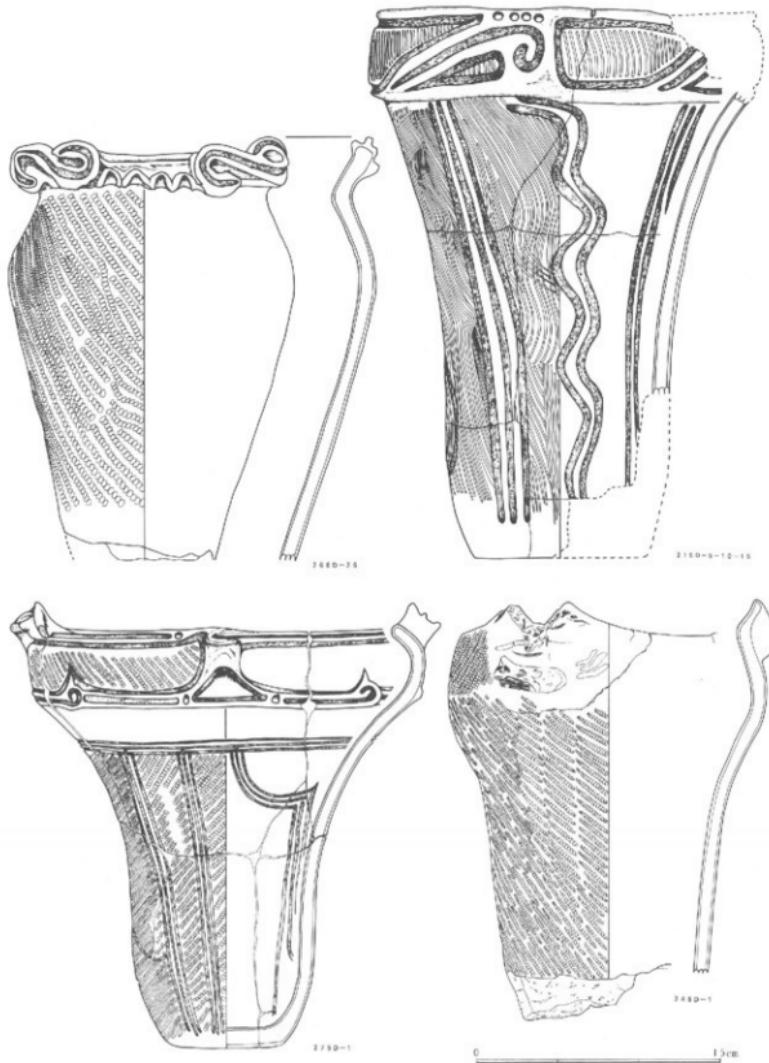
第二九八図 第二次調査B地区出土遺物実測図(一六), 拓影図



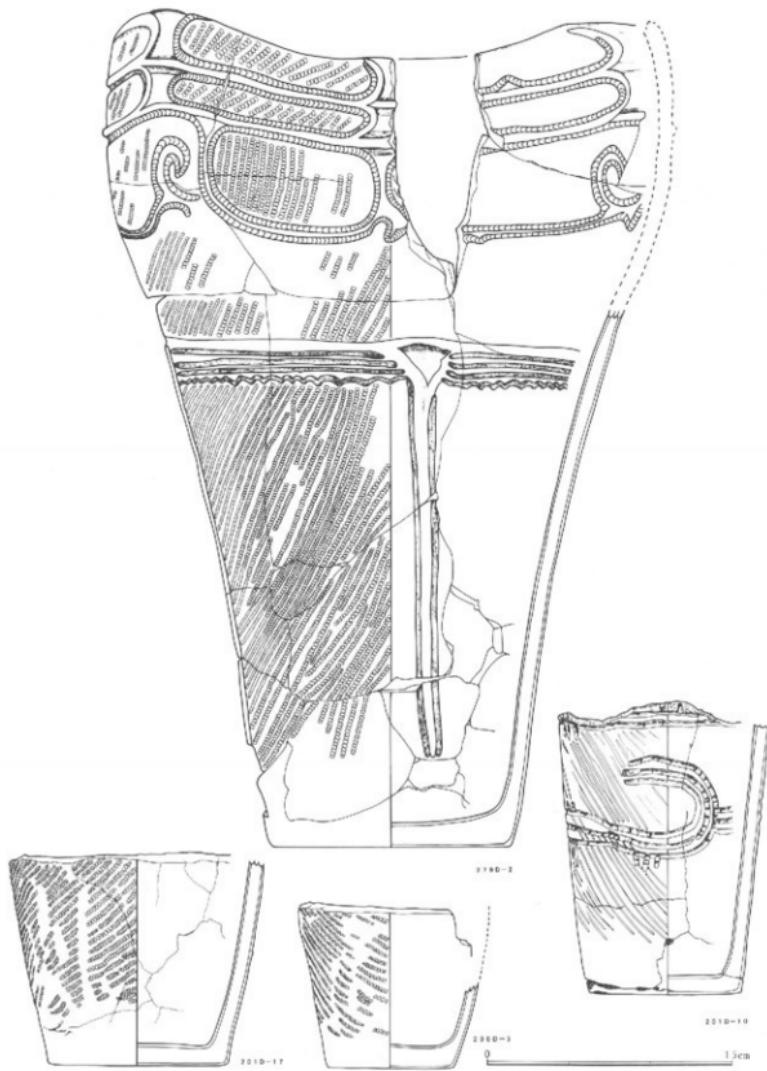
第二九九図 第二次調査B地区出土遺物実測図（一七），拓影図



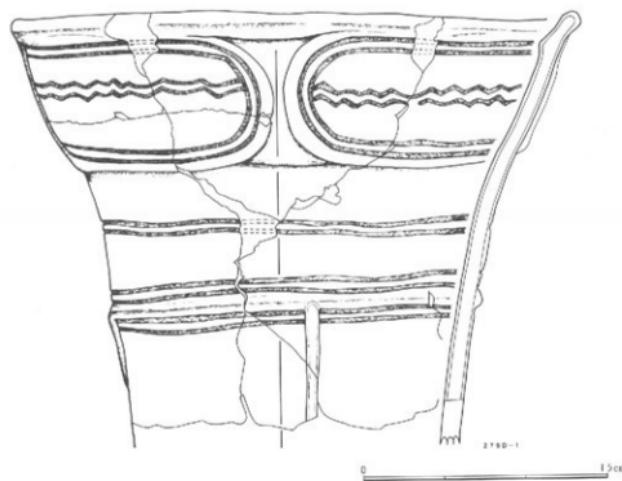
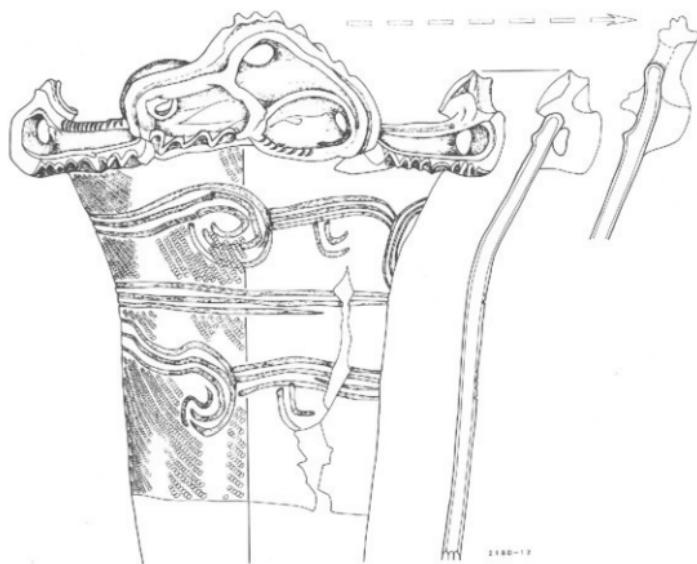
第三〇〇図 第二次調査B地区出土遺物実測図（一八）



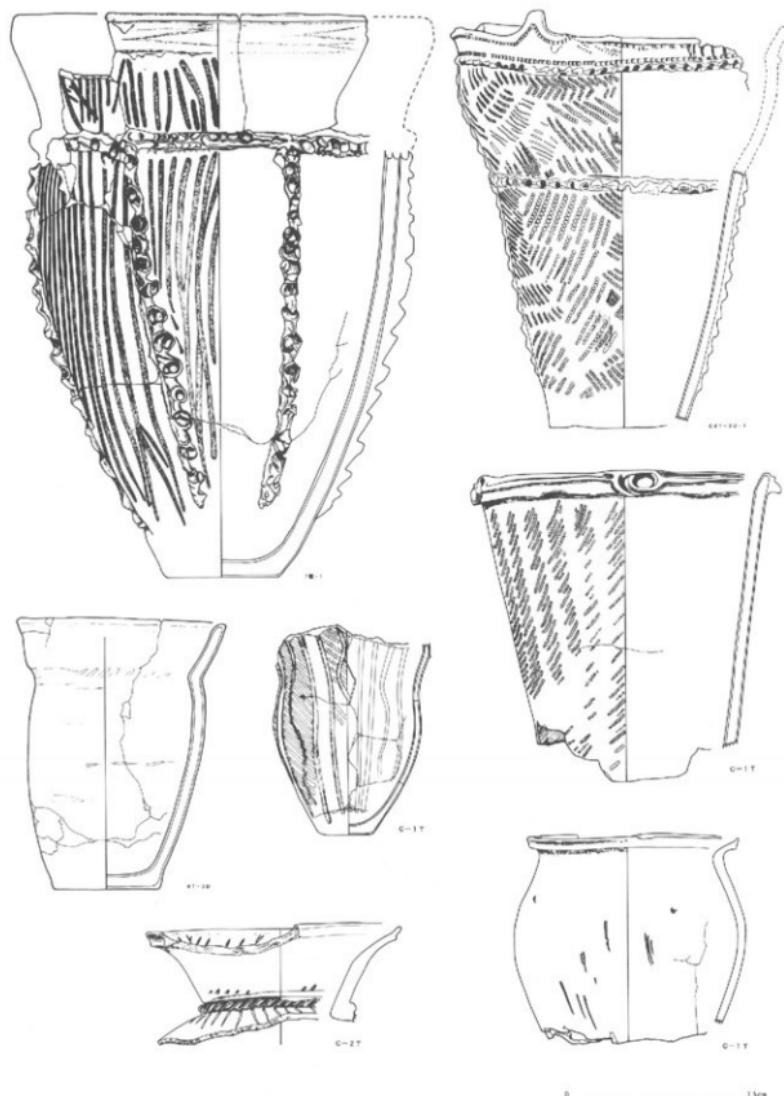
第三〇一図 第二次調査B地区出土遺物実測図（一九）



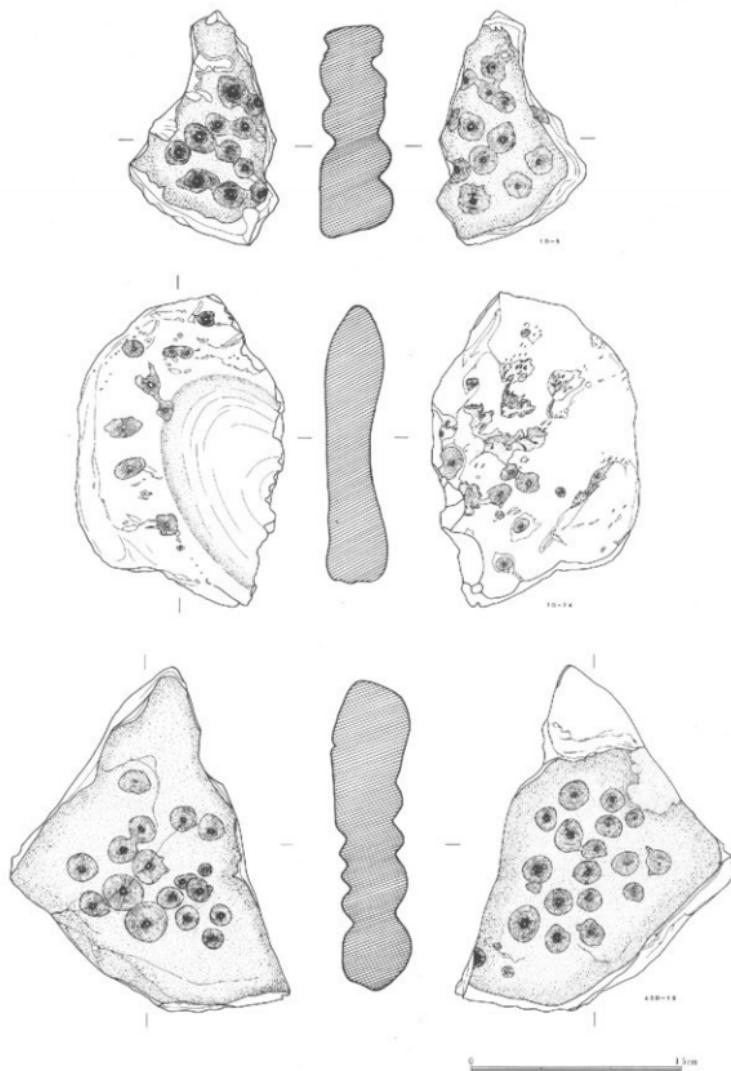
第三〇二図 第二次調査B地区出土遺物実測図(二〇)



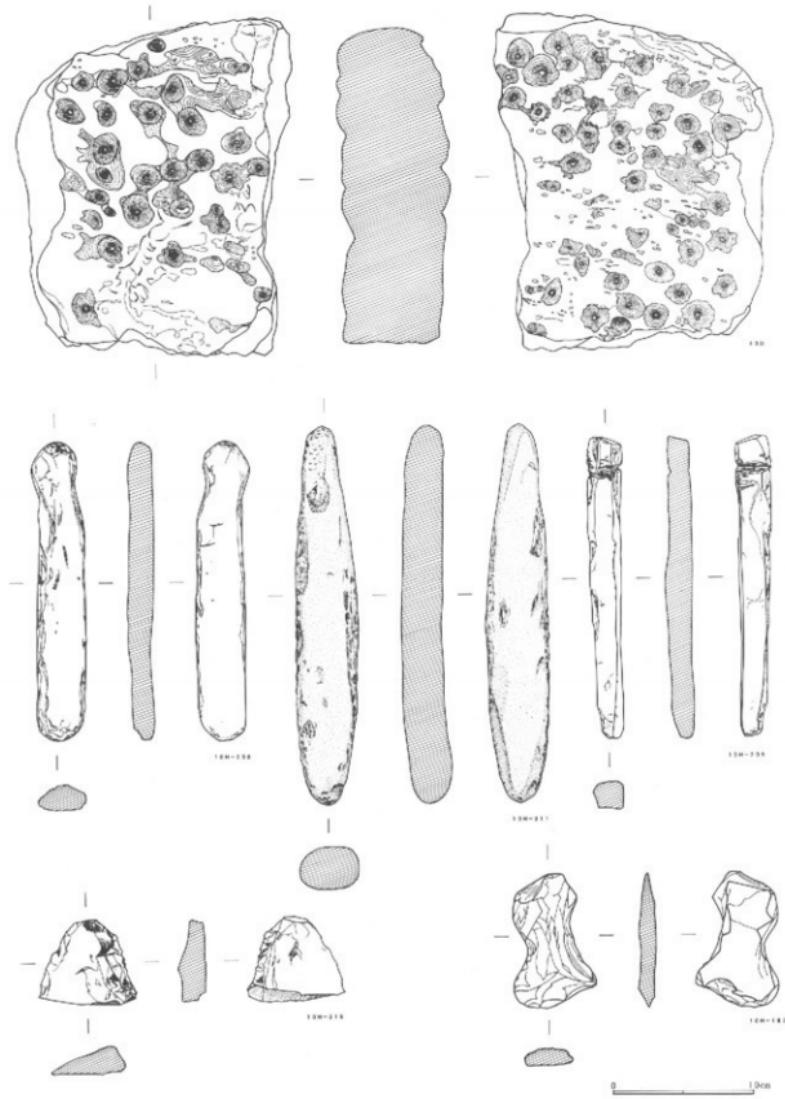
第三〇三図 第二次調査B地区出土遺物実測図（二一）



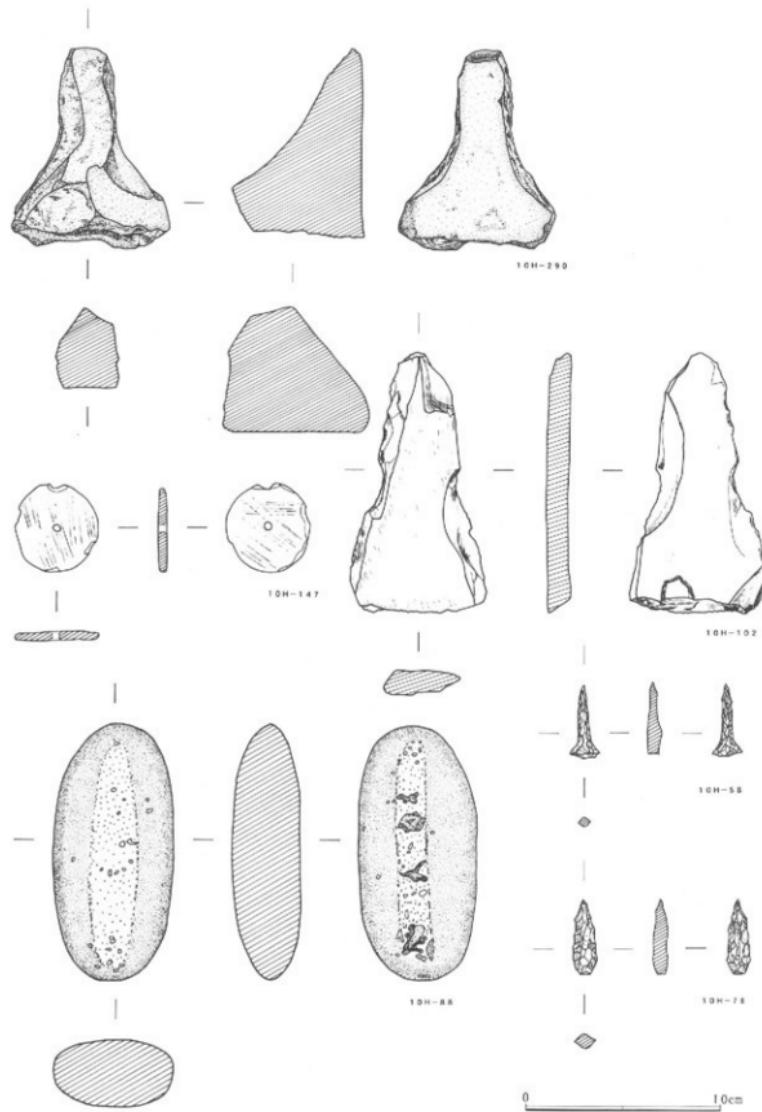
第三〇四図 第二次調査B・C地区出土遺物実測図



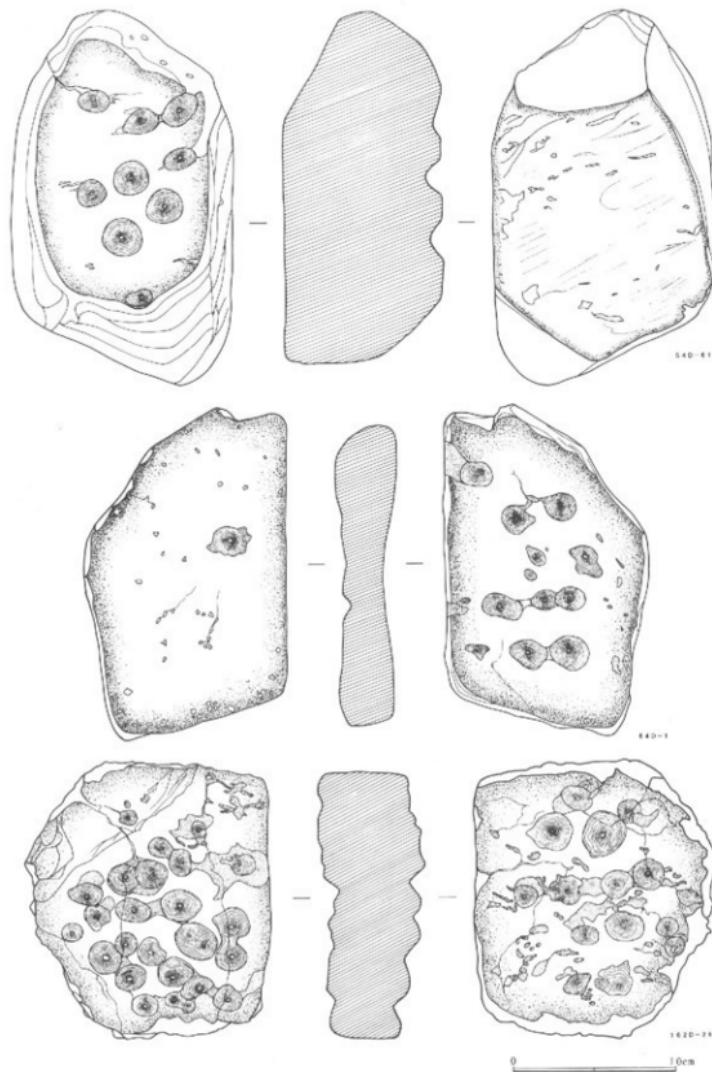
第三〇五図 A 地区出土石器実測図（一）



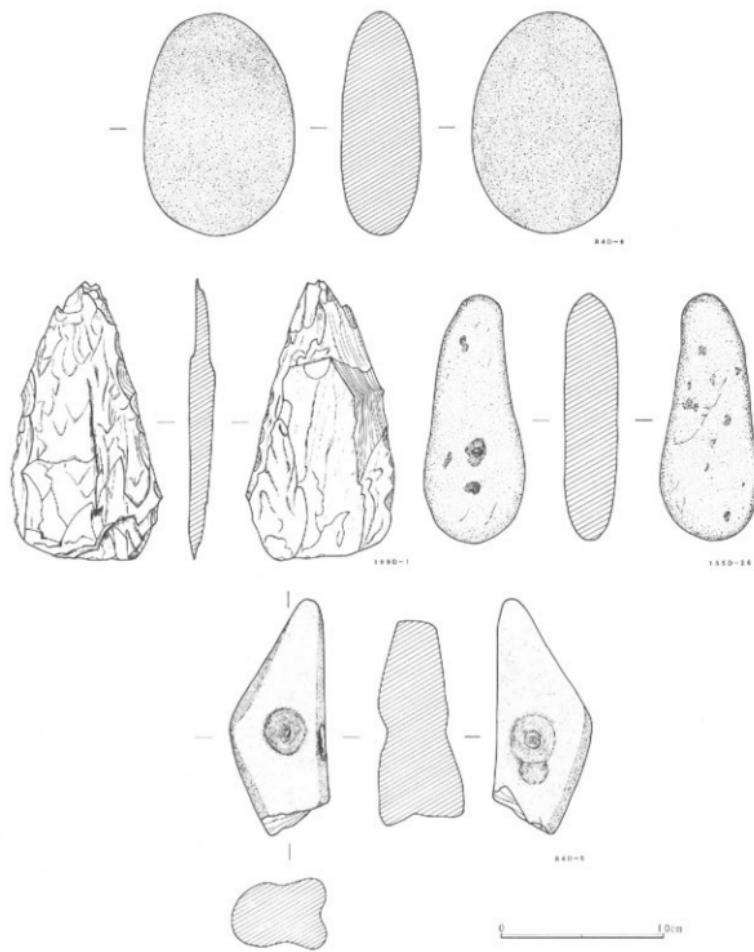
第三〇六図 A 地区出土石器実測図（二）



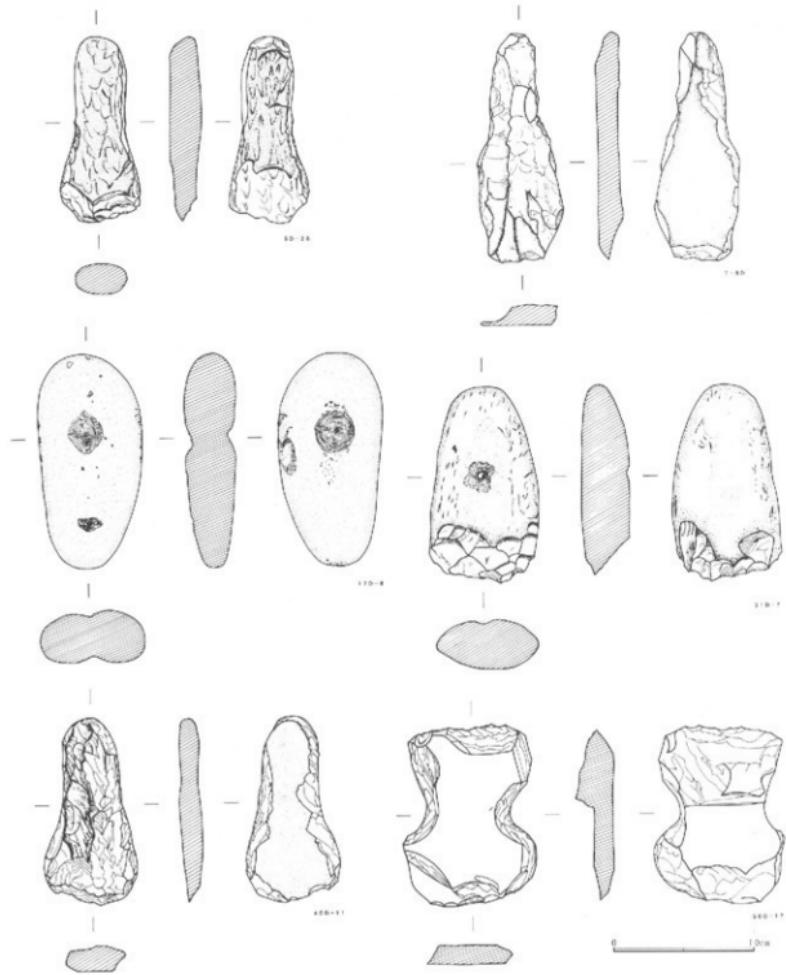
第三〇七図 A 地区出土石器実測図（三）



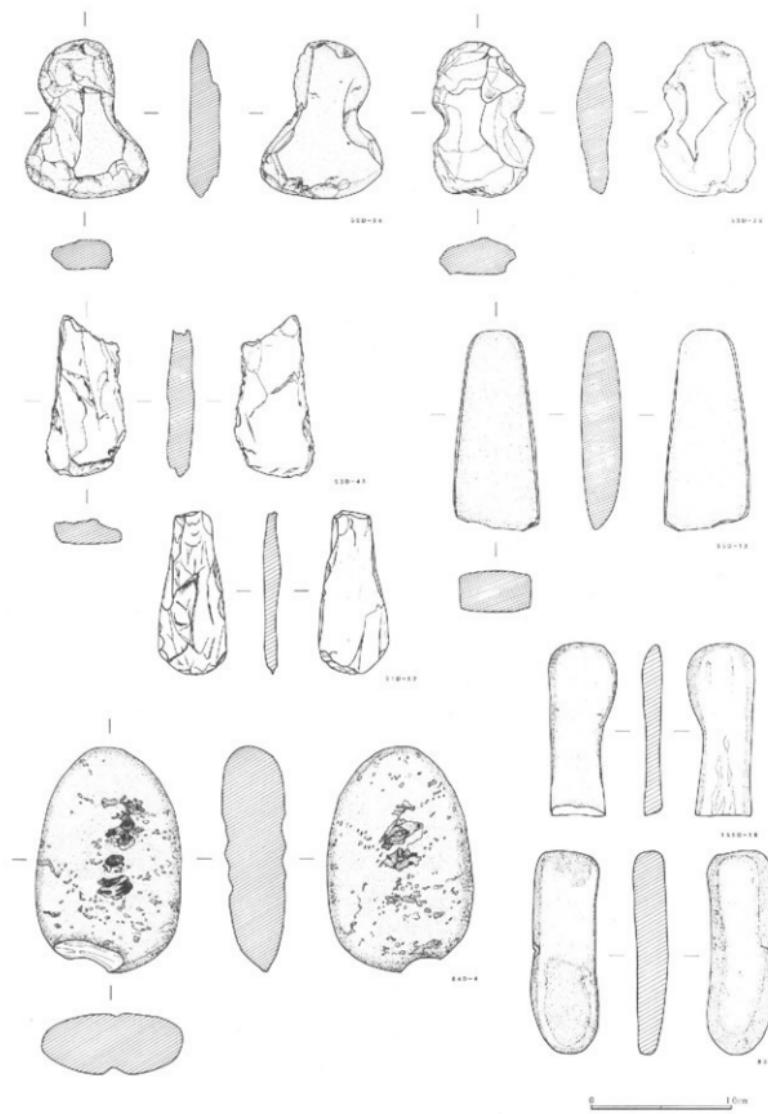
第三〇八図 B 地区出土石器実測図（一）



第三〇九図 B 地区出土石器実測図（二）



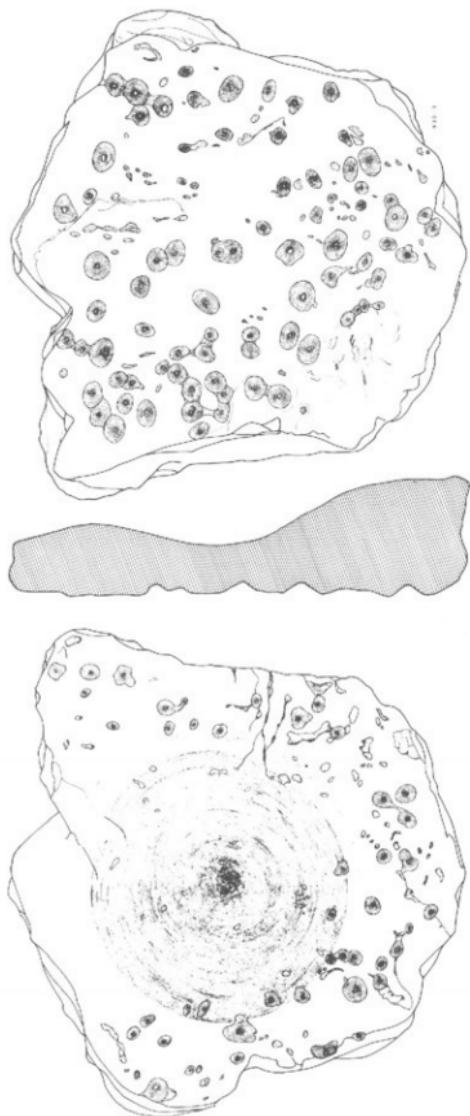
第三一〇圖 B 地區出土石器實測圖（三）

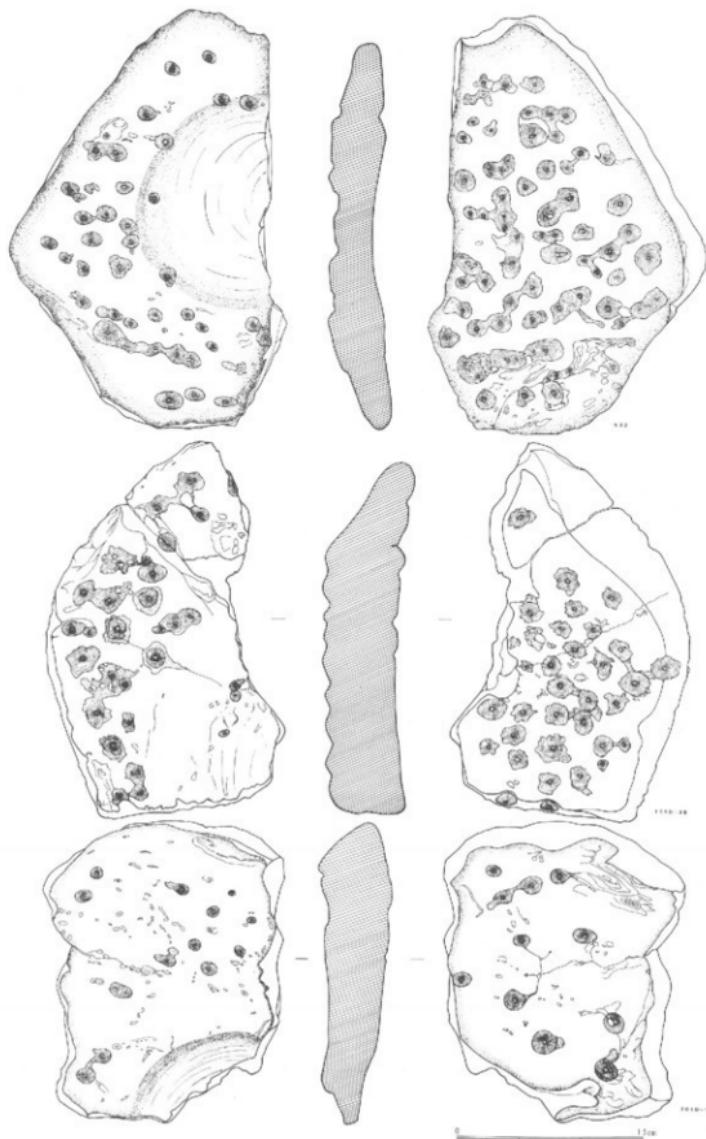


第三一一図 B地区出土石器実測図（四）

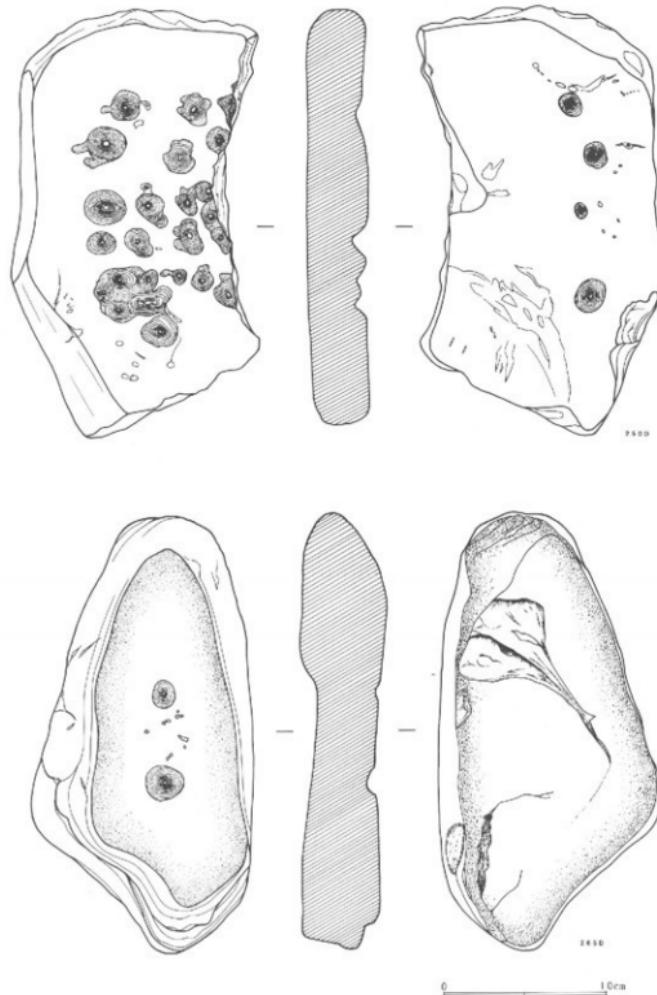
第三一二圖 B 地區出土石器實測圖（五）

1/10

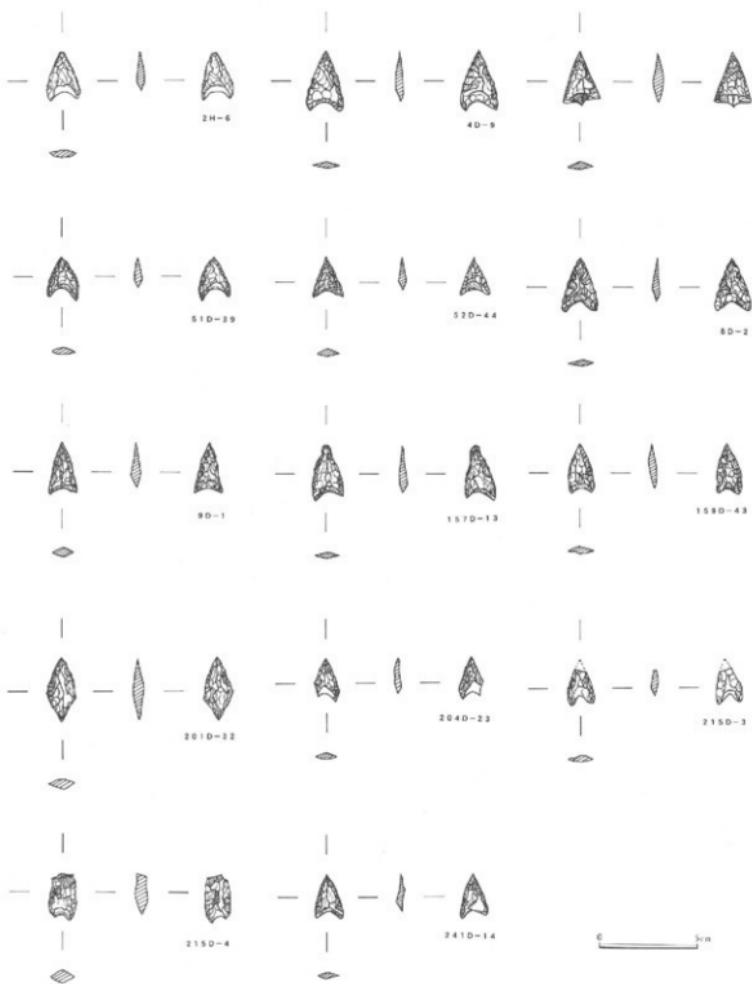




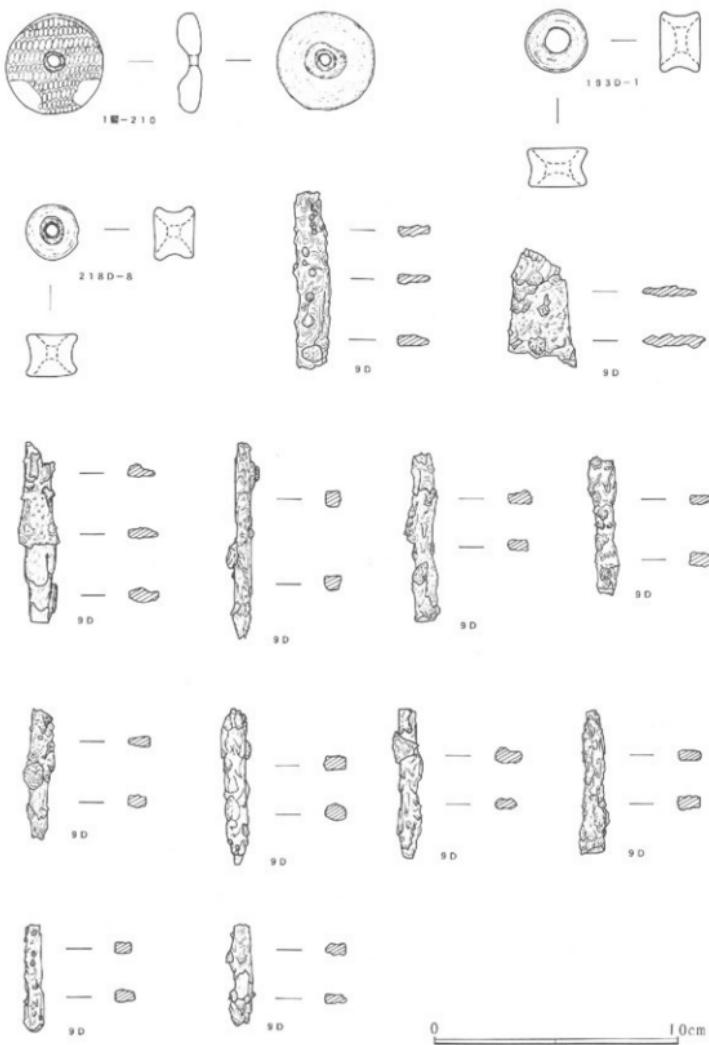
第三一三圖 B 地區出土石器實測圖（六）



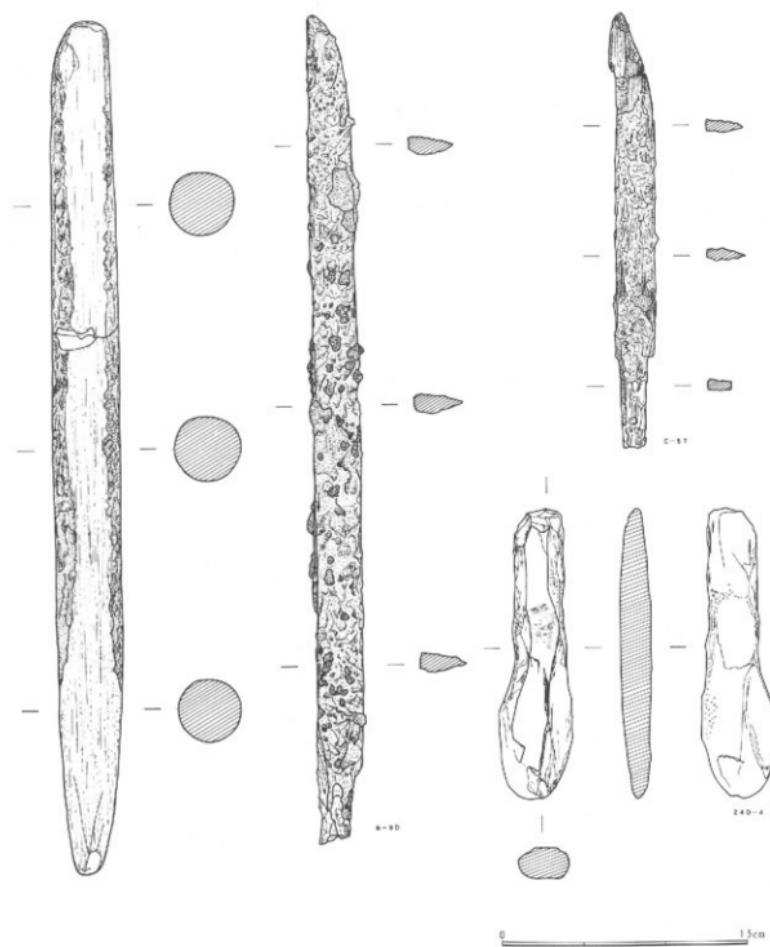
第三一四圖 B 地區出土石器實測圖 (七)



第三一五図 B地区出土石鎚実測図



第三一六図 B 地区出土土製品・鉄製品実測図



第三一七図 B 地区出土刀劍，C 地区出土石棒，刀劍・石斧実測図（一）

第一七章　ま　と　め

二次にわたる坪井上遺跡発掘調査の成果は概報的ではあるが如上のとおりである。

第三章で述べたように竪穴住居址31軒、竪穴状造構21軒、平地式住居址4軒、古墳周溝と思われる造構4か所、溝状造構2条、石組炉址4基、土壙401基を調査することができた。

住居址は縄文時代19軒、弥生時代2軒、古墳時代10軒という分類になるが、方形や長方形の竪穴で特に顕著な事象が認められない住居址の中で、A地区の第一〇号住居址は特異的な存在である。

径約8mの円形を呈し、底面にはほぼ等間隔に径1m前後、深さ70~93cmの柱穴6個が円形に配され、底面には長径150cm、短径138cmの楕円形状の地床炉を設け、底面を17cmほど掘り窪めた燃焼部には煉瓦状に赤変硬化した焼土が全面に堆積している。縄文時代中期の典型的な円形住居址であるが、地床炉址の使用頻度の高さと石劍・石棒出土の意味するものは、祭祀的な集会を行ったこの集落の中心的な存在であったかもしれない。

土壙は401基を調査した。断面形が円筒状やすり鉢状を呈する土壙が大部分であるが、20%に相当する75基が袋状土壙である。

袋状土壙は昭和8年栃木県西那須野町の櫻沢遺跡や、昭和40年矢板市の坊山遺跡などで検出されて以来、各地で検出例が増加するに伴って論考が加えられているが、茨城県内でも土浦市六十原遺跡の98基をはじめ各地で検出例が報告されている。

大宮町では櫻山遺跡や諏訪台遺跡などから46基が調査されており、今回の坪井上遺跡の75基を加えると121基の袋状土壙が検出されたことになり、県北地方では甚も多い調査例となった。

北関東は東北文化と関東文化の混在する地域で、袋状土壙は東北南部の大木式土器とともに那須地方を経て大宮地方へ伝播したことが考えられる。

袋状という名称が示すように狭い開口部から底面になるにしたがって外側へフラスコ状に大きく広がる形状が特徴であり、土器が一括出土する例が多いことから、その性格は墓壙・貯蔵穴・ごみ捨て穴・粘土採掘坑・犬小屋・落とし穴などの説があるが、現在では堅果類や根茎類の貯蔵穴とする説が有力である。

袋状土壙の掘削は困難であったろうと考えられるが、狭い開口部に蓋をすることによって湿度や温度が一定に保たれ、ネズミの害を防げたことや、広い貯蔵空間を確保するには最適の形態であろうと考えられている。

この袋状土壙は日本固有のものではなく、ほぼ同時期の中国西安市半坡遺跡でも確認されており、中国では「口小底大的袋状」と表現されているそうであるから、まさに言い得て妙である。

坪井上遺跡の袋状土壙は、貯蔵穴としての本来の機能が停止したのち、ごみ捨て穴や墓壙に転用されたものと思われるものが多く、深さ1mを超えるものが28基を数え、最も深い土壙は18mを測った。

土器の完形品や準完形品の多くはこれらの土壙から出土している。

B地区第九三号土壙のように大木8a式土器や阿玉台式土器が一括出土した袋状土壙は、栃木県櫻沢遺跡・上の原遺跡をはじめ福島県妙音寺遺跡などでも調査されており、袋状土壙や土器の分布状態の在り方から考察すると、大宮地方も那須地区とともに東北と関東の接点であったことを窺うことができる。

また、B地区182号袋状土壙（深さ1.3m）の底面上より出土した火炎系土器（原色図版第三下段および第二九六図上段）は、口径18cm、器高15cmの小型深鉢形土器であるが、新潟県の信濃川中流域を中心とする馬高系式の土器で、火炎土器の特徴である鋸歯状のフリルや大仰な突起ではなく、水平口縁で低い小さ

な突きを付け、底部からゆるやかに湾曲しながら立ち上って大きく口を開いている。

胴部の文様帯は器面全体が降帯による一つの文様帯となっている。

この型式は小林達雄氏の火炎土器分類によるAⅣ型に比定できるものと思われる。

那珂・久慈両河川の中流域にあたる県北地方は、これまで火炎系土器の空白地帯であったが、今回の出土によって後述する硬玉製大珠とともにその流入経路、つまり北陸地方との交易を考察する上で貴重な資料である。

また、出土品の中には動物意匠のみられる土器がある。

A地区第二七号袋状土壙からはヘビ状の把手がつけられた深鉢形土器が出土している。

この土器は器高18.5cmで底部を欠損しているが、2匹のヘビが口縁部をめぐって把手部で頭をもちあげている様子を表現しているように見える。

A地区第二八号袋状土壙からはフクロウをモチーフとした把手をもつ土器が出土している。

この土器は器高21cmの深鉢形完品で、フクロウの顔が土器の内面を向いている。

原色図版第二上段に示すように眼光炯々たる形相から推考すると、この土器を所有した縄文人が夜行性のフクロウの把手をつけた背景には、土器の中の物を夜の外敵から守ってもらいたいという願いがこめられていたのではないだろうか。ほかにも類似の土器が2個出土している。

縄文時代前期には諸磯式土器に獸面をかたどった把手が現われ、長野県や山梨県でもほぼ同じ時期にイノシシをかたどったと思われる獸面把手が作られている。

関東各地でも縄文時代の中期まで獸面や蛇・蛙・鳥などをかたどった土器が出土している。

これらの特異な土器は単なる装飾ではなく、縄文人の特殊な願望が表現されているものと考えられるが、坪井上遺跡出土の土器も、類型品の解明上きわめて興味深い出土品である。

出土品のなかで特筆しなければならないのは硬玉製大珠である。

前述したとおり、鰐節型の硬玉製大珠が同一遺跡から8個も出土した例は県内にはない。

縄文時代に加工されたヒスイは新潟県糸魚川産のものに限定されることが判明しているので、北陸地方から大官地方へ運ばれたルートを考察してみたい。

栃木県那須地方は良質の硬玉製大珠を出土する地域として著名であり、この地方で硬玉製大珠を出土した遺跡は11を数える。

長者平遺跡（大田原市）、湯坂遺跡（大田原市）、岩舟台遺跡（湯津上村）、淨法寺遺跡（小川町）、坊山遺跡（矢板市）、古館遺跡（馬頭町）、矢又岡平遺跡（馬頭町）、荻の平遺跡（南那須町）、曲畠遺跡（南那須町）、檜木遺跡（茂木町）、楓平遺跡（茂木町）が挙げられる。

これらの遺跡から出土した硬玉製大珠の総数は15個を数え、馬頭町の古館遺跡からは3個出土している。長さは3.9cmから14.1cmである。

さらに、長者平遺跡・坊山遺跡・古館遺跡・曲畠遺跡の4遺跡からは火炎系土器も出土している。

硬玉製大珠も火炎系土器も、いうまでもなく北陸地方から運ばれたものであろうが、那須地方と北陸地方は直線にしても200kmの山河も隔つ。

北陸の縄文人たちがはるばると200kmの山河を越えて那須地方に求めた交易の目的は何だったのだろうか。

那須地方には、石鎚・石槍・石錐・スクレイバーなどの小形石器の石材として最も適した黒曜石の産地である高原山が存在する。

塩原温泉の南方にそびえる休火山群の総称で、一等三角点のある主峰釣迦が岳（1795m）を中心に、鷲頂山・明神が岳・西平岳など変化に富んだピークをもち、いわゆる高原山系と称する黒曜石の産地である。

関東地方の遺跡から出土する黒曜石は、信州系・箱根系・高原山系・神津島系の4系統があるのと同様に、北陸の縄文人たちにとっても比較的近くに和田岬・霧ヶ峰を中心とする信州系の産地があるとはいえる。よりよい素材を求めて那須地方に交易の場を広げたとしても何の不思議もない。

つまり、北陸地方から那須地方へ硬玉製大珠と火炎系土器が運ばれ、那須地方から北陸地方へ黒曜石が出ていったと解釈できないだろうか。

さて、坪井上遺跡への経路を考えてみよう。

前記の那須地方の11遺跡は、そのすべてが那珂川とその支流の流域に位置している。

那珂川は大宮町域に沿った西側を南東流しているが、坪井上遺跡から北西へ15km遡れば茂木町檜木遺跡と樅平遺跡に達し、30km遡れば那須地方で14.1cmというもっとも大きい硬玉製大珠を出土した馬頭町の矢又岡平遺跡に到達する。

坪井上遺跡は広視的にみれば那珂川・久慈川・玉川の3河川に挟まれた台地上に立地するが、北陸地方との交易の対象を考える上では玉川の果たした役割りが大きかったように思われる。

玉川は久慈川水系の支流で、大宮町北塙子を上流端とし、東野で照田川を合わせて南東に流れ、八田と坪井上遺跡の所在する下村田を経て、那珂郡瓜連町の北部で久慈川に注ぐ延長16.2kmの一級河川である。

玉川の谷筋は古くから栃木県馬頭町へ通ずる重要な通路とされ、現在は国道293号が通っている。

この玉川の上流域が、黒曜石と同様に小型石器の石材に適したメノウの産地であった。

また『常陸國風土記』の久慈郡の条に「丹石」と表現されているのはメノウのことで、火鑛石として珍重されていたことも明白である。

黒曜石を求めて那珂川流域の那須地方に辿り着いた北陸の縄文人们は、さらに下流域の大宮地方にメノウのあることを知り、硬玉製大珠と火炎系土器を携えて交易にやってきたのではないだろうか。

すなわち坪井上遺跡の硬玉製大珠は、北陸の縄文人们によって那須地方を経てもたらされ、代りにメノウが出ていったと考えられるのである。

福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚から出土した硬玉製大珠は、耳飾りと13個の貝輪、さらに鹿角2本を所持した特異な身分と思われる成年女子の人骨の胸の上に置かれていた。

この出土状態をみると、基本的には墓に納められたものと思われるが、坪井上遺跡の場合は調査前の耕作中に採集された5個は別として、調査中に出土した3個の出土状態は、1個は径1m、深さ15cmの土壙から大珠のみの出土、他の2個は確認面からの出土である。

2個の周辺にはトレントチャーフ痕も存在しないので、遺構内から巻き上げられたものでもない。

この出土状態からは、墓に納められたものであるとは考えられない。

坪井上遺跡に集落を営んでいた中期の縄文人们は、硬玉製大珠を如何なる身分の物が所持し、その価値をどう位置づけていたか俄に結論を出すことはできない。

ただし、県内出土総数の約22%に相当する8個の硬玉製大珠と、火炎系完形土器の出土は、北陸地方と交易が行われていた証であることに異論はないであろう。

縄文時代住居址・弥生時代住居址・古墳時代住居址・周溝等の検出や、奈良時代以降に用いられた石帶の出土は、複合遺跡であることを意味するが、121基を数える袋状土壙や、原色図版や実測図に示した縄文式土器の宝庫の観のある阿主台式土器・加曾利E式土器・大木8a式土器など多様な土器の出土により、

縄文時代中期における東北文化と関東文化が重複した接点に位置する県北地方の撲点的集落跡であること間に違いはないと思われる。

坪井上遺跡発掘調査会役員名簿

会長(第一次)	浅野長衛	大宮町教育委員会教育長
(第二次)	海老根幹男	大宮町教育委員会教育長
副会長(第一次)	滝昇寿	大宮町教育委員会生涯学習課長補佐
(第二次)	菊池正男	大宮町教育委員会生涯学習課長
理事	千種重樹	主任調査員・茨城県埋蔵文化財指導員
	高岡文男	常陸大宮街づくり株式会社代表取締役
	綿引昭好	株式会社伊勢甚本社代表取締役
	森島伍	大宮町役場企画課長
監事	金沢勲	大宮町役場企画課長補佐
	小泉みどり	大宮町歴史民俗資料館主査
事務局(第一次)	梶幸雄	大宮町教育委員会生涯学習課社会教育係長
(第一次)	助川妙子	大宮町教育委員会生涯学習課主事
(第二次)	宇留野功	大宮町教育委員会生涯学習課社会教育係長
(第二次)	古平妙子	大宮町教育委員会生涯学習課主幹

坪井上遺跡発掘調査に従事した人たち

千種重樹	主任調査員・調査団長
水谷正	調査員
飯島栄子	調査員
山崎光雄	引田馨 齊藤よし子 齊藤静子 和田洋子
沖津峯子	山崎秀夫 海野光 中村実 山崎わぐり
綿引久子	中村作江 中村あさを 倉持あつ江 富山久江
山崎福松	須川義明
研修員3名	那珂町有志 2名

報告書作成従事者 千種重樹 水谷正 飯島栄子 田村みどり

謝辞

二次にわたる坪井上遺跡発掘調査を終えて報告書を上梓するにあたり、常陸大宮街づくり株式会社・株式会社伊勢甚本社のご理解とご協力、大宮町教育委員会並びに大宮町歴史民俗資料館の方々のご高配に対して、深甚なる感謝の意を捧げるものである。

また、砂塵を巻き上げて寒風吹き荒ぶ嚴冬の時期も、憩う日陰もない炎熱きびしい流汗淋漓の盛夏の時期も、連日終始一貫、意欲的・精力的に作業に従事して下さった作業員の方々には、あらためて敬意と謝意を表す次第である。(調査員一同)

図版

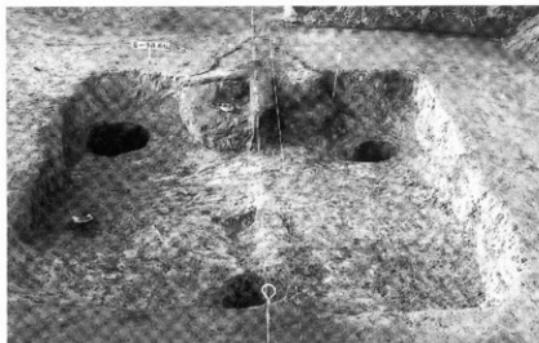


遺跡の遠景(北西より)

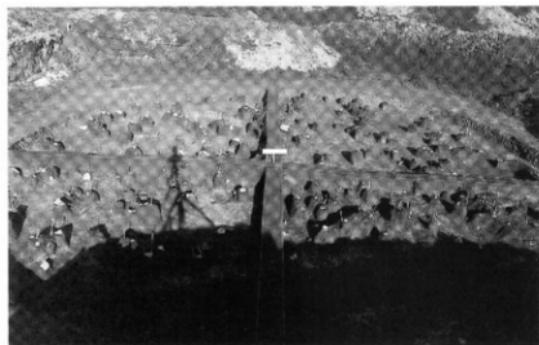
図 版 第 一



A地区調査前の現状



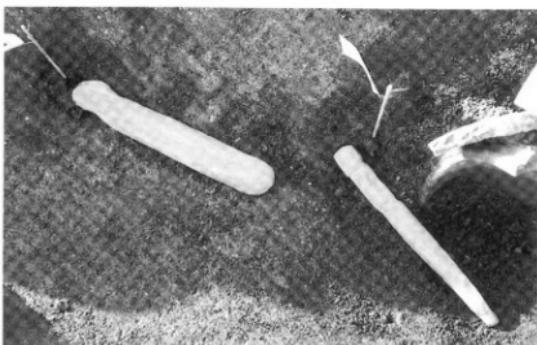
第一号住居址全景



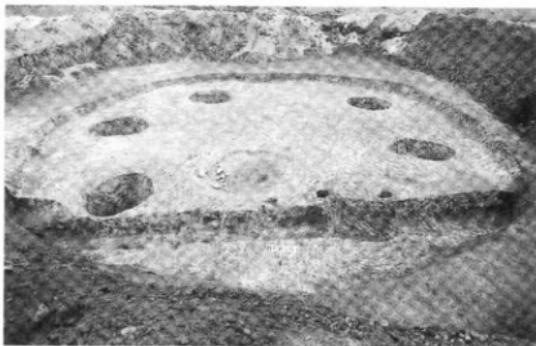
第一〇号住居址遺物出土状態(一)



調査風景(第一〇号住居址)



第一〇号住居址遺物出土状態(二)



第一〇号住居址全景

図版第三



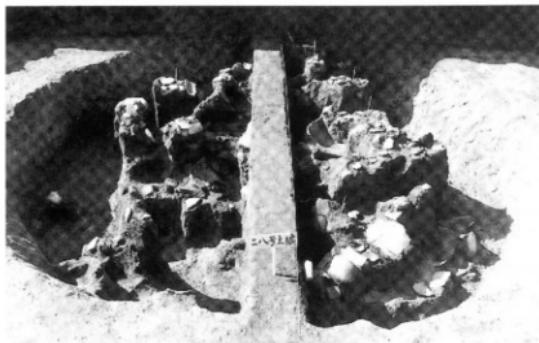
第九号土壤遺物出土状態(一)



第九号土壤遺物出土状態(二)



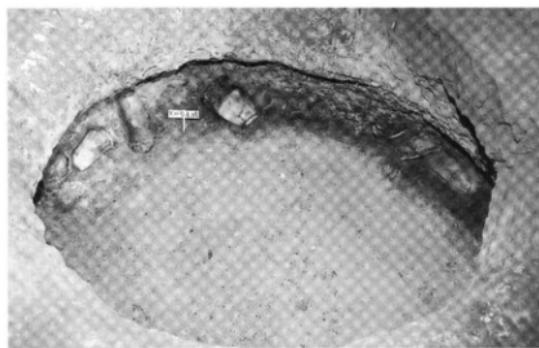
第二四号土壤遺物出土状態



第二八号土壤上層部遺物出土状態



第二八号土壤下層部遺物出土状態



第三〇号土壤遺物出土状態(一)

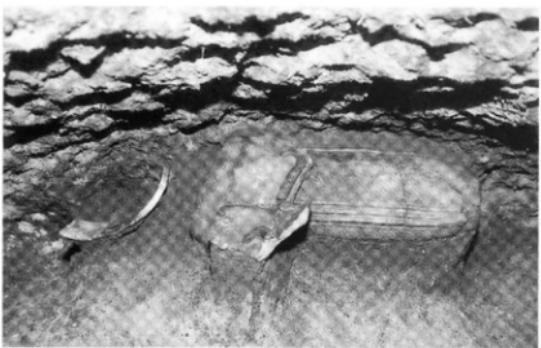
図版第五



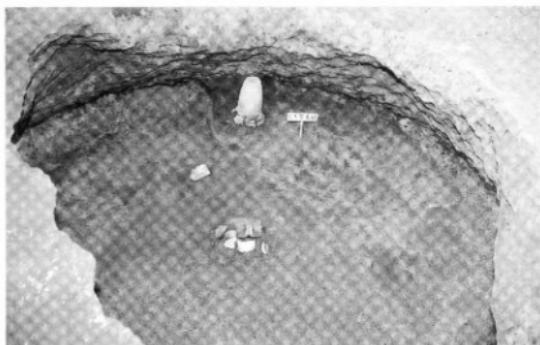
第三〇号土壤遺物出土状態(二)



第三〇号土壤遺物出土状態(三)



第三〇号土壤遺物出土状態(四)



第三二号土壤遺物出土状態



第三三号土壤遺物出土状態



第三八号土壤遺物出土状態

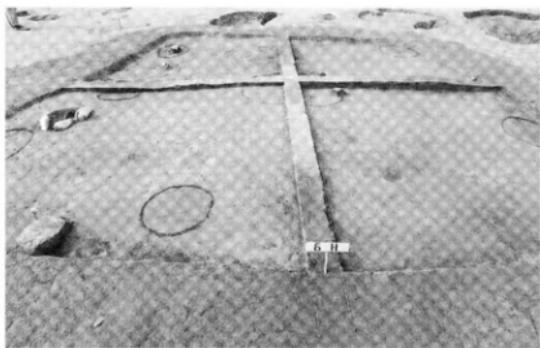
図 版 第 七



B・C 地区調査前の現状



B・C 地区調査安全祈願祭



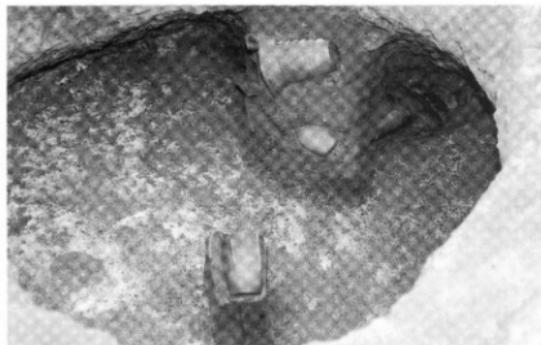
第六号住居址全景



第九号土壤刀剣出土状態

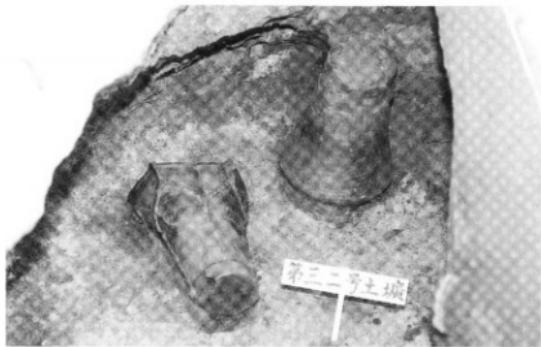


第九号土壤鉄鎌出土状態

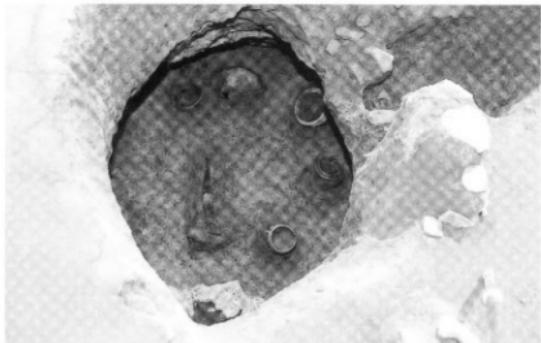


第二一号土壤遺物出土状態

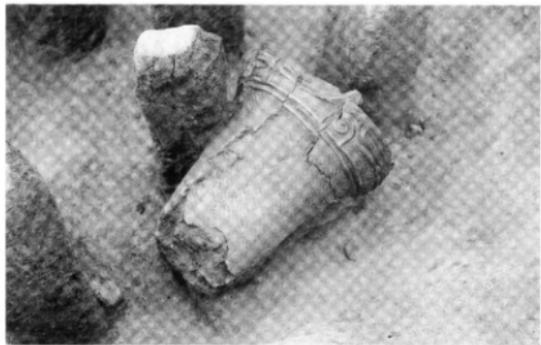
図版第九



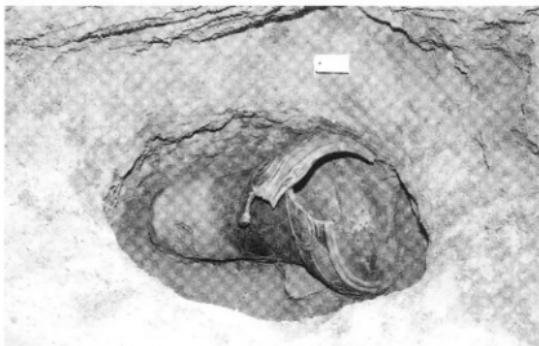
第三二号土壤遺物出土状態



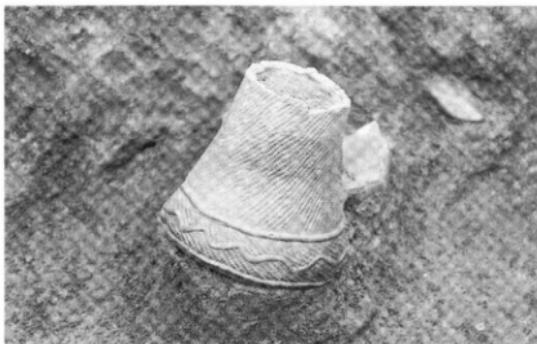
第四〇号土壤遺物出土状態



第七〇号土壤遺物出土状態



第八〇号土壤遺物出土状態(一)



第八〇号土壤遺物出土状態(二)

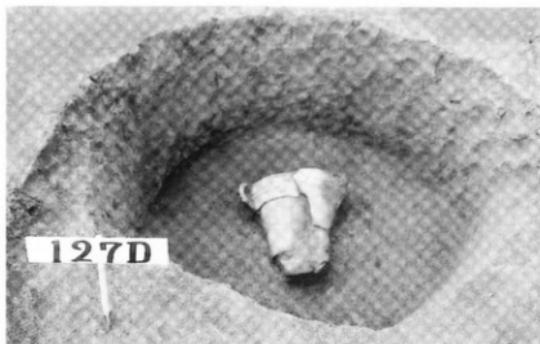


第九三号土壤遺物出土状態

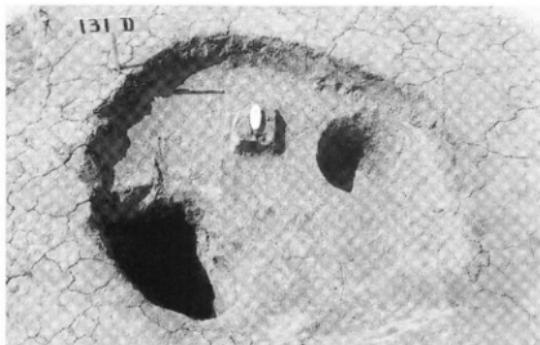
図版 第一一



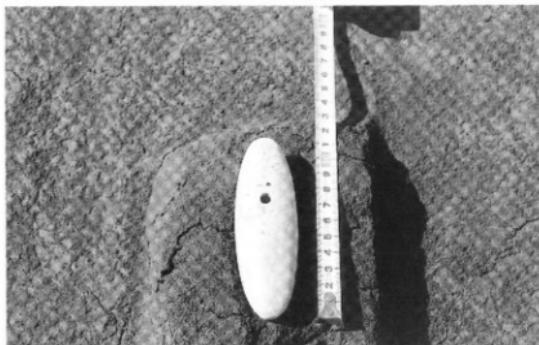
第九六号土壤遺物出土状態



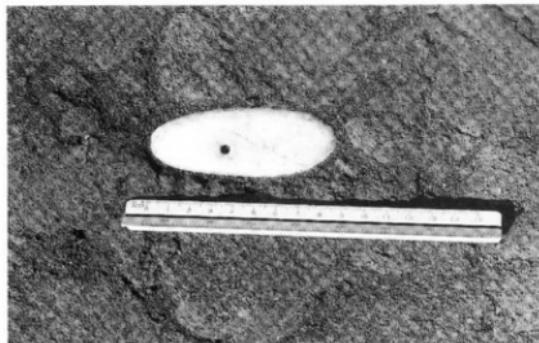
第一二七号土壤遺物出土状態



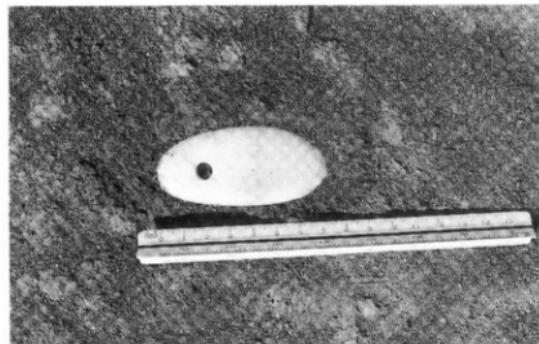
第一三一号土壤硬玉製大珠出土状態



第一号硬玉製大珠出土状態



第二号土硬玉製大珠出土状態

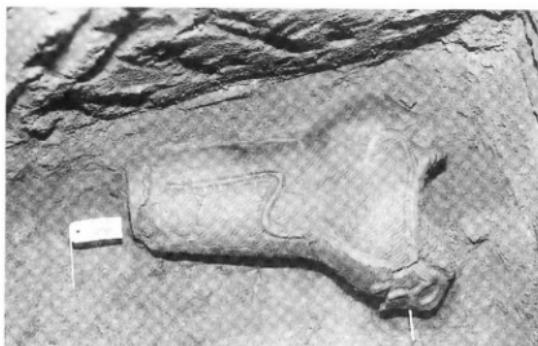


第三号土硬玉製大珠出土状態

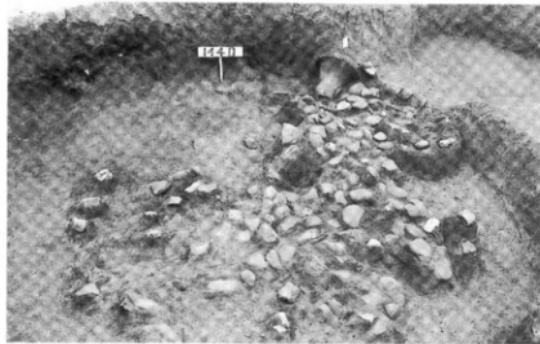
圖 版 第 一三



第一三八号土壤遺物出土狀態



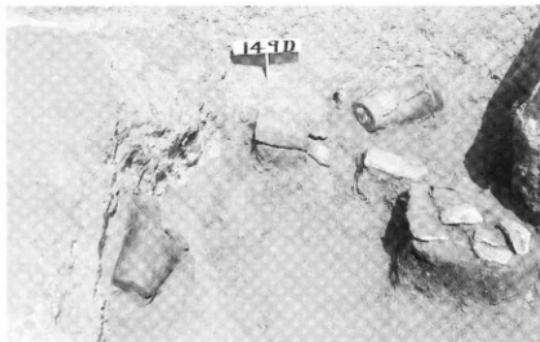
第一四三号土壤遺物出土狀態



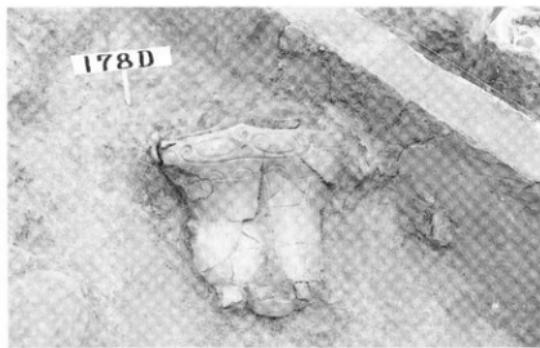
第一四四号土壤遺物出土狀態



第一四八号土壤遺物出土状態

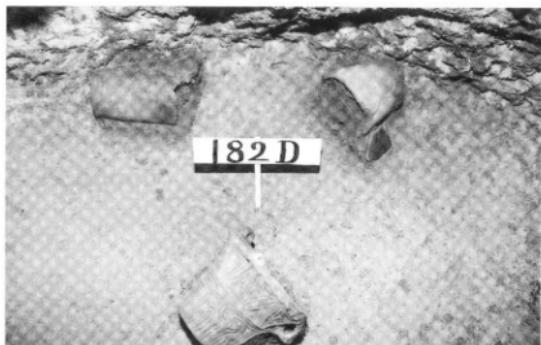


第一四九号土壤遺物出土状態

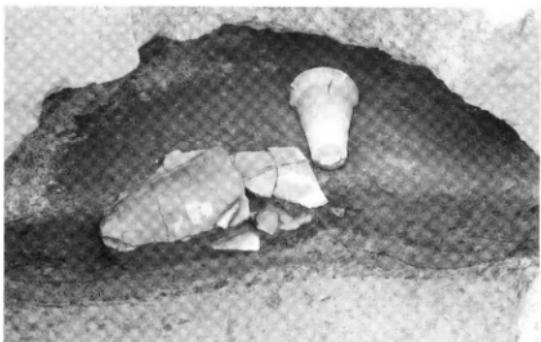


第一七八号土壤遺物出土状態

図版第一五



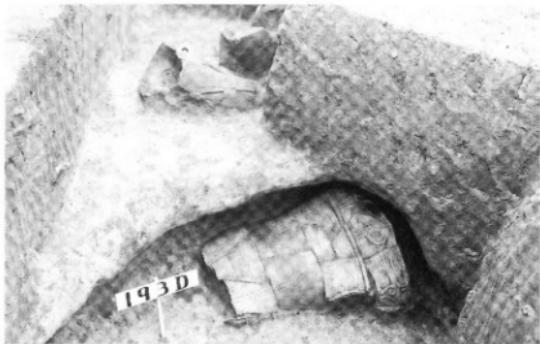
第一八二号土壤遺物出土状態



第一九一号土壤遺物出土状態



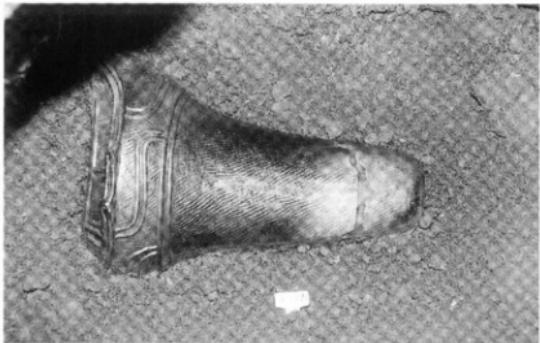
第一九二号土壤遺物出土状態



第一九三号土壤遺物出土状態

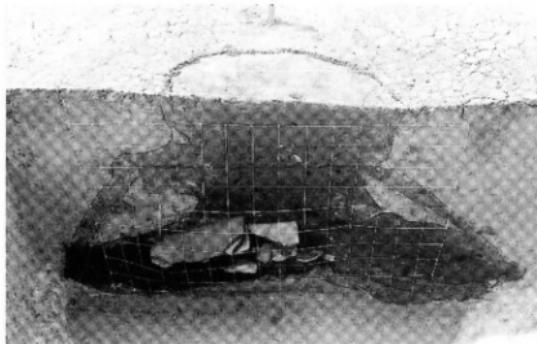


第二二八号土壤遺物出土状態

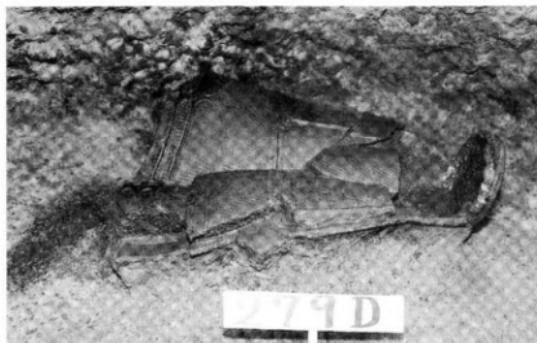


第二三二号土壤遺物出土状態

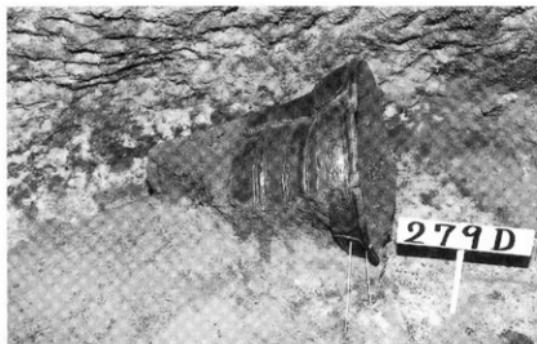
図版第一七



第二三五号土壤半截發掘狀況



第二七九号土壤遺物出土狀態(一)



第二七九号土壤遺物出土狀態(二)



B 地区溝状遺溝全景



第一号石圓炉址全景



第二号石圓炉址全景

図版第一九



B地区調査風景(一)



B地区調査風景(二)



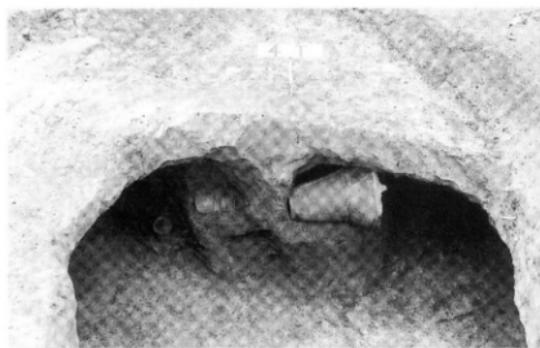
B地区調査風景(三)



C地区第一号土壤全景

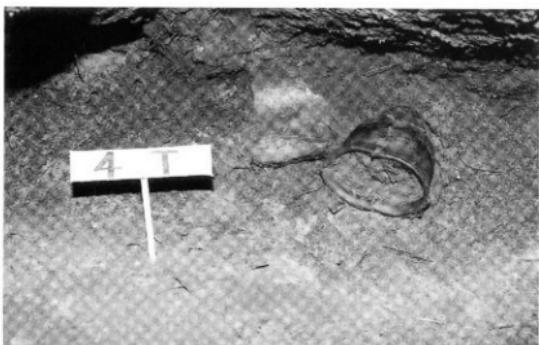


C地区第1トレンチ第二号竪穴状遺構石棒出土状態

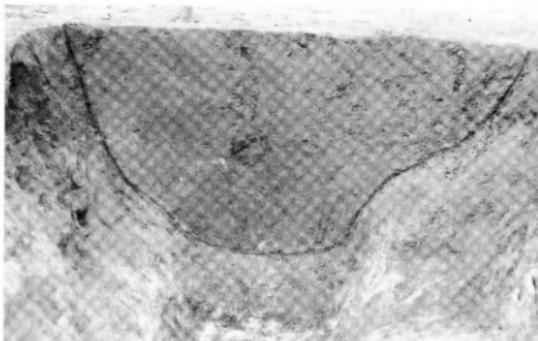


C地区第4トレンチ第4号土壤遺物出土状態(一)

図 版 第 二一



C地区第4トレンチ第4号土壤遺物出土状態(二)



B地区第3号溝状遺構埋没土断面



B地区完堀後の遺構分布状況(一)



B地区完堀後の遺構分布状況(二)



B地区完堀後の遺構分布状況(三)



C地区完堀後の遺構分布状況

図版 第二三



28D-122



10D-30



32D-36



30D-3

A地区出土遺物(一)

図版 第二四



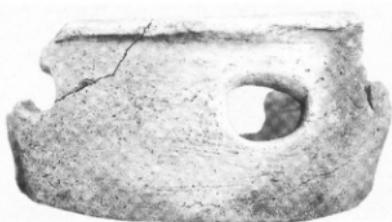
38D-5



11D-5



33D-1



24D-60



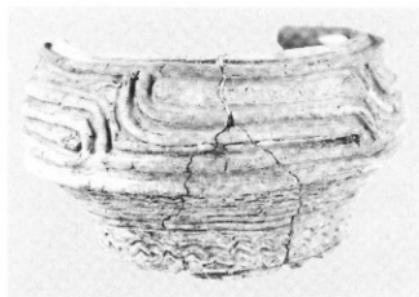
11D-8



27D-46

A地区出土遺物(二)

図 版 第 二五



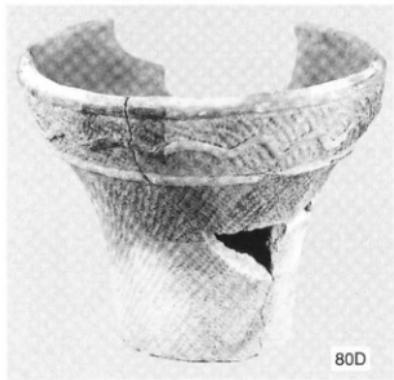
A-10D-1



30D-2

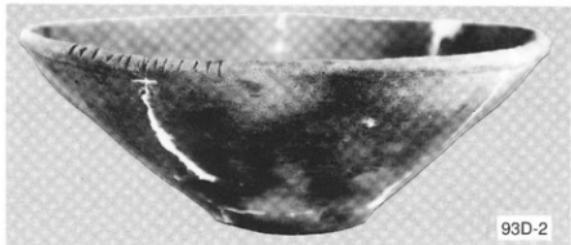
A地区出土遺物(三)

図版 第二六



B地区出土遺物(一)

图 版 第 二七



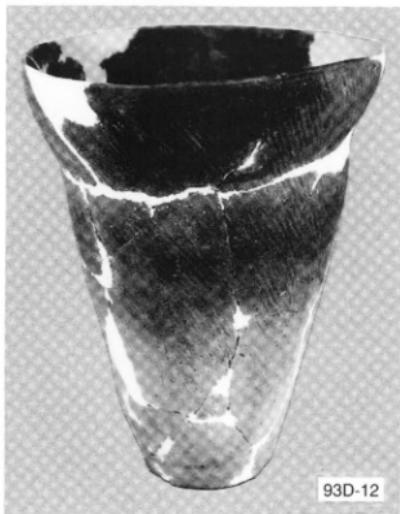
B 地区出土遗物(二)



93D-4

B地区出土遺物(三)

図版 第二九

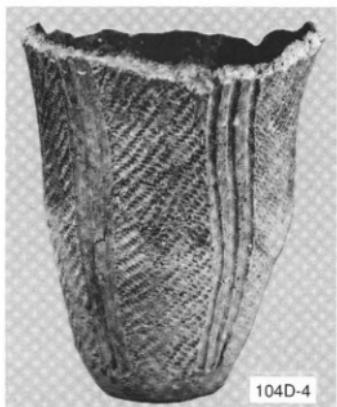


B地区出土遺物(四)

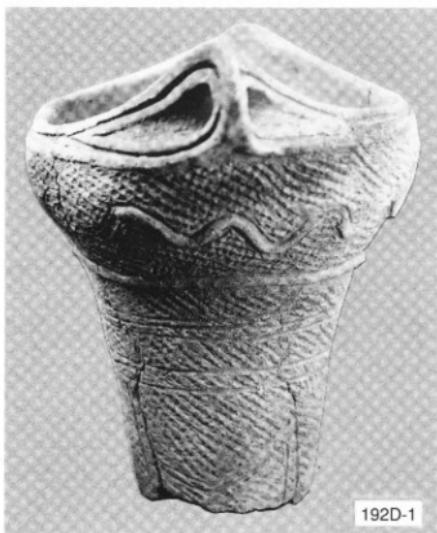


B 地区出土遺物(五)

図版第三一



104D-4



192D-1



127D



148D



129D-2

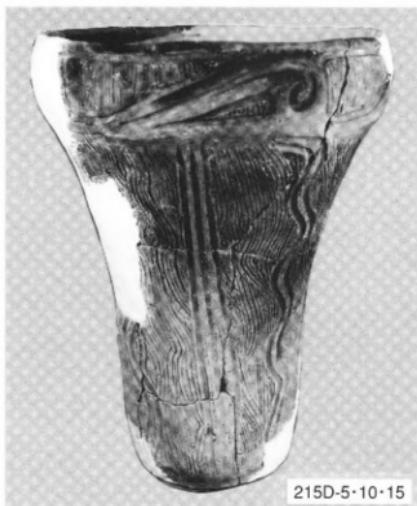
B地区出土遺物(六)



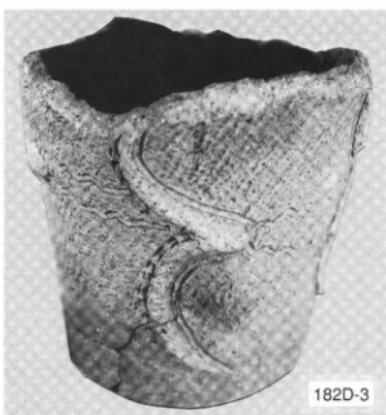
182D-1



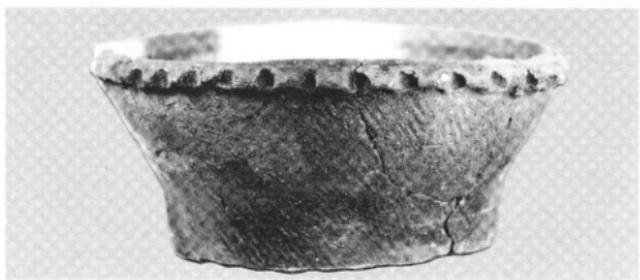
182D-2



215D-5-10-15



182D-3

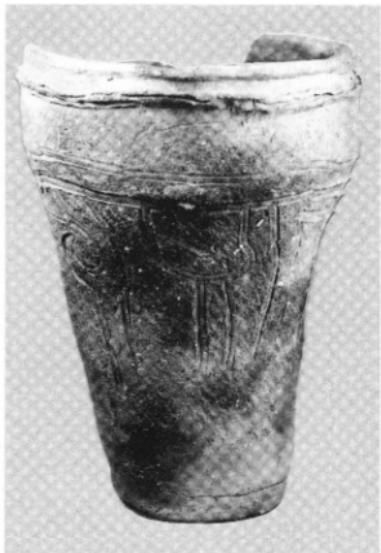


B 地区出土遺物(七)

図版第三三

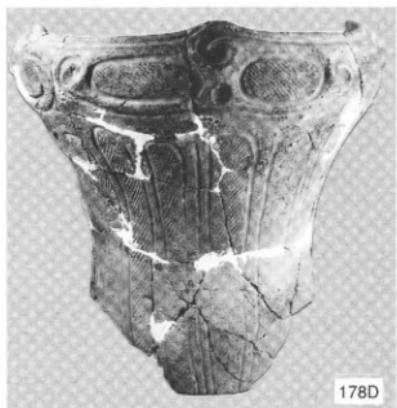


B地区出土遺物(八)

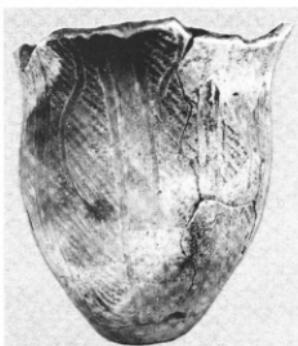
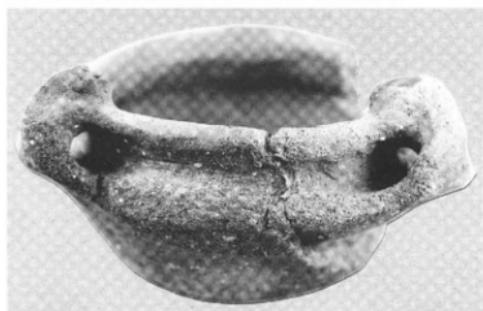


B 地区出土遺物(九)

図版 第三五



178D



201D-10

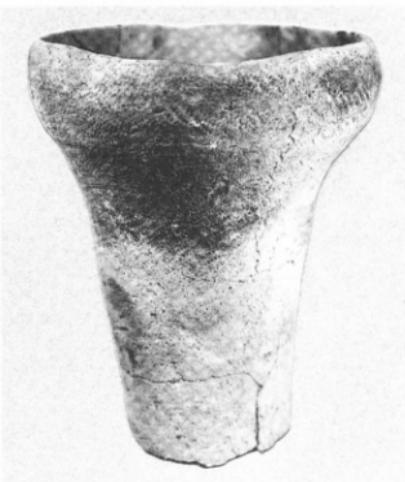


279D-1

B地区出土遺物(一〇)

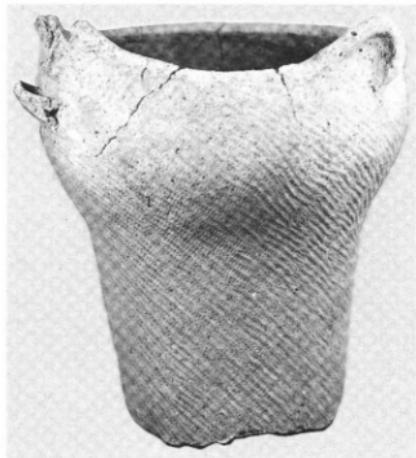


21D



B地区出土遺物(一一)

図版 第三七

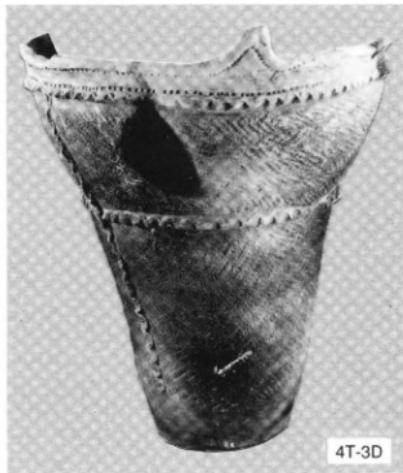


201D-17

132D-1

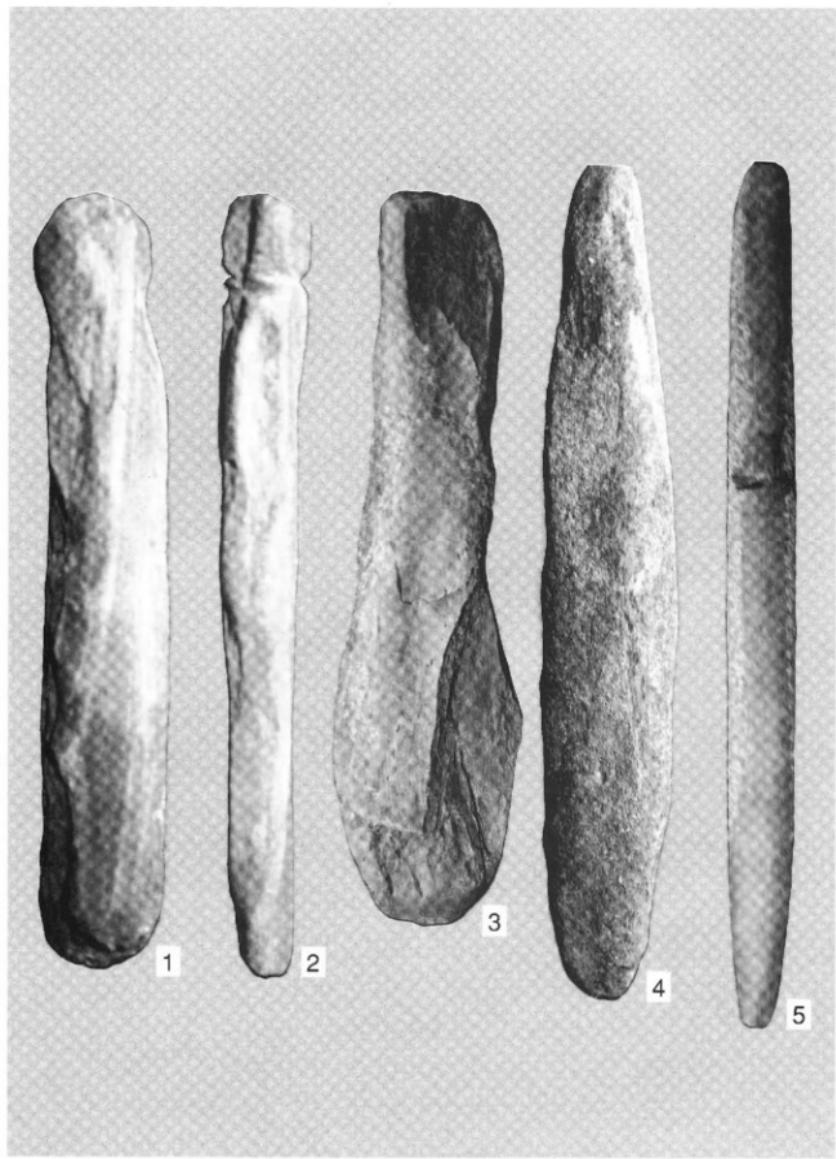


B地区出土遺物(一二)

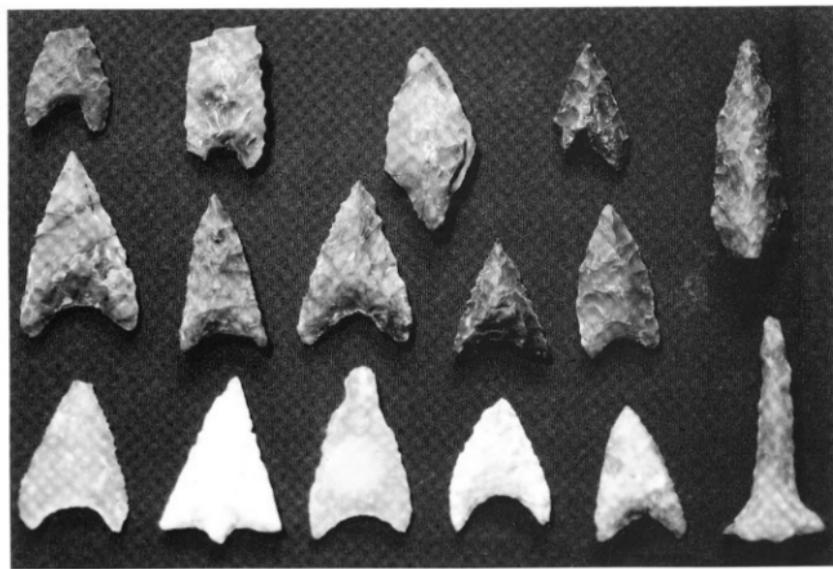
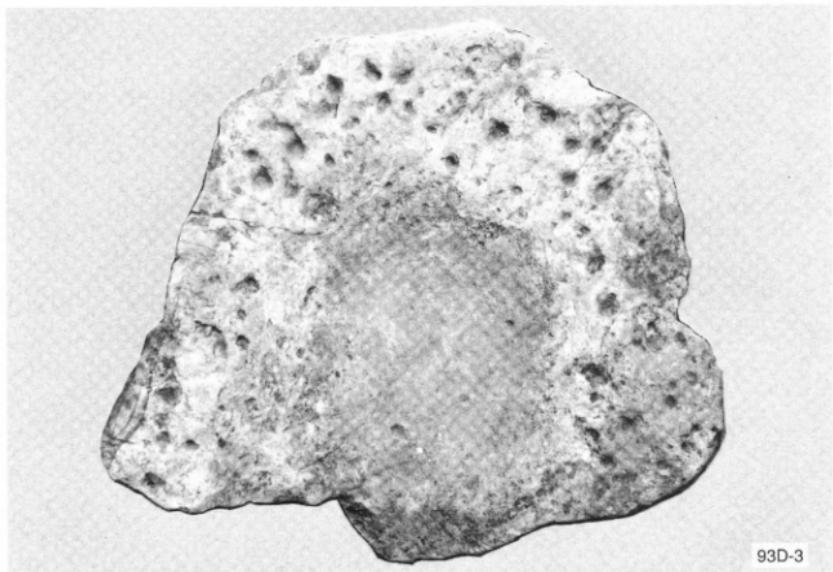


B地区出土遺物(一三)

図 版 第 三九

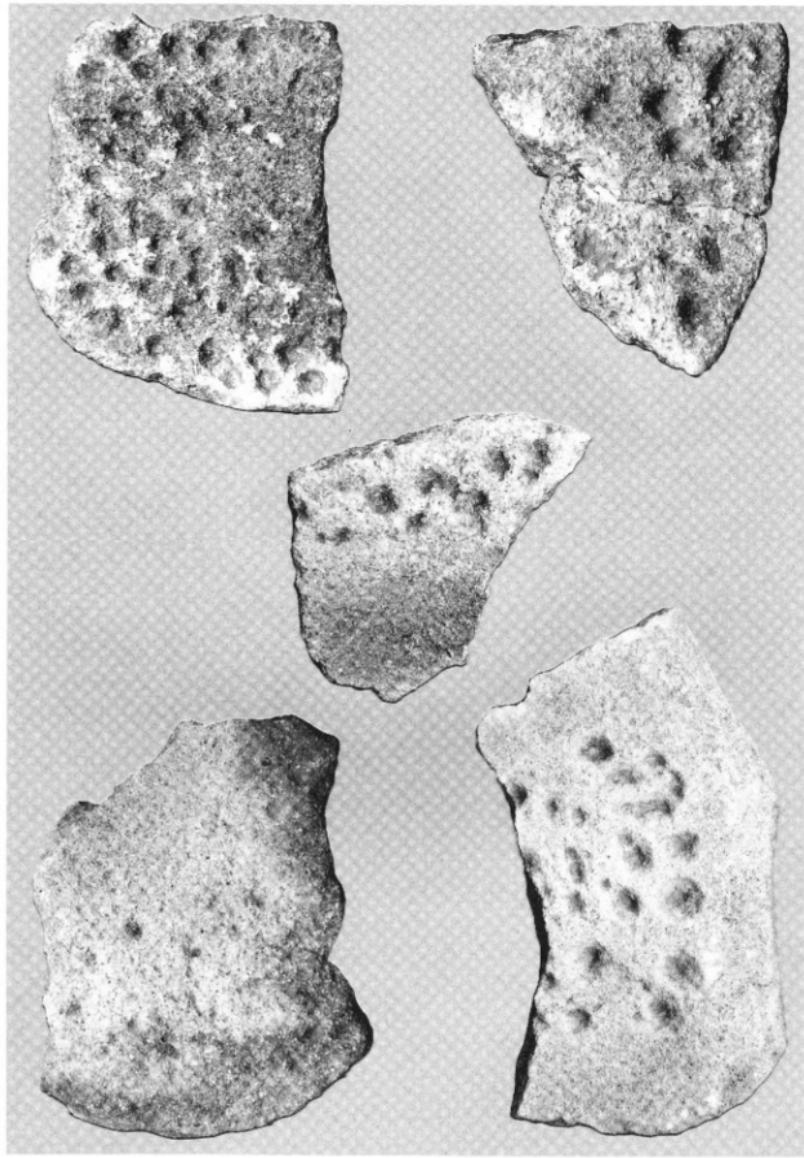


石劍、石棒、石斧(1・2A地区、3・4・5B地区)

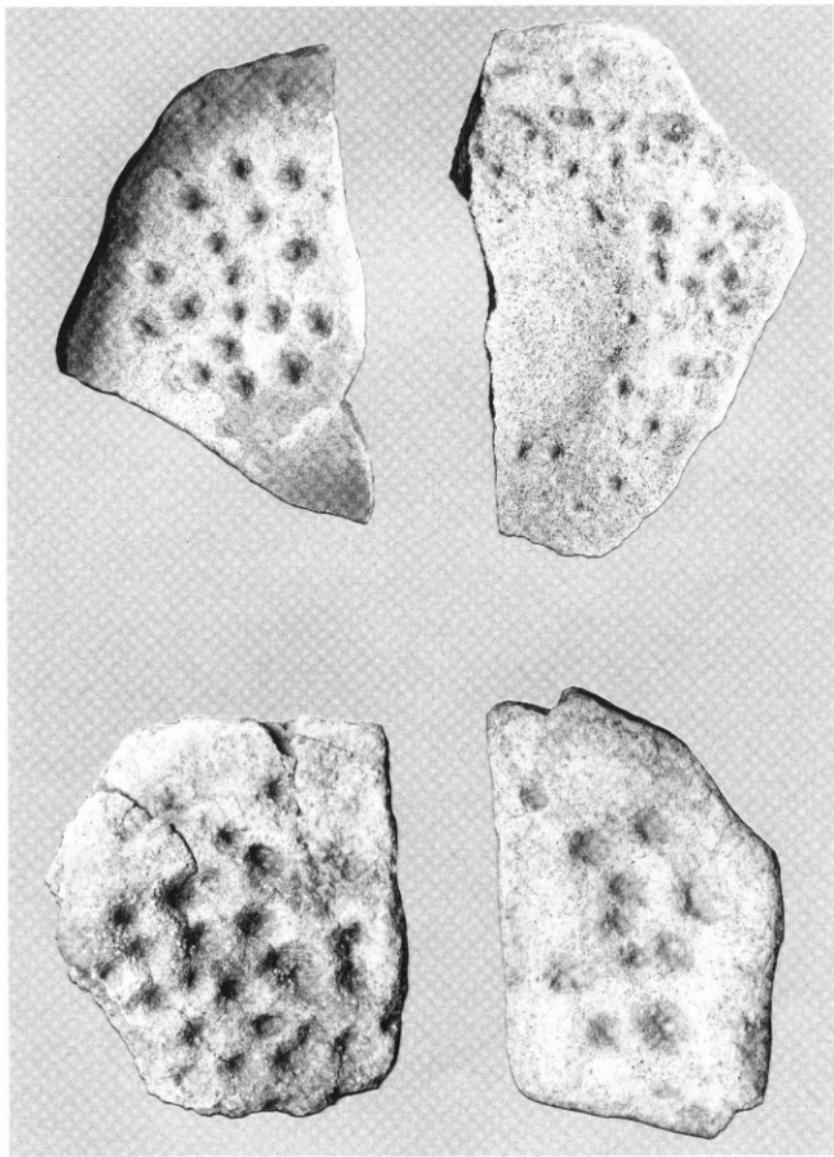


B 地区出土遺物(凹石・石皿・石鏟・石槍・石錐)

図版第四一

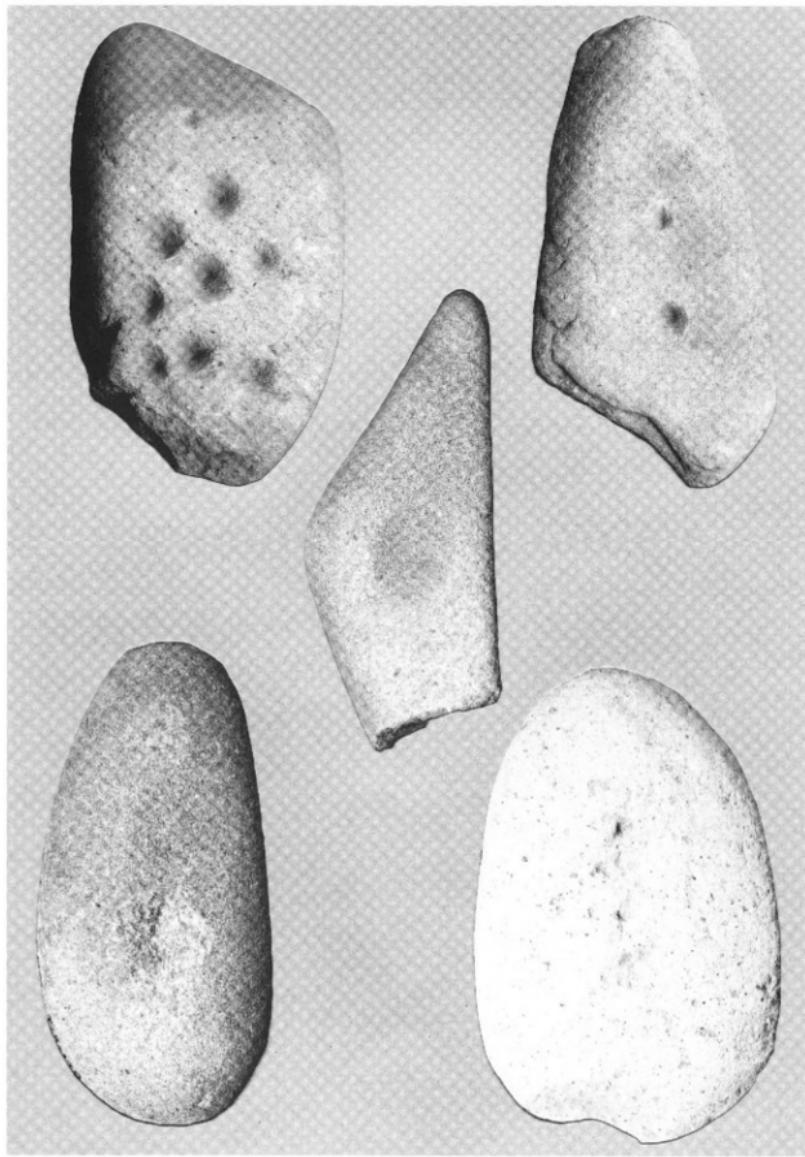


凹石・石皿(左上はA地下、他はB地区)

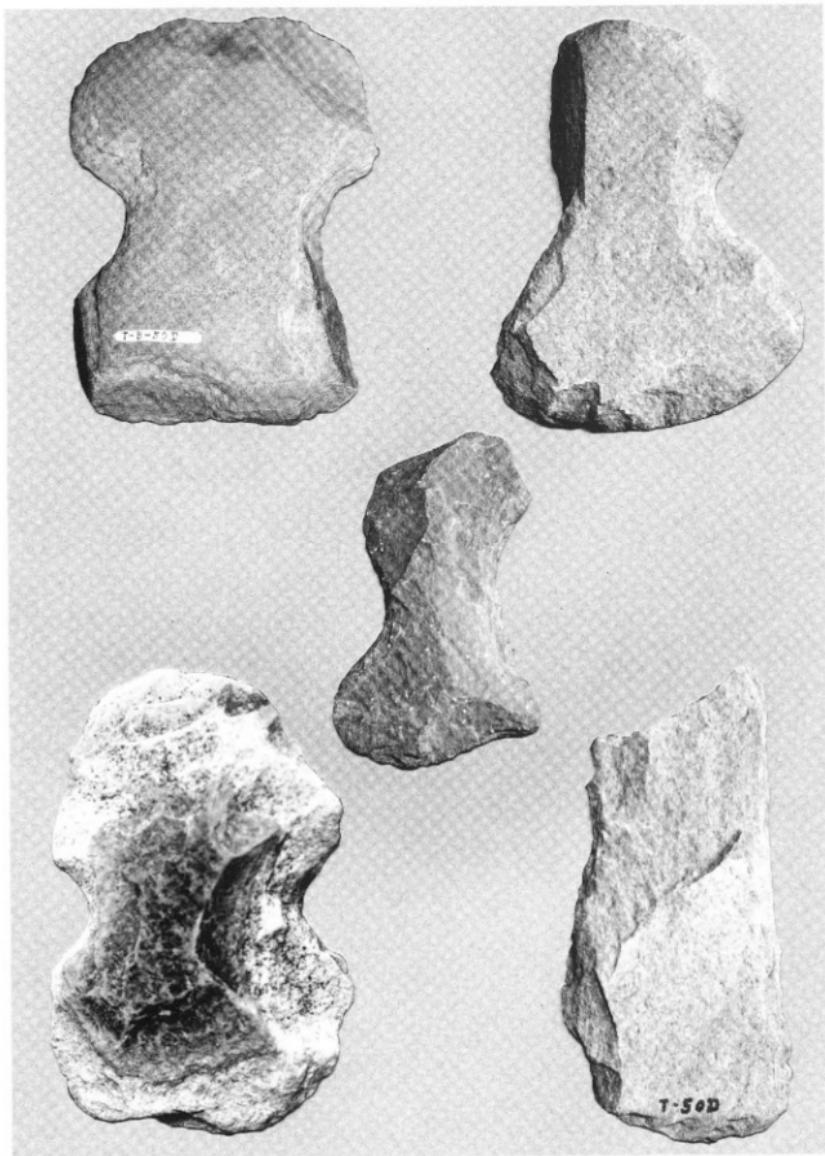


B地区出土遺物(凹石・石皿)

図版 第四三

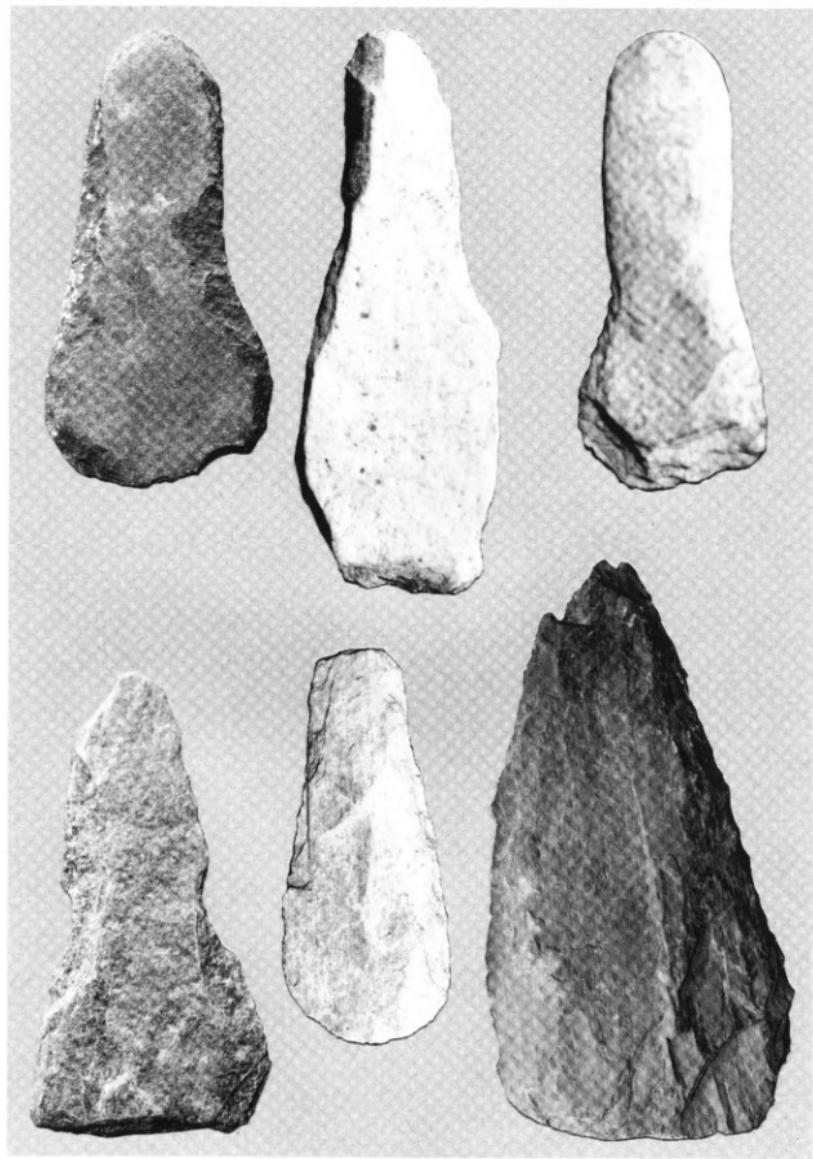


B地区出土遺物(凹石・敲石・磨石)

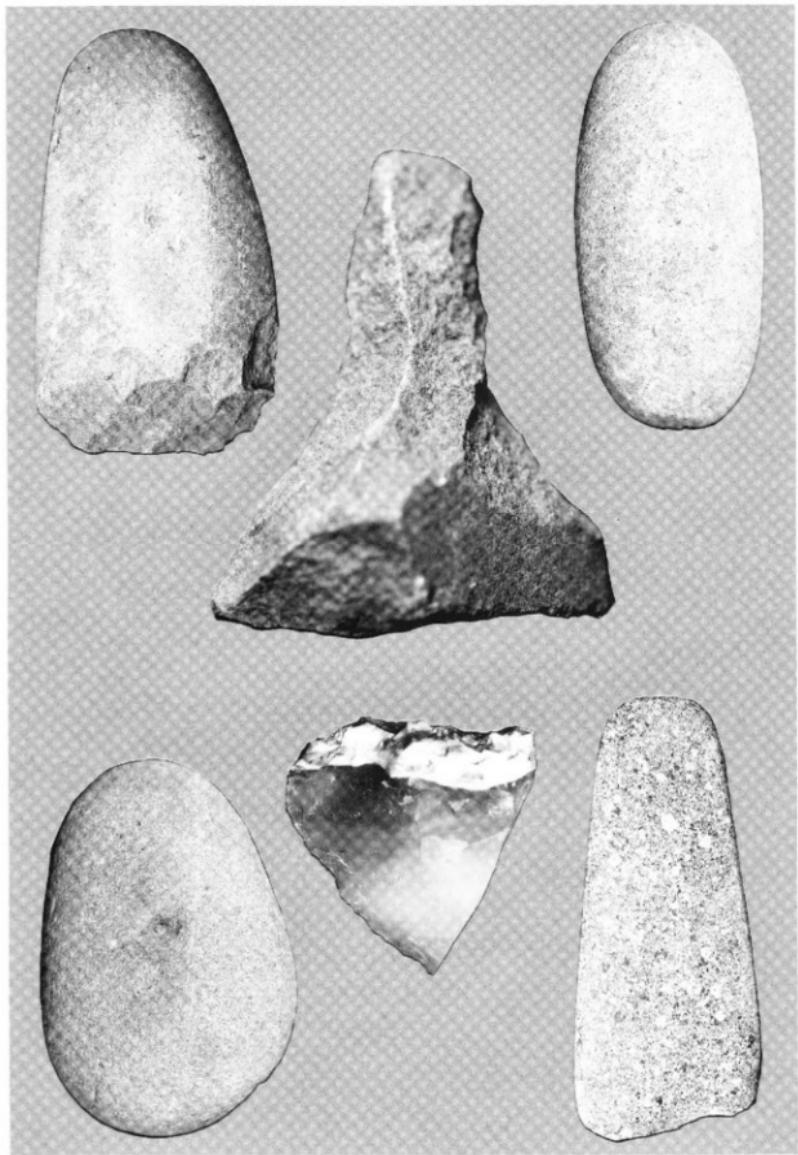


B地区出土遺物(打製石斧)一

図版 第四五



B地区出土遺物(打製石斧)二



B地区出土遺物(磨石・敲石・磨製石斧)

坪井上遺跡

平成11年10月

執筆・編集 千種重樹

発 行 坪井上遺跡発掘調査会

印 刷 石崎印刷株式会社
